
フランは成長するのか？

天澤 星次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フランは成長するのか？

【Nコード】

N4327P

【作者名】

天澤 星次

【あらすじ】

あたりかまわず破壊するフランに一般常識を教えようと人里で人々と同じ暮らしをさせる。可愛い子には旅をさせよ、獅子は我が子を千尋の谷に落とす、みたいな感じです。フランの過去をレミリアが語る回想偏もあります。オリキャラ少々ありますがほぼフランが主人公。そして三人称視点？です。

第一章（前書き）

注意書き

これは2次創作です

キャラ設定は壊しています

残酷な描写が少しあります

以上のことが無理な人は御引き取りください

登場キャラ

（主要人物以外の説明は簡略化）

フランドール・スカーレット（台詞「フ」）・・・幻想卿の紅魔館に住み金髪で紅の瞳をもつ吸血鬼。過去にあった事件で心が壊れず、地下に軟禁されていた。自ら出る意思もなかったが紅魔館の主人のおかげで少しずつ外の世界に興味を持ち、少しずつ出歩くようになった。ありとあらゆるものを破壊する程度の能力を持ち恐れられている。

レミリア・スカーレット（台詞「レ」）・・・フランドルの姉であり紅魔館の当主。カリスマ性を持ち運命を操る程度の能力を持つ。

大島 新之助（新）・・・大島酒蔵の当主の心優しい青年。ひよんなことからフランドルを1ヶ月預かることになる。

小島 雄大（小）・・・小島酒蔵の当主。大島酒蔵をライバル視している。

十六夜 咲夜（台詞「咲」）・・・紅魔館のメイド。ロリコン。

博麗靈夢（「霊」）・・・幻想郷を管理する麗しの巫女であり守銭奴。すこし喧嘩っ早い女の子。

パチュリー・ノーレッジ（「パ」）

八意 永琳（「永」）

紅 美鈴（「メ」）

小悪魔（「コ」）

魔理沙（「魔」）

四季映姫・ヤマザナドゥ（「山」）

小野塚小町（「町」）

八雲紫（「紫」）

第一章

フ「んっ・・・。」

フランは目を開くと木造の天井、それに取り付けられた和式の丸い2重の蛍光灯がぶら下がっている。フランはフカフカの布団にはさまれて寝かされていた。そしてそこは畳のいい草のいい匂いが漂っている。

フ「ここは・・・いつ・・・。」

フランは起き上がると頭に何か違和感が。思わず手で頭を押さえてしまう。

フ（少し膨れてる・・・そういえば、誰かに殴られたような・・・）
新「あ、気がついた？」

隣でまだ若い男の声が聞こえる。しかしフランは寝起きだからだろうか、テンションも低く、そして全く気づく気配がない。いや、気づいてはいるが気付いたという挙動を見せていないというほうが正しいだろう。

フ「ここはどこ？何で私ここにいるんだっけ・・・。」

と自問自答する様にうつむきながら目を瞑って考える。

新「ここは大島酒蔵。町で一番大きな酒蔵だよ」

その瞬間、フランの頭に今何が起きて自分がどういう状況に陥っ

ているのか、そして何故こんな所にいるのか、その記憶が蘇る。

それと共に紅の目は見開かれ、とても白い肌は見る見るうちに青くなる。顔面蒼白とはまさにこのことだ。

フ「夢じゃ・・・なかった・・・」

約3時間前・・・紅魔館

『危険』『DANGER』と物騒な文言が書かれた紙が張られた丈夫なレンガ造りの壁。そしてその奥の暗闇。地下へと続く階段から珍妙なりズムを刻みながら、意気揚々と軽くスキップをしながら出てきたのはフランだった。

フ「今日は何を壊そうかな〜♪」

出てきたフランは廊下に出る。その廊下は左に折れると広場につながっている。フランは鼻歌交じりにスキップしながら進んでいくとそこで女二人の話し声が入ってくる。一つは幼く、よく聞き慣れた声。更にもう一人は前に自分と遊んでくれたとフランが勝手に勘違いをしてる女の子の声。

それはレミリアと霊夢だった。

桃色の洋風の服で身を包んだレミリアと、異変が起きた時にしかでてこない守銭奴で、修行もろくにしない怠け巫女の霊夢が紅魔館にやってきていたのだ。

フ（何で霊夢が？）

フランが壁から顔をひょっこり出して見つめていると霊夢がそれに気付く。続いてレミリアも横目に気付いて更に首を振ってフランを見る。いつも微笑んでフランを迎えてくれるレミリアだが、今日はその微笑みはない。代わりにフランを迎えたのは無表情のレミリアだった。

好奇心旺盛なフランはそんな事お構いなしにルンルン気分で霊夢達のほうへてててと駆け寄る。また遊んでもらえりとも思っただろう。

しかしこの怠け巫女がフランとわざわざ本気の弾幕ごっこをするために紅魔館に来るわけがない。

フランはこの後、衝撃の事実を告げられることになる。

フ「え！？なんで私が人里で！？」

霊「レミリアに頼まれたのよ。あなたに常識を叩き込んで欲しいって」

フ「おねえさま？！」

そんな霊夢の言葉に、フランは信じられないといった様にレミリアに抗議の目を向ける。

レ「あなたはもっと常識を学ばなきゃ。だから霊夢に頼んだの。人里で一ヶ月くらしなさい」

レミリアは机の上に置かれた紅茶を飲みながら椅子に座ってすみ顔だ。

霊「ということよ。私は人里との仲介役ね」

どうやらフランは人里で常識を学んでこないといけないらしい。しかも一ヶ月間。人里などに行ったらフランが大好きな弾幕ごっこができなくなる。そんな事ぐらいまだ幼いフランにだってわかる。

フ「な、何で霊夢はそんなことに協力するのよっ！」

確かにいつも非協力的な霊夢がこんなことをするのはおかしい。そんな面倒な事、と断るはずだ。

霊「私も面倒くさかったんだけどレミリアにどうしてもっていうし、それにあなたの粗行には見逃せないものがあるわ。だからつまり・

・お賽銭よ！」

フ「そうだね」

霊夢はフランのスルースキルに少し悔しそうだ。そんなことよりも人里で常識を一ヶ月も学べとはフランにとってはたまったものではない。フランはすぐさま反撃に出た。

フ「で、でも人里なんかに行ったら私何するかわからないよ？」

そんな事をすればどうなるか分かるだろう、とフランは不敵な笑みを浮かべる。

それもそうだ。情緒不安定、一度かんしゃくを起こせば自分での破壊衝動を押さえつけることの出来ないフラン。人里に連れて行ったが最後、その破壊衝動を気の向くまま、赴くままに自分の満足するまで、人里を破壊し、人を傷つけ、血を吸い尽くすだろう。

それを霊夢達が分からないはずがない。なのに何故こんな事をするのだろうか。

それはニヤリと悪魔のような笑みを浮かべるフランの左腕をひねり上げた永琳の存在が在ったからだ。

フ「あうっ」

永「はいこれ」

カチリッ

とフランの細い手首に何やら聞こえてくる金属音。

フ「へ？」

永「これは妖力を抑制する働きがある腕輪よ。これをつけていれば人里で暴れても大丈夫。弾幕は打てないしあなたのキュツとしてドカーンの能力も使えないわ。そして光学迷彩！無駄に」
フ「え！？ちょ！何これ！？」

フランはすでに消えてしまった腕輪を探り当て全力で外そうとするが腕から抜ける気配がない。

フ「ぬ・け・な・iiiiii！能力が使えないって・・・何でできてるのよ?!」

永「確か、かいろうせ」

霊「一応言っておくけど人里で人に危害を加えたり逃げたりしたらあなたはオセロマニアのところでずっと暮らすことになるわよ。」

オセロマニアとは天界に住む四季映姫のことだ。罪を犯したもの

を投獄し罪を償わせる場所の筆頭。所謂閻魔様みたいなものだ。そんなところでずっと暮らすことはフランにとって死を意味することと同意義だ。

フ「そんなんっ」

フランは驚きの声を上げるがそれに追い討ちをかける様に永琳が目にもとまらぬ早業を見せる。

永「それとこれは預かっておくわ」

今度は背中から何やら果物でも着るような音。永琳がいつの間にか用意したメスを片手に「サクッ」とフランの七色の両方の羽を付け根から切断したのだ。

フ「ああああああっ、ちょっと！返してよ！」

永「一ヶ月我慢できたら返してあげるわ。」

フ「私の羽えええええ！」

永琳とフランの背丈は結構ある。それは傍から見たらまるでお預けしている母親に必死に抵抗している子供のように見える。永琳は手を伸ばして必死に七色の羽を取ろうとするフランの、そのあまりの可愛さにご満悦だ。

フ「な、なんで永遠亭のやつまで！」

フランは半泣きで自分を弄ぶ永琳を睨みつける。

永「しょうがないでしょう、人々の安全無しにこの計画は成り立たないし、それにあなたをそのまま泊まらせてくれる人なんていない

でしょう。それとドコとなく姫様に似たニート臭が・・・だから・・・実験のためよ！」

実験とはフランの羽で色々な実験をするということだろう。フランの羽は7色のランタンがついたような特殊な羽だ。だから皆珍しい。

フ「永琳！おまえもかつ！！」

いい加減につっこみを入れないと調子に乗ると判断したフランは思いつき永琳の豊満な胸に関西ばりのつっこみをはなった。

霊夢は寂しそうにちらりと自分の胸を見たり触ったりしていたが永琳とは雲泥の差だった。胸でつっこみをされるかされないかが決まるのではないかとさえ思っていたりしたことだろう。

永「あ、いいですねえそのつっこみ、新しい！」

気分のいい永琳が意気揚々とテンション高めにいう。

フ「何が？」

永「胸にポニヨンツって、そうですねえ・・・ちちつっこみ！」

フ「ちちいうな！艶かしい！」

永「あ、私整いましたよ、フランさん」

フ「はいはい、なんででしょう？」

いつの間にかフランと永琳の間にはセンターマイクが立っている。二人とその間にマイク。まるで漫才のようだ。

永「ちちつっこみと書いて新しい突っ込みと読めます！」

フ「ほう、そのココロは？」

永「乳（new）突っ込み」

フ「なんでやねん」

永「いい乳突っ込みね」

フ「もうええわっ。永「どうもありがとうございました」」

霊夢とレミリア、そしていつの間にかその他の紅魔館の住民とパチュリーのところに行った魔理沙も小さな子の劇を実に来た親達のように拍手を永琳とフランに送った。

そしてお笑いの舞台から降りたフランは何故か走った。一目散に紅魔館の外へつながる扉へ向けて。全力で駆け出していく。

逃げるつもりだ。

フ「フフン！ばーかばーか！あんな漫才に油断するなんて！！私は絶対に人里なんかに行かないからねーっだ！！皆死んじゃえ！」

フランは首だけをまげて皆を見ながら、更に暴言を吐いて逃走していく。

フ「べーっだ！！」

あまつさえあっかんべーをして。しかしいつまでも後ろを見ていた事が裏目に出る。

フ「いたっ！」

フランは誰かに当たってしまった。前をよく見ないからそうなる。しかしそこにはフランが目を放さず振り返りながら見ていたはずの

霊夢がいた。

霊夢「痛いじゃない」

それどころか周りを見渡すと先程まで後ろにいたレミリアやクスクス笑う魔理沙まですぐ傍にいた。

フ「・・・ごめんなさい」

フランは深々と霊夢にお辞儀をして謝罪する。それくらいの常識はあるようだ。

フ「じゃっ」

深々とお辞儀したフランは頭を上げるが早いかさっそうと逃げ出そうとする。しかし霊夢が逃げようとするフランの金髪のサイドテールをわしづかみにした。

フ「うぎゃっ」

ゴキッと鈍い音を立ててフランの逃走が止まった。

霊「私から逃げようなんて1000年早いわ」

フ「こ、この馬鹿霊夢！人間だったら死んでるよ！」

霊「だからやったんだけどね」

フ「うう、はなせえええ！」

フランは首を曲げたまま自分が逃げた方向を目で追うとそこには信じられないことに空間に隙間が開いている。どうやらあの空間に隙間を生み出すという能力を持つ八雲紫もこの計画に加担している

らしい。

霊「あんなしょぼい漫才でごまかせると思ってるの？さあこれに入
って。」

霊夢が持っているそれはなんともお粗末な分厚い袋だった。光を
完全に遮断できるような、そして幼女一人が軽く納まるくらいの袋。
その袋にはでっかく『フラン専用』と書いてあった。

その袋を見てさすがに血の気が引いたのか、いつも青白い顔がよ
り青白くなる。

フ「嫌あっ!!」

フランは自分のサイドテールを掴んでいる霊夢の手を振り払う。

霊「あ!こら!」

フ「おねえさま!お願い!もう暴れたりしないからっ!だからっ」

フランは追いかけてくる霊夢を尻目に両手をついてレミリアに懇
願する。いつもなら困ったフランを優しく助けてくれるレミリア。

しかし驚いたことにレミリアは顔を背けるだけだった。実の妹が
人里で暮らして常識を学ぶ、とは名ばかりの、ほぼ天界行き決定の
計画で連れて行かれようとしているのに助けようもしない。

フランは困惑の色を隠しきれないといったように少し首をかしげ
そんな、理解し難い行動をとるレミリアをしばし見つめる。

フ「おねえ・・・さま?」

いきなり人里で一ヶ月間暮らせなど、フランは納得が行くわけがない。

フランはならばとばかりに隣にいた咲夜を見る。

フ「咲夜！お願い！たすけて！」

咲「妹様……うう……私は……私にはっ……くっ……なんて嘆かわしい……」

ハンカチーフで涙をぬぐいながら懸命にこらえる咲夜。

フ「もうお屋敷を燃やしたりしない！パッドだって隠したりしないから！」

魔「プッ」

咲「……何笑ってるの？魔理沙」

魔「え、いや……わるかったんだぜ……」

そのドスの聞いた声を最後に咲夜は泣きまねしながら沈黙した。これはもうだめだと思いい次は魔理沙へ。

フ「魔理沙！お願い！私人里なんかにいきたくないよ！魔理沙もっと遊びたいよ！」

魔理沙はとても困ったような顔をして頬をかく。普段霊夢が全く遊ばないためフランと互角に渡り合えるのは魔理沙くらいだった。

だからほとんどフランの弾幕ごっこの相手を魔理沙が請け負っていたのだ。それを通して魔理沙とはよい交友関係になれたと思ったフラン。だから魔理沙なら助けてくれると思った。

魔「そ、そのさ、人里も結構面白いかもだぜ？」

しかしそのよい友好関係にも関わらず魔理沙の反応は冷たいものだった。

フ「ちっ」

魔「し、舌打ち!？」

だからもう用済みとばかりに魔理沙を冷たくあしらう。

そしてフランの次の標的はこの紅魔館のゲートキーパーの美鈴に向けられた。フランの視線がじっと美鈴に向けられる。

フ「・・・」

メ「・・・」

フ「・・・」

メ「・・・」(あれ?)

フ「・・・あの」

メ「・・・」(え?まじで?)

フ「・・・えと・・・そのお」

メ「・・・」(ちょっととおお、この子私の名前忘れちゃってるよ
おおおおお!!)

フ「そのお・・・ね？」

メ「・・・」(何がね?だ何があああ!上目遣いつかったってダメ
だからねえええ!?!咲夜さんじゃないんだしいい!!名前を言え
名前を!)

フ「・・・あれだよね？」

メ「・・・」(めだ!めからはじまるぞおおお!みとか言ったら
私ないちゃうよおお!?!ねえ!?!泣い)

フ「み？」

ブワリ、と涙があふれてくる美鈴。フランは美鈴を一瞥し最後の砦、この紅魔館でレミリアの次に発言力があるであろうパチュリーに懇願することにした。

フ「パチュリー！人里に行きたくないの！魔理沙だって独占しない！図書館戦争ごっこだってしない！誓うからお願い！」

パ「私はこの計画には賛成よ」

フ「え？」

ため息をつきながらパチュリーはじつとフランを見つめて言う。そんなにはつきり言うのとフランが暴れだしそうだと、その発言に魔理沙もハラハラしながらパチュリーを見る。

パ「これは貴方にとってプラスになると思うの。だから私は貴方が人里に行く事を止めはしないわ。逆に人里に行ってほしいと思ってる」

フ「そ・・・そんな・・・」

よほどショックだったのか。フランは表情が見えないくらいに俯く。更になにやらぶつぶつと呪文のように呟いて。

フランは知り合いに一通り助けを求め、そして断られた。霊夢はもういいだろうと再び袋にフランをつめようと声をかける。

霊「さあ、わかったでしょ？さっさとあきら」

フ「でよ・・・なんで？」

霊「？」

フ「何で誰も助けてくれないの・・・私何も悪い事してない・・・

誰にも迷惑かけてない」

フランは俯いたまま頭をフルフルと振りながらそんな事を言う。

確かに霊夢や魔理沙が現れてからフランの凶暴性は少しずつ薄れつつある。紅魔館の皆とも楽しく話し合ったする事もあるほどになっ
っていたのだ。

フ「なのにな！」

フランは涙を目にいっぱい浮かべて顔を上げる。

フ「なのになんで・・・何でよ！何で私がこんな目にあわないとい
けないよ！」

両手、両膝をついたまま胸を張って仰ぎ見るように椅子に座って
いる実の姉、レミリアに最後の助けを求めるようにに見つめる。紅
の目からは涙が溢れ出し頬は赤く蒸気している。

フ「お姉さまだって言ってたじゃない・・・地下から出て遊べって・
・・だから外に出たのになっ
レ「・・・」

そう、元はといえばレミリアが地下室にこもってないで外に出て
欲しいと願い、間のいいことに紅魔館にやってきた魔理沙、霊夢と
の出会いによって外へ出て遊ぶことの楽しさ、すばらしさを知った。

なのにそれをまた規制するなんてと、更に人里で一ヶ月暮らすと
いう罰ゲームまでつけて。

それにフランは納得がいかなかった。

フ「私分かったよ？ 外の世界はおもちゃがいっぱいあるし、面白いところだって！」

フランの声音が少しずつ強くなる。

フ「ねえさまも喜んでくれた！！ だから私・・・だから・・・私・・・」

フランはぼろぼろと涙を流しながら滲んで見えないであろうレミアを一生懸命に見つめる。

フ「嬉しかった・・・」
レ「・・・」

そんな事をフランは泣いてかすれた声で言うのだ。それはレミアに自分を助けさせようと演技している様子ではない。誠心誠意、純粹にレミアに助けを求めているのだ。

しかしもうレミアはフランの顔すら見てはいない。顔を俯け、更に顔をそらし、目は開いているもののフランの目と目が合うことはない。フランはその俯いてそらされている目線を手繰り寄せるように更に言葉を放つ。

フ「なのに・・・なのになんでまた閉じ込めるの？！ なんで私を人里なんかに閉じ込めるのよお！」

フランはどうとう声を上げて泣き出してしまう。

フ「おねえさまあああああ！うわあああああん！」

レ「霊夢」

しかしレミリアの口から出た言葉は

レ「フランを人里へ」

そんな残酷な言葉。

フ「っ?!」

霊「え、ええ・・・」

霊夢は横目にさっきまで大泣きをしていたフランを見ながら渋々承諾する。フランは目が点になるほどに見開いて泣くのも忘れてレミリアを見ている。

そして人間から人形になってしまったかのようにフランの頭がガクリと垂れる。その反動でブラブラとフランの頭が揺れる。

フ「・・・ねえさまなんて・・・嫌い・・・」

それは今まで聞こえていたフランの可愛らしく幼い声ではなく、暗い闇にずっと浸っていたような、まだその闇が付いてぽとり、ぽとりと垂れてしまいそうなほどに暗い声。

その暗く小さな声はレミリアには聞こえた。『嫌い』と。

嫌い、とは実に便利な言葉である。今まで築きあげてきた友好関係や恋愛関係などといった絆を全て破壊することができる便利な言葉。しかしそんなものは口だけで本当はそんなこと思っていない、

などという信頼関係があってもそんなものはたやすく崩れ去る。人の気持ちなど目では見えないし、本当の気持ちなど相手にはわかりはしないのだ。

更にその言葉はフランの幼い口から出たとは思えない闇に染まった声音。

フ「ねえさま・・・なんか・・・おまえなんか・・・おまえなんかだいつ嫌いだ!!!!」
レ「ッ!?!」

そして急に『ねえさま』から『おまえ』へ変わる。更に大声を上げて回りに叫び散らす。まるで自分がレミリアを嫌いだという事を回りにアピールするように。

更にそのアピールはそこにいた全員に感染する。

フ「咲夜も!魔理沙も!みりんも!パチュリーも!霊夢も!皆・・・皆だいつ嫌い!!!!皆死んじゃえ!!!!」
一同「・・・」
フ「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね!」

フランは狂ったように頭を抱えながら嫌いを連呼する。能力を遮る腕輪をしながらフランは全ての絆を破壊していった。全員完全に引いてしまっている。

霊「フラン!いい加減にしなさい!」

見かねた博麗の巫女、霊夢がフランの肩をつかむ。それに気付いたフランは何も言わなくなった。そのかわりに

フ「・・・」

犬が威嚇する吼える行為、それを超えると犬は黙りそして噛み付くのだ。

霊「うあっ!？」

さすがは霊夢、弾幕で鍛えた瞬発力からか、間一髪、腕を放し退いた。

霊「このっ!やろうっての!？」

喧嘩っ早い性格の霊夢。売られた喧嘩は買うのが彼女だ。

霊「紫!!気絶させる程度のバット!!」

そう叫ぶと隙間からバットが出てきた。バットには『残気根絶』と書いてある。成る程、『残気』の『気』と『根絶』の『絶』をとって『気絶』と霊夢は略したのだろう。

魔「待て霊夢!!色々まちがってるぜ!!」

霊「どいてなさい魔理沙!」

魔理沙の制止を振り切り霊夢は牙突の構えに入る。

霊「覚悟はいい?」

フ「お前がな!」

霊夢の脅しにフランはかけらも臆しない。

霊「牙〇零式！」

つつこんでくる霊夢。それに対し何も武器を持っていないフランは正拳突きのかえ。

フ「二〇のきわみ！！あああああああ！」

勝敗は力を失いただの少女となったフランにチート並みの武器を持っていた霊夢の圧勝だった。

フランは反動で壁に叩きつけられ表情を歪めてずり落ちていた。そして痛みをこらえるために丸まってうつむく。しかしそのフランの頭に硬いものが押し付けられる。霊夢のバットだ。

霊「おわりよ」

霊夢の最後の宣告、とバットがフランの頭に押し付けられる。

フ「みんな・・・きらい！・・・みんな・・・死んじゃえ！」

霊「まだそんなことを・・・」

フ「死ね！死ね死ね死ね！！！！死ねえええええ！！！！」

霊「くっ」

ガンッ！

最後の足掻きとばかりに吼えるフランに躊躇無く霊夢はバットを振り下ろした。

霊「ふう・・・全く」

霊夢は『名前…フラン』とかかれた赤くそして中央にPと書かれたキューブをひろってはフラン専用と書かれた袋につめていく。

そして全部拾い終わった時。

レ「霊夢」

霊「ん？」

その声に振り向くとさっきまで座っていたレミリアが霊夢の傍に来ていた。

レ「嫌われ役、ありがとう」

そう言って霊夢をそっと抱きしめる。身長差があるため霊夢の胸に顔をうずめる形になるレミリア。

霊「いいのよ。あなた泣きそうだったから」

その肩をポンと叩いてやる霊夢。

レ「フランのこと、よろしくね」

顔は上げずそのまま言う。本当は泣いているのかもしれない。だから霊夢は困ったように笑って言葉をつむぐ。

霊「うまくいくとは思えないけど、やれることはやるわ」

そういうとレミリアは満面の笑みを浮かべて霊夢を見上げる。

レ「頼りにしてるわ」

霊「ええ」

レ「ではおいきなさい」

霊「・・・なら放してくれないかしら？」

レ「うー」

咲「おぜう・・・」

少女運送中・・・

そして今に至る。

天界

その様子を特別な鏡で見ていた四季映姫と小町。

山「誰がオセロマニアだ・・・」

町「四季様」

山「ん？なんだ」

町「本当にこの計画でフランドールがしくじったらここに幽閉するんですか？」

山「そうだな。こうなった以上しかたないだろう」

町「そうですか。ナムナム。あ、そうそう、さっきの乳突込みを見て考えたんですけどね？」

山「ん？なんなんだいきなり？」（小町が何か考えるなんてめずらしいな）

町「まあまあ、聞いてくださいよ」

山「まあいい、いってみろ」

町「では、『貧乳と書きまして四季様の乳と読む!』」
山「ちよっと・・・あたまひやそうか?」

四季は今にも指からビームを発射しそうだ。

町「やだなあ、四季様、ここは『そのころは?』ですよ?これだからB型H系は」

四季は呆れてものもいえないとばかりに口をぽっかりと開けている。しかしここは四季開いた口を閉じそして小町に合合わせてやることにした。

山「おほおんっ、いやな、さっきの乳突っ込みを練習しておこうとおもってな、そしてだれがB型H系だ」

町「え?なぜですか?」

山「小町がつまならないことを言ったら私がつつこまないでだれがつつこむのか?」

町「たしかに」

小町は大真面目にうんうんと相槌を打つ。そして四季はある石造を指差す。

山「そこに女の像がある。どれ突っ込んでみるか」

すると四季は何か剣のような鏡に念を送っている。そして目を見開く。

山「なんでやねん!」

スパッ!!

山「どうだ！私のつつこみは?!」

町「あの、四季様・・・胸きれてるんですけど？つるぺったんになっちゃってるんですけど!?!」

山「よし、いいぞ、さっきの続きを言ってみろ」

町「え？あ、はあ・・・では・・・『貧乳と書きましてて四季様の乳とよむ』」

さすがに自分の胸が匂に出てくるとあつて胸を手で隠すように押さえている。そして恐る恐るといった具合に問う。

山「そ、そのところは？」

町「どちらも品（貧）があります」

山（品・・・私の胸は品があるのか??！品乳なのか!?!）

不意をついたよいしよで完全に四季は舞い上がってしまった。
小町は小町でなにやら祈っている。

山「・・・小町」

町「は、はいっ」（ツルペッタンだけはカンベンしてください!）
山「今日何がきたい」

その一言で小町はニヤリ。

町「お後がよろしいようで」

第二章（前書き）

前回までのあらすじ

いきなり人里で一ヶ月間暮らせと言われたフラン。抵抗するも力を失ったフランはなすすべなく霊夢にやられてしまう。そして人里へ運搬されたフランの運命はいかに。

第二章

新「僕らは霊夢さんから君の事を頼まれたんだよ。これから一ヶ月間よろしくね。僕は新之助」

と、はきはきとした声調で、先ほど起きたばかりのフランに話しかける男はまだ二十歳くらいだろうか。黒髪で眼鏡を掛けている。そして青を基調としたはっぴを着ておりそのはっぴには『大島酒蔵』と書かれている。そして笑顔だった。

フ「はぁ・・・」

しかしフランはそんな笑顔で話しかけてくる男の方は見もせずのため息をつく。

新「どうかした？」

新之助は心配になってフランに尋ねる。しかしフランは相変わらず無反応。そのかわりにぶつぶつと呟きだした。

フ「ねえさま・・・咲夜・・・パチエ・・・ほんみ・・・み・・・皆・・・」

新之助は紅魔館の住民のことはあまり知らなかったがフランの知り合いだということは何となくわかった。

新（・・・寂しいのかな）

と少しぼつの悪い顔をする。

フ「皆……」

未だに無視され続けている新之助。しかしそんなはかなげなフランを見るに見かねて声を掛けようとした時、フランの口から背筋も凍るような言葉が発せられた。

フ「八つ裂きにしてやるっ……」

新「……」(こええええ……)

フランは寂しがってはいない、明らかに怒っている。

その迫力到新之助は何も言えずに固まってしまう。

その時、奥から声が聞こえた。

「新之助！いつまでも眺めてないで学校いきな！」

新「ば、ばあちゃん！変なこといわないでよ！じゃ、じゃあいつてくるね。フランちゃん」

声の主は新之助の祖母だ。新之助は大学に通っているのでもう行かないといけならしい。そんな祖母の言葉にそそくさと恥ずかしそうにフランが寝ていた部屋を出る。

フ「……はあ……なんで」

自分の寝顔を眺められていたにも関わらず、そんな事どうでもいいといったようにフランはまたため息をつく。

自分が何故こんな目にあわなければいけないのか。しかも幻想郷

で暴れていただけで。暴れるならば暴れる為の相手がいる。なのに何故自分だけが。

理不尽だと思いつつその場で膝に顔をうずめてしまふ。

フ（ここの住人を全部殺して出て行ってやろうか・・・）

なんて物騒な事を思いつつも霊夢の言ったことを思い出す。それがフランを思いとどまらせる。

人に危害を加えたら閻魔様のところでずっとくらすことになる、ということ。今ここで住人を殺したところで未来は自分にとって地獄であるだろう場所で一生暮らさなければならぬということ。

フ「一ヶ月くらい、我慢できるもんっ・・・」

だからフランはいもしない誰かに八つ当たりするようにそう吐き捨てた。そして少しの沈黙。

フ「・・・ひま」

退屈とは死よりも耐え難い苦痛である、と誰かが言ったようなきがする。好奇心旺盛なフランは辺りを見渡してみる。したには畳がしかれ、い草のいいにおいがする。

四つん這いになって歩き障子を開けるとそこは庭になっており真昼の太陽が身を焦がすような光を放っていた。庭には石で囲まれた池がありその中には錦鯉がゆらゆらと泳いでいる。広場には洗濯物が干されている。

その障子から部屋の外に出ると、真上から降り注ぐ太陽の光からは日陰となっている安全な廊下があった。板張りで日陰の廊下はどこかひんやりしている。

フランはその廊下をテクテクと歩いていくと前に階段、左手には違う部屋があった。部屋には机とテレビが置かれているだけの簡素な部屋。

フ「テレビ・・・？」

フランは机の上にあたりモコンでテレビをつけてみる。するとM1グランプリの総集編をやっていた。今は射命丸と樫が漫才をやっている。

興味津々にその番組を見ているとなにやら聞き覚えのある響きが流れてくる。

『吸血鬼姉妹！幻想郷の吸血鬼姉妹、フランドールスカーレットとレミ』

プツツ。テレビの画面が消える。もちろん消したのはフランだ。

フ「つまんない・・・」

もう紅魔館の住人など見たくもないのだろう。そう吐き捨ててまた膝に顔をうずめる。

やはり寂しいのだろうか。うずくまってしばらく黙考していたがやはり退屈のようだ。すぐさま辺りを見回す。

フ（だれもないの？）

常識を学んでこいといいながら誰もフランに教えようとするものはいない。ただ人里で暮らすだけで常識を学べというのだろうか。俗に言う見て盗めというやつだろうか。

振り向くとそこには木造の柱が。そしてそこに刻まれた『シンノスケ 10』の文字がある。その横に地面と平行に横の線が。これは新之助が10歳の頃の身長だろう。

それはフランの背と同じくらいだ。フランは何気なく背伸びしてみたり自分の身長がどれくらいか柱に手をやって計ってみたりしている。

するとフランのほうが少し低い。それに不満なのか頬を膨らませるフラン。必死に背伸びしてみたりする。

すると横にあった階段から音がした。誰かが降りてくる。それは前が見えないくらいに積み上げた洗濯物を運んでいる新之助の祖母だった。

フ（・・・こけないかな？）

などと不謹慎なことを思うフラン。フランは祖母のおぼつかない足をじっと見つめる。

フ（踏み外せゝこけろゝ）

と不謹慎な事を思うだけでなく両掌を祖母に向けて念まで送っている。馬鹿が付くほど可愛らしいその仕草。

しかしそんな思いが通じたのか祖母が階段から足を滑らし前のめりになる。フランは今までにない満面の笑顔でわくわくしながらその行く末を見守る。

しかし天罰とは下るものである。足を踏み外した祖母はもう片方の足で思いっきり階段をけり上げた。

フランまで3メートルはあっただろう。洗濯物と祖母は階段を蹴り上げた反動で中を舞い、うきうきわくわくしているフランめがけて跳んでいく。

フ「へ？」

といった時にはもう祖母の頭はフランの顔面に迫っていた。そして

フ「ぎゃ」

ゴツン！というハンマーに叩かれたような音と共にフランの視界はまた閉ざされていった。

フ「ん・・・？」

新「あ、きがついた？大丈夫？」

なにやら前にもあったようなこのやり取り。フランはさっきの布団に寝かされていた。

フ「・・・うん」

新「よかった。もうおきないかと思ったよ」

新之助は大学から帰ってきたらしい。ということはその間ずっと気を失っていたのだろう。頭には痛みがまだ残っている。そしてよみがえる記憶。

そこから導かれることは新之助の祖母への怒りのみだ。

フ「・・・あ・・・あのくそば」

ばあ、とは言わなかった。というよりも新之助の思いもよらない言葉によって遮られた。

新「ありがとう」
フ「・・・へ？」

わけがわからないそのやり取り。頭に何度も衝撃を受けたせいでおかしくなったのだろうかと思いを疑ってしまうほどかみ合わないやり取り。

自分の頭に頭突きをかました祖母の代わりに謝るならともかくありがとうとはどういうことなのか。

新「ありがとう。ばあちゃんを助けてくれて」
フ「な、な、なんのこと?!」

新「ばあちゃんが階段から足を滑らせて落ちてきたのを助けてくれたんでしょ？本当にありがとう。」

新之助は恭しく頭をたれる。

フランは混乱していた。新之助は勘違いしている。それを問いただすべきかそのままにしておくべきか。

しかしフランはそのジレンマの中で全く別の感情を抱いていた。それは『ありがとう』という言葉だった。

今までフランのその性格と能力から気味悪がられたり鬱陶しがられ、恐れられることはあっても新之助のように感謝の言葉を投げかけてくれるものはいなかった。

だからフランはこの感情をどうしたら言いかわからないのだ。

フ「あ、あ、あれはっ・・・そっ・・・そうよ・・・私が助けてやったのよ！危なっかしいばあだったからね！！」

フンツとそっぽを向くフラン。しかしそっぽを向いたのは自分の顔が混乱で新之助には見せられない顔になっていたからだった。

新「あははは、でもばあちゃんをかばって頭をうったって聞いたんだけど、大丈夫？」

そんなフランに新之助は笑いながらそして心配そうに問いかけてくる。フランは頭を打ったがその痛さなどもうどうでもよかった。

フ「う、うん・・・」

頭と頭がぶつかったのだから祖母の方も無事ではないはずだ。

しかし人の心配をするようなフランではない。そんなこと露ほども考えてないだろう。

新「よかった。じゃあ僕は店の手伝いがあるから」

そつぽを向いたまま頷くフランに満足したように立ち上がり新之助は部屋から出て行った。

新之助が出て行った方をしばらくじっと見つめるとフランは視線の先へゆっくり音を立てないように四つんばいで這って行く。

そして戸を少しあけて顔半分を扉から覗かせる。そこには新之助が店前で客引きをしている姿があった。何故見ているのか自分でもわからないフラン。

顔を半分出しているフランに気付いた従業員がビクつく。フランがどんなに可愛くとも顔半分を出して見られるというのは何とも気味の悪いものだったのだろう。

従業員はそれを新之助に伝える。それで新之助が振り向くと顔半分を出しているフランと目が合う。新之助はニコリと微笑むとフランは驚いて顔を隠してしまう。

まるで小さな子供が恥ずかしくがっているような光景だ。まあフランは小さな子供なのだが。

フ（なんかどきどきする・・・なんで・・・）

フランは布団の上にダイブするように倒れこむ。

フ「ありがとう・・・か・・・」

今まで言われたことのない『ありがとう』にフランはどうしていいかわからない。どう接すればいいかわからない。

そんな自分に嫌気がさしたのか、フランは自分の両頬を音がするほど強く叩く。

フ「あー！もうっ！何でこんなときどきするのよっ！」

「ニャー」

フランの頭の中でいろいろな思いが渦巻いている。そんな時、猫の鳴き声がした。その方向を見てみると小さな猫がいる。まだ子猫だ。

フ「猫？」

フランは忌々しそうにその猫を睨む。その子猫はそんなフランによろよろと近づいてくる。

フ「・・・なにによっつかいきなさいよっ、今忙しいんだから！」

猫「ニャー」

フ「なに？遊びたいの？」

威嚇しても逃げ出さず逆に近寄ってくる猫にフランは苛立ちを隠せない。

猫「にゃー」

フ「そう・・・あそびたいんだあ」

フランは一定の怒りを超えるとその表情はその思いとは裏腹に笑顔に変わる。それは皆が気味悪がる怪しいもの。その笑みを浮かべてそっと猫の顔に手を伸ばす。

フランはその力故、全てのことを破壊することで身を守ってきた。何かあれば壊す。そうすれば何も起きないし自分に害を加える者もいなくなる。フランはそうやって今まで生きてきた。その延長が過度の弾幕ゴッコだったりするのだろう。そしてそれを快楽と勘違いして。

フ（人じゃないし・・・いいよね？）

怪しい笑みを浮かべるフランの掌が猫の横顔に触れる寸前、逆に猫がほほをフランの掌にこすりつけた。その瞬間、フランの胸にざわめくものがあつた。

猫「ニャオン」

フ「か、かわいい・・・」

ありがとう、という言葉、そして殺そうと思ったのに殺せなかった感情、もうフランはわけも分からず猫と遊びまくった。

新「フランちゃん、やっと店終わったよ。」

新之助が意気揚々とフランのいる部屋に入ってくる。しかし返事も何も無い。無視されているのだがそれにしても静かだ。

新「って、寝てる？・・・あはは、猫も一緒か。」

新之助がフランの部屋に行くとか掛け布団の上にダイブしたように眠っていた。猫と遊び疲れて寝てしまったのだ。

その背中に先ほどの子猫が丸まって眠りこけていた。先刻八つ裂きにしてやるなどと物騒な事を言っていたフランが今はうつぶせに

倒れるように眠りその上には猫が乗っているのだ。

その妙な光景に新之助は思わず笑ってしまう。

そしてその天使のような寝顔に顔をだらしなく緩ませる新之助。」

新（全く・・・かわいいなあ）

と、新之助は微笑みつつ毛布を掛けてやった。

夜、昼間ほとんど、不本意にだが寝ていたからかフランは起きていた。

いつの間にか二階の景色がよく見える部屋に移動している。タンクトップを着てひらひらの薄い生地ホットパンツを履いて帽子をとっている。フランの寝る時の格好なのだろう。

窓枠に両手を乗せその上に顎を置きながらボーっと夜空を眺めている。人里ではもう皆寝る時間なのか、辺りはもう真っ暗で空の星がよく見える。

そして夜空には丸い月がひとつ。その青白い光がフランの紅の瞳を照らす。

それは窓から差し込む光だけで部屋の中がよく見えるほどに明るい。

フランは窓の外を眺めながら考えていた。昼間にあった事。

フ（ありがとう・・・か・・・私どうしちゃったんだろ・・・猫も

殺せなかったし)

窓枠に乗せている腕に自分の頬を置く。考えれば考えるほど押し付けられて歪んだ顔のように思考が歪んでいく。

とそこに誰かの気配が。

新「フランちゃんアイス食べる？」

フランは考え事をしていて全く気付かなかった。はっと気付いて声の方を見るとすぐそこに新之助が手にアイスを持って微笑みながら立っていた。フランはごくりと生唾を飲み込み無言で頷く。どうやら甘い物に目がないらしい。

アイスを食べている間もフランは夜空を眺めていた。

新之助もフランの隣に座ってアイスを食べ夜空を眺めていた。フランは隣に座った新之助を特に気にもせずにとただ夜空を眺めている。

二人の視線の先には丸く光る月が一つ。それは何も考えず、ただ見ているだけでも飽きないくらいに綺麗な月だった。

綺麗な月はある話によると不思議な魔力で人間を狼に変えるらしい。そしてそんな不思議な魔力にフランが舐めていたアイスはただの棒に変えられていた。

不意にフランがその棒をポイッと放り投げた。新之助は驚いて急いでフランの投げたそれを拾い上げゴミ箱に捨てる。

新「ダメだよフランちゃん。ゴミはゴミ箱に捨てないと。」

と一般常識を教える身なので一応説明する。

フ「そうなの？いつもそこらへんに捨てたら咲夜が・・・」

とそこで言葉を切りうつむいてしまふ。紅魔館の住人だろうという事は新之助にはわかる。寂しいのだろうか。それともただ思い出したくないだけのだろうか。

新之助は少し探りを入れてみる。

新「・・・そういえばボーっとしてたけど、どうしたの？」
フ「・・・」

フランは無言だ。

新「寂しくなった？みんながいなくて」

フ「あ、あいつらなんか死ねばいい・・・」

当たりだったのだろう。フランは慌ててそう言ってまたうつむく。

その反応に今までほぼ無視され続けてきた新之助は少し嬉しそうだ。その勢いで新之助は笑いながら更に続けた。

新「そっか。僕もあるよ、死ねばいいのって思うこと」

フランは目で新之助を捉える位に首を動かす。

しかしその何気ない行動とは裏腹にフランはとても驚いていた。いつも笑顔で優しくそうなこの青年がそんなことを思うこともあるの

かと。

フ（仲間？）

だからそんなことを思ったりしていた。

新「ばあちゃんや父さん、母さん、友達、皆思ったことあるよ」

無駄な仲間意識を持ったフランは興味本位で聞いてみる。

フ「・・・親がないみたいだけど・・・ころしたの？」

物騒な物言いだがフランの可愛らしい見た目から出るそんな言葉は、新之助から見れば子供が強がって言葉を吐く、世間知らずの子供にみえない事もない。

慣れたこともあるだろうが、だからあまり驚かずその会話を続けることができた。

新「まさか。ころさないよ。親は事故でね・・・」

フ「ふーん・・・私なら殺そうと思ったらかまわずやる」

何故か唇を尖らせて顔を正面に戻す。おそらく仲間だと思っていたが外れたというところだろう。

新「あはは、僕にはとてもそんなことできないよ」

フ「根性無しね」

笑ってそんなことを言う新之助に苛立ちを覚えながらそんなことを吐き捨てるフラン。

新「そうだね。僕は根性無しだね」
フ「そうよっ」

フランの興味はもう完全にそがれたというようにまたフランは綺麗な月の魔力に引きつけられるように夜空を眺め直す。

だがフランは次の新之助の言葉にまたしても首を振ってしまうのだった。

新「でもね。殺したらそこでその人はこの世からいなくなってしまうんだよ」
フ「え？」

フランが今度は顔の正面に新之助が来るくらいに首を振る。

フランは今寂しがっている。だからいなくなるという言葉に敏感に、過剰なほど反応してしまう。

それを気取られないように慌てふためくフランだがそんなフランを新之助は見えていなかった。今度は逆に新之助は夜空を眺めている。

新「もうその人とお喋りもできない、触れることも会うことすらできなくなる。そう考えると悲しくて」

フランは皆のことを思い出す。

一瞬、フランの頭の中に紅魔館の住人やそこに集まる人々の事が映し出された。しかしそれを払拭するかのようにブンブンと首をふる。

フ「べ、べつにいいもん・・・」

そんなフランを横目で見る新之助。

フ「私をこんなところにおいやって・・・皆私が嫌いなんだ・・・」

新「それは違うよ！」

フ「?!」

新「あ、ごめん、驚かせちゃって」

いきなり大声を出した新之助に体をびくつかせるフラン。新之助は一先ずそれを謝る。しかしその声調の勢いは消えない。

新「でもこれだけは聞いて欲しいんだ。町の会議で君の事で色々大事になっちゃってね」

更に続けてフランが何故こんな目にあう事になったのかを人里の町であった会議の事をかねて説明し始める。

それはフランにとって衝撃の事実となる。

第三章（前書き）

少し慣れてきたのか新之助と口を利くようになったフラン。しかし紅魔館のみんなの事をいまだ嫌いだと言い放つ。それを見かねた新之助が何故この計画が始まったか。詳しく話すことになる。

※

フ・・・フランドールⅡスカーレット

霊・・・博麗霊夢、博麗神社の巫女

新・・・大島新之助、大島酒蔵の当主

小・・・小島雄大、小島酒造の当主

民・・・町民、人里に住む人々

第三章

回想

民「紅魔館の吸血鬼の娘、妹の方また事件をおこしたらしいな。」
民「ああ、他の紅魔館の連中は常識ってもんをわかつちやいるがあの妹だけはもうかんべんならねえ」

民「霊夢さん！どうにかしてください！わしら怖くて怖くて！！」

ああだこうだと議論する町の人々。上座に向かって縦に2列で向かい合うように座っている。しかしその視線は前ではなく上座に正座をして手を膝に乗せている巫女に向けられている。

それは町民に呼び出され渋々やってきた霊夢だった。赤と白の巫女装束に身を包み正座し、そしてだるそうにしていた。

霊「といわれてもねえ・・・」

そんな霊夢は肩を落としぬらりくらりと町民の抗議をよけていた。議論の中心となっているのは紅魔館に住む吸血鬼、フランドールⅡスカーレットだった。彼女が町のすぐ近くで暴れまわり壊しまくるせいで怖くて仕方がなく、どうにかして欲しいというのが町民の要望だった。

民「警告くらいできるでしょう！？もう暴れまわらないでくれって！」

霊「注意しても聞くような子じゃないのよねえ・・・」

霊夢が注意なんかしにいったが最後、辺りを破壊しつくす勢いで

襲ってくるだろうし、その後片付けも面倒だ。紅魔館の住人は相手をしてくれて助かると大喜びするだろう。が、そんな事霊夢にはたまったものではない。

この案には霊夢は渋い顔をする。

民「じゃあ殺してくだせえ！まだ人里に被害が出ていないことが不思議なくらいでさあ」

霊「でもそれで殺すのもねえ」

もしそうならば紅魔館の連中全員を倒していかないといけないだろう。そうなった時の被害（主に霊夢の）は計り知れない。更に霊夢が失敗した場合、紅魔館の連中は町に仕返しに来るかもしれない。そっちの方が被害が大きくなるだろうしやっかいだ。それにせっかく築きあげた友好関係を壊してまでそんなことするのはナンセンスというもの。

だからこれにも霊夢は渋い顔をする。

民「じゃ、じゃあどこかに幽閉するとか！？」

町民の気もそう長くないようだ。だんだんあせりの色を見せ始める。それもそのはずだ。唯一頼みの綱である霊夢がずっとこんな調子なのだ。

霊「うーん……閉じ込めるの可愛そうじゃない？」

だからこんな霊夢の一言について町民の一人が痺れを切らした。

民「霊夢さん！あんた巫女でしょう！博麗神社の巫女でしょう！！」

妖怪なんかに味方するなんてどうかしてる!!!!」

怒号のような啖呵が室内に轟き響く。ついに来たかと霊夢は耳をふさぐ準備をしていたがあまりの迫力に自然に姿勢がのけぞる。更に悪い事にこの場には同じ不満をもった町民が大勢いる。同じ志を旗に掲げ啖呵をきければそれに続くの人が集まり続くのが道理。仰け反り戦く霊夢に他の町民が次々に野次を飛ばす。

民「そうだ! アイツは妖怪だ! 巫女のアんたが助ける道理はないんだど! ?」

民「いや! やつは悪魔だ! この間なんて山が丸ごとなくなってただ!!」

民「明日はわが身だべ! ?」

民「そうだそうだ! こういふときこそ動いてくれないとわしらは何のために博麗神社を崇拜しお賽銭を入れてたんじゃ!」

霊「お賽銭・・・全然なかったんですけど・・・」

民「じゃかあしい!」

霊「ひゃっ」

民「それはあんたがしゃんとしとらんせいじゃろう!!」

民「それがあんたの日ごろの行いの結果じゃ!!」

民「だから胸もそんなんだ!」

民「腋出しやいいってもんじゃねえぞ!」

民「恥をしれ! 恥をし!」

霊『だまれこの愚民ども!!! 黙って聞いてりやいい気になりやがって!!! いい!? 私の日ごろの行いが悪いからお賽銭が少ないんじゃないの! あなた達のお賽銭が少ないから私がこうなってしまったのよ!!!!!!』

等とは言えば賽銭が0になってしまふ可能性があるから言えず。

(言っても自分がだめなのは変わらないのだが)

押されっぱなしの霊夢。これは収まりがつかないかと、一旦打開策を練ることにした。座禅を組み手を組む。さすが巫女だ。精神統一し、もう周りの騒音は聞こえない。

そんな霊夢の異様な雰囲気気付いたのか町民もいつの間にか静かになり、息を吞んで霊夢を見守る。何かいい案が出てくるに違いない、あつい期待を胸に町民は待つ。

ドコからとも無く聞こえる木魚の音。そして誰がならしたのか、『チーン』と響く鐘の音。その瞬間、霊夢の目が見開かれた。息をする事すら忘れて町民が霊夢を見守る。口をへの字に結び、目を見開き眉にしわを寄せる。

霊夢が突然大げさな動作で片手を天に掲げ掌を広げる。そこから、ゆっくり地面と水平になるように、町民に掌を見せるように手を突き出す。まるで歌舞伎でも見ているかのようだ。そして霊夢が一言。

霊「後五分。」

町民は切れた。切れた町民の一人が霊夢の襟首を掴んで持ち上げる。

民「おんどりやああ！なめとんのかわりやああああ！！！」

民「ただわしらに腋を見せただけじゃねえか！！」

民「後五分ってなんだ！寝るつもりか？！もうすこしうってか！？早く目覚めろおお！！その間違いから覚めろおおおお」

霊「苦しい苦しい苦しい！ギブギブ！！死ぬうううう・・・」

霊夢はあくまでも巫女であり、この町唯一の頼みの綱だ。あまり手荒な事はしてはいけないと思ったのだろう。すぐに開放された。まだ霊夢に襲いかかろうと体制を屈める連中を別の町人が抑える。その間に霊夢は乱れた服装を正し息を整える。

霊「ふう。今のはちよつとした冗談よ。」

民「じよ、冗談?!」

よいしょ、と、もともと座っていた上座の位置に座りなおす霊夢。礼儀正しく正座で膝の上に両手を乗せる。

そして釣り目気味にまっすぐ前方にいる町民達をにらみつける。すると唐突に

霊『つまりまとめさせてもらうとこういうわけよね』

ときりだす。頭で事の成り行きを整理するように目をつぶる。そして一呼吸するかしないかの間に霊夢は目を見開いた。

霊「あなたたちは結界が張られているにもかかわらず、町の周りでやり放題やっている、町へ入ってこれもしない幼い妖怪が、怖くて怖くて仕方ないから殺せ、と。」

いきなり真顔になって一息のうちに、少し低めの声で一氣に言い放つ。そんな霊夢の言い回しにあつという間に飲まれていく町民。それもそのはずだ。襲って来もしないもの、いや、襲いたくても襲えないものに恐れ戦き、喚き散らした哀れな町民と言われたのも同然だ。霊夢の威圧感もあいまって誰も口を開けない。

霊「全く、さっきまでギャーギャー喚いていたのにもうだんまり?」

町民は皆そろってうつむき誰一人として喋らない。怖い怖いと恐

れ喚く自分達の愚かさ、惨めさが身にしてみたのだ。更に結界を信用していなかった事に対して霊夢の怒りを買ってしまった事。霊夢の切った啖呵は自責の念を町民の仲で大暴れさせていた。

霊「警告しろだの殺せだの喚くならそれ相応の、私が納得する理由を持って来なさい！」

もう誰も喋ろうとするものはいない。一人あきらめたように座る。それを機に一人、また一人と座っていく。まるで親に怒られた子供のように背を丸めうつむく町民。座っていても町民を見渡せるほどは言いすぎだろうがそれほど皆縮こまってしまっていた。そして霊夢はというと、

霊（くうく、たままないわ、この調子に乗った愚民どもを言い負かした時の優越感！嗚呼、幸せ。）

等と、思っていたりした。巫女として、人間として最低である。

霊「オホオン！」

霊夢はわざとらしく咳払いをする。皆霊夢に注目する。

霊「という事で、議論の余地はないと判断します。誰も反対意見は無いわよね？これにて解散ってことで」（早く帰って連ドラドラドラドラえもんなんちゃって。）

と、そこにルンルン気分の霊夢の解散を妨げ手を上げるものが一人。それは小島酒蔵当主の小島雄大だ。少し肥満体系の初老の男。白髪の禿げ上がった頭に顔にはしわがいくつも刻まれている。

霊「ん？何？早く連ドラ・・・早く帰って修行の続きをしないといけないんだけど？」

小島当主は手を下ろし不敵な笑みを浮かべている。ここで手を上げた男を無視などしたら心優しい巫女というレッテルははがされてしまう。（もともと貼られてもいないのだが）ここは小島当主である雄大の意見を聞いたうえで論破しなければならない。

しかし霊夢はいやな予感がした。もしそれを言われると一気に立場が逆転する。それどころか袋叩きに会うかもしれない。どうするかを考えるまもなく、小島当主は芝居がかった演技で斜め上を見ながらそして思い出しながら言うように『たしか』と切り出す。

小「これは噂で聞いた話なんだがね。その娘、特別な能力をもつらしい。」

とは、『ありとあらゆるものを破壊する能力』だろう。それは全て、何でも、壊せるという事である。石だって、山だって、ダイヤだって、それはもう霊夢が張った強力な結界だって同じこと。

それは同時に霊夢の切った啖呵が通らなくなるという事だ。あんな啖呵の切り方をし、あまつさえ町民をコケにしていた。

それが町民を問い正した神聖な叱咤からただの暴言と化するのだから。

町民は皆両隣の顔と顔を見合わせる。ざわざわと・・・。

話は流れる川のようなという。会話は流れによって進行し誰かが意見を出しその賛否によって分岐する。霊夢の啖呵でできた流れを

今小島当主がせき止め川の町民が話しあう事で流れが違う分岐へ遷移されていく。その中でこんな流れが生まれた。

民「誰か知っているか？」

民「いやあ、知らないなあ。」

霊「あれだっぺ、血をすう能力だっぺ」

民「ああ、そりゃ吸血鬼だあ。あたんまえだっぺえ」

民「なんだあ、そんなこと知ってるっぺよ。」

民「もお、小島さんもおちやめやねえ。」

民「んだんだ。ワシらてつきり霊夢さんに逆転できる位に危険な能力かと思っただっぺ。」

小「できる。」

霊「ちっ」

霊夢がさりげなく作った流れをまたしても小島当主がせき止める。

小「ありとあらゆるものを破壊する能力、だったかな？ 霊夢さん。」

ニヤリ、と片方の口を吊り上げて多いしわをより多く、そしてより深く刻ませ、霊夢に問いかける。

町民達の視線は小島当主から一気に霊夢へ移される。流れは完全に小島当主だ。

霊「ええ・・・」

民「なっ」

民「じゃあ強力な結界も壊されてしまっじゃねえべか！」

民「霊夢さん！ あんたしってて」

霊「え・・・と、どうだったかなうちがったようなく。」

民「どう何だ霊夢さん!!」

民「あんた!」

霊「ひい!」(ころされるううう!)

民「あんた分かってたな!! ワシらが知らないと思ってあんな事!」

民「こ、この! もうこんなヤツ巫女として認められね!」

民「みんなやっちまええ!!」

新「待ってください!!」

さっきまでニヤニヤ笑っていた小島当主がその声の主を睨みつける。それは新之助だった。困っている霊夢を見ていられなかったのだ。心の優しい青年なのだ。

しかしこんなど修羅場に待ったをかけるのは無謀だ。怒りの矛先が自分に向いてしまうかもしれない。新之助のお付のものもわなわなと震えて新之助を思いとどまらせようと必死だ。

民「ああ?! 何だ!! 青二才が!! こいつは俺たちのこと馬鹿にしていたんだぞ?! もうがまんならねえ!!」

新「はい、でもそれには理由があると思います。」

新之助に突っかかってくるのはガタイのいい大男だ。農作で鍛えたのだろう。こんな男に殴られたら新之助などひとたまりも無いだろう。しかし新之助は臆す事はなかった。

民「理由?」

新「僕達を不安にさせないよう、こっそり裏で解決しよう。そしてそんな事で慌てふためく僕達にこれから不安な事は一切無いと、安心させようとしてやった事ではないでしょうか。」

筋は通っている理屈。その穴の見つからない理屈に皆の勢いは一瞬そがれる。町民はその場に棒立ちになる。

しかし新之助の言った事は理屈はいいが憶測だ。憶測で言う理屈などどこまでいったって屁理屈にしかない。

新「僕達を馬鹿にしたのだってその事を気付かせないように、カモフラージュするためでしょう。そうですよね？霊夢さん！」

だから反論される前に釘をさす。町民は霊夢の方を見る。

霊「ええ、皆をあまり不安にさせたくなかったの。」

そしてこの変わりようである。いけしゃあしゃあと言い放ち少し残念そうに目を細める演技までしている。そんな霊夢に困惑気味の町民。後一步、霊夢はそう判断した。

霊「皆にあんなこと言って私も心苦しかった・・・でも、ばれたなら謝らなきゃね。ごめんね、だって私・・・皆のことが大切だったから！」

ハリウッド女優も真っ青の名演技である。

民「わ、わしらは間違っていたのか・・・まさか霊夢さんがそんなにわしらの事を・・・」

民「連ドラ見たいなどと言って早く帰えろうとしたのは準備しようとしていたのかっ」

民「すまんかった！霊夢さん！なんてお詫びしたらいいかっ」

町民は口々に謝罪の意を示し始めた。

霊「いいんですよそんなの、お賽銭さえ入れてさえくれれば。」（ちよろいわ）

霊夢は跪いて謝る町民の方をポンポンと叩く。そして誰もが癒される天使スマイルを放つ。

そんな仲で霊夢は新之助に軽くウィンクするのだった。新之助は苦笑いだったが。

民「で、では霊夢さん！あの吸血鬼の娘を討伐してくれるんでえ？！」

民「あの悪魔を本当に退治してくれるんですかい！？」

もうこうなったら後に引けない霊夢。

霊「わかったわっ！私にドーンと任せなさい！」

とトンと胸を叩く。町民は歓喜し霊夢を崇め奉る。

民「おお〜霊夢さん万歳！」

民「これで安心だべえ！」

現在

フ「私人里に行ったことなんかないよ！？人を襲った事もないよ！？」

座った体勢から動いたせいなのか、昼間の猫ではないが今のフラ

ンはそんな風に四つんばいになり身を乗り出す。

しかし猫背ではなく身長差もあってかそり返し新之助に詰め寄って睨む。というよりも何かを訴えかけるような目で困ったような表情をしている。

フランの大きな赤い瞳が月の光に照らされ明るい紫に色が変わっている。それがとてもよく分かるくらいにフランの顔が新之助に近づけられる。

本人に意図は無いだろうがまるで胸のないグラビア撮影のポーズをとっているかのようだ。さすがの新之助も顔を赤くする。

新「そ、そうだね、確かに君は人には何も危害は加えてない。」

フ「じゃあなんで!？」

そんなフランの表情は困ったようなそれから怒ったそれへ変わっていく。

新「でもすぐ近くで危ないことをされると、自分達にもいつか災いが降り注ぐんじゃないかって思っちゃうものなんだ。」

新之助はゆっくりとなだめるように話す。

フ「そんな・・・」

今新之助が言った事は人間の本质であり吸血鬼であるフランには理解できない事だった。恐怖という感情に人間は敏感だ。それ故少しでも危険を察知すると逃げる、誰かに守ってもらう、等何か解決策を見つけるまで不安で不安で仕方が無いのだ。

先ほどの会議での町民の騒動も決して大袈裟なものではないのだ。

怒った表情から理不尽な、その状況をうまく理解できない混乱への苛立ちを表すような表情になっていく。

新「皆怖いんだよ。それで君をここで」

フ「それであいづら私を・・・ゆるせない」

顔はうつむいてもう月の光も届かず表情は読めなくなった。『あいつら』とは紅魔館の住人だろう。自分を助ける事を放棄し、ただここに放り込んで幽閉させるか否か運任せの『あいつら』。

新「違うんだ、フランちゃん！」

もうフランには聞こえていなかった。なにやらぶつぶつ言っている。自分の世界に入ってどうやって皆を殺そうかと考えていることだろう。

フ「皆・・・八つ裂きにしてやるっ・・・」

そんなフランの両肩を新之助は掴む。フランは驚いて自分の世界から引き戻される。そしてふっと顔を上げる。

フランの少し色素の薄い金髪のサイドテールが一瞬フランの顔の前を通る。通り過ぎた後には真剣な今までに無い新之助の表情があった。

肩をつかまれて驚いた事もあって一瞬新之助と目が合うがすぐにうつむいてしまう。その瞳は長いまつげによって隠れ、もう見えな

い。それでも新之助は続ける。

新「聞いてフランちゃん！あの時決まったのは霊夢さんがフランちゃんをどうにかするという事だけで具体的にまだ決まっていなかった。だからあの後また会議が開かれたんだ。」
フ「？」

回想

民「今日は何を話し合うだ？」

民「あれだろ？どうやってあの吸血鬼を黙らせるか。」

民「殺しちまえばいいだよ。それが一番だっぺ。」

民「んだんだ。霊夢さんなら簡単にやれるだ。」

そこは前と同じ会議が行われた場所。前のように上座に向かって二列に並び町民は向かい合って座っている。そして上座に霊夢の姿はない。

民「しかしどうしたんだ？言い出しっぺの霊夢さんがいないっぺ。」

会議開始の時間はとくに過ぎている。もしかして忘れているのではないかと、そんな疑惑が話題になり始めそうな時に会議室の扉がガラガラと開く。

霊「遅くなったわね。」

民「やっときただか。」

民「霊夢さんおそ」

時間が止まる。霊夢を除いて。

霊「ん？どうかしたの？」

町民は誰も喋れない。恐らく喋っただけで彼女の怒りをかい八つ裂きにされるかもしれない。なかったからだ。

民「ひっ」

町民の小さな悲鳴が静かな会議室の中を駆け巡る。それもそのはずだった。

民「何でそんなやつらを！」

霊「私に任せるって言ったじゃない。正確には任せろだけど、あなた達も納得したでしょ？」

その者は幼い体に大きな二枚の羽を背中に有し紫色の髪に赤い瞳。ゆっくりとそして堂々とした歩みで部屋に入ってくる。

実に堂に入ったその歩みは周りの雰囲気を一気に変えるほどのカリスマを発していた。

なんとやってきたのは渦中の人、フランの実の姉レミアースカーレットだった。そして咲夜が斜め後ろを付いて行くように入ってくる。

レ「お久しぶりね。」

第四章（前書き）

突如現れたレミリアのとつた行動とは・・・

第四章

民「お前は、レミリアスカーレット!?」

民「こ、紅魔館の当主がなんのようだ!」

民「そ、そうだ!こ、こ、ここはお前のような妖怪が、く、来るところじゃないべ!」

霊夢たちが中に入ると町民が口々に言った。町民の表情は恐怖で歪んでいる。

咲「お嬢様に向かって無礼な口の利き方は私が許しません。」

静かに怒るといふのはとても強い威圧感を与える。すでに怯えきっている町民に更にナイフまで出す。町民はそれを見て今にも腰を抜きそうさ。しかもそんな町民を見て咲夜はニヤリと片方の唇を吊り上げて笑っているのだから手のつけようがない。

レ「咲夜、手出しはしないという約束でしょ?」

咲「あ、すみません、つい癖で・・・」

霊「まあまあ、みんな、落ち着いて聞いて。」

とのんきに町民をなだめる霊夢のその行動が町人達の気分を逆撫でした。前回と同じ要領で一人の町民が霊夢の襟首を掴みあげる。

民「あんた何考えてんだよ!当事者の保護者なんて連れてきたらろくに会議なんかできないべ!!」

とレミリアたちには聞こえないような声で霊夢に訴えかける。

霊「ちょ、暴力反対なんですけど！」

町民の言う事もっともだ、姉のいる前でその実の妹を幽閉するだの殺すだのと、話し合いができるわけが無い。

レ「あなた、霊夢に何をしているの？」

幼い子供の容姿からは信じられないほどの低く、そしてドスの聞いた声。

そしていつの間にか霊夢を掴み上げている町民の喉に突きつけられている紅の槍は、他の町民まで腰を抜かす勢いだった。

レミリアの怒りで周りの空気が震えている。その澄ました幼い顔の持ち主の小さな体から発せられる威圧感はいく夜とは次元の違う、まるで町民の意識を飛ばしてしまう勢いだ。

咲「お嬢様！落ち着いて下さい！てか暴れていいのですか？」

そう言ってまたナイフを持ち出す咲夜。

民「ひ、ひいい！」

霊夢の襟首を離れた町民は転げ落ちるようにその槍から離れた。

レ「話は聞いたわ。妹の粗相で何か面白い事になっていると。そして暴れてはダメよ。」

目をらんらんと輝かせる咲夜をなだめて自分も槍をしまう。

町民は慌てて霊夢の後ろに隠れるように集まる。すると水を得た魚のように町民の元気が戻る。

民「か、帰れ帰れ!!」

民「そうだそうだ!ここはお前たちが来るようなところじゃない!」
民「霊夢さん!どうにかしてくれよ!」

確かにこんな状況では話し合いになどなる筈がない。

初めの会議の後、霊夢はレミリアに全て話しどうするか決めようと思ったのだ。紅魔館に行って全て話すと、レミリアは直々に話し合いに行くと言った。

さすがの霊夢もそれはやめた方がいいと言った。話し合いにならなくなると。その結果、実際にそうなった。

何か策があったのではないのか。レミリアほどの人物が何も策も無く飛び込んでくるとは考えにくい。

霊夢は困ったようにレミリアを見る。

そのレミリアは町民の罵声を浴びながらうつむいている。これ以上罵声を浴びせられ続けるとひと騒動起きるだろう。

例えレミリアは動かなくてもその御付の者、手癖の悪いメイドが、主を馬鹿にされたと大義名分を掲げ、ナイフを大道芸のように操り町民を傷付けるだろう。

そうなればフランの処分は火を見るよりも明らかだ。それどころかレミリア自信の身も危なくなる。

実際、咲夜はうつむいてなされるがままのレミリアを見て

咲（罵倒に耐えるお嬢様もなかないじらしくて可愛い・・・）
霊（あれ？）

恍惚の表情を浮かべていた。

そんな咲夜を尻目に霊夢はレミリアをひとまず外に出そうと、一歩、足を出そうとしたその時。

レ「愚民。」

一言そういった。レミリアは怒ってはいない。笑っても、見下しているわけでもない。何か悲しい事でも思い出しているかのような遠い目。

何か考えた上での発言なのか、それともただ思った事を口に出しただけなのか。どちらにしろ町民を挑発しているのは確かだ。

霊夢の顔は青ざめる。町民を挑発したところでそのしわ寄せは全て霊夢に来るのだから。

民「何だと！」

レ「あなた達にはお似合いの言葉よね。」

霊夢はまだ続けるらしいレミリアの挑発にもうやめてと心から願っていた。しかしレミリアの挑発は続いた。

レ「怖い怖いと喚いて泣いて、早く殺せと言いながら自分達では何

もせずぐんぶ霊夢任せ。思い通りにいかないと、霊夢のお尻を叩いて急かす。思いもよらない事が起これば全て霊夢のせいにして・・・危険を感じたら逃げ惑い掌返しで霊夢にすがり、盾ができたらまた喚く。私はただ話し合いをしにきただけなのよ?」

霊「お尻?!」

レ「例えよ。」（霊夢可愛い・・・）

咲（何故そこに反応する・・・）

民「う、うるせえ! ワシらが意見を出したらお前らは暴れだすだろう!」

民「お前らが暴れたらワシら全員殺されてしまう!」

民「俺たちの立場をよく知りもしないやつらにそんな事言われる筋合いないだ!」

レ「人間は何故いつも・・・」

まるで昔のことを思い出すように目を瞑るレミリア。そしてあきらめたように小さなため息をついた。

レ「いえ・・いいわ霊夢。進めて頂戴。」

霊「ええ。」

こんなに挑発しておいて今更始めろなんてもう何も言っても無駄だと、半ばあきらめ気味の霊夢。それでも何か策を練っているのだと信じて自分を盾にしている町民に向きかえり説明を始めた。

霊「皆聞いて! もうここでぎゃーぎゃー討論するよりも当事者に直接話したほうが早いと思ってレミリアに話したの。それで直に話したいからってここまで来たのよ。」

レ「そう。今日は妹のことであな達に頼みがあるわ。」

民「奴は処分すると決定したんだ! いくら紅魔館の当主でももうど

うしようもないぞ！そういう掟でわしらは守られてるんだ！」
民「その掟を破ればお前らだって幻想郷にいらねえんだ！」
民「そしてここはお前らみたいなのが来るところじゃないんだよ！
かえ」

帰れとはいえなくなった町民。言いたい放題言う町民にレミリア
が怒ったのではない。レミリアの威圧に声が出なくなったのではない。
なのだ。

レ「お願いします。」

咲「お嬢様っ!？」

レ「どうか妹をゆるしてほしい。」

霊「レミリア・・・」

民「な・・・」

現在

フ「土下座？」

土下座くらいフランだって知っている。紅魔館のゲートキーパー
が居眠りを繰り返し何度もクビになりそうな時、レミリアの前でや
っているあれだ。

土下座されているところはよく見るが逆になっているところなど見
る事も想像すらできない。そんな屈辱的な格好をレミリアがやった
のだ。フランのために。

新「うん。正直驚いたよ。あの紅魔館の当主のレミリアスカーレット、高貴な方なんでしょ？その人が土下座なんて」

フランは目を丸くする。月明かりに照らされて紫色になった大きな綺麗な瞳があらわになっていく。その大きい瞳が入ってしまいそうなくらいに口もぽかんと開けられている。

回想

町民だけでなく、咲夜、霊夢まで固まってしまう。

普段礼儀正しく、気品の塊のようなレミリア。そのレミリアが町民に懇願する。それだけならまだしもプライドを投げ捨て、両手両膝を、さらに額まで床に押し付けたのだ。

レ「あの子はずっと地下で暮らしていてまだ常識を知らないだけです。495年間閉じ込めていたけれどやっと外で遊ぶ事ができるようになったんです。」

額を床に押し付けたまま懇願するレミリア。

民「お、おい・・・謝ってるだべ・・・」

民「ああ、あの紅魔館の当主が・・・」

民「おらたち何か悪い事したんでねえか？」

町民はそのカリスマ性あふれる土下座に困惑している。中には罪

悪感すら感じるものもでて来ている。

ずっと額をつけているせいであんなに帽子を被っているのは、ここにいるものの中で一番気位が高く、一番プライドが高い人物だろう。その人物が一番低い位置にいるのだ。困惑するのも無理は無いだろう。背が一番低いのだがそれは置いておいて。

レ「そのせいでわけも分からず色々なものを壊しています。皆に迷惑をかけてしまったという事も事実です。でも決して悪い子ではないんです。」

霊夢は見誤った。それは何か策があるだろうと思っていたレミリアは何も策など無かったこと。そして自分の妹のためならばこんな事もやってのけるという覚悟だ。

自分の愛する妹が危険な状況にあることにいても立ってもいられなかったただけだったのだ。

レミリアは自分がもしフランの立場なら土下座などせずここにいらる全員を殺しているだろう。しかしその的となっているのは最愛の妹。これはその妹の為なら何だってするという覚悟の表れだった。

民「そ、そんなことしても無駄だ！あんとこの妹は頭がおかしい！」

民「そうだ！常識ってもんがないんだ！いつか里に被害が出るに決まってる！」

民「あんな悪魔は殺すべきなんだ！」

だがそんな事、町民には知った事ではないのだ。謝ったところで町民のフランに対する恐怖や怒りが消える事はない。例えここでフ

ランに注意すると言ってもまた繰り返すだろうとずっと平行線をたどる事になる。だから町民も引くわけにはいかないのだ。

レ「フランは私の家族です！ たった一人の・・・可愛い・・・妹なんです！」

レミリアの声はもう涙声になっている。霊夢や咲夜でさえ、こんなレミリアは見た事が無かった。

だから咲夜はもう見ていられなかった。限界だった。主のその屈辱的な行いに耐えられなかった。

咲「お嬢様！ もう」

レ「お黙りなさい！！」

しかしレミリアは自分を抱き起こそうとする咲夜を一喝する。

普段の冷静なレミリアではない。涙声を張り上げたせいで声がかすれている。

必死だ。妹を守る為に必死なのだ。自分の知らないところではない。自分の手が届く範囲で妹が、家族が殺されようとしている。だからそんな事など、自分のプライドが傷付こうと気品が傷つこうと、必死に守るに決まっているのだ。例えば自分の身が滅ぶことになって

も。
だからこんな土下座くらいフランを守るためならレミリアにとってはどうってことないのだ。

レ「ですから・・・フランを・・・たった一人の家族を奪わないで

欲しい・・・」

大いなる覚悟をもって繰り返されるレミリアの悲痛な叫び。しかし町民にその叫びは届かない。

民「うるさい！ けえれけえれ！」

民「んだど！ そう言ってまた暴れだすんだろ！」

レ「お願いします！ どうか！」

人間とは愚かな生き物だ。自分に謝っているものがいればそれが自分より弱いものだと思ってしまう。

町民の心からはレミリアに対する恐怖心が次第に消えていった。

無理もない、今まで恐怖の対象と見られてきたレミリアが頭を地に着けて謝っているのだ。まだ幼い少女が、だ。

今までその恐怖にさらされていた怒りが徐々に生まれてきた。

民「ならお前も一緒に死んじまえ！」

民「今まで散々怖がらせやがって！ ふざけんじゃねえだ！」

民「お前たちがいなければワシらは全員平和に生きれるんじゃない！」

そうして町民達は自分達が座っていた座布団を投げつけ始めた。更にはまだ中身が入っている湯飲みまで投げつけるものもいた。

霊「あなた達！ やめなさい！」

霊夢は止めようとするものの人数が多すぎて防ぎきれない。そしてそのひとつがレミリアの頭に直撃する。

レ「ぐっ・・・」

あまりの痛さにうめき声が漏れる。そのうめき声に一瞬、町民の暴拳が止まる。もう冷めているだろうがお茶がレミリアの顔にかかっている。

レ「・・・どうか・・・お願いします・・・」

だがレミリアはそんな事お構い無しに懇願を続けた。それに町民達は調子付き、暴拳はだんだんエスカレートしていった。

民「死ね！死んじまえええ！」

民「妖怪なんて皆いなくなっちまえばいいだ！」

もうレミリアの言う事など聞いてはいない、いや、聞こえもしないほどに町民達の声は大きくなっていく。集められたのはだいの大人数十名だ。レミリアの小さな声はかき消されていった。

しかし、それでもレミリアは懇願し続けている。

そして第二の湯飲みがレミリアに襲い掛かる。

だがそれは2つ、4つ、10・・・と、まるでサイコロステーキのように細切れになる。

咲「お嬢様、言いつけを破る事をお許し下さい。」

咲夜だった。咲夜がレミリアの前に立ちはだかったのだ。ナイフを両手に持てるだけ持って。

んでくる咲夜はナイフを振りかぶる。霊夢は避けようとするが町民達によって盾にされ動くに動けない。

霊（殺られる！）

刹那、その霊夢を弾き飛ばし咲夜の襲い来るナイフの前に立ちはだかったものがいた。それは新之助だった。

だが咲夜は止まらない。止まるはずがない。最初から咲夜の狙いは町民だ。霊夢ではない。反動で霊夢が倒れ床に手を着く瞬間だった。

パリン！

何かが割れる音。それはレミリアが落とした自分の頭に当たった湯飲み。

それは不思議な響きだった。咲夜の頭の中で、その音が反響する。

周りの空気が変わる。咲夜の襲撃も止まっている。ナイフの刃が新之助の喉へ今にも食い込もうかという時、咲夜の目はまだ見開かれている。

そしてその目はまだ新之助を睨んでいる。

レ「咲夜。もどきなさい。」

咲「・・・はい。」

咲夜は新之助を睨みながら振り返りレミリアの前まで言って片膝をつく。そしてレミリアの顔についているお茶なのか涙なのかどち

らとも分らないような液体をハンカチーフで拭いとる。

咲「申し訳ございません、お嬢様。お怪我はあ」

パン！

とはレミリアが咲夜の頬をたたいた音。

それもそのはずだ。それは自分が土下座をして湯飲みの直撃や暴言を必死で耐えていたことを台無しにしたからではない。咲夜のその行動でフランの立場が危うくなってしまうからだ。あそこで刺してしまったならもうフランの処分は決まったも同然だった。

レミリアの潤んだ瞳は咲夜を睨みつけている。頬を真っ赤に染め、口をへの字に曲げて。それは全く子供の様な表情だった。叩かれた咲夜も叩かれた片方の頬だけを真っ赤に染めている。そして睨みつけられる視線から逃げるようにうつむいている。

新「あ、あの」

その何とも重い空気の中口を開く新之助。皆の視線が新之助に集まる。

新「どうでしょう、紅魔館のご当主であるこの御方はちゃんとした常識が備わっています。」

と誰かを案内するようにレミリアを示す。咲夜は横目でその新之助を、レミリアも咲夜の肩越しに新之助を見ている。

民「そ、それがなんだっていうんだ？」

大分勢いが落ちた町民の一人がそう問う。この状況で一体何を言うつもりなのか。

新「なら、妹さんにも常識を学んでもらえば、人里に恐怖を与えるような行動はしなくなると思うのです。」

民「常識を学ばせるってどういうことだ！」

民「そんなことできるわけがない！」

民「大体この巫女に常識があるとは思えねえ！」

標的が新之助になったとあってまた勢いを吹き返す町民。全く絵に描いたような、レミリアが言った愚民であるが、そんな愚民に新之助は熱弁する。

新「何故そうやって何もかもできないとあきらめるのですか！何故霊夢さんに全部任せようとするのですか！？僕達にも何かできる事があるかもしれないじゃないですか！」

ふふっ、と誰か笑ったような気がした。それは霊夢だろうか、霊夢の顔には少し笑みがこぼれている。咲夜もレミリアも意外な町民の発言に驚いている様子だ。

霊「おほおん！わかったわ。とりあえずここは私に任せてくれないかしら？」

と前の会議と同じような感じでまとめようとする霊夢。そう言っ
て今回は散々な目にあつたため町民は疑惑の目を向けているが今度の霊夢は少し違うようだ。

霊「いいこと考えたわ。」

現在

新「その場は霊夢さんが納めてその後の会議で今の計画が決定されたんだ。それで言いだしっぺの僕がこの計画を任されたんだ。」

フランの反応が無い。

新「フランちゃん？」

いつからだろうか、いつからフランの涙は頬を伝っていたのだろうか。

新「・・・泣いてるの？」

フ「へ？」

フランは今気付いた様に恐る恐るといったように頬に手をやった。その手は小刻みに震えている。

フ「涙？・・・私が？・・・そんな・・・わけっ」

そう言っとうつぶいてまた表情が見えなくなった。

新「フランちゃん？どうし」

フランの震える手がいきなり新之助の着ていた、青を基調としたそのはっぴを掴む。新之助の胸の辺りにあるフランの手はまるでそこから落ちてしまわないようにしっかりと握られていた。

その手は震えている。更にフランのおでこが新之助の胸にトンツとぶつけられる。かすかに漂ってくるやわらかく甘いおいと奮えが伝わってくる。

新「ふ、フランちゃん？」

フ「みんな・・・」

新「え？」

フ「みんな・・・うう・・・ひっぐ・・・ころじてやりたいって・・・えぐっ・・・おもった・・・ぐすっ・・・私・・・みんながらわれでるっで・・・」

新「フランちゃん・・・」

涙をぼろぼろとこぼしながら新之助を仰ぎ見る。それは涙がこぼれないようにしたささやかな抵抗だろうか。しかしそんな事は知った事ではないといった様に涙はどんどん溢れ出していく。

フ「だいきらいって言っちゃっだ！みんなしんじゃえっで！」

泣き出すと口が思ったように動かない。フランはまともに言葉がいないくらいに、しかしそれをぐっと我慢するように叫ぶ。まるで誰かに許しを請うかのように。

新「君は皆から愛されてたんだよ。今も」

フ「・・・私も皆が・・・うっ・・・」

新「皆が？」

優しい声音で問いかける新之助。フランは泣きながら顔をうつむける。

フ「皆が・・・だいずぎ・・・なのにつ！」

新「うん。分かってる。」

フ「えぐっ・・・なのに・・・だいぎらいっでえ・・・」

新「でも好きなんだよね？」

フランは最後の踏ん張りとはばかりに涙を流しながら歯を食いしばって頷いた。

それを機にフランは顔を新之助の胸に押し付けてついに声を上げて泣き始めてしまう。全身を震わせながら握る手には力がより力がこめられる。

儂い。その震える体には一番よく合うだろう言葉だった。人里の周りを、山を、あらゆるものを破壊してきたとは思えないくらいに細く小さな体。これ以上震えたら崩れてしまいそうなの。

男としてこれをどうすればいいか。それは決まっている。

新「大丈夫。」

フ「ふえっ？」

驚いて震える体をびくつかせるフラン。見た目よりも細く柔らかい。力を入れればつぶれてしまいそうなの、そんな小さな体を優しく抱きしめる。

新「大丈夫だから。皆フランちゃんのこと大好きだから。」

フランはすごく暖かい、そして安心感に包まれた感じがした。まるで触れる事すらできない太陽の光をずっと前から知ってたかのようなの、そんな暖かさに包み込まれたよう。

いつの間にかフランの震えは止まっている。

フ（何だろう・・・この懐かしい感じ・・・すごく暖かい・・・）

えずく様に泣いていたフランの瞳は閉じられ、きらりと月明かりに照らされて光る涙の粒が長いまつげに引っかかっている。それはまるで透明の果実のようだった。

そしてその透明の果実はいつの間にか熟して落ち、窓からは少し寒いくらいの夜風が二人をなでる。

新「フランちゃん？・・・あはは」

静かな夜。聞こえてくるのは鈴虫の綺麗な鳴き声とフランのささやくような寝息だけだった。

第四章（後書き）

ここでやっと序盤が終わったところです。

次回はフランの過去についてフランがいなくなった紅魔館で暇しているレミリアが語ってくれます。それでは

第五章（回想偏）（前書き）

今回は少し短いですが一応キリがいいので追加しました。
注意…まだフランの過去は出てきません。すみません・・・

第五章（回想偏）

紅魔館

空には雲ひとつなく真っ暗な空に、きらきら光る星と少し欠けた月が紅魔館を照らす。その紅魔館の窓がひとつ開け放たれている。中が暗いからか、そこはまるで月のスポットライトを受けているよう。

そのスポットライトにはテーブルと椅子が一组。

そしてそのテーブルには頬杖を付き、つまらなそうに、月に照らされた景色を眺める少女が一人。幼い顔立ちに紅の瞳、背には大きな羽を有する。レミリア＝スカレットだった。

その背後の暗闇からコツリ、コツリ、と足音を立ててティーセツトを持ってやってくるのはこの紅魔館のメイド十六夜咲夜だ。

咲「お嬢様、お茶をお持ちしました。」
レ「ありがとうございます。」

コトリ、と静かにおかれたティーカップに月の光が反射してレミリアの瞳を照らす。そのカップに紅茶を入れる咲夜。流れ出る紅茶が月に照らされて紫色に光る。

紅茶が注がれたティーカップを手に持ち口に運ぶレミリア。その様子はとても上品であり、その子供のような容姿とのギャップに、いつもなら恍惚の表情をする咲夜だが、今の表情は月の光に照らされていないせいか何処か曇っている。

しかしレミリアはそんな事など全く気づいていないかのように、一口飲むとまた窓の外の景色をつまらなそうな表情で眺めている。

咲「月が綺麗ですね」

主がつまらなそうにしていればそれをどうにかするのもメイドの仕事だ。しかし帰ってきたのはただ一言だけ。

レ「そうね」

だから咲夜も何とか間を持たせようと話しかけ続ける。

咲「妹様がいなくなって静かになりましたね」

レ「そうね」

咲「少し寂しいですね」

レ「そうね」

間が持たない。普段ならばこんな事はないのだが、というよりレミリアが自発的に話しかけてくることが多い。

しかしこうなってしまったのは、フランが今回の計画でこの紅魔館を一時的にとはいえ離れてしまったから、レミリアは寂しくてたまらずボーっと考え込んでしまっていた、事だけが原因ではないだろう。

前の会議で頬をひっぱたかれた咲夜とひっぱたいた本人のレミリアの関係がギクシャクしていたのだ。

そしてあまり我慢強くない咲夜のストレスがとうとう爆発してし

まう。

咲「お、お嬢様！」
レ「何？」

外を眺めたままで振り向きもしないレミリア。そんなレミリアの反応に、心にグングニルをくらわされたかのような表情をする咲夜。これは精神的にきついものがある。しかし負けじとばかりに続ける。

咲「怒っているなら怒っていると、そうおっしゃってください！クビにするというならクビにしてくれてもかまいません！その覚悟はできています！」
レ「怒ってないわ」

依然として窓の外を見ながら咲夜のほうは見向きもしない。

咲「嘘です！」
レ「嘘？」

そこでもようやく、ゆっくりと咲夜のほうをやっと見れるくらいに顔を動かして横目で見える。月の光が少し顔にかかって照らされているせいで何処か怒っているように見える。

咲「だ、だって最近何を話しかけても・・・いつも二つ返事で！」
レ「そう・・・ね」
咲「やっぱり・・・」

レ「あなたが私を、そんな小さな存在だと思っていた、という事になら怒ってあげてもいいわ」

と妖艶に笑うレミリア。

咲「え、あ、あうう・・・」

笑う時にちらりと見えたその吸血鬼の牙に、何処か安心してしまった咲夜は、ずっと怒っていただろうと思っていたレミリアのその思いがけない応対に目を泳がせ、唸ることしか出来なかった。

レ「あうう・・・ね」

とレミリアが返したその言葉にさっきまでとは打って変わってもう恍惚の表情だ。

咲「私は嬉しいです・・・ずっと怒っていると思って・・・」

とハンカチーフでうれし涙を拭いながら鼻水をすするという芝居がかった表現で嬉しさを表す。そんな咲夜にレミリアはため息をつきながら笑う。

レ「・・・怒っていたわ」
咲「え」

パサリとハンカチーフを落としてしまう咲夜。

レ「あの時はね」

と意地悪く笑うレミリア。その笑はやはりとても妖艶で、もちろんだまされた咲夜は恍惚の表情である。

咲（ああ、何という小悪魔な天使の笑顔・・・いただきます）
レ「私もあの時は頭に血が上っていて、でも私のためにやってくれ

たんでしょ？」

咲「お嬢様・・・」

照れ隠しのためなのか、それともただの仕草なのかまた顔を戻し景色を眺める。

レ「ありがとう」

咲「お嬢様ー！」

咲夜は思わず抱きついてしまう。

咲「お嬢様、一生付いていきますううう！」
レ（うぜえ・・・）

抱きつきながら泣き叫ぶ咲夜を他の誰かに見られる前に引き離すレミリア。咲夜は涙を手で拭いながら心に残った疑問をぶつける。

咲「では・・・何故ずっとボーっとしてらしたのですか？やはり妹様の事を？」

レ「・・・そうね」

咲「お嬢様と妹様は仲がよろしいですもんね。姉妹愛というヤツですか？」

レ「姉妹・・・愛？」

そう言うのと腑に落ちないといった表情になり顔を曇らせるレミリア。

咲「違うのですか？」

レ「そう・・・ね・・・」

レミリアは何か考えるように背もたれにもたれかかり、尚且つ組んだ片方の足で椅子を傾け、ゆらゆらと揺らしている。咲夜はもしもレミリアが後ろにずっこけた時の為に腰にぶら下げていた時計を握る。

レ「怒るわよ？」

突然目を開けたレミリアがそんな咲夜を一喝する。咲夜はパツと手を離れたようだが遅かったようだ。

咲「も、申し訳ありません！」

フツツとレミリアが笑った気がした。そして体勢を戻し、また頬杖を付く。

レ「そう、そうね。これは謝罪よ」

咲「え、あの・・・どういうことでしょうか？」

レ「あの子があんなふうになったのは私のせいなんだから」

咲「え、ええ？えええ！？」

わけが分からず目を泳がせる咲夜を楽しそうに見るレミリア。ひよっとしたらレミリアはSなのかもしれない。あんな風とは見境なく人を襲い、気に入らないことがあれば暴れだし、手に負えなくなる、所謂情緒不安定だという事象についてだろう。

レ「ちょうどいいわ。暇だし。あなたに昔話をしてあげるわ。心して聞きなさい」

咲「は、はい！」

第五章（回想偏）（後書き）

予告とは違いましたが、次回からフランの過去をはじめさせていた
だきます。

申し訳ないです・・・。

第六章（回想偏）（前書き）

キリが悪かったので前回の宣言と違ったことを改めてお詫びします。
さて、ここでフランとレミリアの過去が徐々に明らかになってきます。

※この章は前編という形になります。

第六章（回想偏）

大昔。幻想郷の西のずっと西。そこには吸血鬼の住む町がところどころに点在していた。フランとレミリアはその西洋のとある国で暮らしていた。

父は吸血鬼の中では高位に値する人物。二人もそれに見合った優雅な生活を送っていた。

フランとレミリアは腹違いの姉妹でレミリアは吸血鬼同士の子供。しかしレミリアの母親が吸血鬼ハンターに殺されてしまう。そして次に人間を母として生まれたのがフランだった。

だがその両親も禁忌を犯したという吸血鬼の迫害にあい、然るべく、教会を後ろ盾に動くハンターに狙われて殺されてしまう。

残ったフランとレミリアは吸血鬼の集まる町に孤児として連れてこられたのだという。

そこは吸血鬼とハンターが平和協定を結んでいた安全な場所だった。教会に属している教会直属の軍隊隊長であるダリスは吸血鬼との仲を深めようと時々、吸血鬼達の住む町へやってきていた。所謂親善大使である。

紅魔館

レミリアと咲夜は青白い光のスポットライトを浴びながら昔話を

続けていた。咲夜はまるで子供が話の続きをせかすように興味心身にその話に耳を傾けている。聞き手がこんな状態なら話し手はとも楽だろう。レミリアもつまらなそうな表情の跡など微塵も見せないくらいに生き生きと語っていた。

レ「フランはそのダリスという吸血鬼ハンターに好意をもってたわ」
咲「人間にですか？ しかも何故ハンターなんかに？」

レ「フランはね、信じられないと思うけど、昔は人見知りで、母親が人間という事もあって友達なんていなかったの。だから部屋ですっとお人形ごっこばかりしてたわ」

咲（今も同じような感じですけど）

レ「そんなフランを同年代の吸血鬼が面白がって連れ出したの。そして皆でダリスを襲おうとした」

咲「えっ？ 大使を襲ったらずいのでは？」

全くよく食いついてくれるメイドだと、もうレミリアは思わなかった。咲夜はまだ若く、そしてレミリアはゆうに500歳をこえている。レミリアからすれば咲夜は赤ん坊みたいなものだからだ。

だから声音を少し優しくし、小さな子供に話しかけるように語りだすレミリア。

レ「そうね。まあ所詮は子供の遊びよ。その子達はダリスにコテンパンにやられたらしいわ。だからその子供達は一目散に逃げたの」
咲「そうですか。それはよか」
レ「ただし」

と咲夜の閉じたり開いたりする唇に人差し指で蓋をする。傍から見たら妙な光景である。小さい子供が大きい大人の唇を人差し指で蓋をしてるのだ。実のところは小さい大人と大きい子供なのだが。

そしてレミリアはためにためてびっくりさせてやろうという気満々の顔で言い放つ。

レ「フランに『お前はハンターの注意を引いてろ』といってね。」
咲「そんなんっ」

ここまで反応がいいと逆に笑ってしまうだろう。現にレミリアはフフツと鼻で笑っていた。

そして咲夜の口をふさぐために乗り出した体を背もたれに預けて更に話をつづける。

レ「ダリスはフランを縛り上げて吸血鬼の私達が住む町へ連れて行ったわ。そこで思いっきり叱られたけど、ダリスの口添えでフランの罪はすぐに許された。更に逃げた子達を叱るように進言してね。仲間を捨てて逃げるなんて許せないって」

咲「それでその男を好きになったと？」

レ「そうねえ……。そのときから付きまっていたわね、たしか……。一方的にだけねど」

何かを思い出しながら語るように天を仰いでまた椅子をゆらゆらさせる。付きまどっていたとは変な言い方だが恋する乙女はそんなものなのかもしれない。

そしてそんなレミリアを見ながらやはり時計に手が伸びる咲夜。

レ「怒るわよ？」

とまた一喝される咲夜。と、咲夜が時計から手を離れた直後「キ

ヤッ」等と可愛らしい声を上げてレミリアが勢い余って後ろに倒れてしまう。

咲「お嬢様！」

咲夜はわざとらしく大きく両腕を振りかぶる。思いっきり抱きしめるつもりだったのだろう。だが咲夜が抱きしめているのは椅子だけだ。

レ「なんてね」

レミリアは宙に浮いて呆れ顔で咲夜を見る。だがそれは楽しそうな呆れ顔だ。

咲「お、お嬢様ひどいですう・・・」

レ「うふふ、ちょっといたずらしたくなったのよ。それとこの後話す事のためにテンション上げておかないと思ってね」

咲夜は抱きしめている椅子をもとあった場所に戻しレミリアを座らせる。

咲「そうですか・・・楽しみですが、それよりも許せないですよ、その子達は。私がビシッと一発！その子供達は今何処に？」（子供という事はお嬢様と同じ子供！）

なにやら顔をにやつかせる咲夜。レミリアはそ知らぬ顔で紅茶をすすると、ふと視線を落として一言。

レ「死んだわ」

咲「え？」

別に咲夜が能力を使ったわけではない。俗に言う「時が止まる」とはこの事を言うだろう。声のトーンも下がり、より一層現実身が増してくる。

咲「まさかお嬢様が？」

だからこんな馬鹿な問いにレミリアは思わず笑ってしまう。

レ「ふふ、まさかつ。・・・これから私が話す事は人間である貴方にとって少し耳が痛いものになるかもしれないわね。」

回想

吸血鬼の町

広く分布する、光も入らないような、一度入れば抜け出す事ができないような深い森。その最奥にある城壁に囲まれた西洋風の城。

そしてその城壁に囲まれた城下町に吸血鬼達は暮らしていた。光が全く入らないような家の造り。窓にガラスを張っている家はひとつもなく、全て木製で開く事でしか外を見ることができない。

その町の入り口に、門番と何やら話している二人の人影が。恐らく吸血鬼の町への入出許可を取っているのだろう。その町へは普通の吸血鬼でさえ、入るのに許可を取らなければならない。人間と平和協定を結んでいる町に凶暴な吸血鬼や、人間に対して前科を持つ

ている吸血鬼が入ってきては困るからだ。

その二人の内一人は岩のようにでかい。それはダリスという吸血鬼ハンターの隊長であり親善大使でもある男。2メートルを超えるかという大男だが顎には無精ひげが目立ち、髪もぼさぼさだ。

そのダリスの後には弟子のようについてくる少年が一人。

その二人がゆっくりと町の中央を突っ切る一本の大きい通りを歩いていく。城壁の正門を抜ければ正面には真っ直ぐな道とその奥には大きな城がそびえ立つ。

空には満天の星が輝く夜空が広がっていて、もう吸血鬼の苦手な太陽は出ていない。にもかかわらず、二人が歩いて行く度に通りに軒を連ねる家々の窓や扉はパタリ、パタリと閉められ吸血鬼が出てくる気配がない。さらにその隙間からは殺気に似た紅の視線が向けられる。どうやら平和協定は結んでいるもののあまり友好的ではないようだ。

少年はおどおどと周りを伺いながら歩いているが、ダリスは慣れているのか、そんな事を気にするそぶりもない。

そしてやっと城内に入るとはるか上空に小さな黒い影が。そして豆粒のように小さかった黒い影がだんだんと大きくなっていく。

「おじさまー！」

色素の薄い金髪をなびかせ、それを白い帽子で覆い、赤と白色でできた西洋風の服。その白く綺麗な肌で包まれた顔には二つの紅の瞳がくっ付いている。

それはフランだった。どうやらフランはダリスのことを「おじさま」と呼んでいるらしい。ハンターに対して吸血鬼が「おじさま」とは何とも奇妙な関係だ。そのフランは遙か上空に飛び出しダリスに向けて一直線に向かってくる、というより落ちてくる。その勢いで思いつきダリスに抱きつかうというのだろう。

しかし飛び降りてきた勢いで抱きつくには少し高すぎる。例えフランのような小さな子供でもただではすまないだろう。

しかし、ダリスは上空から降ってくるフランの両脇を何事も無いようにがっしりと受け止める。

フ「ぐはぁ!」

とは、当然である。飛び降りる勢いで思いつき両脇をクッションも無しに岩にぶつけられたようなものだ。それはそうなるだろう。

フランは頭がもげんばかりに頭を振ってキャッチされる。しかしフランは吸血鬼だ。そんな事たいしたことではないのだろう。そしていつもの事というように息を整える。

ダ「出たな悪ガキ」

フ「ゲホッ・・・ふふふ、久しぶり!おじさま!」

ダ「ははは、元気そうだなによりだ」

ダリスも別段驚く様子もなくあっけらかんとしている。唯一驚いているのは後ろに弟子のように付いてくる少年だけだ。

フ「あ、あの、おじさま?」

ダ「ん？」

しかし恋する乙女は盲目だ。そんな少年などいないかのようにダリスに喋りかける。

フ「手が私のお胸に当たってる」

もじもじしながら顔を赤らめて言う。牙を出してニヤニヤしているので演技だということがばれられた。

ダ「あ？ああ、あったのか、気付かなかった」

だからダリスは冷静に対応する。そしてこれもいつもの事なのだろう。ダリスもつられてニヤリと笑う。

だがそんな事を思っているのはダリスだけだったらしい。

フ「むっ」

フランは驚きもせず、さらに動揺もせずに言い放つダリスに鬼の形相で中指を立てて悪態をつく。しかしそんなことにダリスは動じない。その悪態に笑いで返しながら慣れたようにフランを肩車させてやる。

するとフランはダリスの頭に抱きつくように手を回し頭の上に顎を置く。なんともしっくり来る光景だ。これも恐らくいつもの事なのだろう。

フ「あ、おじさま」

ダ「ん？」

フ「私の太ももがあたってる、これって痴漢だよね？」

ダ「うるせえ。振り落とすぞ」

いけしゃあしゃあとそんな事を言ってくるフランにいつまでもかまっけてられない、とばかりに言い捨てる。

フ「あ、おじさま」

しかしフランもこれで終わりはしない。

ダ「今度は何だ？」

ダリスはまたか、とだるそうに言い捨てるがフランは今度は恥じらいもなくこんな事を言い出した。

フ「私のパンツが・・・当たってる」

ガンッ

気付けばフランは投げ飛ばされ弟子の横に置いてあった樽に逆さになって突っ込んでいた。

ダ「あ、悪い。つい」

弟子はびっくりしながら慌ててパンツ丸出しになっているフランを樽から引っ張り出す。引っ張り出されたフランは弟子にお礼も言わず、ダリスを見るや否や鬼の形相で詰め寄った。

そして文句を言うフラン、対してそれをなだめるダリス。

その光景を眺めていた弟子はほっとため息をついて落ち着いている。それもそうだろう。ダリスの粗暴な吸血鬼の扱いに驚かないわけが無い。平和条約を結んでいるとは言え、ひよんな事からその条約は壊れてしまう事がある。些細な事で戦争にまでなってしまう事だってあるのだ。

だがその二人のやり取りを見てみると心配する事はないだろう。と不意にその弟子が何かに気付いたように目を丸くする。そして二歩、三歩と後ずさりすると慌てて何処かに行ってしまった。

フ「ん？」

フランはダリスの体の横から逃げていく弟子の後姿を目で捉える。

フ（弟子が逃げてった？もしかして私のサプライズが・・・）

数瞬の間その弟子を黙らせようかと思案したフランだが

フ（まあどっかいったしいっか）

と、そんな弟子を特に気にもしないフラン。そんな事よりもダリスの女性に対しての粗暴な行動を非難するので忙しかった。女性とはなんであるかをくどくどとダリスに叩き込んでやらねばと思っていたのだ。ダリスはそんなフランをなだめるのに精一杯だった。

ダ「だいたいだなあ、お前が変な事言うからだぞ？」

フ「ふん！」

フランはご機嫌斜めだ。それもそうだフランのようないたいけな少女を捕まえて放り投げ、樽にストン、だ。フランが怒り狂うのも

分からないでもない。

もしここでフランの機嫌を損なえば吸血鬼と人間の関係が悪化してしまう、何てことはないだろうがいつまでもフランの説教を聴いているわけにも行かない。

ダリスは荷物の中からごそごそと何かを取り出した。

ダ「・・・まあ、機嫌直せよ。ほら、欲しがっていた兎のぬいぐるみだ、探したんだぞ？」

するとさっきまで不機嫌だったフランの顔はすぐさま満面の笑みに変わる。それはフランが前々からずっと欲しい欲しいと言っていた、人が住む所にある、真っ白い兎の人形だ。

フ「わー！わー！ありがとう！やっほーい！」

フランはとても嬉しかったのだろう。宝物でも見つけたかのようにぬいぐるみを天に掲げ踊っている。そしてくるくる回ってぎゅっと人形を抱きしめる。

なんとも微笑ましい光景である。もちろんダリスはそれを見て満足顔だ。

ダ「どういたしまして」（やっぱガキだな）

とさっきまで機嫌が悪かったのにもう上機嫌なフランに、大袈裟に、女王陛下にでも挨拶するかのように胸に手を当てて深々とお辞儀をする。

フ「くるしゅうないぞ」（後でこれをネタにもっとねだってやろつと）

とフランもそれに乗っかって女王さまごっこに付き合っでやる。

両者裏にあるどす黒い感情を押し込めつつ、フランはダリスの肩に乗り直し、兎をクッション代わりにダリスの頭に載せる。そしてダリスの頭に顎を置く代わりに頬を置いて兎に密着させた。フランは気持ちよさそう。今にも眠ってしまいそうな程気持ちよさそうに目を細める。

ダリスは寝るなよと一応忠告しておいた。前によだれをたらされ、髪の毛がカピカピになった事があるのだ。その時この町の長に腹を抱えて笑われてしまった。今度寝たらカピカピになるのは兎のぬいぐるみなのだが。

ダリスはフランを肩に乗せたまま、城に住む吸血鬼の長に軽く挨拶する。その長も肩に乗っかっているフランを笑いながら見ただけで特に何も言わなかった。この光景はこの町ではもう当たり前なのだろう。

挨拶をすませ、二人は城の庭の外灯の光が当たるベンチで一息ついていた。この時代に電気などないのだが、それは吸血鬼たちの古くから伝わる知恵である。

吸血鬼たちはとても長生きだ。そしてその知識をほぼ全て蓄積し使用し更に進化させる事もできるのだから。だから人を見下し家畜同然としか見ておらず関心は薄い。ダリスが来た時の町の反応はそういう事からもきているのかもしれない。

外灯が当たるそのベンチにダリスは腰を下ろし、その隣にはもちろんフランも座っている。フランは最近あったいろいろな事をダリスに話していた。

フ「でねえ、おねえちゃんがお腹に穴開いちゃって。さっき飲んだ紅茶が出てきちゃってさ、もう爆笑だよね」

ダ「はは、笑えない冗談だな」

などと物騒な事をべらべらと喋っている。傍から見たら学校で何があったかを得意げに話す娘と父だろう。と、そんな事を言うときまたフランの機嫌が悪くなるだろうからダリスは言いはしない。

フ「冗談じゃないよ？吸血鬼ならこんなの普通だよ。すぐ直っちゃうし。おじさまも吸血鬼になったらいいのに」

吸血鬼にどうやってなるのかは置いておいて、その言葉に少し表情を曇らせるダリス。ダリスは片眉を吊り上げ複雑そうな面持ちでフランに問いかける。

ダ「なあ、フラン。」

フ「何？」

ダ「お前は俺が嫌いじゃないのか？」

フ「なんで？」

ダ「俺はハンターだぞ？今までに何人も吸血鬼を殺してきた。未だにあちこちから殺気が感じられる」

ダリスは少し辺りを見渡しながら言う。

この城は孤児院としても使われている。この庭もこの日の当たらない時間は子供達が遊んでいるのだが皆ハンターを怖がって城の中

に隠れている。そしてところ何処ろ隙間から赤い目が覗いている。それは殺気とも憎悪とも取れるような痛く突き刺さる視線。

レミリアに限っては暢気に紅茶を飲みながら城の一室から二人の事を見下ろしているが。その皆が嫌っているハンターとフランは何事もないように話している。

フ「私は好きだよ」

だからそんなフランの言葉に面食らう、という事はもう無いが実際、最初ダリスは驚いたものだった。吸血鬼が自分の命を狙うハンターに好意をもつなんて、と。

こんなフランの態度に慣れたといえbaum慣れたダリス。だから少し立ち入った質問を試してみる事にした。

ダ「お前の両親は何も言わないのか？」

フ「いないよ」

ダ「なに？」

と、とっさに聞き返してしまうダリス。女性の過去を詮索するなんて野暮な事だとよく言われる。そしてこれは失敗だったらしい。長い寿命を持つ吸血鬼がこの年代の吸血鬼を置いていなくなるということはつまり

フ「ハンターに殺されちゃった」

それしかない。恐らくこの城に住んでいる子供達のほとんどがその部類だろう。

しかしそれでも不思議な事にフランは笑顔のままだった。

ダ「・・・そうか、すまん、変なことを聞いた」

そういえばフランはこの城の近くでよく見るなど、今更思い出すダリス。フランはこの城であり孤児院でもある所で暮らしているのだ。今まで何処かの家から勝手についてきてるものだとばかり思っていたのだ。

フ「あははは」

謝った事もフランは気にしていない風だった。どうやらそういう湿っぽい話はしたくないのだろう。親が死んで何年たつかフランは吸血鬼なので分からないがこれは芝居などではなく無理に笑っているという風でもない。

だからダリスも湿っぽいのは嫌いなのでそのまま自然に会話をつなげる事にする。

ダ「じゃあなおさら嫌いになるだろ？俺はそのハンターだぞ？」

フ「嫌いじゃないよ。お父様とお母様も言ってたもん。人間を嫌ったり憎んじやいけないって」

ダ「へえ、めずらしいな」

ダリスは素で関心してしまった。そんな事を言う吸血鬼がいるのかと。ハンターに命を狙われながら尚そんな言葉が出てくるのかと。

フ「だって人間無しでは私達は生きていけないんだもん」

ダ「ま、まあそりゃそうなんだが・・・」

まっすぐにダリスを赤い瞳で見つめながら嬉々として話すフラン。

それは恐らくフランの母が人間である事を説明している時に出た文言だろう。

しかしそんな事を知る由もないダリスはあたりまえなフランの意見に少しがっかり、しかし真面目にそんな事を言うフランが少し面白かったので、がっかりしているのか笑っている分らないような、微妙な表情をみせる。

ダリスはその微妙な表情を直す為にそっぽを向いてカリカリと頬を掻いて表情を変える。

フ「でも」

表情を直しているダリスから視線をおろし少し声の調子を下げたフラン。フランの異変に気づきダリスは頬を掻きながらフランを横目で見る。

フ「そのせいで人間から嫌われることをいつも嘆いてた」

フランの横顔は何処か懐かしむように、そして寂しそうだっただからその後に出てくるフランの言葉と表情にダリスは目を丸くする。

フ「人間と吸血鬼が一緒に暮らせる日が来ればいいのにな」
ダ「それは・・・」

それはダリスが描く理想と全く同じだった。それに気付いたダリスにフランがニヤリと牙を見せて笑った。

ダリスはしまったと思った。しかしフランはニツと両方のまだ幼い牙が見えるくらいに笑う。

フ「そう！おじさまと一緒に！私はお母様とお父様すきだったよ。だから私はおじさまがすきなんだよ」

これが言いたかったのだろう。二カツと白い歯と立派な八重歯を見せて笑うフラン。

ダ「ッ！」

全く何処の誰がこんな方法を教えたのか。しかしそんなまだ子供のフランの満面の笑みにダリスは思わずドキッとしてしまった。だからすぐにそっぽを向いてフランに勘ぐられるのを防ぐ。

そんなダリスを見て不満そうに口を尖らせ前に向き直るフラン。

フ「でも、おじさま以外の人間はまだ・・・好きになれないけど・・・」

今度は少し口を尖らせて小さく呟くように言う。

ダ「・・・そうかい」

ダリスはそう言って仕方なしにフランの頭に手を載せてワシャワシャとなでてやるのだった。女の子の頭を撫でるには少し乱暴だがフランはフランで嬉しそうだった。きっとこれもいつもの事、なのだろう。

フ「私ね、大きくなったらおじさまと結婚してあげてもいいよ」
ダ「まだガキの癖に寝ぼけたこと言ってるじゃねえよ」

そしてまたいつものようにフランの逆セクハラ的な言葉が出てくるがダリスはもういつもの事なのでもう驚きはしない。

しかしそんなダリスに今日のフランは食い下がる。

フ「ガキじゃないもん！おじさまより年上の熟女だもん！」

ガクリと肩を落とすダリス。さすがにその幼すぎる口からは想像もしていなかった言葉だった。

ダ「そんな言葉、一体何処で覚えたんだ？」

フ「おねえさまが言ってたもん！」

ダ「ああ・・・はは・・・」（あの子か・・・）

ダリスは妙に納得してしまった。

ダリスはレミリアに対しては周りからは子供のなりだが何処か大人びたしっかりした印象を受けていた。幼い頃から高位の吸血鬼について行っていたせいでマナーや礼儀、言葉遣いに対してはほぼ完璧だった。

だからダリスもフランとは違い大人として一目置いている。

ふと上を見ると城の窓からこちらを見下ろしているレミリアがい

た。レミリアもその視線に気付いてか笑顔で手を振り返してくる。手を一度振るたびにダリスの顔がだんだん引きつっていく。

しかし、今はそんな事よりもまた駄々をこねているフランの機嫌を直す事が先決だ。

毎度毎度このようなフランの非難にあうダリスは対策を用意していた。

ダ「まあまあ、これをやるから機嫌直せよ、飴だ」

これも吸血鬼の町には無いものだ。だから密かに吸血鬼の子供には大人気だった。

フ「わー！ありがとう！」

ダ「あはははは、やっぱガキだ」

熟女やら結婚やらと言っていたフランが、こうもあっさりただの飴玉で機嫌が直るので思わず、というか思いつきり腹を抱えて笑ってしまうダリス。

フ「む〜」

もちろんフランは飴を口に入れた頬をパンパンに膨らませダリスを睨みつけている。そして笑って大口を開けているダリスの口に思いつきり、ありったけの力を込めて飴をぶち込んだ。

ダ「ぐっ！？グハッ！？ゲホッゲホッ・・・」

飴は思いつきりダリスの喉の奥へ直撃しそのまま飲み込んでしま

った。その勢いは下手をしたら喉を突き破って死んでしまう勢い。苦しがるダリスを尻目に何故かフランは恍惚の表情で目をらんらんと輝かせている。

フ「こ、これが間接ディープキスってやつね！」

フランはもじもじしながら両手を赤らめた頬に当てる。

ダ「ば、ばかやろう！げほっ・あんな勢いで飴を吐き出すんじゃない！下手すりゃ死ぬ！」

フランはそんなダリスを心配するそぶりも無く顔を背ける。さつきとは一転してツンとする。全くよく表情が変わる娘だとダリスはため息混じりに思う。

フ「私・・・」

と聞こえたかと思うと頬を赤らめ、目を涙で滲ませたフランがうつむきがちに

フ「本気だもん・・・」

などと言うものだからまたしてもダリスはドキッとさせられる。

少し震えている。恐らく演技ではない。つまりこの本気は本気の本気だろう。ここで茶化したらどうなるか。襲ってくるならまだいいが大泣きされるのは困る。それならまだしもそのまま無言でどっか行かれるのはもっと辛いものがある。

ダリスは慎重に言葉を選ぶ事にする。

ダ「お、大きくなったらか？」
フ「うん！」

やっと真面目に取り合ってくれたからか、若干機嫌が直るフラン。フランが大きくなったらと思うと末恐ろしい魔女になるだろうな、と思いながら逆にどれくらいの時間が必要なのだろうか、と考えてみた。

ダ「俺は生きてっかな」

だからそんな一言を呟いてみたのだった。人間と吸血鬼の寿命は違うのだ。

フ「えー・・・じゃあおじさまもやっぱり吸血鬼になったらいいんだよ」

ダ「はっ。太陽と一生お別れなんてごめんだな」

フ「じゃあ私がおじさまの太陽になってあげる」

ダ「・・・おまえなあ・・・何処で」

またしても何処かで聞いたような臭い台詞を言い出した。もう予想は付くがとりあえず上を見るとレミリアがウインクしてきた。ダリスはあきれて笑うしかない。

フ「今すぐにもいいよ？」

だがフランの攻めはまだ続く。

ダ「俺がロリコンって思われるだろ？」

攻めてくるなら守りを固めるしかない。その守りで鉄壁の防御を誇るその言葉をダリスは言い放った。それにはフランはいつも困り顔でうなるのだ。長い年月をかけないと色気のある吸血鬼にはなれない。時間はどうする事もできないのだから。

フ「むゝ、いつもおじさまは私をガキ扱いするけど私だってちゃんと成長してるんだよ？」

ダ「へゝそのつるぺたの体でいうのか？」

そう言いながらケラケラと笑うダリス。体で女性を判断するとは人間として最低である。

だからフランも暖めておいた策を披露する。

フ「ほら！」

ダ「ん？」

フ「羽も生えてきたんだから！」

ベンチから飛び降り、ダリスに背中を見せるようにスカートをなびかせてくるっと回る。

レミリアには立派な羽が生えている。そしてダリスはレミリアには一目置いている節がある。そこから推測して自分にも一目置けという事だろう。

しかしその背には普通の羽とは違う異形の形をしている。とても小さな羽に緑色の綺麗なランタンのようなものが付いている。

ダ「こ、これは・・・」

フ「えへへ、驚いた？」

そう、フランが言ったとおり、ダリスは凍りついたように固まってしまう。開いた口が塞がらないくらいに。

ダリスが固まってしまうのも当然だった。この出来事がきっかけでこの微笑ましいダリスとフランの関係、更には人間と吸血鬼の関係が脆くも崩れ去ってしまうのだから。

第六章（回想偏）（後書き）

ここまで読んでいただき誠にありがとうございます。

次回でついにここまで普通？だったフランが何故あのようになってしまったのかが明らかになります。（今回は本当です）

では～。

第七章（回想偏）

フ「どうしたの？おじさま？何か言ってよ」

予想以上に驚き、そして成長したなと一向に褒めてくれないダリスをおかしいと思ったフランはしかめっ面で問う。その問いによってダリスは引き戻されすぐさま聞き返す。

ダ「そ、その羽は？」

フ「ふふふ、綺麗でしょ？スコシ前に生えてきたんだあ。ちょっと変な形だけど」

と自信満々に無い胸を張って言うフラン。だがこれはダリスにとって、そして吸血鬼にとって非常にまずい事態になる火種に他ならなかった。

ダリスは現状を確かめるためまず片膝をつき、フランの細い両肩に手を載せて掴み、目を見る。これはまじめな話だという雰囲気を作り出すためだ。普段がこんな風な感じなので冗談で終わらせてしまいかもしれない。それだけ現状は時間がないということだ。

フ「おじさま？」

フランはその雰囲気を感じたのか少し困惑気味だ。そのフランにゆっくり、しかし力強く話す。

ダ「フラン、これを教会の人間のだれかにみられたか？」

フ「う、うん・・・おじさま」

ダ「違うっ俺以外だっ」

あせるダリスは語尾が強くないように努めているがどうしても、事態が事態だけに怒鳴るようになってしまう。そんなダリスに少し怯えつつもフランは答える。

フ「おじさまの弟子が・・・見てたかも・・・でも驚いてどっかいっちゃった・・・なんで？」

ダ「弟子？・・・あいつか・・・なんてことだ・・・」

とダリスは独り言のようにぶつぶつと喋っている。

フランが弟子だと思っていた少年。実は教会側がダリスが吸血鬼側に不等な契約を結ばないように派遣された、いわば監査役だった。ダリスは軍人で交渉にはあまりむかないからだ。

その監査役にフランの羽を見られたことで事態は急速に悪化することになる。ダリスはフランに話すため、うつむいていたせいで、目にかかっていた前髪をなで上げるように額に手を当てる。

ダ「・・・他の吸血鬼に誰にも見せるなどは言われなかったのか？！」

その怒鳴るようなダリスの言葉に、フランは恐る恐る頷くことしか出来なかった。

ダ「吸血鬼の間で伝説は継承されていないというのか・・・」

と呟き顔を少し上げレミリアを見る。レミリアも何の事かよく分からないといったふうに首をかしげる。

フ「おじさ」

ダ「見られたのはいつだ?!」

フ「・・・今日おじさまが来て・・・すぐ」

ダ「・・・なんで気づかなかったんだ!」

と自問自答するダリス。羽が生えていた事はフランが意図して黙っていたのだ。気付くはずがなかった。

フ「お、おじ」

フランはわけがわからずどうしていいかわからなかった。もうダリスのことを呼ぶ事もままならないほどに。ダリスの様子は尋常ではない。

フランには何かいけないことが起こっている事だけしか分からなかった。

ダ「すぐ追いかけてねば!」

フ「ど、どうして?今日はずっといるって」

現状を把握できないフランは目の前の現実だけを見て判断するしかない。だから素直にダリスが何処かに行ってしまうことを何とかして止めようとする。

ダ「フラン!」

ダリスはフランの肩を掴み直し、すごい剣幕でフランを見つめている。それによって、フランの儚い願望はダリスの一言で打ち碎かれた。

ダ「すぐ戻るといいたいがもし私が戻らない場合、いや・・・」

更にそんなフランに追い討ちをかけるようにダリスが信じられない言葉を吐く。一人称を俺から私に変えて。

ダ「教会が攻めてきた場合に備えて」

これにはさすがのフランも目を丸くする。昔フランの両親はハンターに殺されている。そのような事が起きないようにと連れてこられた、平和協定を結んでいるこの町に教会が攻めてくるなどありえないからだ。

フ「おじさま？何言って」

しかしそれは平和協定の表面だけしか知らないフランの考え。

ダ「聞くんだ！このままではお前は殺される！いや・・・それよりも恐ろしい実験体にされるかもしれない！もし教会が攻めてきたら姉さんと共に逃げなさい！」

ダリスは問答無用で、フランに有無を言わず喋り続けた。それはフランにとって理解しがたい事ばかり。

それに殺される、実験体にされるとは一体何なのか。

教会と吸血鬼の内情を知らないフランにはダリスの険しい表情以外に危機感を持てる理由が無かった。

フ「なんで」

ダ「なんでもだ！」

フ「ひゃっ」

いつまでも危機感をもてないフランに苛立ちを覚えるダリス。まるで聞き分けの無い子を叱りつける様に怒鳴り散らす。

ダリスは説明してやりたいがそんな時間もなく、更に説明せずにフランを納得させる事が難しい。それがもどかかった。

しかしどんな理由であれこんな小さな子供を怒鳴り散らしていいはずがない。

ダ「す、すまない・・・」

だからびくつくフランを見て我に返ったのか、ダリスはまた額に手をあてばつが悪そうに一言謝罪する。

ダ「とにかくここは危険かもしれない。いつでも逃げれる準備をしておくんだ」

フ「う、うん・・・」

フランは頷く。いや頷かされたという方が正しいだろう。

ダ「じゃあ俺は行く」

ダリスは立ち上がると踵を返しそそくさと町の外へ向かう。

フ「おじさま!」

ダ「ん?」

フランがそんなダリスを呼び止める。ダリスが戻らない場合など

と言うから、このまま一生会えなくなるかもしれないと感じたのだろう。

ダリスは振り返らず首だけを向け肩越しにフランを見る。フランは兎のぬいぐるみをきつく抱きしめている。

そしてダリスを見ずにうつむきがちに言う。

フ「おじさまは・・・すぐ帰ってくるよね？」

またダリスに会いたいという一途な思い。フランは本当にダリスが好きなのだろう。

しかしその顔に笑みはない。恐らくダリスの返答に希望がもてないからだ。

実際にダリスは何かを考えるように黙りこくっている。

ぬいぐるみの形が徐々に歪む。形が変形してもどらなくなってしまう程に。それはフランのうつむいてよく見えない表情を映し出した鏡に見えなくもない。

その様を見てダリスは一度目を瞑りゆっくりと振り返る。フランもそれに気がついたようにビクつくように顔を上げる。

ダ「ああ。すぐ帰ってくる。だから心配するな」

しばらくの沈黙の後発せられたその返事はダリスも顔に笑みを浮かべていった。それにフランはパツと表情を明るくする。

フ「約束だよ!？」
ダ「ああ、約束だ」

ダリスは少し笑いながら返事をする。そして振り返って前を見ると上から見下ろしていたレミリアと目が合う。「フランを頼む」まるでそう言ってるかのような目、しかし表情は険しく、厳しい。

フランはフランで行ってしまうダリスを寂しそうな表情で見つめている。兎のぬいぐるみを抱きしめ外灯の明かりを受けながらダリスの姿が見えなくなるまでじっと見つめていた。

二日後の早朝、その町は吸血鬼の集団狩りにあった。

ハンター達は怪しげな妖術を使い吸血鬼たちを殺しに殺した。泣き叫び許しを請おうが胸には銀の杭を打ち付ける。

朝という事もあり戦いの最中、運悪く日向に出てしまったが最後、激しい苦痛にもだえながらハンターに殺されていく吸血鬼。

家という家には火が放たれる。中には火あぶり、外に出れば日光の餌食。

パチパチと物が焼ける音。気付けば辺り一面が焼け野原。

まさに戦争だった。いや、戦争と呼べるものなのかどうかも怪しい一方的な蹂躪。平和協定を結んでいた事もあり吸血鬼は何の対策もしていなかった。

そんな吸血鬼の町はたやすくハンター達の手に落ちていった。

唯一火の被害を受けなかったのは石造りの、レミリアとフランがいる孤児院でもある城だけだった。

その城にはハンター達が攻め入るしかなく日光や火の被害もないので対等に戦えるのだが、数の上で圧倒的不利にあった。孤児院という事もあり大人は少なく、結果は目に見えていた。女子供容赦なく殺されていく。

フランとレミリアは城の一室に籠っていた。家具の物陰に隠れ入って来たハンターを殺し窓から投げ捨てる、という事を繰り返していた。

どのくらい時間が経っただろうか。もう日が暮れて今なら外に出ても日を浴びる心配もない。逃げるなら今だ。

しかしレミリアとフランは未だに城に閉じこもっている。

レ「フラン！もうこれ以上ここにいるのは危険よ！早く逃げるわよ！」

ハンターを紅の槍で突き殺したレミリアがもう限界だとばかりに叫ぶ。

フ「だめだよ！おじさまが戻るまでフラン待ってる！」

フランは白い兎を抱きしめながら叫び返す。

これが原因だった。フランは約束した。ダリスは戻ると約束して

くれた。だからフランはずっと待っていたのだ。レミリアはそんなフランを放っておく事ができず、城に籠っていたのだ。

しかしもう限界だった。うすうすとハンター達に感づかれているのだ。なぜなら昼間とは違い部屋に入ってくるハンターの数が増えてきたのだ。一人、二人と入ったところでレミリアは負けはしないだろう。だが三人、四人と増えていけばいずれやられてしまう。

そしてレミリアの体力も尽き始めてきている。だからその前に逃げなければならない。そのリミットが迫ってきていたのだ。

レ「ダリスは教会の人間よ！殺しに来ることはあっても助けに来ることはないわ！」

肩で息をしながらレミリアはハンターを窓から落とし、後がないこともあって語尾を強くしてフランに言い聞かせる。

フ「そんなことない！」

レ「聞き分けなさいフラン！このままじゃ私達も」

その会話の途中でレミリアは後ろに気配を感じた。恐る恐る後ろを振り返る。今の状況で吸血鬼の増援が来るとは考えにくい。

ハンターだった。

部屋の入り口に教会の服を着てフードをすっぽりかぶっているハンターが一人。

子供二人と甘く見たのか幸いな事に仲間を呼ぶ気配はない。

レ「フラン下がってなさい」

フ「う、うん・・・」

ハンターとフランの間に立つレミリア。手には紅の槍を持って。対するは剣を振りかざし襲い掛かってくるハンター。

かなり広い部類にあたる部屋。ハンターとはまだかなり距離がある。

レミリアは手に持っている槍を思いっきり投げつける。接近してわざわざ危ない橋を渡る必要もない。

だがレミリアの槍はハンターの横をすり抜けていく。当然ハンターは警戒して足を止めて構える。レミリアは続いて手に槍を出現させてそれを投げつける。

しかし当たらない。体力の限界なのだろう。繊細なコントロールを必要とする槍投げはもう使えないだろうと思われたその時。

フ「おねえちゃん！これ！」

フランがレミリアに何かを投げ渡す。レミリアはそれを受け取る。

レ「フリ○ク？」

レミリアはいぶかしげに見つめる。

フ「集中力が増すんだって！おじさまにもらったの！」

レ「そう・・・でも、おじさまはもうこないわよ？」

フ「くるよ、絶対助けに来てくれる」

そう言うフランの顔は笑顔だ。その手にはしっかりと兎のぬいぐるみを抱いて。

それを見てレミリアはため息混じりに笑う。

レ「・・・わかったわ。じゃあそのぬいぐるみを大事に抱えておきなさい！」

フ「うん！おねえちゃん！きたよ！」

レミリアは一粒食べる。それは目が覚めるような味だった。そして向かってくるハンターに思いっきり槍を投げつけた。槍はまっすぐハンターに、今までよりも格段に速いスピードでハンターに向かっていく。そして。

ドカツ！

ものすごい勢いでハンターに向かっていった槍は思いっきり上方に進路を変えて跳んでいったのだ。そして天井を盛大に突き破り、ぽっかりと大きな穴が開いてしまった。そこには夜空が顔を出す。夜空には大きな満月が赤色に染まって怪しく光を放っている。

その光景を呆然と眺めるレミリアとハンター。二人は開いた口が塞がらない。唯一、フランだけは何やら目新しいものを見て興奮しているといった風に目を輝かせている。

レ「こ、こうなったら、接近戦よ！」

手に今度は少し短めの槍を出現させる。そしてハンターも距離をつめてくる。レミリアも打って出るしかない。

ハンターの初撃を交わし思いっきり槍をつく。しかし上手く体をひねり交わすハンター。そしてハンターは剣を振りかざす。

だがレミリアも何の考えも無しに突っ込むほど馬鹿ではない。レミリアの弾幕が保険でセツトされていた。

ハンターは一步引く。そして剣をヒュンヒュンと二回ほどすばやく振りレミリアの弾幕を斬り落とした。

レ「んなっ」

その鮮やかな芸当に一瞬、目を奪われるレミリア。その隙をついてハンターがレミリアとの距離をつめる。そして剣を振りかぶる。

ヒュンッ

横一閃。ハンターの剣がレミリアの体を2つに切り裂いた。

しかしレミリアの体は二つには切れていなかった。だが上半身はない。いや、上半身が見えないほどに思いっきり身を低くしていた。ハンターとの体格差で更に思いっきり身を低くされたら振られた剣は空を斬るしかない。

そのレミリアは身を低く、しかし頭は上を向いて、紅の瞳はハンターを睨みつける。ハンターはまるで三振したバッターのように体勢を崩しそれに対応する事ができない。

その刹那、レミリアは片手で床を叩き、跳ね上がるように体を起こし槍をハンターの胸めがけて振りかぶる。

レ「終わりよ！」

ハンターはすばやく身を引いた。そのせいで来ている服が無重力になったように膨らんだ。

しかしもう間に合わない。今にも槍がハンターの胸に刺さろうかという時レミリアが動きを止めた。

レ「えっ!？」

レミリアはまるで妖術にでもかかったかのように動きを止めてしまふ。

そしてその隙を逃すハンターではない。体勢を整え空を切った剣を自分の懐にもぐりこませるようにねじ込み一気に突き出す。

レ「ぐっ」

レミリアの右肩を鈍い音をたて、剣が貫く。その勢いでレミリアの足が床を離れ宙に浮く。

しかしそれで終わりではない。ハンターの兵法なのだろう。レミリアを襲ったその剣は勢いを殺さずそのまま床に突き立てられた。その為かレミリアは息が思わず漏れてしまうほどに全身を床に叩きつけられた。吸血鬼の弱点である心臓がある胸をあらわにして。

フ「おねえちゃん！」

フランが叫ぶ。その叫び声は驚きすぎて声が裏返っている。

レミリアは肩に剣を突き刺され、更に床に突き刺された事で身動きが取れない。あまつさえ床に叩きつけられた衝撃で呼吸困難を起こし喋る事さえ叶わない。

ハンターはレミリアのまだ動く左手を制し、もう片方の手で、何処から出したのか銀の杭を振りかざす。

フ「やめてえええええ！」

フランは気がつくやうに弾幕をハンターに放っていた。ハンターは杭を振り上げた所で放たれた弾幕に吹っ飛ばされる。

フ「うわあああああ！」

両親がハンターに殺された時、その場にフランはいなかった。だから自分のよく見知っている吸血鬼が今にも殺されようとしている所に遭遇した事はまだなかった。

あまりの衝撃的光景にフランは一步も動けず固まってしまう、ような子供ではない。勇気を振り絞る。

体に鞭を打つように叫びながらハンターに迫る。その途中にあったレミリアの肩を貫いている剣をレミリアの横をすり抜けざまに抜き取る。

その際に倒れ身動きが取れなかったレミリアが剣を抜き取られる時の痛みと共に何が起きているのか状況を把握する。

レ「ふらん！やめなさ」

それはフランにとっても危険な行為。危ないからやめろという事なのだろう。

しかしレミリアが言い終わる前にフランの持っている剣は見事にハンターの腹部を貫いていた。

ハンターはフランに突っ込まれた勢いで壁に激突しずるとずり落ちた。

フ「はあはあはあ・・・」

レ「フラン！はなれて！」

今フランはハンターの腹に抱きつくような形で一緒に倒れこんでいた。その状態からだとなフランの心臓を背中から杭で刺されるかもしれない。だからそう叫んだのだろう。

幸いな事に銀の杭はハンターの手を離れころころと床を転がっている。

レ「フラン！」

しつこいくらいにハンターから離れる事を促すレミリア。

フ「大丈夫だよ・・・もう杭を握れもしな・・・」

ふと顔を上げてハンターを見る。壁に打ち付けられた衝撃でフードは取れその顔があらわになっていた。顎には無精ひげを蓄え、それから上はよく見たことのある鼻と目。その目にはうつむいた時にいつも引っかかっていた前髪が。

フ「ふえ？」

だからそんな間の抜けた声を出してしまうフラン。レミリアは齒を食いしばり目を瞑る。そのフランの表情をみていらなかったのだ。

フ「おじ・・・さ・・・ま？」

第七章（回想偏）（後書き）

フランは自分の恋する人を自らの手で殺してしまいます。これがフランが壊れてしまう事になる出来事として書いてみました。

この後は壊れてしまうフランの今後の動向とそのフランとレミリアはどう付き合っていくかを書いていきます。

回想偏は次がラストだと思います。そこからまた本編の方へ戻っていかうと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では。

第八章（回想偏）（前書き）

注意

ハンターの台詞・・・「ハ」

第八章（回想偏）

ダ「でたな・・・悪ガキ」

ばつの悪そうな顔のダリス。腹にはフランが突いた剣が垂直に突き刺さっている。

ダ「元気そうで何よりだ・・・」

いつも通りといった感じでフランに挨拶をする。

しかしダリスの顔にはいつものような余裕は無い。苦痛に歪めた顔に必死に浮かべた笑みを貼り付けている。

吸血鬼は刺されても、腕を切られたとしても血はあまり出ない。しかし人間は違う。じわりじわりとダリスの着ている服が刺さっているところを中心に赤く染まっていく。

まるで不思議なものでも見るかのように、赤く染まっていくダリスの服を、目を見開いて見つめているフラン。

フ「・・・どういう・・・こと？」

フランは自分が一番好きな、恋焦がれ、軽くあしらわれても決してあきらめる事のなかったその男を自分で、自分の手で今まさに刺してしまった。

しかしそんな事はよくあること。吸血鬼の間ではよくあることなのだ。本物の槍と本物の剣で戦争ごっこをする子供達。

そして体の一部を切り落としてしまったり、貫いてしまったりしたとしても、傷の度合いにもよるが十数分で元に戻ってしまう。

しかしダリスは人間だ。吸血鬼の中には人間を「血の詰まった皮袋」と侮蔑の意を込めてそう呼ぶものもいる。

そしてそれを強く明示するようにダリスの服が真っ赤に染まっていく。

フランは強烈なめまいに襲われる。服が真っ赤に染まっていくにつれて、それは強くなる。気分が悪くなり今にも吐きそうな、不快なもやが頭に流れ込む。

フランにこの状況はあまりにも衝撃的過ぎたのだ。

視界が回る。ぐるぐると。

もうどこが天上でどこが床なのか分からなくなったフラン。何か悪い夢でも見ているようだ。視界が傾くにつれ体が徐々に傾いていく。このまま倒れ夢の中に落ちてしまった方が何百倍楽だっただろうか。

そしてぐらりと視界が大きく傾く。

ダ「フランクッ！」

しかし倒れそうなフランの体をダリスがしっかりと掴む。

ダ「ぐうっ」

はるか上空から落ちてくるフランを難なく受け止めたダリスだが、今は腹部を貫かれている。激痛で思わず声が漏れてしまう。ダリスによって倒れる事を静止されたフランは頭だけが力なく揺れる。

フ「う・・・あ・・・」

意識が朦朧として今にも気を失いそうなフラン。今馬乗りになっているフランの体重はほぼダリスによって支えられている。

ダ「フラン・・・すまない・・・」

朦朧とする意識から連れ戻せるのはもうダリスの声だけだった。

だからそんなダリスの悲しそうに謝罪の言葉を述べる声で引き戻される事になる。

フランは細い両手をダリスの胸について服を握る。体を固定させてどうにか倒れないでいる。

しかしまだ意識は朦朧とし、未だ平衡感覚がつかめない。そのせいで腕に力が入る。だからか、それとも悲しいからか、はたまたダリスへの怒りからか、フランは震えている。

フ「おじ・・・さま・・・」

その朦朧とする意識の中でフランはようやく言葉をひねり出す。フランが悲しんでいるのか怒っているのか、どう思っているのか何も分からないほどに無表情な声で。

喋る事ができるフランに安心したのかダリスは少しほっとしたように笑う。そしてそのままの表情で言葉をつむぐ。

ダ「・・・こうするしかなかった」

と一言だけ。

フ「・・・助けに・・・きてくれたんじゃないの？」

ダ「俺はお前を・・・殺しに来た」

それが気つけ薬となったかのように、フランの目が見開かれ一気に焦点が合う。更に手に力が一層込められる。

フ「何でよ、何で・・・」

信じられないといった風に首を振る。目からは涙は出ていないがもうすでに声は震えていた。

フ「おじさまは・・・おじさまは吸血鬼と人間が、平和に暮らせるようになって」

ダリスの描く理想。それは奇しくもフランの両親が描いていた理想と同じ。だがフランの両親は実現している。その証がフランの存在。

フ「そう言ってたじゃない!!」

フランもダリスとそうなればと思った。それが理想だった。それがダリスの描く理想でもあったはずだ。

フ「なのになんてこんなことするのよ!!」

しかし現実とは違っていた。ダリスは銀の杭を握りやってきた。

ダリスの理想は嘘だったのか、狂言だったのか、フランが言っていた理想を、心の中では笑っていたのだろうか。

もう豪快に笑う事はできないのだろう。それを聞いてダリスは力なく笑う。いつの間にか、フランを支えていた腕すらだらんとたろしている。

ダ「はは・・・今だから言うが、俺の妻と子供は吸血鬼に殺された」
フ「へ？」

フランは口をぽかんと開けたまま固まってしまった。更にそんなフランに容赦なく言葉を浴びせかける。

ダ「俺は・・・吸血鬼が・・・嫌いだった。」

フランの中で今までの、自分の恋焦がれていたダリスが音を立てて壊れていく。ガラガラと。目の前にいるのは一体誰なのだろうと思わせるくらいに。

ダ「いや」

フランの中のダリスを壊していく言葉の行使は止まらない。あまつさえ勢いが増す。

ダ「大嫌いだった。」

フランの知っているダリスはもういない。

フ「もうやめて！！聞きたくない！！！」

フランは頭を抱えてうずくまる。これは悪い夢だ、早く覚めろと、そういう場合はもうとつくに過ぎた。これ以上、自分の今まで恋焦がれていた男の口からこんな事を聞きたくなかったのだ。

ダ「・・・憎かった・・・憎くて憎くてたまらなかった。」

しかし、無情にもダリスの言葉は続く。フランが何度やめろと叫ぼうとダリスはやめなかった。

だからフランはダリスの胸ぐらを驚づかみにする。引き寄せようとするがその体格差からフランが引き寄せられる事になる。涙がにじみでる目を見開いて、怒りと悲しみで染めた表情で。

フ「だったら！！なんで！！！」

何故平和協定など結ぼうとしたのだろう。大嫌いで、自分の家族を殺され、憎くて憎くてたまらないその吸血鬼と。

ダ「俺が吸血鬼を殺したら・・・また・・・繰り返す・・・終わりが見えない・・・だから吸血鬼と平和協定を結ぼうと・・・」

ダリスは口数少なく言った。ダリスの顔から血の気がだんだん引いていく。表情は笑みが辛うじて張り付いている。

憎しみは繰り返す。

ダリスが吸血鬼を殺せばその吸血鬼の仲間がダリスやその仲間を殺しに来るだろう。そして殺された仲間の仲間がそれを許さず吸血鬼を殺すだろう。

それを繰り返せばどうなるか。

どちらかが死に絶えるまで、何人の人間と吸血鬼が殺されるのか。

そして一体何が残るのだろうか。

だからダリスは仕方なく平和協定を申し出たのだ。

フ「そんな・・・」

ダ「家族を殺された俺の申し出を・・・奴らは受け入れてくれたよ。」

ダリスとフランの理想は似て非なるものだった。二人は通じ合っているようですれ違っていた。そしてその事を知らなかったのはフランだけだった。

それがフランはただ、ただ悲しかったのだろう。その感情が溢れ出して止まらないかのように、大粒の涙がぼろぼろと落ちていく。

ダ「・・・泣くな・・・フラン」

そう言ってフランの頭をなでる代わりに微笑むダリス。

ダ「・・・俺はな・・・恥ずかしかった・・・お前を・・・ぐっ・・・お前を見てると・・・自己嫌悪に陥って・・・」

フランは純粹に平和を願っていた。両親を殺されたにも関わらずだ。

しかしダリスはどうだろう。もちろん平和を願っていた。絶望の淵で、自分が耐える事で、吸血鬼への憎しみを押さえつけることで。

同じ理想でもここまで違うのだ。

ダリスはフランに会うたび、フランの事を思うたびに思っていたのだろう。自分は何て汚い人間なのだろうと。何て小さい人間なのだろうかと。さぞ思い悩んだに違いない。

ダ「でも・・・俺は嬉しかった・・・ぐっ・・・ガハッ！」
フ「おじさま！」

ダリスは口から血を吐き出した。もう喋る事すら辛そうだ。

しかしダリスの顔から笑みが剥がれ落ちる事はない。しかも先ほどよりも強く笑みを浮かべている。

ダ「はあはあ・・・フランみたいに・・・心から・・・はあはあ・・・人間を好いてくれる者が・・・いることが」

フ「違う！・・・私は・・・私はおじさまが好きなの！おじさま以外なんていなかったっていい！おじさまだけいてくれればそれでいいの！！！！それだけでよかったのよ！！！！」

とどまる事を知らない涙がフランの叫びに呼応するように弾けて飛び跳ねる。そのきらきら光る一粒がダリスの顔に落ちる。

その涙は熱かった。その熱い思いはきっとダリスに伝わっただろう。

う。

ダ「そうかい・・・それを聞いて安心した・・・死ぬな・・・フラン・・・」

それを機にダリスの目は閉じられる。まだ笑みが張り付いた表情のまま。

フ「おじさま?・・・おじさま!!おじさまああああああ!!」

ダリスは息絶えた。

レ「フラン・・・」

その動向を黙ってずっと見ていたレミリア。なんと声をかけたらいいのか分からず、ただフランの名前を呼ぶ。

フ「う・・・そ・・・」

フランはダリスの胸倉を掴んだまままるで人形のように固まっていた。唯一動きがあるといえば見開かれた目からとめどなく溢れる涙だけ。

しかし、フランに悲しむ暇など無かった。いや、与えてくれなかった。

タタタタタタ、と多数の足音が聞こえる。だんだんとこの部屋に近づいてくる。

レ「くっ・・・フラン！」

気付いたレミリアがフランを呼ぶが人形にはいくら喋りかけても見向きするはずが無い。レミリアも肩を貫かれ更に満身創痍の体。もう飛ぶ事もできないだろう。

無情にも足音は止まる。フランとレミリアを取り囲むようにして。

ハンターは剣を抜き取り、人形の様に動かないフランと満身創痍で動けないレミリアに剣の切っ先を向ける。それは訓練されているのか、綺麗に高さが揃えられている。

フランとレミリアはまるでエリマキトカゲにでもなったかのようにだ。

そして、何故か不思議な事に攻撃してこない。

と、突然にハンターが口を開く。

ハ「レミリアアスカレットとフランドルスカレットだな！
貴様らを教会の命により拘束する！」

ハンターはそんな事を言い出すのだ。

レ（拘束！？なぜ！？）

ハンターはレミリアとフランを殺さずに何故拘束などするのだろうか。

ここでレミリアは思い出す。ダリスがフランに何と言って用心し

ろと言ったか。

ダリスは言った。殺されると、もしくは「実験体にされる」と。

実際そうなのだろう。珍しい羽が生えているフランを生け捕りにし、すぐ直る吸血鬼の体を利用し実験をするのだろう。体を切り刻んだり、薬を試したり、日光に当てたりと。

そしてそれはいくら泣き喚こうと、いくら悲痛な叫びをあげようと知らぬ顔で続けるだろう。それはもう死んだ方がましだと思われるくらいに。

ではなぜレミリアも生かされているのだろうか。吸血鬼の体ならばハンターならいくらでも手に入るはずだ。しかし殺されないのは一体。

フ「うふっ」

その時、動かない人形と化したフランが笑ったような気がした。レミリアからはハンターに遮られてよく見えないがハンターの足の隙間からフランの頬がつりあがっているのが分かった。

笑っている。

ハ「うごくな！動くとかいつの命は無いぞ！！」
レ「うあっ！」

そういう事だった。レミリアはフランを生け捕りにするための、これ以上ない人質。

レミリアは髪を引っ張られ喉に剣を突きつけられる。喉を切られたところでどうという事は無いのだが。

フ「うふふふ．．．あはははは」
レ「くっ．．．フラン！？」

まるで聞こえてないかのようにフランは笑う事を止めない。そして真上にぽっかりと開いている、グングニルで開けた穴を見る。そこには怪しく、赤く光る満月が。

それはダリスに馬乗りになるフランを照らす。まるで上から赤いスポットライトで照らされているかのようだ。

ハ「動くなと言ってい」

キ
イ
イ
ン
！

ハンターのその言葉を遮って聞こえたその音は、フランを襟巻きのように取り囲む劔という劔が全て割れる音だった。それは不思議な事に、折れるではなく割れたのだ。まるでガラスでできた劔を落としてしまったかのように。

フ「うあああああああああああああああああああああ

続けて城中に、いや、町中に轟く程強烈で高音なフランの咆哮。そんな小さな体の何処からそんな声が出るのだろうか。その咆哮はびりびりと体を激しく震わせる。ハンターの鼓膜は全て破れてしまっているだろう。

レ「ぐうう！フラン！？」

耳を劈く音を遮るために放されたレミリアも自分の耳を塞ぎフランを見る。それは信じられない光景だった。その光景にレミリアは目を見開いた。それはなんとも幻想的で神秘的な光景だった。

月の光に照らされたフランの小さかった羽が月に向かって伸びていくのだ。それにつれて色鮮やかなランタンが生えていく。まるで果実ができるまでを早送りしたかのように、伸びていく羽に次々に生っていく。

それが7色そろうと同時にフランの強烈な咆哮がやんだ。その背中にはこの世のものとは思えないほど綺麗な7色の羽を生やして。

フランの左手には今まで腋にでも挟んでいたのか、白い兎が握られていた。

そして右手はというと天に向かって伸びていた。あたかも月を掴もうとするかのように、掌を月に向けて。

キュツ

と不意にフランの手が握られる。

レ「え？」

レミリアは急に無重力になった。それは落ちていた。床が抜け落ち真っ逆さまに落ちていたのだ。いや何かおかしい。レミリアは周りの壁を見つめる。それはさっきまで自分がいた所の壁であり天井への距離も変わっていない。これはつまり

レ「城が・・・崩れて」

ドゴオオオ！！

と、まるで積み木で作った城が崩れるかのように脆く、更に轟音を上げてフランとレミリアが住んでいた城が崩れ去った。

後に残ったのはそれが城だったとは微塵も感じられない、積み上げられた岩石だけ。

そのはるか上空、月に重なるように飛んでいるのは、大きな七色の羽を有し、真紅の瞳で地上を見下ろし、怖気の走るような、怪しい笑みを浮かべるフランだった。

第八章（回想偏）（後書き）

この章で終わるだろうと思った回想偏ですが肉付けをしていくうちに膨大な量になってしまいあと2回に分けて追加する事にしました。

もうどちらがメインか分からなくなってしまふような感じになってしまいました・・・最初からこの作品とは別で出せばよかったと少し後悔しています。

というわけで前回宣言した事をまた破ってしまいましたが後1回か2回続きます。

もう狼少年と名前を変えてしまおうか・・・

年内にあげる事ができればあげようと思います。

第九章（回想偏）

現在 紅魔館

レ「今思えばダリスはフランの力を解放させようとしてたんでしょ
うね」

レミリアは軽くため息をつき、そう言った。

咲「どうしてそう思うのですか？」

レ「私達が生まれるずっと前、人間達の書物に七色の災いのことが
書かれてるってパチエに聞いたの。禁断の愛、吸血鬼と吸血鬼ハン
ター、愛するものの手によって殺されたハンター、その七色の羽の
吸血鬼は力を解放し一瞬にして人間を滅ぼした」

咲「何か似ていますね」

レ「ダリスは私を殺してフランの力を解放しようとしたのかもしれ
ないわ。自分の死でフランの力を解放してしまった形になってしま
ったけどね。もしくは最初から自分が死ぬつもりだったのかもしれ
ない」

咲「・・・だから妹様の気持ちを聞いて安心したのですね」

レミリアはよく頭の回るメイドだと少し感心したように咲夜を見
て微笑む。

そしてすぐに視線を前に戻す。少し思案したかと思うと「そうい
えば」と切り出した。

レ「フランの羽を教会の人間に見せないようにって、何故吸血鬼た

ちは言わなかったと思う？」

咲「それは妹様がサプライズで隠していたのでは？」

レ「いいえ、フランは自慢するように皆に嬉しそうに話してたわ」

咲「そ、そうですか・・・」

吸血鬼に言ったところで誰もダリスに言いはいしないだろうと思っていたのだろう。

咲「では何故？」

レ「簡単なことよ。人間達にとってたまたまあの羽を持った吸血鬼が現れた時にたまたま災いが起こっただけ。あの羽はたまに突然変異でできるの。町にはいなかったけど私は何人か見たことがあるわ」
咲「つまり人間と吸血鬼での価値観の違いですか？」

レ「そう、人間達だって昔は、指が6本生えた子供を神の子とはやし立てたでしょう。でも今は突然変異としか思わない。それと同じことよ。人間達にとってフランの羽は不吉の象徴だったらしいの」

咲「だからハンター達はお嬢様たちを襲ったのですね」

レ「それは安易過ぎないかしら？フランの羽を見ただけでいきなり襲ってくるなんてありえないわ。見せかけだけど平和協定も結んでいたしね」

咲「ではなぜ？」

レ「・・・私達は人間を襲わない代わりに人の血液を定期的にもらっていた。でも人間達にとっても血液は重要なもの」

咲「それに不服だったから襲ったと？」

レ「そうね。そういう不満は前からあった。だから私達は不満が起こらないように、昔から吸血鬼の間だけで伝えられていた術や歴史を教えたの」

咲「長生きですからね」

レ「そう、そして人間達は術を研究して自ら使えるほどにまでなっていた」

咲「それがどういう？」

レ「わからない？ 私達に恐怖と不満を持っている人間達が私達と同等の力を持つなら」

咲「まさか・・・」

レ「そう、皮肉にも私達が平穏に暮らすために差し出した知識を使って私達に戦争を仕掛けたの」

しかし、それが不満だからと、不公平だからといって手に剣や槍を取り、吸血鬼を襲えば同じ人間から見ても、その人間達の傲慢だと、同じ人間として最低だと、周りから見ても賛同を得られず、逆にその戦争を起こした人間は迫害に合うだろう。血も涙も無い人間だと。

だから

レ「フ란の、七色の羽という大義名分を掲げて」

理由が欲しかったのだ。それは何でもよかった。吸血鬼が人間を少しでも傷つければそれだけで戦争は起こっただろう。だからダリスは最小の人数で吸血鬼の町に向かい、吸血鬼達もそれを知っているであえてダリス達に近寄ろうとはしなかった。

フ란を除いて。しかし唯一近づいたフ란の、その不吉の象徴と言われる羽というささいなことが理由だった。戦争の理由などいつも小さな出来事なのだ。

咲「そんな・・・」

レ「人間達はしめたと思ったでしょうね。その状況を打開するうつつつけの大義名分をみつけたんだから。それが無かったらただの人間の傲慢とされるだけ。・・・全く、人間という生き物は今も昔も

変わらないのね」
咲「・・・」

咲夜は同じ人間として耳が痛かった。いつも綺麗に伸びている背筋を丸めてシュンとしている。

レ「まあでも、ダリスみたいな人間もいる」

その言葉に光明を見たのか咲夜の顔が少し明るくなる。

レ「もちろん、あなたのような人間もね」

咲「お、お嬢様ああああ！」

咲夜は泣きながらまたレミリアに抱きついた。

レ（うぜえ・・・）

そしていつものようにまた咲夜を引き剥がした。

咲「そ、それでその後お嬢様達はどうしたのですか？」

涙を拭きながら、そしてわくわくしながら目を輝かせ咲夜は問う。

レ「そうね・・・、私が瓦礫の中から這い出るとハンター達の悲鳴が聞こえたわ」

咲「それはまさか・・・」

レ「そう・・・フランは強かったわ。町にいたハンターたちを次々殺していった。ハンターは恐ろしかったでしょうね。手を握るだけでハンターの体をつぶせるんだから」

咲「おお・・・」

レ「そこで人間達は怒り狂ったフランに私達の技術を使って魔法陣を作り隕石を放ったの。」

咲「それが噂に聞く例の破壊したってやつですね？」

レ「ええ、今でも忘れないわ。高く手を掲げて・・・そして握るの」
咲「そ、それで」

レ「笑うのよ、怖気の走るような笑みだった」
咲「あ・・・う」

レミリアは咲夜をみてまた笑う。この二人は結構いいコンビかもしれない。

レ「隕石が破壊された事でハンター達は逃げ惑ったけど結局フランに全員殺されちゃったわ。その時のフランの表情は今でも忘れないわ」

回想 吸血鬼の町

狂ったフランはハンター達を全て殺した。そして月に向かってゲラゲラと笑っていた。服や帽子を真っ赤に染めて。その背中の羽が月の光で怪しく光る。

その光景をレミリアはずっと見ていた。呆然として、動く事もできなかった。レミリアをそうさせたのは他の何者でもない恐怖。実の姉のレミリアでさえ恐怖で動けなかった。

フランの横顔、月に照らされるそれはまるでこの世のものとは思

えない、悪魔そのもの。その悪魔が目を見開いて、口を裂けんばかりに吊り上げ、笑うのだ。それを見て恐怖を感じないものは、その悪魔を駆逐する事ができる神しかないだろう。

しかしレミリアもずっとその場で呆然としてるわけにも行かない。もし狂ったフランが人が住む町等に行けばとんでもない事になるだろう。

フランがそんな事をすれば人間は大挙して押し寄せフランを襲うだろう。それはもう世界中の人間を敵に回す事になる。

いくらフランが強いとはいえ体力の限界がある。

それにフランはそんな事は願ってはいないはずだ。ただ一人純粹に人間と吸血鬼の平和を望んでいたのだから。

レ「くっ・・・フランっ」

レミリアはフランを止めようと、満身創痍の体に鞭をうって一步フランに近づいていく。

しかしレミリアはなかなか進む事ができない。満身創痍の体でもこれはおかしい。瓦礫の下敷きになった時にどこか怪我したのか。

ふと自分の足を見る。

レ「なっ・・・こ、この私が震えているというの・・・」

それは恐怖だろうか、警告なのだろうか、フランの方へ行くなという、身の危険を察知したレミリアの本能が、そうさせているのだ

ろうか。

何にせよレミリアはそんな自分が情けなく恥ずかしく思った。位の高い貴族の娘。何ものにも堂々たる態度をとり、恐るものなど何もない。そう自負していたレミリアのプライドはガラス細工のように崩れさってしまっていることだろう。しかし、プライドを捨てたとしても貴族としての意地がある。だからレミリアはその足に思いっきり拳を入れた。

レ「とまれ・・・とまれ!とまれ!!!」

と、叫びながら。何度も何度も殴りつける。

そしてどちらの痛みでだろうか。足の震えがとまった。

レ「よし・・・フラン・・・今い」

震えの止まった足から顔を上げ、前を向く。とそこには薄ら笑いを浮かべるフランがいた。顔には人間のものと思われる返り血をべつとりと貼り付けて。

レ「・・・う・・・あ・・・ふら」

レミリアは思わず一步下がってしまう。そして一瞬、自分の事を思い出して着てくれたのではないかと、ほんの一瞬だけそう思ってしまったのだ。少し笑みを浮かべながら「フラン」と呼ぼうとする。

しかしフランはレミリアの喉に手を伸ばす。そして思いっきり驚づかみにし乱暴に持ち上げた。

フ「ひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや!!!」

フランはそんな奇声を上げて笑い散らす。

レ「ぐっ……フラ……ン! やめ……!」

レミリアは何とか振りほどこうとするも、その小さな体の何処にそんな力があるのかと感ぜられるほどにフランの腕はびくともしない。

息絶え絶えにふと視線を落とすと、フランはダリスからもらったぬいぐるみをまだ握っていた。

その視線を追うようにフランも右手に持っているぬいぐるみを見る。

しかしそれはハンターの血で真っ赤に染められた、白いところな
どかけらも見ることができなくなったぬいぐるみだった。

フランは今までこんなものを持っていたのかと首かしげる。そして

ぱああん！

ぬいぐるみが赤と白のわたを振り乱し爆発した。

レミリアはもう何をしても無駄だとその時悟った。フランはもう完全に壊れてしまった。理性を失い、ただ破壊する事でしかその衝動は満たされる事はない、と。

あいた片方の掌をゆっくりと握り締めるフラン。

レ「ふら・・・」

終わった。レミリアはそう思った。その時レミリアの目から大粒の涙がこぼれた。

レミリアは後悔する。フランを連れて無理やりにも逃げればよかったと。あの時、ダリスを殺してそのままフランに知られないよう、窓から落とせばよかったと。

そしてこうなってしまった実の妹のフランを止める事ができなかった、ふがない自分。姉という立場でありながら、こんな事になってしまったという無力が悲しかった。

涙がレミリアの顎を伝ってフランの腕に落ちそして地面に落ちた。

ぐっ

とうめき声が聞こえる。それはレミリアのものではなかった。

先ほど握ろうとしていた手で頭を押さえ、もう片方の手は未だレミリアの首を鷲づかみにしているフランのものだった。

破壊の行使がとまる

レミリアは涙を流しながらその涙でかすむ光景を目を細めて見る。そこには未だ薄ら笑いを続けるフランが依然として変わらない光景が見て取れた。

しかしひとつだけ違うことがあった。間違い探しでも一目で分か

るようなその光景。

フランは血の涙をながしていた

それはまるでこれ以上殺したくないと、レミリアに訴えかけているようだった。だが自分では制御することができず、どうすることもできず、そんな自分を止めて欲しいとレミリアに懇願しているようだった。

フ「ううううがああああ」

何かと葛藤するかのようにフランはうめき声を上げる。

レミリアのクビを絞めていた手も少し緩められる。

レ「わかったわ・・・止めて・・・欲しいのね?・・・なら私がとめて」

グサツ! 『F r i s k ! S h a r p e n s y o u u p ! ! 』

フランの胸に、今はなき城の天井をぶち抜いて飛んでいった紅の槍が突き刺さった。

レ「あげたわ・・・」

現在 紅魔館

レ「まあそんな感じね」

咲「つまりフリ○ク最強ということですね」

レ「そういうことよ」

咲「・・・あの、ひとつ質問なのですが」

レ「ん？」

咲「妹様は自分の羽や、ハンターを殺したことを知っているのですか？」

レ「あの子の目が覚めた時は全部わすれていたわ。ダリスのことも咲「そうですか。それをお嬢様は教えてあげたのですか？」

レ「・・・ふふ、どう思う？」

とレミリアは頬杖を付いて目を細めて妖艶に笑う。

咲「え、・・・その・・・愚問でした・・・」

と急いで頭を下げる咲夜。

レ「咲夜」

咲「はい!？」

咲夜は急いで頭を上げて返事をする。

レ「今日は私はここで寝るわ。ねむい・・・」

そう言ってその机にうつぶせになってしまう。

咲「え、しかしこんなところでお休みになると風邪を」

レ「貴方は私の何なのかしら？」

咲「えと・・・畏まりました、お嬢様」

先ほどレミリアが言った通りだ。メイドは主に従順でなくてはいいけない。

レ「おやすみ・・・」

咲「・・・お休みなさいませ、お嬢様」

そう言っいていつの間にか手に持った毛布をかける。

咲「私は、貴方のメイド、メイドはお嬢様の意見に反抗せず黙ってそれに従うのみ・・・これが従順な巨乳メイドです」

レミリアはびくりとする。

第九章（回想偏）（後書き）

次で回想偏ラストだと思います。

次は回想というかレミリアの夢で回想をしようと思います。

少し咲夜もかかってきます。

では

第十章（回想偏 最終章）（前書き）

机にうつぶせになって眠ってしまうレミリア。

その夢とその後の回想という形になります。

注意

アイリス・・・台詞「ア」

八雲紫・・・台詞「紫」

八雲藍・・・台詞「藍」

第十章（回想偏 最終章）

回想 レミリアの夢

レ「はあはあ・・・」

一体どれだけの時間歩いただろう。どれだけの距離を歩いただろうか。あの戦争で生き残ったのは二人だけ。

レミリアは追っ手の来る可能性を考慮して町を離れていた。

気を失ったフランを満身創痍の体で背負うレミリア。その体でも何時間歩いたか分からない。そこは見渡す限り草原の、木など一本も生えていないような場所。地平線が見えるくらいに何も無い。

レミリアは無心に逃げていた。町から離れられればそれだけでよかった。何も考えず、ただひたすらにフランを背負って歩いていた。

その時、背負っているフランが動いた気がした。レミリアは少しドキツとする。町であったように、もしもまた襲ってきたらどうしようかと。

しかしそんな心配は無用だったようだ。

フ「ん・・・？おねえ・・・ちゃん？」

それはいつものフランの声だった。気味の悪い笑いもなく、普段の寝起きのフランだった。

ほんとレミリアは安心したようにため息をつく。

レ「フラン、気がついたのね」

フ「ここ何処？私なんでおねえちゃんに背負われてるの？」

レミリアは歩を止めてフランの様子を伺う。疲れきっているのか、フランは全体重を預け手一つ動かさない。

レ「フラン・・・あなた何も覚えてないの？」

フ「へ？」

レ「私達はハンターに・・・ダリスに殺されかけたのよ！？それをあなたが」

フ「ダリスってだれ？」

レ「はあ!？」

フ「うう・・・なんだか・・・まだ眠い・・・」

レ「・・・」

そう言っ頭をレミリアの肩に預け、また眠りに落ちるフラン。
今まで起こった事を全て無かったことにするように深い眠りに付く。

あれほどの事があったのだ。好きな人を殺し、更には人間と吸血鬼の平和を心から望んでいたフランがその人間を殺しに殺した。レミリアと同様、フランもまた心身共に疲れ果てているのだろう。

そしてその記憶をもし失っているのだとしたら無理に言う必要もない。

レミリアはフランを起こすこともせずまた歩みを進める。

風が草原をなでて草の波を作る。その草の波がレミリア達を追い越していく、と同時にその風が二人を優しくなでる。

波と風の戯れが終わると、また辺りが静まり返る。聞こえるのはレミリアが草をくしゃくしゃと踏む音とフランの心地よさそうな寝息だけ。

レミリアは未来のことを考える。

これからどうするのだろうか、これからどうやって生きていけばよいのか。この先、生きていくにはこの二人はまだ幼過ぎる。あまつさえ二人は吸血鬼で生きていく事が難しい世の中。更に片割れは七色の、綺麗ではあるが人間にとって不吉の象徴とされる、戦争の火種になるような羽を有している。

そんな二人の未来は暗過ぎて全く先が見えない。一体これからどうすればいいのか。

レミリアはそんなこと満身創痍の体で考えながらフランを背負い、ただ、ただ無心に歩いていく。

『絶望』

満身創痍の体と今の状況から悔しいほどに相応しい言葉。そんな言葉がレミリアの脳裏をよぎる。そしてすぐに首を振ってそんな呪いのような言葉を頭の外へ放り出す。

しかし、そんなレミリア達に追っ手がかかった。それは教会の中で最高の権力を誇る神。神は大罪を犯した吸血鬼二人を許しはしなかった。

辺りがゆっくりと明るくなる。

レ「日がっ・・・！」

朝日だった。神の象徴と言ってもいい太陽が二人を追ってやってきたのだ。

レミリアは慌てて辺りを見渡す、が何処にも影ができるような大きな岩も木も生えていない。見渡す限りの草原。はるか彼方に生い茂る森林があるが、満身創痍、さらにフランを背負っているせいで走る事もできない。

レ「くっ何処にも隠れるところがない・・・どうすれば・・・」

レミリアは考える、森林に向かって全力で走ればどうにか満身創痍の体でもぎりぎり間で間に合うかもしれない。

しかしそれは一人の場合だ。フランを置いていく、そんな事レミリアにはできるはずが無い。

今更ながら森林の中を進めばよかったと後悔する。レミリアはそんな事にまで考えが及ばぬほどに心身共に疲れていたのだ。

だが今更後悔しても遅すぎる。何時、どんな状況でも日はのぼるのだ。

レ「これが私達の運命だというの・・・？」

レミリアはフランを背負ったままガクリと膝を折り、地面に両膝を突く。

レ「私達はただ・・・平和に暮らしたかったただけなのにっ」

憤りとも悲しみとも取れる声音でそんな言葉を吐き出す。だがやはりそんな事を言ってみても何も起きるわけがない。自己満足にもなりはしない。

レミリアはふと横を見る。そこにはフランの可愛らしい寝顔があった。

レミリアはまるで猫のように、フランの頬に自分の頬を擦り付け撫でる。

好きな人を自らの手で殺し、心を壊してまでハンターを殺し結果的にだがレミリアを守ってくれたフラン。

レミリアはそれが愛おしくて愛おしくて仕方なかった。だから、フランだけは守る、フランだけは自分の命に代えても守り通してみせる、と誓う。

レミリアは最後の力を振り絞り弾幕で大地を削る。

だが大きな音を立てて空いた穴はあまりにも小さい。子供一人入れるかどうかも疑わしい。

レミリアはそこにフランをゆっくりと寝かせてやる。そしてゆっ

くりと土を被せていく。

少しはみ出している足に自分の着ているものを破り、かけてやる。

土の中に埋めて日光をやり過ぎそうというのだろう。しかしもしも途中で起きてしまったらどうするのだろうか。フランが助かる可能性はあまりにも低い。しかしゼロではない。少しでも助かる可能性があるならばそれにかけるべきだ。

だがそうなればレミリアが助かる可能性は消え失せる。

レミリアは死を覚悟している。レミリアの意思はとても固いよう
だ。

レミリアはフランの体が外に出ないように丹念に土を被せていく。

その時、背後から突き刺すような痛みがレミリアを襲う。

レ「ぐっ・・・」

太陽の光だった。吸血鬼にとって最大の敵である日の光がレミリアの背中を襲う。

フ「・・・おねえ・・・ちゃん？」

レ「ふらん・・・」

そんなレミリアの悲痛なうめき声に、フランが気づき目を覚めます。
だが未だ眠り眼で目を細めている。

フ「おねえちゃん・・・どうしたの？」

レ「どうも・・・しないわ。もうすこし眠ってなさい」

まるで母親が言うようにそう言って、顔には笑みを貼り付けて、フランの頬を優しく撫でてやる。

フ「うん・・・おやすみなさい」

フランは気持ちよさそうに目を瞑りレミリアの柔らかい手に顔を預け眠りについた。

その間も日光は強くなりレミリアの体を焼き尽くそうとする。

レ「フラン・・・ううつ・・・ごめんね・・・おねえちゃん・・・
あなたに助けられたのに・・・もう・・・これ以上あなたを・・・
助ける事ができそうにないの」

レミリアは帽子を取ってフランの顔にかけてやる。そしてその上から土を被せていく。

レ「ぐうつ・・・フラン・・・ごめん・・・ごめんね・・・つよく・・・
いきてっ・・・この不甲斐ない姉をどうかっ・・・ゆるして・・・
ほしい・・・」

そう言って涙を流すレミリア。その涙は日の光の痛みだろうか、それともフランと共に明日を歩く事ができなくなった事へか、はたまた自分のせいでフランをそんな風にしてしまった事へだろうか。そんなことを考えてもきりが無い、といったように、レミリアの目からは涙がこぼれ落ちてくる。

そしてその間も日光によってレミリアの体は火に包まれていく。

その時、足音が聞こえた。

「ハンター」という言葉がレミリアの脳裏に過ぎる。が、レミリアにはもうどうする事もできない。

心残りはそのハンターにフランが殺されてしまうかもしれないという事だけ。だがもう、本当にどうする事もできない。

薄れゆく意識の中、振り返る。身を焦がす光でよく見えない。

最後のあがきか、睨みつけるために、目を見開きそして。

咲「お嬢様、おはようございます」

レ「・・・咲夜？」

気がつくと目の前に咲夜が立っていた。

咲「朝日が出てきたので。灰になりますよ？」

咲夜は朝日を遮るようにレミリアの前に立っていた。そこはくしくも、夢で見た最後に向かってきた人物と同じ位置。

レ「もう・・・朝・・・」

回想

レ「・・・ん」

レミリアが目を覚ますとそこには星がきらきらと輝いていた。そして少し欠けた月が夜空に咲いていた。

辺りはもう夜だ。

起き上がると横にはフランが毛布を被って気持ちよさそうに眠っていた。これにはほっと一安心のため息をつくレミリア。

レミリアが絶命する間際、迫ってきたあの足音は一体誰だったのだろうか。

生きている、そして縛られていない事からハンターではないだろう。

「あ、大丈夫？ よっぽど疲れてたのね。半日ほど寝てたよ」

と、すぐ傍で女の声をする。声の方を見るとまだ十代半ばといった顔立ちで銀色の髪の娘。

その娘は膝を抱いてこちらを見ている。

レ「あなたは誰？」

ア「あ、私はダリスの娘のアイリス」

レ「そう、私はレミリア、そっちはフランよ」

ア「よろしくね」

アイリスと名乗る少女はレミリアにそう言ってニコツと笑う。

確かにアイリスという名前にダリスの名前の一部が含まれている。嘘はついていないだろう。そしてそれでレミリアとフランが助けられた理由には納得がいく

しかし家族は殺されたのではなかったのか。その疑問をアイリスにぶつける。

ア「ああ、それは私の母と兄が・・・」

レ「そう・・・謝罪はしないわよ？」

ア「いいのよ、もう。それにあなたが謝ると私もあなたに謝らないといけないでしょ？」

人間が吸血鬼を殺せばアイリスはレミリアに謝り、その逆ならレミリアがアイリスに謝らなければならない。そんないつ終わるかも分からない謝罪合戦など無意味な戦いだ。

レ「でもお礼は言うわ。助けてくれてありがとう」

ア「どういたしまして」

とアイリスはにこりと笑う。愛嬌はいいようだ。

しかし何故あんなところにいたのだろうか。その疑問もアイリスにぶつけてみた。

ア「父に言われたの。吸血鬼が二人が逃げてきたらその手助けをして欲しいって」

そして町から出てきたレミリアとフランの後をずっと隠れながら

つけていたらしい。

しかし町で狂ったように暴れるフランを見て怖くて話しかけられなかったと言う。そこで朝日が二人を襲い、レミリアがフランを埋めるのを見て慌てて森から走ってきた、という事だった。

レ「そう、でも吸血鬼を助けてもよかったの？あなたも追われることになるのよ？」

ア「そうだね。だからこの戦いが終わったら父も一緒に逃げる予定だった」

レ「え？」

アイリスの顔はうつむきがちになる。アイリスだけ逃げてダリスが逃げない、となると吸血鬼に加担したとしてダリスは何らかの罰を受けるだろう。逆もまた然りだ。

しかしレミリアが驚いたのは一緒に逃げるという事だ。一緒に逃げるとはつまりダリスは死ぬ予定ではなかったという事。

レミリアは思い出す。ダリスは言った、二人で一緒に逃げろと。

そしてダリスも一通り戦争が終わった頃を見計らって逃げ出すつもりだったのだろう。

しかし、そんなダリスと「すぐもどる」と約束したフラン。フランを安心させるためについた嘘が逆に鎖となって二人を城へ縛りつけた。そして不幸にも城で鉢合わせてしまったダリスとフラン。いや、フランはダリスに会うまで城からは出なかっただろう。

レ「なんて・・・こと・・・」

運命のいたずらか。全く、悲劇としか言いようが無い。

レミリアはフランを見る。そんな事で、簡単に避けられた事でフランは心を壊してしまった。更に平和を願っていたにも関わらず多くの人間を殺し、あまつさえ恋していた男を殺してしまった。しかも自らの手で。

そんな悲劇のヒロインに相応しいフランは何事もなかったかのようレミリアの隣ですやすやと眠っている。いや、何事も無かったのかもしれない。フランはそのことを忘れているのだから。

レミリアはそんなフランの頬を軽くなでてやると、くすぐったそうに身を縮めてそっぽを向いてしまう。

ア「そ、それで・・・ちょっと聞きたい事があるんだけどね・・・その」

レ「ダリスは死んだわ」

レミリアはアイリスが質問する前にそうきっぱりと言い放った。アイリスは言い出し辛い顔をしている。そして聞きたい事といえばそれくらいしかない、とレミリアでも分かる。

ア「そ・・・そうだね。たぶんそうじゃないかと思ってた」

レ「・・・ずいぶんあっさりと信じるのね」

ア「覚悟は・・・してたから・・・戦争だもん、仕方ないよ。それに」

と、アイリスはフランのほうを見て話を続ける。

ア「城は崩れちゃうくらい激しかったし、ハンターの人たちも皆その子に」

レ「ダリスは私が殺したわ」

ア「え？」

時間が止まり沈黙が生まれた。

アイリスはしばらく目を見開いてレミリアを見た。と思うと、すっとうつむいてしまう。

少し震えているようだ。表情が読めないがきつと怒っているのだろう。そしてダリスの仇と、急に襲い掛かってくるかも知れない。

レミリアは思案をめぐらせながら警戒する。

しかし、それは間違いだったようだ。

ア「父は」

レ「ん？」

ア「父は笑っていたかな？」

レ「・・・どういこと？」

ア「父は言ってた。あの町には死んではけない吸血鬼姉妹がいる・・・自分の命を犠牲にしてもって。その二人の名前は・・・フランドールⅡスカーレットとレミリアⅡスカーレット」

レ「・・・」

ア「父はいつもあなた達の話をしてた・・・私にね・・・嬉しそうに話すんだよ・・・時々何か考え込んでいたけど・・・」

レミリアは今気付いた。アイリスは泣いている。しかし涙はこぼさず、手でこすりながら、地面に落ちないように。

ア「でも本当に嬉しそうに話すんだよ。自分の娘のように」

アイリスの声は震えている。

ア「娘の私が・・・私が嫉妬しちゃうくらいなんだよ？笑っちゃうでしょ？家族も殺されて」

アイリスの涙を流しながら、震えながら語る言葉が止まる。

それを遮ったのはいつの間にかアイリスのすぐ傍まで近寄っていたレミリアがアイリスを抱きしめたからだ。

レ「ごめんなさい」

ア「・・・」

レミリアはアイリスのその泣いてうつむいている顔を両手で優しく持ち上げる。そして目からあふれ出す涙を親指で拭ってやった。そして優しい声で言うのだ。

レ「ダリスは笑ってたわ」

ア「・・・そう・・・よかった」

アイリスはそう言って涙をまつ毛に滲ませながらレミリアに微笑みかけるのだ。それがあまりにも痛々しかった。

レミリアはそんなアイリスを見ていられなかったのだろう。顔を交差させてぎゅっと抱きしめてやった。

アイリスも泣き止み、レミリアはフランの横に戻ってボーっと空を眺めていた。

静かな夜だった。

泣き止んだアイリスも何か考えているかのように夜空を眺めている。

そしてふと

ア「綺麗な月だね」

と呟くように語り掛けてきた。

レ「そうね。でも昨夜が満月よ。少し欠けちゃったわ」

ア「所謂十六夜ってヤツね。私はまん丸より少しかけた方がいいけど。真っ暗な夜に咲くかけた月ってよくないかな？」

その言葉にレミリアは思わず笑ってしまう。

レ「人間の考えそんなことね」

ア「というと？」

レ「完璧を求めるくせにずっと欠けたままなんだもの。しかもそれを美德としている」

とあざ笑うかのような笑みで欠けた月を見ながら言う。

ア「少々の不満くらい我慢すればあんなことにならなかったと？」

レミリアは少し驚く。自分の思っていた事、言葉の裏に隠した思いを簡単に言い当ててしまうアイリスに。

そんなアイリスを横目に睨みながら口を尖らせるレミリア。アイリスはアイリスで笑顔でクビをかしげている。

レ「・・・あなた、これからどうするの？ダリスは死んじやったけど」

ア「え？・・・そうねえ・・・父の言いつけを守って貴方達と一緒に逃げようかな、と」

レ「非常食としてならいいわよ」

さっきの仕返しとばかりにレミリアは薄ら笑いを浮かべてそんなことを言う。

ア「そ、そんなぁ・・・」

レ「ふふっ、冗談よ。一応吸血鬼にも義理と情はあるわ」

ア「そ、そう・・・で、何処かへ行く予定はあるの？」

レ「そうね・・・とりあえず東の方へ向かおうと思ってるわ」

ア「東？何故？」

レ「城の地下にある図書館で読んだ事があるんだけど、ここからずっと東の方に幻想郷というところがあるらしいの。そこでは人間とは違う異形のものが普通に暮らしているらしいわ」

ア「へえ、じゃあ私はそこにはいけないなぁ」

レ「そうね。まあ近くまでは連れて行ってあげるわ。だから気が向いたらいらっしやい。世話役にならしてあげるわよ」

ア「あはは、考えとくよ」

翌朝

気持ちいいくらいに晴れた朝。小鳥がさえずり木漏れ日が刺していた。

「紫様！やっぱりやめましょう！吸血鬼とハンターの戦争を見に行くなんて！人としてどうかしています！」

「藍。あなたはもっと主観を捨てた方がいいわ。私は戦争なんてものに全く興味はないけどそのことを後世に伝えて、それが愚かなことだと教える義務がある。そう思わない？長く生きつづける者として」

「そんなの戦争した本人達が教えますよ！」

「誰が自分達がした戦争を愚かなものだと言うのよ？自らが望んだ戦争を英雄嘆のように語られちゃ困るでしょ？」

「そうですが・・・ていうか紫様」

「なによ」

「やっぱり面白がってるでしょ？」

「馬鹿なことやってないで行くわよ。もう終わっちゃったかもしれないわ」

そんな会話が聞こえた。レミリアはフランを背負いアイリスはその二人に日傘をさしてやっていた。

その方向へ注意深く歩いていくとなんと信じられない事に空中に穴が開いていたのだった。

レ「・・・この穴」

レミリアがその穴に躊躇なく入ろうとする。

ア「え？入るの？」

レ「ええ、これが私達の運命だということよ」

ア「運命？そんなの分かるの？」

レ「何となく、ね」

アイリスはまだ警戒しているように穴をまじまじと見ている。

レ「ここに入れば貴方と私は別れて暮らすことになるだろうけど」
ア「え？」

不意に後ろを振り向きもせずそんな事を言うレミリア。アイリスは当然の如く首を振ってしっかりとレミリアを視界内に入れる。しっかりとアイリスの視界内に入った時のレミリアは振り向いてアイリスの方を優しい表情で見つめていた。

そして

レ「また会いましょうね」

と一言。

ア「・・・ふふっ、会えたらね」

そう言ってレミリアにニコリと微笑みかけるアイリス。しかしそれをレミリアは即座に「いいえ」と否定する。

レ「これは決まっていることよ。運命なのだから」

アイリスは少し驚いたようにレミリアを見る。そしてまた微笑んで頷いた。レミリアもまた優しく微笑み返す。

そして隙間に入っていく

紫「行ったわね」

藍「何がですか？」

紫「何でもないわ」

こうしてレミリアとフランは幻想郷でアイリスは人里で暮らす事になる。

フランは少しかんしゃくを起こすと破壊衝動に襲われ、あたりかまわず破壊しまくるようになる。

レミリアはそんなフランを地下に閉じ込め、他人と接する事を遮断した。フランも破壊を自らが望んでいなかったためすんなりと受け入れた。

それからそんな珍しい幻想郷のニューフェイス、吸血鬼姉妹を訪ねて色々な人物が訪ねてくる。

それは攻撃をしてくるもの、いつの間にか城の地下から持ってこられた本を盗み読む魔女、行くところが無いからと行き倒れのドラゴン、色々だった。

長い時を経て二人は色々な人物と知り合いになり、喜怒哀楽を共に過ごし、掛け替えのない大切な仲間になっていった。

そんな楽しい時はゆっくりと、ゆっくりと過ぎていった

そして・・・

咲「お嬢様。モーニングティでございます」
レ「ありがとうございます。咲夜」

レミリアはいつものように、朝のテラスで咲夜の入れたモーニングティを飲むのだった。

（回想偏）おわり

第十章（回想偏 最終章）（後書き）

これで回想偏は終わりです。

次回からは本編の方へ戻っていかうと思います。

いったん実家に帰るので更新は1月3日くらいからになります。
す。

ここまでご愛読ありがとうございました。

ではよいお年を。

第十一章（前書き）

前回の補足

銀髪の少女アイリスは咲夜の先祖に当たる人物として書きました。

丁度十六夜の月の日に会い、更に夜に咲く月がいい（もしくは昨夜）と言うアイリスの言葉から、約500年後？フラッとやってきた銀髪の娘にそうレミリアが命名したと思ってくれたら幸いです。

さて、本編に戻り、人里で会議の内容を聞かされたフランは今までそっけなかった態度を変え、今後どういった変化を見せるのか。

シリアス回から一気にほのぼのとしてしまいますがこれが本編です。一応本編でもシリアスは出てきますが最後の方です。ご了承ください。

第十一章

町民達の会議とレミリアのフランに対する思いが明かされ涙し、新之助に抱かれながらなき疲れて眠ってしまったフラン。

その翌日、フランが目を覚ます。フカフカの布団にいつの間にか寝かされていたフランは体を起こし未だ眠り眼でボーっとしている。

何故自分はここに居るのかを思い出してみる。

レミリアが自分の為に土下座までしてくれた事、それを思い浮かべると何故か心が温かくなる。そして眠り眼で目を細めながらだが、思わず口が笑ってしまう。自分の為にそこまでしてくれる事が嬉しいのだ。

新之助は紅魔館の皆がフランの事を大好きだと言ってくれた。そして抱きしめてくれた。

フランは抱きしめられた感覚を思い出していた。自分より大きく大きな腕で優しく抱きしめられるその感覚を。少しきつく息苦しいがとても何故か安心でき、そして暖かった。

フ「はぁー。」

フランはそんなため息をつきながら、起こした体をまた倒す。別に二度寝するというわけではない。

新之助に抱きしめられたその感覚が気持ちよく、しかし気恥ずかしさから意味の無い行動をとってしまったのだ。

そして意味の無い行動をとり、それを意識してしまうと、今まで考えていた事とは違うことを考えてしまうもの。

天井を見上げたフランは紅魔館で皆に言ってしまった事を思い出す。

フ「大嫌い・・・か・・・」

更に死ねと言ったことも思い出す。しかも何度も何度も。

先ほどまで暖かった気持ちが急に冷めてくる。そして胸に湧き上がる言いようの無い不安感。

思わず仰向けだった体を横に向ける。そして一言。

フ「緑の名前が未だに出てこない・・・」

その時、何やら足音が聞こえる。床を歩くより早く走るよりも遅い間隔で刻まれる足音。

しかもそれはひとつではない。何人かが入り乱れるように遠くあったり近くなったりを繰り返している。

今気付いたが外が騒がしい。朝、店では開店の準備が行われているようだ。

フランは前と同様にして四つん這いになって、店となっている場所へ架かる引き戸を少し開ける。

そして前と同じく顔を不気味に半分だし、店の様子を伺う。

そこには従業員と思わしき者達があちらこちらを行ったり来たりしている。

そして唯一止まって何やら立ち話をしている人物が。それは若くしてこの大島酒蔵の当主、大島新之助だった。青いはっぴを着て眼鏡を掛け、何やら部下と思われる男と話している。

部「若。最近売れ行きが落ちてきていやす。」

新「そうか・・・うーん、客が小島酒蔵の方へ流れていってるのかな？」

新之助は少し困ったような顔をして、更に真剣な表情で部下と話している。そんな会話にフランは興味津々といった感じで体を乗り出す。

部「それもありやすがその・・・あの吸血鬼が着てから皆怖がっちゃってまして、お酒に血が入ってるとか噂も出始めて」

新「これは僕達の商売がへただからだっ！フランちゃんのせいにするなっ！」

部「す、すいやせん！」

その部下は新之助よりも年上だろうか。それなのに新之助には頭が上がらないらしい。

若くして大島酒蔵のトップになった男だ。絶大な信頼があるのだろう。

それから次から次へと他の従業員から質問を受けている。それを

てきばきとこなし従業員を誘導する。そして何処からともなく聞こえてくる叱責する部下の怒号。

フランはその朝から賑やかな店の中へ入っていく。フランに驚いて小さな悲鳴を上げる従業員を無視し新之助の後ろに立つ。

フ「お、おい、おまえっ」

と、何ともぎこちなく新之助を呼ぶフラン。まだ少し気恥ずかしさがあるのだろう。

その声に気づき、少し驚いたように振り向く新之助。

新「あれ、フランちゃんどうしたの？」

見るとフランは腰の後ろに手を回して組み、もじもじしながら顔を俯けている。

フ「わ、私も、な、な、何か・・・」

新「何か？」

フ「手伝おうかなあ・・・なんて」

新「え？フランちゃんが？」

もじもじしていたフランが今度は不貞腐れたように顔を背けて口を尖らせる。

しかし目だけは新之助を捉えて反応を見ている。

フ「暇だから。」

その瞬間新之助の表情は一変する。驚いた表情から満面の笑みへ変わっていく。目を輝かせたそれはレミリアを見る昨夜のようだ。

そして何か言おうと口をパクパクさせている。

新「な、なら軒先で呼子をやってくれないかな？新しい酒も売れるかもしれない。いや、君の可愛さならどんどん客が来るに違いない！」

そんな新之助の口から出てきた言葉はそんな事。何を根拠にそんな事を言っているのかは分からないが注目を受けることは間違いないだろう。更にフランの見た目は人里に住む人々とはまた別のもの。金髪に白い肌に赤い目。

注目は受けるだろうがそれは恐怖の対象として、が大半だろう。

そのやり取りを見ていた部下が新之助に信じられないといった表情で抗議する。

部「若っ！そんな事したら普通の客ですら来なくなっちゃまいやすよ！」

それはフランに背を向けるようにして、内緒話をしているかのようになに小さな声を張り上げて言う。

それも当然だろう。恐怖の対象になっていた、町民に忌み嫌われていたフランが店先で呼子をするのだ。力を使えないとは言えそんなところにわざわざ近づいていく町民がいるわけがない。

しかし新之助はそれを否定する。

新「僕の目に狂いなければあの可愛さだ、どんどん客が来るに違いない！」

部（狂ってますよ！！その目は狂々と回ってますよおおお！！）

などと部下は思っている事は言えず、渋々といった感じで小さなはっぱをフランに渡し、更にフラン用に日よけ用の大きなパラソルを立ててやる。

そのパラソルの下でフランはぽつんと突っ立っている。横には丸い机が置いており、その上に透明なグラスが十数個、綺麗に並べておいてある。そしてその中には血のように赤い試飲用のお酒が入っている。所謂ワインやブドウ酒と呼ばれるお酒だ。

血を好む吸血鬼にそれに似た色のお酒を売らせるとはこれいかに。

確かに吸血鬼が飲む酒と銘打って売るのもいいが本当に血が入っているんじゃないかと疑われたらそれまでである。なぜなら商売は信用第一だからだ。酒蔵のように食品を売買する商いは特に。

そしてその心配は的中する。

民「おや、吸血鬼の娘がこんなところでなにやってるだ。」

民「あれだっぺ、その赤い酒売ってるんだっぺ。」

民「何だその酒？まっかじゃねえか。きっと血が入ってるべ。」
フ「はいつてないっぺよ！」

民「おお、怖い怖い、逃げるっぺよ。」

と町民がフランが力を使えない事をいいことに冷やかして笑いながら逃げていく。

フランはパラソルの下で不満そうな表情を浮かべて突っ立っている。

そんなフランは暇だからと言って申し出たはずがまた暇になってしまった。

しかしそんな暇なフランの所へカメラを持った男が一人。ムキムキの体にタンクトップを着て軍人用のズボンにブーツ。頭にはキャップをしている。

フランの前に立ち止まる。そして

「やあ僕は富竹プロのカメラマンさ。」
フ「・・・」

と、固まってしまうフラン。口をぽかんと開けて富竹と名乗るそのカメラマンをポケットと眺めている。

文「なんちゃって」

と、まるで脱皮するようにその男の皮膚や服が剥がれて行く。それは赤い変な帽子に黒髪、更にどこかの会社員のようなシャツでビシッと決めた記者でもある射命丸文だった。

文「あ、驚きました？これは取材前の一種のパフォーマンスでして、取材する相手が緊張しないようにといった目的があるんですよ。」

と聞いてもいないのにぺらぺらと笑顔でそんな事を言い出す文。何処で知ったのか、どうやらフランを直々に取材しに来たらしい。

文「それでフランさんこんなところで何してるんですか？」
フ「え、えと・・・」

フランは何か思い出すように考え込んでいる。文はウンウンと笑顔で頷きながらペンとメモ帳を持ち臨戦態勢だ。

文「大丈夫ですよ、ゆっくりでいいですからね。」

と優しく声をかけてやる。フランも頷く。

フ「あ、あの」

文「はいはい、何でしょう？」

困ったような顔をしてフランが文に話しかける。身長差からフランは上目遣いになる。

フ「パパラッチには近づいちゃ駄目っておねえさまが言ってた。」
文「なっ」

と、フランの口から出てきたのはそんな言葉。文は目を見開く。

文「何ですか！その不審者みたいな扱いは！それにあんな下賤なものと一緒にしないで下さい！私は真正正銘のプロの記者です！そう！私は清く正しい」

フ「音速丸」

文「射命丸です！」

フランはケラケラと笑っている。恐らく先程の困った顔も演技なのだろう。

その時、店先を誰かが通り過ぎた。フランは新之助に言われた事を思い出す。入るつもりがない人にも声をかけるのだと。

だから「いらっしやいませ」と声をかけるがそのまま行ってしまう。

そして目の前には文がまだいた。

文「む、無視しないでください！」
フ「・・・なんか用？パパラッチ。」

と横目に文を見ながら面倒くさそうに言う。

文「そんな顔しないでくださいよ、そしてパパラッチはやめてください。」

フ「あ、お酒試飲できますよ、よ、よろしかた、かた・・・かったらどうぞ」

フランは何か思い出したように手に持っている紙を見ながら、文に酒を勧める。フランの手には血のように赤いワインがゆらゆらと揺れている。

文「あ、私勤務中なのでお酒はちょっと。」

それも当然だろう。勤務中にお酒など飲んでいたら上司になんと言われるか分かったものではない。

しかしそんな事フランは知った事ではない。フランは渋い顔をしながら言う。

フ「私の酒が飲めないっての？」

文「なっ、何処でそんな言葉を！？」

恐らくはレミリアが酔っ払って発した言葉だろう。フランにとってレミリアは教育上よくないかもしれない。

フ「飲めないなら取材なんか受けないもん。」

文「え」

と、フランは顔を背けてしまう。しかし文の前にはまだワインが差し出されている。

文（くっ……私が勤務中にお酒を飲むだなんて……しかし取材はしたい……）

文は世間体と取材魂のジレンマに挟まれ、唸っていた。

そして何かを決心したかのようにフランの差し出されたワインを手取る。

文「一杯だけですからね！」

フランはご満悦の顔をして頷く。

文はそのワインの匂いを嗅いで見る。以外にもいい匂いがする。そしてぐいっと一飲みにした。

文「おお、これはおいしいです。後でこれも取材してもいいで」

と文の言葉が止まる。フランの手に持たれているもの。それは文が持っていた、いつでも編集部と連絡が取れる、便利な通信機だった。

いつの間にか拘り取られていたのだ。

フ「あのー編集長？」

『ああそうだが？そちらは？』

フ「私フラン。」

『フラン？あれ？射命丸が取材に行っていた筈だが』

フ「勤務中なのにお酒を飲んで卑猥な取材ばかりしてくるんですけど？」

『な、なんだって！？』

文「ちょ！フランさん！？」

文はフランから通信機を搔っ攫う。

文「へ、編集長！？今のは嘘ですからね！？決して酒など飲んでいませんからね！？」

『おい射命丸。』

文「はい？」

『この通信機は相手が酒気を帯びているかどうかとも分かるようになってるんだ。』

文「げっ！まじで！？」

『嘘だ。』

文「・・・あ、あははは・・・編集長？」

『プツッ・・・ツーツーッ』

文「編集長おおおおお！？」

その光景を見てフランは腹を抱えて笑っている。

文「くっ・・・また来ます!!」
フ「ばいばい。」

文は急いで編集部に戻っていった。そこで思いっきり絞られた事は言うまでもない。

そして数時間後、

フ「また来た。」

文「ええ、何度だって来ますとも! さあ、今度こそは取材受けてもらいますよ!？」

その時、フランが指を鳴らす。

文「え？」

ばさばさと向かいの塀の上にカラスが舞い降りた。そのカラスはリードをくわえておりそのリードの先には真っ白な犬のような耳を生やした樫がいた。

文「お兄ちゃん!? 樫!？」

兄「文。聞きたいことがある」

文「何よわざわざ？」

兄「ホワイト家族24って何？」

文「それは家族への幻想郷通話が24時間無料になるってことよすごいでしょ？」

兄「すっごい、でも何で？」

文「私だってわかんないわよ、何で樫が馬鹿犬なのかも!」

樫「馬鹿犬じゃないです馬鹿狼です!!」

兄「何で何で？」

椀「狼です!!」

文「ええい!うるさい!帰れ帰れ!!」

バサバサ、キャンキャンといいながら射命丸の兄と椀は逃げるように帰って行った。

文「では、フランさん!取材を」

張り紙

本日の営業は終了しました

文「・・・」

次の日

フ「しつこいなあ・・・」

文「お願いします・・・なんでもします・・・だから」

文は両手と頭を地に着けて懇願している。土下座だ。

フランは思ってしまう。土下座ってたいした事ないのではないかと。

そんなことを思っていると顔を上げてフランを仰ぎ見る射命丸。

文「お願いしますフランさん!もう後が無いんです!飲酒がばれて編集長にこっぴどく叱られて・・・もう・・・」

と言うだけ言うと射命丸はうつむいてしまう。泣いているのかも

しれない。肩が少し震えている。

少しかわいそうになったのかフランはため息をつき片膝について文の震える肩に手をぽんと置く。

すると文が顔を上げて潤んだ瞳をフランに向ける。

そのフランはにっこりと笑う。天使のようなその笑顔。

文は心が洗われるようだった。

文「フランさん・・・」
フ「だが断る。」

フランの天使のような笑顔が悪魔のそれに変わる。そして呆然と
している文を見てまたケラケラと笑う。

文「ひとでなしいい！うわああああん！」

文はいい年をして人目をはばからず声を上げて泣き喚く。小さな
フランの足にすがりつきながら、まるで大きな子供だ。

フ「ちょ、ちょっと!？」

さすがのフランも周りを見回しながら文を引っぺがそうとするが
タコのようにまとわりついて放さない。

文「お願いしますううう！ふらんさあああん!!」
フ「しょ、しょうがないなあ・・・」

文「本当ですか?!（泣き落とし成功）」

と顔を上げるとそこはフランのスカートの中だった。

文「暗い？」

フ「ちょ、ちよつと!! エッチ！」

ガンッ

と文を殴り飛ばす。

文「がはぁ・・・」(色は白・・・っと)

文はよろよろと立ち上がりペンとメモ帳を持ってフランに迫る。

文「で、では・・・取材を」

フ「でも条件があるわ。」

文「条件？」

フランは文の耳に何やらゴニョゴニョと耳打ちしている。

文「え・・・それはちよつと・・・」

フランが出した条件が厳しいのか少し渋い顔をする文。

しかしフランもそれで引き下がるわけが無い。なぜならフランは切り札を先程作ったばかりだからだ。

フ「パンツ・・・」

文「へ？」

フ「パンツ見たでしょ？」

文「み、見ましたが・・・ま、まさか・・・」

フ「人のスカートに顔をつっこんでハアハア言う記者。」

文「ハアハア何て言っていないです!」

フ「警察に」

文「へ?」

フ「警察に言ったらどうなるかな?」

とそっぽを向きながら唇を吊り上げまだ幼い牙を見せていたずらに笑う。

文「あわわわ・・・」

フ「幻想郷の皆はどう思うかな?」

文「や、やればいいんでしょ!?!やれば!」

フ「うん。」

フランはとてもご満悦だ。そしてこの出来事がフランの人里での生活を、町民のフランに対する考え方を変えるきっかけとなる。

第十一章（後書き）

あけましておめでとうございます。

2011年もがんばっていききたいと思います。

そしてこの回はフランの鬼畜ぶりが万歳になってしまいました。
ストーリー上文を手玉に取らなければいけなかったので鬼畜フランに
変身しましたね。

後は児童ポルノ違反で文を捕らえようなんて事も考えました。
予想以上に長くなったのでやめました。

ではまた。

第十二章（前書き）

注意

西行寺幽々子・・・台詞「幽」
魂魄妖夢・・・台詞「夢」

第十二章

民「お、吸血鬼の子だ。」

民「こんなところで何突っ立ってんだ？」

民「大島酒造の売り子だってよ。」

民「へえ。」

先日、冷やかしに來た町民とはまた別の町民が数人、フランの前にやってきた。

珍しそうにフランを見ている。今まで怖くて近づくことすらできなかった存在が、今は力を失いすぐ近くで見れるのだ。フランにとってはまるで動物園の檻に入れられたライオンのような感覚だろうか。

その町民は特にフランを冷やかすでもなく、すぐに興味を他のものに移す。それは町民数人が手に持った新聞だった。

民「そうだ、あんたこれ知っとるかね？」

そう言つてフランに見せてきたのは手に持った新聞。フランはその記事を読むために顔を近づけてじつと見る。町民が新聞を持つ手とは反対の手で新聞のある一部を指差している。そこには大島酒蔵の記事が乗っていた。

そう、これは文が書いた記事だった。この前フランが文の取材を許可する変わりに提示した条件がこれだ。血のように赤い酒を売れるようにして欲しいと。

フランは大島酒蔵の部下の言っていたことを気にしていたのだ。自分のせいで売れ行きが落ちていると。更に吸血鬼がいることで酒に血が入っているのではないかなどと、酒が赤い事もあり、そんなありもしない噂を流され、新之助に迷惑をかけていると思っていたのだ。

それを払拭するために文に頼んだのだが、フランはその記事の見出しを見てぎよっとする。

見出し

血のように赤い酒

と書いていたのだ。その後に写真やら口当たりやらが書かれているが、フランは見出しにしか目が行かなかった。

フランは驚きの表情から次第に怒りの表情へ変わっていく。血のようになどと書いたらますます血が入っているように見えてしまう。

そして文を焼き鳥にしてやろう、と思っていたその時、

民「ここに血のように赤い酒と書かれているんだが？」

フ「あ・・・えと・・・」

民「血じゃないなら何でこんなに赤いんだ？」

フ「え?・・・何でだろ？」

新「葡萄です。」

フランがしどろもどろしていると新之助が後ろから助け舟を出した。

民「葡萄？」

新「そうです。原料は葡萄を使用しています、ここら辺では珍しいですが西洋の方では普通に飲まれています。」

町民達は新之助の説明を聞いている。するとそこへまた別の町民達が寄ってきてその説明に聞き入っている。そしてその塊は段々と大きくなっていった。

その町民に共通しているのは全員片手に新聞を持っているということだ。

文が作った赤い酒の記事は大成功だったらしい。

その光景をボーッと見ていると新之助がフランの方を振り返る。フランはびくりとして背筋を伸ばす。

新「こちらでそのお酒を試飲できますので、よろしければどうぞ。」

と、新之助はフランに軽く微笑む。そしてその合図を分らないフランではない。ごくりと生唾を飲み込み、心得たとばかりにフランも頷く。

フ「え・・・えと、よ、よろしかったらどうぞ。」

フランはその小さな手でグラスを持ち、身長差から掲げるように町民に差し出す。それは小さい子ががんばって仕事している、周りから見れば何ともほほえましい光景である。新之助はもちろんの事、町民達も男女を問わずやはり心が温かくなる光景だ。

そして初めの町民がフランからグラスを受け取り少し匂いを嗅いだ後ゆっくりと口に運ぶ。

民「どれどれ。」

その町民は口の中で少し弄ぶように転がしてごくりと飲む。フランと新之助もごくりと生唾を飲む。

民「こりゃ美味しい！」

その瞬間ざわめきが起る。フランと新之助も笑顔がこぼれる。心の中ではほっと胸をなでおろしている事だろう。なでおろすほどの胸は無いのだが。

しかし、それが幸か不幸か、自分もその美味しいと言われる酒を飲むとうと、我先にとフランに試飲を求めるために町民が殺到する。

民「お譲ちゃん！ワシにも一つくれや！」

民「あたしも！」

民「可愛いお譲ちゃん！先にワシにくれ！」

新「お、落ち着いてください！まだまだいっぱいありますので！」

フランはその殺到する町民達に試飲用の酒を渡すが、次から次へと手が伸びてくるので若干困惑気味だ。

「どけどけえええええ！」

とその時、地響きに似た震えとその大きな叫び声が聞こえた、かと思うと、その殺到している町民がすごい衝撃音の後、空高く舞い上がったのだ。それはボウリングで吹っ飛ばされたピンにも似ている。

フランにはスローモーションに見えた。人が回転しながら、オリンピック選手のように体をひねりながら、あるものは縦回転しながら、宙高く舞い上がるのだ。

フ「人って・・・こんなに跳ぶものなんだ・・・」

人はこんなに跳びません、と教えるべき新之助も口を開けて呆然とその光景を眺めていた。

新「跳ぶかも・・・しれないね・・・」

そしてそんな事をいう。

「この馬車に轢けないのはあまりない！」

大きな馬車に乗りそう豪語するのは、白い髪に黒いリボンを頭につけている少女。その髪とリボンをなびかせて漆黒の漆塗りの馬車から飛び降りたのは魂魄妖夢だった。

夢「血のように赤い酒があると聞いたのですが、こちらでよろしかったでしょうか？」

どうやら例の酒の買いに来たらしい。その手には町民と同じ新聞を持って。

新之助は未だ呆然としている。そんな妖夢はフランに気がついて少し驚いている。紅魔館の地下で暮らしていてほとんど見たことのない珍獣的存在のフランが何故こんなところにいるのだろうか。

夢「これはこれはフランさん。みよんな所にいますね。何してるん

ですか？」

フ「お手伝いしてる。」

夢「お手伝い？」

フ「これ売ってるの。」

と妖夢の顔色が変わる。宝物を見つけたと言わんばかりにパーツと顔を明るくする。

夢「それです！それを買いに来たんですけど。」
フ「よろしかったら試飲できますよ。」

と呆けている新之助を尻目にいつもの定型文を読み上げる。そのフランの振る舞いに少し驚く妖夢。もっと幼く、わがままし放題のイメージでもあったのだろう。

しかしそこはまじめな妖夢、こんなにしっかりした子だったのか
と思い込み、今までのフランに対してのイメージを塗り替える。

そしてフランの掲げるように差し出された酒の入ったグラスを手
に取る。

夢「では少しいただきますね。」

妖夢はゆっくりと口にグラスをつけて飲もうとする。しかし妖夢
の唇が空をきる。

「あらあ、これは美味しいわねえ。」

とゆったりとした口調で喋る女性の声。いつの間にか妖夢の隣に
立っている。その女性は桜色の髪を、ドリキヤスのようなマークが

ついた青い帽子で覆っている。

夢「幽々子様!？」

西行寺幽々子だ。幽々子はいつの間にか馬車から降り妖夢の試飲用の酒を奪い取っていたのだ。

夢「何で飲んじゃうんですか！」

幽「いいじゃない、妖夢のけちい。」

夢「毒が入ったりしたら危ないじゃないですか！」

幽「もう、心配性ねえ、あら？」

幽々子がフランに気がつく。

幽「あらあら、もしかしてフランちゃんが呼子をやったのかしらあ？」

フランは頷く。

幽「そう、かわいいわねえ」

そう言ってフランの頭をなでてやる。まるで母親に褒められている子供のようだ。

フランは特に嫌がる様子もなく、なされるがままにしている。少し顔が赤くなっているところを見ると照れているようだ。

幽「あらあらまあ、この子は幾らかしら？」

夢「売り物ではありませんよ！」

そう言つて幽々子の暴走を収めたため息をつく。毎度毎度こんな事があるのだろう。そんな妖夢はもう一度酒の入っているグラスを手に取り飲もうとする。

しかしまた幽々子に搔つ攫われる。

幽「ふう、これは美味しいわねえ。お肉が食べたくなるわあ。」
少し渋めなのかしら？」

と、何故取るのかと抗議する妖夢を尻目に、頬を赤らめて片手でその頬を覆う幽々子。その様子はレミリアとはまた違う柔らかな気品を感じる。

その言葉にさっきまで呆けていた新之助が即座に反応する。

新「そうですね、ご婦人方には少し渋めかもしれませんが。渋めと感じるのでしたらもう少し飲みやすい白ワインもございます。更にあなた様の美しい髪の色のように桜色のピンクワインもございます。こちらなどはご婦人方でも飲みやすいかと。」

幽「あらあ、私桜色は好きなのよねえ・・・うん！おいしい！」

先ほどとは違い、ピンクワインはよほど美味しかったのだろう。思わず声を上げる幽々子。

幽「とりあえず100本くらいもらおうかしら？」

夢「100本！？また後先考えずに！」

幽「紫にも分けてあげないといけないでしょう？霊夢ちゃんや魔理沙ちゃんも」

と次から次へ幻想郷にいる人物の名前をあげていく。妖夢はそん

な幽々子に少々従い、結局ピンクワイン100本と赤白を50本ずつのお会計を済ませる。そしてそそくさと馬車に乗り込み、大島酒蔵を後にする。

新「ありがとうございます！」

後に残ったのは満足げの新之助と、頭をなでられ微妙な表情をしているフラン。

そして馬車の砂埃から出てきた、地面に倒れている多数の町民達だった。その町民の一人が新之助のところに芋虫のように這って行く。

民「わ、ワシにもワインをくれ・・・」

と、幽々子が大量に買っていったのを見ていたのか、焦って次から次へと新之助の方へワインを買い求める町民で溢れていく。それはまるでゾンビが新之助にたかっているようにも見える。

フランはじっとその町民達のゾンビみたいな光景を見つめていた。それは霊夢が言った人里の町民に危害を加えたら閻魔様のところで一生暮らす、と言った事を思い出したからだ。妖夢は馬車で盛大に轢いて行ったがこれはいいのだろうか。

少し理不尽だなとも思いつながらも、まだまだ殺到する町民に試飲用のワインを渡さないといけないので段々と頭の中からその考えは忘れ去られていった。

文「ふふん、どうでしょうかフランさん？私が書いた記事はお役に立てたでしょうか？」

ふと気付くと後ろにどや顔の文が立っていた。

フ「す、少しだけ・・・」

その文に唇を少しだけ尖らせてそっぽを向きながらそんな事をいう。

この記事のおかげでワインが売れたことは事実だ。文が来たら素直にお礼を言おうと思ったフランだが、どや顔の文に思わずそんな態度をとってしまう。

文「いいんですよ？もっと褒めてくれても。ほらほらそんな顔してないで」

そう言いながらしゃがみこみ、フランのむすっとしている頬をつまんで引っ張ったり回したりしている。

フ（うぜえ丸・・・）

顔を左右に振って文の指を振り払う。

フ「あ、ありがとう・・・」

文「どういたしまして。」

文は白い歯を見せてニコリとする。

フ「血のように赤いつて書いてた記事を見たときはブチコロソウと思ったけど。」

などと悔しかったのか負け惜しみ発言をするフラン。

文「ああ、あれですか？あれはですね、町民達の心理の裏をついたんですよ。いいですか？血のように赤いお酒と書けば町民の関心はその赤いお酒の原料に目がいくでしょう？」

そしてその原料をあえて書かない事で町民の興味をそそり、現地でその詳細な説明を新之助に聞くしかない。これにより血が入っているという噂を払拭できつつ、周りの町民に大島酒蔵の集客率が高いという印象を植え付けることができる、という事だった。

更に文も飲んでみたがそれは美味しかった。これで売れなければ嘘と言うものだ。現にそのお酒は歯止めがかからないほどに売れに売れた。

文「いやゝ我ながら惚れ惚れする程の記事でしたねぇ。と、いう事でこれだけ売れば文句は無いはずです。取材に応じてもらいますよ！フランさん！」

張り紙

本日の営業は終了しました。

文「あやや・・・」

店内

営業は終了してもすることはまだまだある。大島酒蔵の従業員が朝と同じく忙しく動き回り店じまいをしている。

フランはテレビのある部屋でのんびりとジュースを飲んでいる。吸血鬼の体力は人間の何倍もあるのだろう。ずっと立っていたにも関わらず疲れた様子が無い。

フランは店内に通じる戸を開けてジュースを飲みながら中を見ている。

そして店にはある変化が見られた。前を通り過ぎる従業員やバイトがたまにフランにお疲れ！と声をかけてくるのだ。中にはお菓子を渡してくるものまでいる。

フランは変な気分だった。あんなに毛嫌いし、フランを見ると小さな声を上げるほど驚いていた従業員達がそんな言葉をかけてくるのだ。人間とは不思議な生き物なんだな、と思いながらもその表情は笑顔だ。

ボーっと、忙しそうに動き回る従業員を見ているフランにまた話しかけてくるものがいた。それはこの大島酒蔵の当主新之助だった。とてもにこやかな表情でフランのいる部屋の中に入ってくる。

新「ありがとうございます、フランちゃん君のおかげで売り上げもうなぎのぼりだよ。」

フ「う、うん・・・」

文に頼んでやってもらったため少し後ろめたさが残るので微妙な表情をする。

しかしフランが頼まなければこんな事にはならなかった。とフランは自分に都合のいいように解釈する。それが人間と妖怪との違いなのかもしれない。

新「何かお礼がしたいんだけど、何か欲しいものがあるかな？なんでもいいよ？」

フ「なんでも？」

と新之助が嬉々として、何かお礼がしたいとフランに申し出る。新之助は未だにフランの可愛さで酒が売れたと思っっているのだろうか。それともあの記事の裏にあった事を知ってこんな事を言ってくるのだろうか。

しかしそんな事フランはどうでもよかった。何かくれるのなら遠慮なくもらうのがフランだ。その申し出にフランはとんでもない事を言いだした。

フ「ぎゅってしてほしいな！」

新「え？」

フランは嬉しそうに机にのぼり自分の身長を高くする。そして自分の肩を、腕をクロスさせてぎゅっと握る。

フ「ぎゅって」

前にフランが泣いた時、新之助に抱きしめられた感覚がとても気持ちよかったのだ。あの感覚が今でも忘れられずもう一度味わいたいと言う事だ。

新之助は机の上に乗った事をとがめるような無粋な事はしなかつ

た。机の上にトンと飛び乗るフランのしぐさがあまりにも可愛かったからだ。常識を教える立場としてこれはどうかと思うがフランはきっと大事な事はうすうすと分かつてはきているだろう。

新之助は机に上ったフランに困惑気味に近づいてぎこちなく抱きしめる。

新「ぎゅって・・・こ、こう？」

フ「うん。」

フランは気持ちよさそうに目を閉じる。机に上っている事もあり、上半分だけ見ると恋人同士にも見えなくも無い。

新之助は照れもあつてかおどおどしながらあらぬ方向を見ている。

新「ど、どうかな？」

フ「気持ちいい。」

目を閉じながらそんな事をいうフラン。それに少しほっとしたのかフランの方を見る。

新「フランちゃんはこれが好きなのか。」

フ「うん。大好きっ」

そう言ってフランも新之助の方を見て微笑む。間近で見るフランの笑顔はこの世とは思えないほど可愛らしかった。

新「そっか。」

新之助は少し顔が赤くなる。それを隠すためかフランをもっとひ

きつけて強く抱きしめる。

しかし幸せは長くは続かないものである。

新之助が強くフランをひきつけた事によってフランの目の前には新之助の首筋が青いはっぴから覗いている。日もあたらず少し華奢な新之助のその首筋はいかにも吸血鬼が好みそうなそれだ。

血がざわつく。それは吸血鬼としての本能なのだろうか。フランの鼓動が段々早くなっていく。二つの紅の瞳はまっすぐに新之助の首筋に向けられている。

ガブッ

果汁たっぷりの果物にかぶりついた時、そんな音がするのだろう。そういう音を鳴らして新之助の首筋にフランの牙が食い込む。

新「いだっ!？」

そして大島酒蔵中に響く新之助の叫び声。

人に危害を加えてしまったフラン。これから一体どうなってしまうのだろうか。

第十二章（後書き）

妖夢の特徴のある台詞を入れてみました。

少し不自然になってしまったところもありますが暖かい目で見てやってくだされば幸いです。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

では～。

第十三章

フランに噛み付かれた新之助は、その激痛から店全体に轟くような叫び声を上げてしまう。それもそのはずだ。まだ幼いとはいえ鋭い吸血鬼の牙、それが二本も新之助の首筋に突き刺さっているのだ。

フ「へっ？あ、つい・・・」

しかし幸いにも新之助の首筋からすぐに牙が抜かれた。新之助の悲鳴に体をびくつかせて驚き、口を離したのだ。

そのフランの口からはよだれでも垂らしているかのように血が唇から垂れている。そのフランの表情は困ったようなそれだった。

フランは霊夢が紅魔館で言っていた事を思い出す。人里で人に危害を加えたらどうなるか。

その時、新之助の悲鳴を聞きつけてかばたばたと慌ただしい足音が近づいてくる。

それにフランはびくつき、更に表情が困った色から恐怖の表情に塗り替えられていく。

このまま行けば霊夢の言ったとおり閻魔様のところで一生暮らす事になってしまう。それはとても退屈でつまらないところだろう。更に誰にも会うことができず一人孤独に一生暮らす事になる。

その事を考えるとフランは体が震えて止まらなくなった。

フ「や・・・やだ・・・いやだっ・・・」
新「フランちゃん？」

そしてその足音はフラン達がいる部屋の入り口で止まる。そして中を覗き見る従業員。

フランは祈るように力いっぱい目を瞑っている。

フ（誰か・・・助けて！）

その時、フランはまたあの心地よい安心感に身を包まれる。震えるフランを新之助が抱きしめたのだ。それは入り口に背を向けるようにして、更にフランの口元を隠し、そして首筋の傷が見えないようにはっぴで隠しながら。

部「若どこうかしましたか？」

その中を覗き見た従業員はあっと驚き、見てはいけないものを見てしまったとばかりに顔をうつむかせる。その中では新之助がフランを抱きしめているのだ。無理も無いだろう。

その従業員は恐らく変な想像をしているだろうが新之助とフランはそんな誤解を解くような余裕も無い。

フランは新之助の胸に顔をうずめて困ったような目をしているし、新之助は新之助で苦痛で歪む顔を何とか必死に変えて微妙な表情をしている。それは従業員に見られて気まずいと言う表情と見えなくも無い。

新「なんだ？」

新之助はあたふたしている従業員にそう言うだけで精一杯だ。

部「い、いえ。若の悲鳴が聞こえたので。」

新「机に足をぶつけてしまっただけだ。でも大丈夫。」

部「そ、そうですか。」

新「まだ何かあるのか？」

部「あ、はい・・・それがワインがもうほとんど売れてしまっていて・・・発注数を検討し直して欲しいとのことですよ。」

新「わかったすぐ行く。」

部「では」

そう言ってその従業員はご丁寧に扉を閉めて何処かへ行ってしまった。

足音が聞こえなくなると、その間ずっと息を止めていたかのように、新之助が大きなため息をつく。

そして目線をドアから、抱きしめているフランの方へ移す。そこには口に血をつけて困ったように新之助を見上げるフランの顔があった。

フ「私・・・」

新「大丈夫、もう行ったよ。」

フランを安心させようと優しく言う新之助。

そう言われてフランは初めて閻魔様の所で一生暮らすことを暫定的に免れた事を認識する。

しかしその新之助の表情は痛みで半分歪んでいる。

そしてその表情を見てフランは自分の心配ばかりで新之助の心配をかけらもしてない事に気がついた。

フ「新之助・・・」

新「ん？」

フ「・・・痛い？」

新「ちよつとね。」

と顔を引きつらせながら笑う新之助。いつも大丈夫と言ってくれる新之助もさすがにちよつと痛過ぎたのか、大丈夫とは言わない。

その言葉にフランの曇った表情は、雨が降ってきそうなほどに更に曇ってしまう。

新「名前。」

フ「え？」

その時その曇った表情に風が吹く。

新「はじめて名前呼んでくれたね。」

フ「・・・？」

フランの表情は未だ曇ったままだがそれに困惑の色が加えられた。

新「新之助って呼んでくれたよね。ありがとう。」

とフランのやわらかい唇についた血をぬぐいながら笑顔で言う。

フランは今まで新之助を名前で呼んだことが無かった。それが新之助はとても嬉しかったのだ。だからフランにありがとうと言ったのだが、フランはそんな事でなんでお礼を言われるのか分からなかった。

先ほどの文がやった事でお礼を言われたのではなく今度は本当に自分にお礼を言われたのだ。

人間は本当に不思議な生き物だとそしておかしい生き物だとフランは思った。名前を呼ばただけで嬉しいなんて、と。

そしてそれが何かの呪文蚊のように曇っていたフランの表情は段々と晴れていった。

フ「うん！」

その言葉にフランは元気よく返事するのだった。

フランは新之助の首筋にぽっかり空いた穴を消毒しようと綿に消毒液を染み込ませる。全て新之助の指示通りなのだが。フランは新之助が自分でやるから、と言っても聞かずに自分がやると言い出したのだ。

自分がやってしまった事だから、せめて自分の手で手当てしたいと言う事なのだろう。

そこで断るほど新之助は人の気持ちに鈍感な人物でもない。新之助は首筋と言う事で手当てしにくい事もあり任せたが、それがフランと言う事もあり少し不安だった。

トントンと消毒液を染み込ませた綿で叩くと新之助は思わず痛みで声を出してしまう。しかしそれをフランは

「それくらい我慢しなさい」

などと自分がやった事ではないかのように笑いながら言う。恐らくはレミリアの受け売りなのだろうが新之助はそれを聞いて楽しそうに笑う。

そしてガーゼをテープで目も当てられないほど汚く貼るフラン。中々うまくいかないから何度も何度も貼り付けたせいでこぶみたいになっている。それには新之助も苦笑いだ。

苦戦しながらも粗方手当てが済むと、新之助がフランにある提案を申し出た。

新「そうだフランちゃん！」

フ「ん？」

新「もう少ししたらパーティーがあるんだけど」

フ「ばーてい？」

新「そう。ワインの事を聞きつけた町長さんがワインをパーティーで使いたいって言ってきてくれてね。それで大島酒蔵も参加しないかって。」

フ「へー。」

新「煌びやかな衣装を身に着けた人たちが集まって皆で踊るんだ。色々なおいしい食べ物もあるらしいよ？」

フ「ふーん。」

フランはあまり興味なさげにそう言って失敗したテープを丸めて遊んでいる。新之助もそんな手ごたえの無いフランの様子に苦笑いで頬を掻く。

フランは昔、吸血鬼であり貴族でもある父親によくパーティにレミリアと一緒によくパーティに引っ張り出されていた。そしてパーティの度に自慢の娘だと見せびらかせられていた。

レミリアのように礼儀正しくなどした事がないフランはいつも父親のそばに引っ付いているか、陰に隠れながら離れてパーティを見ているしかなかった。

だからパーティなど飽き飽きしていたしあまりいい思い出も無い。

新「よかったら・・・その・・・」

フ「新之助。」

新「ん？何？」

このままでは新之助はフランを誘ってパーティに行こうとするだろう。そしてそれを分らないフランではない。フランはパーティは正直行きたくないと思っている。

しかし新之助に誘われたら断る事は難しい。傷の事もあり、恩をあだで返す事になってしまう。だからそうなる前に手を打っておく必要がある。

フ「私もワインのみたいなの。」

新「だめだよ。お酒は20歳になってからなんだよ？」

フ「私500歳超えてるもん。」

新「成程。じゃあパーティでもでるから・・・その・・・僕と一緒に」

フ「あ！　そういえば前にいた猫が見あたらないんだけどどこ行ったんだろ？」

新「ああ、あの猫はたまにくるんだよ。いつも二本尻尾が生えた猫と一緒に遊んでるけどね。」

フ「ふーん。そこって何処？　そこに連れて行って欲しいな。」

新「いいよ、そこは今度のパーティーの会場なんだ。パーティーに行く時に一緒に」

フ「そ、そう言えば昔おねえさまのお腹に穴が開いて、飲んだ紅茶が」

とその時、新之助が何か決心したような表情でフランの両肩を掴む。

フ「し、新之助？」

新「僕と一緒にパーティー行かない？」

ついに言われてしまった。

フ「えと・・・その・・・」

新「僕とじゃ嫌かな？」

必死な新之助に戸惑い、なかなか言葉が出てこない。そんなフランに新之助が追い討ちをかける。

フランは目を背けて黙り込んでしまう。その沈黙が長くなったせいか新之助のフランの両肩を掴む力が段々弱くなる。それと同時に新之助の表情にも諦めの色が次第に濃くなっていく。

面と向かって断れなければただ黙っていればいい。そうすれば暗黙のうちに断る事になる。

しかしそうなる就先程あった事に申し訳が立たなくなる。

新之助はそれを狙って言ったのではないだろうがこの状況でフランがする返事はもう決まっている。

フ「嫌じゃないけど・・・」

新「けど？」

新之助は希望の光を見たのか、ずいっとフランの方へ身を乗り出す。

フランはそんな新之助を牽制するかののように先程丸めていたテーパーの塊を、ぴっと指ではじき新之助の顔に当てる。

新「あたっ」

そんな声を上げて思わず目を瞑る新之助。

トンネルを抜けた先は銀世界だったと言う事がある。

しかし新之助が目を開いた先にはそんな寒々とした光景が広がってはなかった。春のように暖かく柔らかい、そんな光景でもない。

それはツンと唇を尖らせた表情で頬を膨らませ、しかし目は笑っているという高等技術を組み込んだフランの顔。真紅の瞳は新之助とは無縁のあらぬ方向を向いている。

そしてその口からでてきた言葉は

フ「ちよつとだけなら・・・いいよ・・・」

そんな短い言葉。

しかしそんな短い言葉の効果は新之助には抜群だったようだ。新之助の顔がパーッと明るくなる。

新「ほ、本当!？」

フランはあらぬ方向を見ながら小さく頷く。

新「ありがとう! フランちゃん!」

そう言つて新之助はまたフランを抱きしめる。

心地よい包容感に包まれたフランは感謝された事もあいまって心が温かくなっていく。それはフランの頭にパーティに新之助と一緒に行くなら別にいいか、という考えが芽生えてくるほどだ。

そしてすぐ引き離すところして入られないとばかりに立ち上がって

新「じゃあすぐに準備してくるね!」

と言う。そして慌てて扉の方へ走っていく。その時機の脚に思いつきり小指をぶつけて本日二度目の悲鳴を店中に轟かせる事になった。

そしてそれを見てフランは笑うのだった。

第十三章（後書き）

フランを今度は攻められるという状況に陥らせて見ました。

そして攻めの新之助は少しがつついた感じになってしまいました。がやる時はやる奴だと思ってくだされば幸いです。

次回はフランがパーティに新之助と一緒に参加します。

あまり乗り気ではないフランがどんな反応をするのかを書けたらいいなと思っています。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

では～

第十四章（前書き）

注意

長老・・・台詞「長」

第十四章

フ「し、しんのすけえゝ・・・」

そんな情けない声で更衣室の扉から顔を出すフラン。今は顔半分どころか顔の2割ほどしか見えていない。

新「あ、フランちゃん着替え終わった？」

先日、フランをパーティに誘う事に成功した新之助は更衣室の前でまだかまだかとうろろうしていた。そこは従業員が着替える時に使う更衣室の前。

その新之助は黒いスーツに蝶ネクタイでビシッと決め込んでいる。

そう、これからそのパーティに行くのだ。

フ「これ、すごく恥ずかしいんだけど・・・」

未だに恥ずかしがって扉から顔しか出せないでいるフラン。そんな姿を見てか、フランの後ろから笑い声がする。

それはフランの頭に頭突きをかました新之助の祖母だ。

バ「あんた本当にメンコイよ！自信もちな！」

フ「いたっ」

そう言ってフランはドアのカーテンから叩き出される。

そこにはラッピングされたプレゼントがあった、様に新之助には見えただろう。新之助の祖母によってラッピングされたフランはもうこれまでの幼女ではない。細い首、肩、健康的な鎖骨を露にし、胸を取り巻くように巻かれた白い襟。胸にはオレンジ色のチーフが真つ青な宝石で止められている。その下には真つ赤なドレスがフランを取り巻いている。

フランが着ている普段の洋服の色に合わせた特注品だ。

髪型もパーティ用のそれになっており、サイドテールはそのままでその片方の前髪をなで上げてヘアピンで留めている。フランの可愛らしいおでこが顔を覗かせている。首や耳にはネックレスとイヤリングが控えめといった具合に光っている。

そんなフランは自分を叩き出した祖母に非難の声を上げるが目の前にいる新之助にその姿を見られて急にもじもじし始める。

新之助は静かだ。それは驚きのあまり声が出ないから。

フランは何も言ってくれない新之助に不満の視線を向け頬を膨らませる。

フ「何か言つてよ!」

新之助は恥ずかしさのあまり大きな声を上げるフランに気付き現実に取り戻される。

新「すごく・・・綺麗だよ!」

それで安心したのか今度は無い胸を張って「よろしい!」などと

いうフラン。新之助もそれを見て笑っていると店の前から新之助を呼ぶ声がする。

部「若！準備できましたらいきやしょう！これが最後の便です！」

それはワインをパーティ会場まで運ぶような大島酒蔵の馬車だった。中にはいくつかのワインが詰まった箱がおいてある。

しかし新之助とフランが入るには十分なスペースがある。

新「フランちゃん。行こう。」

フ「うん！」

新之助は白いロンググローブで包まれたフランの手を取ってエスコートする。

両脇に従業員に見守られて二人が馬車へ向かっていく。

部「フラン御嬢！お綺麗ですよ！」

フランはそう言う従業員に満面の笑顔ありがとうと言う。言った従業員も言われたフランもご満悦の顔だ。

二人は馬車に乗り込むと鞭が叩かれる音で馬車が走り出す。ゴトゴトゴトと揺れる馬車。フランは大島酒蔵以外に人里を見た事がなかったのか、ワインの箱に体を預け、興味津々と言った具合に窓から外を眺めている。

外はもう夜で街灯が灯っている。商店街を通ると店じまいを始めている町民達が。銭湯らしき店にはタオルとオケを小脇に挟み親子

で入っていく町民達と、様々だ。

そんなフランを新之助は笑顔で眺めている。

その視線に気付いたのか、フランは首を傾げてくる。何とも子供っぽいその仕草。

フ「どうしたの？」

新「楽しそうだなんてね。」

と笑いながら言うとは何故だか頬を膨らますフラン。

フ「だって人里ってあんまり見た事無かったんだもん！」

恐らく、そんなたいしたことが無い風景で楽しそうにしている様子を馬鹿にされたと思ったのだろう。もちろん新之助はそんな事は思っていないのだが。

新「じゃあさ、今度案内するよ。町の中を。」

フ「本当!？」

新之助は無言で、そして笑顔で頷く。

先日とは違いこれには乗り気のフランに少し疑問を持つ新之助。

新「フランちゃん。」

フ「ん?何？」

フランは顔だけを新之助に向けて問う。

何故あの時フランは嫌がったのか。それを新之助はフランに聞いてみた。もしパーティの何が嫌なのか分かれれば新之助はそれを防ぐ事ができると考えたのだ。

フ「ああ・・・それね・・・」

フランは外に向いている体を新之助に向ける。そして新之助に先日誘われた時に思っていた事を全部話した。

それは声のトーンを落として、しかし悲しそうな表情ではなくどこか懐かしむように話していた。

それを何故かうんうんと頷きながら話す新之助。

新「それは辛かったね。」

と全て話し終えるとそんな事を言う。フランはそんな新之助を目を細めていぶかしげに見る。自分の気持ちが本当に分かるのだろうか。

その疑問を抱くのとほぼ同時。馬車が止まり馬を操っていた従業員が窓をコンコンと叩き「つきやした!」と一言声かけてくる。

そこは会場の裏口だった。ワインや食料を運搬する用の大きな入り口が空いている場所だ。

新「ありがとう。助かるよ。」

部「いえいえ、この方がいいと思いやして。ここで待っていやすのでお帰りの際はまたこちらへお寄り下せえ。」

新「分かった。」

どうやらフランが正面から行くと、騒ぎがでかくなりそうだから従業員が気を利かせてくれたらしい。

新「行こうフランちゃん。」

フ「うん。」

フランは新之助に手を支えられて馬車から降りる。そして裏口から廊下に入ると一応照明はついているものの間隔が広いせいで薄暗い。廊下の床も怪しい光沢を放っている。

フランにはいつも暮らしている地下よりかは明るいので特に何とも思わないが、新之助はフランを怖がらせないようにしようと一生懸命リードする。フランは後ろを歩いているので知る由は無いが。

すると段々と人々の声と心地よいリズムの音楽が聞こえてくる。

そして新之助が突き当たりの扉を押し開けると

フ「ふぁっ・・・」

そんな間抜けな声を出してしまうほどにフランは驚いた。

そこはまるで見るもの全てにセピア色のフィルターがかけられているような色合いで、とても高い天井からは煌びやかな大きなシャンデリアがいくつも吊るされている。

奥の舞台には、色々な楽器を持った人々が、前に置かれたピアノの横に立っている指揮者の指揮棒に合わせて楽器を演奏している。それは女性だろうか。指揮者で女性とはなんとも珍しい。

更にその前には様々な鮮やかな色のドレスで着飾った女性、そしてスーツを着た男性で溢れていた。

あるものは皿にスイーツを乗せて喋っていたり、あるものは曲に合わせてゆったりと踊っている。

「よおお！坊主！久しぶりだな！」

と呆けているフランがびくりと体をすくませる程の大声を上げて、新之助に喋りかけてくるものがいた。それは頭を白髪で覆い、顎にも真っ白な髭をたっぷりと蓄えた老人だった。

老人にしては恰幅のいい体系をしている。この人物はこの町の町長だ。

新「町長。こんばんは。いつもお世話になっております。」

長「はっはっは。いやあ、いつの間にかこんなにでかくなりやがったんだ？」

二人は握手を交わしてそんな挨拶をする。

なにやら何処かの輩みたいなの喋り方のこの男。その恰幅のよさから見て町長よりも何処かの山賊の長と言った方が似合いそうだ。

新「ご無沙汰してます。しかしなんだかずいぶん賑わっていますね。」

長「ああ、今年は大物指揮者が来てくれてな。お前も聞いた事があるだろう！あの女指揮者でもあり作曲家でもある久石レミだ！皆は親しみを込めて久石嬢と呼んでいるがな。」

新之助は驚いたように演奏している人々の前で指揮棒を振っている女性を見る。それは紛れもなく久石嬢だった。

新之助は新之助で偉く興奮して見入っている。恐らくファンなのだろう。

新之助の服を掴みながら隠れるように後ろについてきていたフランもその方向を見る。するとそのフランに町長が気付いた。

長「おい大島！そいつあもしかして」

新「ちよっと待って下さい・・・よく見えないなあ・・・」

長「吸血鬼の娘じゃないか？」

そんな新之助の耳を引っ張りながら町長が隠れているフランを見ながら言う。フランは横目に長老を見る。それはどこか怖がっている風でもある。

新「ええ・・・そうですよ。可愛いでしょう？」

耳を引っ張られた新之助は町長の方へ向き直り耳をさすりながら言う。その言葉でフランは頬を膨らませ新之助を睨む。

フランは見せびらかせられるのが嫌いでパーティに行きたくないと言った。それを新之助が思い出した時にはもう遅く、更に新之助の後ろに完全に隠れてしまう。

長「がっはっはっは！お前の若い頃を思い出すのお！お前も両親に連れてこられてはずっと後ろに隠れておったな！」

新「ちょ、町長！変な事言わないでくださいよ！」

その言葉でフランは顔をひょっこり出して新之助の顔をうかがう。新之助は恥ずかしそうに笑い、頬を掻きながらフランを見ている。どうやら先程、馬車の中でウンウンと頷いていたのは本当に気持ちがかかっていたらしい。

フ「新之助も恥ずかしがってたの？」

長「そうさ！こいつときたらずっと親の後ろに引っ付いていてなあ、二人がダンスを踊っている時なんざ柱に隠れて泣きそうに」

新「町長！他にも挨拶しないといけない人がいるのでこれで失礼させてもらいますよ！」

長「がっはっは！全く、恥ずかしがりは直っとらんのか！？」

新「勘弁してくださいよ・・・」

フランはそんな新之助を見て意地悪く笑い、町長はそんなフランを見て更に豪快に笑う。新之助は肩をすくませるしかない。

新「では失礼します。」

長「ああ、ワインありがとな！」

新之助は誰かを探すように首を振りながら歩いている。フランは新之助の服を掴みながら人ごみの中を掻き分けていく。

新「あ、小島さんがいた。」

新之助の目線の先には頭を白髪で埋め尽くし、顔には多くのしわを刻んだ小島酒蔵当主の姿があった。前の会議で霊夢を追い詰めた人物だ。

新「ちよつと挨拶に・・・」
フ「私も行くの？」

と、フランは不満げな顔で言う。

その言葉に新之助は驚き、続いて残念な表情を見せた。フランは先程の事を根に持っているのだろう。人前で自分を自慢した事を。

新「じゃ、じゃあ・・・そこに食べ物あるから好きなの食べてて。」
フ「うん！」

新之助は残念そうな顔をして小島当主の方へ歩いていく。フランはそれを笑って見送る。

その時、小島当主が新之助を見つけそのすぐ後フランを見た気がした。

それはどこか睨んでいる風でもあったがすぐに視線は新之助に向けられた。

フランは首をかしげながら特に気にする様子もなく、フラフラとスイーツが置かれているテーブルに吸い寄せられるように近づいていく。そこにはプリンやらミニケーキ、フルーツなどが置いてある。

フ「うわぁー！おいしそう！！」

フランは今にもよだれが垂れそうだが、そのテーブルの横に置いてあったワインに目がいく。

フ（おいしいのかな・・・）

フランは一つ手にとり、皆が皆匂いを最初に嗅いでいたからか、匂いを嗅いでみた。

それはフランにとってはいい匂いではなかったらしい。それに眉を潜める。

嗅覚はそれが自分にとって毒か毒ではないかを見極める一種のセキュリティ装置でもある。フランはそれが腐っているのではないかと疑いの目で睨みつける。

しかし周りを見ると皆平気で飲んでいる。

それならば大丈夫だろうと一気に口に含むフラン。

フランの嗅覚は正しかったらしい。フランの幼い口にはワインは合わなかった。口をパンパンに膨らませながら震えて悶えている。それから手に持った空のグラスにワインを吐き出した。

フ「うえ・・・不味い・・・」

そう一言言い残し、吐いたワインが入ったグラスを元あった場所に返す。

フ「よし！」

フランは笑顔でどや顔だ。何が「よし！」なのかはわからないが、よい子は真似してはいけない。

今度はお口直しとばかりにお皿を取り、ミニケーキやらフル

ーツを積み上げてフォークで串刺しにしてパクパクと食べ始めた。

フ「おいしい！」

よほど美味しかったのだろう。フランはパクパクと食べている。それはとどまるところを知らないといった具合に。

その時、久石嬢による音楽が一曲終わり辺り拍手が起こったかと思うと少しの間静まり返る。

その間もフランは拍手もせずにお構いなしに食べる食べる。

しかしそんなフランの周りで新たにざわめきが聞こえ始める。それもそのはずだ。ドレスは西洋のものでフランも西洋出身者だ。まづ顔立ちからして良い意味で違う。ドレスに似合う顔立ちをしていて周りからは郡を抜いて目立つ。ドレスは西洋の顔立ちに合わせて作られているのだから当然だろう。

更に髪の色、目の色、肌の色。全てにおいて人形のようなフランに町民が注目しないはずが無い。

そして、フランは吸血鬼だった。

民「おい、吸血鬼の娘だ。」

民「本当、怖いわ。」

民「何しにきたんだ？」

民「出ましようよ、ぜったい暴れだすわ！」

民「あんな格好してまさか踊る気？」

民「早く閻魔のと言っちまえばいいのに！」

民「何で霊夢さんは殺さないんだ。」

そんな声がざわめきとなってフランの周りから聞こえてくる。そしてそれは次第に大きくなっていく。

フ「・・・」

フランは口をむぐむぐしながら目だけで周りを伺う。そして段々うつむきがちになる。

フ（うざいなぁ・・・皆・・・殺してやろうか・・・）

そしてまた一口フォークに刺したケーキをパクリ。その頬は少し釣りあがっている。むぐむぐしているせいでよく分からないが、もしかしたら薄ら笑いでも浮かべているのかもしれない。

フ（この腕輪なんか無かったら皆殺しなんだからっ！）

腕輪がなければいつものように暴れだし皆殺されているだろう。

しかし今は力が使えない。フランは力が使えない時、この不快な感覚を払拭するすべを、物を破壊する事意外では持っていなかった。

民「死んでしまえばいいのに。」

その時、ざわめきの中からそんな言葉が聞こえた。

第十四章（後書き）

何故祖母がフランの髪やドレスをうまく着せれるのか、そのドレスはどこから出てきたのか。それはなぞです。

第十五章（前書き）

今回は久石譲さんの曲「人生のメリーゴーランド」（ハウルの動く城のテーマ曲？）を思い浮かべながら書いてみました。もしよろしければその曲を流しながら聞いてもらえれば・・・

第十五章

コトリ

フランは最後のミニケーキを頬張るように食べ皿を置く。そしてそれを飲み込んだ時、丁度ピアノの音が聞こえ始めた。

久石嬢による2曲目だ。それは独奏なのだろうか。ピアノの音しか聞こえない。それはどこか悲しく哀愁漂う曲調。

その曲が始まるとフランの周りで囁き、ざわめいていた町民達が久石嬢の方へ視線を向ける。新之助がファンになる程だ、とても有名な音楽家なのだろう。町民が皆が皆黙りこんで耳を傾けている。

そしてフランはというと、テーブルに置かれた何も乗せられていない皿の傍、そこにはもういなかった。

町民は皆、久石嬢の方を向いていて誰も気付かない。恐らくもうどうでもいいのだろう。

久石嬢による曲が始まると同時に、女の手を男が手に取りダンスを申し込む光景があちらこちらで見えて取れるようになる。受け入れられる者もいれば断られる者もいる。受け入れられれば中央の広い場所へ移動しダンスを踊るのだろう。

そして段々中央に町民ペアを組んだ町民達が集まってくる。

その時フランはいくつかある、外に出るための開け放たれた扉か

ら外へ出ていた。その扉の横で背を壁につけ、浮かない顔をしてたずんでいた。

フ「やっぱり人間って分からない・・・」

そう独り言を言っただけ息をつきながら、そして無駄に光学迷彩を付けられた腕輪を探り当てる。無理やりに取ろうとするがやはり取ることはできない。そこで二度目のため息。

フ「やっぱりパーティなんか来るんじゃない・・・新之助もどこか行っちゃうし・・・ばか」

そんな言葉を吐くと先程まで悲しい曲調だった曲が陽気な曲調に変わる。演奏される楽器も増えて音量が上がる。

フランがそれに気付いて大島酒蔵の店を扉の影から不気味に覗いた時の要領で顔半分を出す。

そこにはまだダンスを求め求められる町民が多くいた。

そのうちの一人の女。多数の男に囲まれてダンスを求められている。誰と踊ろうか決めかねているようだ。

フ（あの時もこうだったな・・・私は柱に隠れて影からこっそり・・・）

フランは昔、パーティに連れてこられた事を思い出す。親は二人してダンスを踊り、レミリアもまた複数の男達からダンスを求められていた。

もちろんフランにもダンスを求める男はいた。

しかしフランはそれがその時は怖かったのだろう。柱に隠れてダンスを求めてくる男達から逃げていた。そして多くの男からダンスを迫られるレミリアを影からこっそり見ていたのだ。

フ（おねえさまと・・・誰だか知らないロリコン共が・・・踊りを申し込んで・・・）

丁度このようなセピア色のシャンデリアの証明で照らされて

男『お嬢様』

男はレミリアの手を取り、目の高さまで持ち上げる。

そしてこう言うのだ。

男『私と一曲踊りませんか』

と、

フ（そう、こんな風に）

手を持ち上げて

「僕と一曲踊りませんか？」

フ（え？）

フランはぽかんと口を開けているが声がでない。どうやら心と言
う場所で声を詰まらせてしまったらしい。

フランは気付くと目の高さに手を持ち上げられていた。そして目の前には見慣れた眼鏡をかけ、見慣れた黒髪、更に黒いスーツを着た人物。

フ「しんのす・・・け？」

新之助がとても柔らかな笑みを浮かべてフランの目の前にいる。

新「行こう！フランちゃん！」

フ「うあっ、新之助！？」

フランは手を引つ張られまた会場の中へ連れこまる。それはいけない為に足を出さざるをえない歩みで、フラン自らが進んで会場に入っという歩みではない。

するとそんな二人を見て周りからまたざわめきが生まれる。そのざわめきの内容は言うまでもなくフランへの侮蔑や嫌味などのわずらわしいもの。

フランは目だけで周りを見る。どの町民もフランを厄介者を見るような目で見ている。その目はせつかくのいい曲をぶち壊してくれるなど、それよりも早くこの会場から出て行けと、言うような視線。

その視線はフランは顔をうつむかせた。

しかし新之助はそんな事関係ないとばかりにぐいぐいとフランの手を引いて会場の中央へ連れて行こうとする。

フランはまたこんな居心地の悪い場所に行かなければならないの

かと軽く頬を膨らませる。

フ（もう帰りたい・・・）

そしてフランがふと顔を上げるとそこには真剣な顔をしている新之助の横顔がセピア色のシャンデリアに照らされていた。その真剣そのものの顔でフランの手を握り、会場の中央へ連れ出そうとしている。

それを見てフランは不思議な感情に襲われる。

一言二言文句を言って帰りたいと言えば新之助は帰してくれるだろう。普段あんなに優しいのだから嫌がっているフランを無理やりに躍らせたりはしない筈だ。

しかしフランはそうしなかった。そうすると何故かもったいないような気がしたのだ。フランは自分でもよく分からなかった。何故そんな事を思ってしまったのだろうか。

そしていつの間にかフランの顔からは不満の表情は消え失せていた。しかしそれは笑顔でもなく怒るでもない。フランは不思議そうな顔をして、ぽかんと口を開けて新之助を見ていたのだ。

その時、新之助が振り返る。その顔は先程の真剣な顔とは違いた柔らかな笑顔に変わっている。

新「僕の肩に手をかけて」

と一言。フランは黙って頷いて新之助に言われるまま、おずおずと肩に手をかける。

曲の速度が段々と速くなる。

普段はまっすぐに手を伸ばさないと手は届かないが、今はハイヒールを履いているせいで軽々と手が届く。そして新之助もフランの腰に手を回し、もう片方の手でリードする。

さらに軽くステップを踏み、曲に合わせて踊り始める。右へ左へ華麗にステップを踏んでいく。

フランは見よう見真似でダンスを踊った。その見よう見真似とは昔踊っているレミリアを見て。

すると周りからざわめきがおこる。それはフランへの不服不満ではない。意外にも上手に踊る二人に感嘆の意を示すざわめきだ。フランのよく似合った、洋風のドレスに洋風の顔立ちに、そしてダンスの上手さもあいまって町民達の視線は二人に釘付けだ。

それは周りで踊っているもの達も止まって注目してしまうほど。更には邪魔にならないように場所を空けるものまででるほどだ。

しかし新之助とフランはそんな事には全く気付かない。踊りに集中しているのだ。

くるくると二人は回る。

月は地球の回りを公転する事で太陽に照らされ、その輝く形が変わっていく。新月から三日月、満月へと。

フランと新之助は互いの顔がその月のように照明によって照らさ

れる。

新「上手いじゃないかフランちゃん。」

フ「そ、そうかなあ、えへへ」

新之助は笑って、しかしパーティが嫌いと言っていたフランがあまりにも上手に踊るので少し驚いた表情で言う。そして褒められてフランは恥ずかしそうに笑う。

フランは思い出していた。

フ（あの時と同じだ。）

あの時とは柱の影からダンスを男と踊るレミリアを見ている時。

新「フランちゃん、楽しい？」

フ（おねえさまの時と・・・同じ）

あの時には自分がこうなるとは全く思わなかっただろう。だからだろうか、嬉しさ、または気恥ずかしさからか少し顔をうつむける。

そしてこうして、意外にも自分が今踊っている事で、昔の自分では絶対に分からなかったであろう事が今分かった。

新「フラン・・・ちゃん？」

それはとても楽しいと言う事だ。

フ「めっちゃ、楽しい！」

満面の笑みを浮かべ、ニツと白い歯を出し両側の唇を吊り上げて両牙を見せるほどに頬を吊り上げる。

それはとても気持ちのいい、そして男を虜にするそれ。もちろん新之助はそのとても可愛い天使スマイルのフランにメロメロだ。

嬉しさのあまりか、フランの笑うために細められた目から涙がほろりと、流れる。

新「え？」

タイミングよくそれに新之助が気付くか気付かないかの間に照明が落とされる。

フランは今の内に涙を拭いておく。今の場面で涙は相応しくないと感じ取ったのだろう。こんな楽しい場所に涙など不要だ。

そして照明が消えてパツと明るくなった。しかし何かおかしい。自分達がいる場所以外はまだ真っ暗だ。

そう、つまりそれは新之助とフラン、その二人にスポットライトが当てられていたのだ。

そしてシンバルが叩かれたかと思うと曲調が最大の盛り上がりを見せ盛大な音楽に変わっていった。

フ「な、なにこれ?!」

新「フランちゃん! 楽しもう!」

スポットライトに困惑するフランを新之助がリードする。先程の

ように、月のような影は二人の顔にはもうできていない。

二人の顔はずっと満月のように輝いていた。それはとても幸せそうな表情を浮かべた二つの満月だった。

二人はさっきよりもピッチを上げて、更に激しさを加えたようなダンスを踊った。そしてその激しいダンスの間も二人の顔から笑みは消える事はない。

そしてフィニッシュ。音楽がやんだ。

更に少しの静寂のあと消されていた照明が点灯し辺りがまた明るくなる。

そして中央にはフランが新之助の腕に支えられながら上半身が仰向けになる程仰け反った格好で固まっていた。新之助が覆いかぶさるような形になっている。

新之助の息は上がっている。そしてさすがのフランもその緊張と激しいダンスから白い頬が赤く上気し、更に息も上がっていた。

すると周りからざわめきが起き、続いて拍手が、そして会場が吹き飛ばんばかりの歓声が巻き起きた。

更に上空からきらきらと光る紙ふぶきが周りの視界をさえぎらんとひらひらと舞い落ちてくる。照明に照らされ、それに反射した紙ふぶきが跳ね返す光がフランたちを祝福している様に輝いている。

フランは新之助に体勢を起こされそしてその綺麗な紙ふぶきをぼんやりと眺めている。その紙ふぶきが入ってしまいそうなほどにぼ

かんと口を開けて。

もうフランはわけが分からなかった。

その二人を取り囲む用に町民達が近づいてくる。

民「感動したぞ吸血鬼の娘！」

民「今度は私と一曲！」

民「いや私とだ！」

民「ちよつとどいて！よく見えないじゃない！」

民「ほらケーキ食べる？」

民「私の血を吸うかね？」

などとわけの分からないことを言うものもある。今までフランを忌み嫌っていた町民達とは思えないほどの心変わりようだ。

そこでフランはまた心の中で呟くだろう。人間って分からないとその顔には笑みを浮かべて。

そんなフランは迫ってくる町民が少し怖いのか新之助に抱きついている。

すると真上から何かが降ってきた。それは紙ふぶきではない。人の形をしたもの。

文「今期のMVPおめでとうございます！フランさん！新之助さん！」

新聞記者の射命丸文だった。

フ「MVP？」

新「そうだよ。ここで一番上手くダンスを踊って皆を盛り上げたペ
アって事だよ。」

あの会場を真っ暗にしスポットライトが当てる演出はそういうこ
とだった。そしてそれを決めるのはこの町の長だ。

先程の老人が二人の方を見てウンウンと腕を組みながら頷いてい
る。

文「では写真を撮りますよ！笑ってください！」

いつの間にか自前の少し古風なカメラを構えて中腰になっている
文がいた。その表情はカメラでよく見えないが口は笑っていた。

文だけではない。二人のダンスを見て町民のほとんどが笑みをこ
ぼしている。

カシャッ

その時撮られた写真は翌日、人里と幻想郷に文の手によってばら
撒かれた事は言うまでもない。

そこには町民に囲まれて、照れるように笑う新之助と、その新之
助に恥ずかしそうに抱きつきながらも横目でカメラを見るフランが
写っている事だろう。

帰りの馬車

二人はワインが無くなって広くなった馬車の中にいた。

新之助は背もたれに背中を預け、窓の外をボーッと眺めているフランを笑顔で見ていた。フランと新之助の間には会場でもらったケーキがぎっしりと詰められている箱に占領されているが。

二人は無言だった。それは気まずさからではない。あれほどすばらしい出来事が起こった後だ、楽しさと喜びと少しの疲れ、そして沈黙。この雰囲気は滅多に味わう事はできないだろう。その雰囲気を二人は味わっていたのだ。

ゴトリ

と小石でも踏んだのか、馬車が揺れる。その拍子にケーキの箱がずれ座席から落ちそうになる。それを新之助が受け止める。そして気付けばフランが振り返り新之助の方を見ていた。

新「・・・食べる？」

と新之助が聞くとフランは首を振る。そして今まで外を眺めていたフランは前に向き直って座る。

新「きよ、今日は楽しかったね」

新之助は今まで黙っていたからか、少しぎこちなくそんな事をフランに問う。

するとフランは何故か少し不満そうな顔をして新之助を睨みつける。そんなフランの反応に新之助は予想外の反応に驚きを隠せないでいる。何故そんな表情をするのか新之助には分からなかったから

だ。

すると新之助とフランの間に置かれているケーキの詰まった箱をフランがひったくるようにして自分の膝の上に置く。

ケーキを取られるとでも思ったのだろうか和新之助は思った。しかしフランの口からはこんな言葉が。

フ「見せびらかさないでっていったのに・・・」

フランは昔のことでパーティは嫌だと言った。見せびらかされ我慢されるような事が嫌だと。そして今回のパーティでは盛大に見せびらかされ、あまつさえ文に写真を取られて周りにばら撒かれる事になってしまった。

ではフランは今回のパーティはやはりそんなに楽しくは無かったのだろうか、和新之助は考えてしまう。

新「ご、ごめん・・・」

そう一言謝って新之助はさっきまでのしんみりとして余韻に浸っていた自分が恥ずかしくなってしまう。だからフランから顔を背けて少しうつむいてしまう。

そんな新之助にフランは一言こんな事を言うのだ。

フ「でも楽しかったから許してあげる」

ケーキを間からひったくるように奪い取ったのはそのためだったのだろう。新之助の頬に柔らかいものが押し付けられ続いて甘い匂

いがした。

新「へ？」

隣を見るとフランは箱の中のケーキをつまんでぱくりと食べむぐむぐしている。

フ「うん！おいしい！」

そのフランを新之助は見ていたか見ていなかったのか分からない。

悪魔と言われるフランの行いで目の前が真っ白になってしまったからだ。

それは小悪魔なフランのキスによって。

第十五章（後書き）

フランはレミリアを見てダンスが上手いと書きましたが新之助もそれくらいに上手かった。それは新之助も親のダンスを陰から見ているからと思ってくれれば幸いです。文脈からそれを説明する文を省いてしまいました・・・

そして次回から終盤へ差し掛かってきます。シリアスな場面になると思われます。恐らく・・・

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第十六章（前書き）

後半をあまり作りこんでいなかったため少し手を加えていたらかなり時間がかかってしまいました。お詫び申し上げます。

言い忘れましたが今は夏という設定です。（夏の終わりくらい）あとキリが悪いので少し長くなっています。

第十六章

パーティから帰った次の日から、新之助は暇を見つけてはフランを町へ連れ出していった。

フランには目に映るものの全てが目新しいようで、あれは何だこれは何だと新之助を質問攻めにする。そんな新之助も面倒くさがるそぶりすら見せず聞かれたら丁寧に教えてやる。

そして聞いただけで満足するフランではない。

だからいても立ってもいられないといった、そんなフランの手を取り、新之助はやりたいことができるように手助けをしてやる。

しかし世間知らずのフランの相手をする事は大変だ。

映画館に入ると興味津々に周りを見渡し、ポップコーンを片手に見ていたが最後には眠ってしまい、背負って帰らなければならなくなるし、馬車から見えた銭湯では男湯の方へ入ってこようとするフランを慌てて止める羽目になる。風呂の中は中で女に囲まれて大変だった、とかで半泣きで飛び出てきたり。その姿は言うまでもなく新之助が天国へ行けるほどのそれ。

カフェの前、ショーウィンドウに飾られてあった巨大パフェの模型をボーッと眺めてよだれをたらしながら「あれが食べたい」などと新之助にねだる。新之助は少し意地悪がしたくなり「どうしようかな」と言うとならフランはそれ以上ねだる事はせず肩を落としてとぼとぼと歩いて行こうとしてしまう。

それを新之助が慌てて呼び止めると、頬を吊り上げて牙を見せながらにやつくのだから新之助は苦笑いをせざるをえない。そしてその体のどこにそんな量が入るのかと思うくらいに巨大パフェをぺろりと平らげてしまう。新之助はフランにパフェを食べさせてもらうと言う夢は実現できなかったが、フランの頬についているクリームを丁寧拭いてやるという夢は叶えることができた。

話は変わり街角で子供達が動かしていたラジコンを追いかけて日向へでて死にそうになると。

フ「遊ぶのって命がけなんだね。」

などと、慌てて日傘を差してやる新之助に驚いたように、そして黒焦げになりながらそんな事を言う。新之助もそんな甘いことだらけではない。

更には新之助の趣味の釣堀で、魚を釣らせていた時、フランは魚が食いついた瞬間、思いつき釣り竿を引き上げる。するとその魚を姿が見えなくなるほどはるか上空へ飛ばしてしまう。周りにいた人も新之助も目が点になっていたと言う。

後の空から降る魚のミステリーを作った当のフランは魚がいなくなって不満そうに頬を膨らませていたとかなんとかかんとか。

常識を知らないフランならではの行動だが、そのフランの仕草に新之助も周りの町民も顔を緩ませるのだから始末に終えない。

常識を教えるものがこの体たらくとはこれいかに。

こうしてフランは、当初は地獄のようにつまらないと思っていた日とは正反対の、毎日が楽しく、ずっとここで暮らしてもいいと思ってしまうくらいに充実した日々を送っていた。

そして大島酒造にて昼、机の前にフランと新之助が昼食を済ませてだべっていた。

するとフランが最も喜びそうなフレーズが新之助の口から出てきた。

フ「夏祭り?!」

新「そう、今日なんだ。出店ならもう出てるかも。」

フランは身を乗り出すほどに驚き、目を輝かせて新之助に問い返す。

フ「ねえねえ新之助! 祭りで雲が食べれるって本当!？」

新「雲?」

フランはうんうんと頷きながら新之助の回答を待っている。

新「ああ、わた飴のことかな? 雲みたいに白くて柔らかくて甘いんだ。」

フ「お、おお・・・」

フランは感嘆の声を上げてそれが本当だった事、そして空に浮かんでいるあの柔らかい雲を食べれると勘違いし感動している。

フ「じゃ、じゃあじゃあ! 血の塊はあるの!？」

新「血の塊?」

フ「透明な血の中に林檎があつてなめると甘いらしいんだあ！」

新「ああ、あるよ。」（林檎飴か・・・）

フ「じゃあ人魚すくいはいは！？」

新「え？」

フ「巨乳すくいはいは！？」

新「ぶっ」

フ「胸の大きな人を吊り上げるって・・・違うの？」

新（誰が言っただろ・・・）

新之助はその間違いを全部丁寧に説明していった。金魚すくいや、ヨーヨーすくいのことを。

その間フランはずっと目を点にして聞いていた。

フ「魔理沙・・・コロシテヤルッ・・・」

フランは恥ずかしそうに頬を赤らめる。

新之助は祭りには何があるかをそんなフランに教えてやった。見たとたんにフランがよだれをたらしてねだりそうな甘辛ソースがかかったハンバーグやフランクフルトにたこ焼き。それを食べながら活気溢れ人々の中心で上下左右に揺れるみこしを見る。その雰囲気呑まれながら渴いた喉を潤すために飲むラムネは最高だと。

フランの目が太陽のように輝いている。

新「今夜連れて行ってあげるよ。」

フ「やたー！」

新「今から行ってもなんかあるかも知れないけど。誰かに頼んで連れていてもらう？」

と今にも飛び出しそうなフランにそんな事を言う。するとフランは新之助にとってとても嬉しい事を言ってくれたのだ。

フ「新之助と行きたい！」

笑顔でそんな事を言うフランに新之助はもう鼻の下を伸ばしデレデレだ。

バ「新之助！大学いなくていいのかい！？」

その時、タイミング悪く新之助の祖母から怒鳴り声が大島酒蔵に響いた。

新「あ、それじゃ行って来るね！」

新之助は教科書が入ったバッグを肩にかける。とても笑顔で。

バ「いってらっしゃい。」

フ「はやく帰ってきてね！」

と二人で新之助を見送る。

バ「さあて、洗濯物でもするかねえ。」

そう言って祖母は大島酒蔵の中に入っていく。

昼間は客があまり来ない為、呼子はやらなくていいと言われている。やれば皆がちやほやしてくれる、それが嬉しいのかフランは自ら進んでやっているのだが。

フランは中に戻ってこの暇な一日何をしようかと、辺りを見渡す。たまにいる小さな猫はいない。テレビがあるが昼間はフランが見たような番組は無い。

フランにとって退屈ほど苦痛なものはない。困り顔でふと視線を落とすと机の上に箱が置いてある。何か入っていたのだろうか。その箱は空になっていてその箱の横には箱を開けるために使ったと思われるカッターが置いてあった。

それが目に留まりフランはカッターを手取る。カカカとカッターの刃を出すとそこには鈍く光るフランの紅の瞳が写っていた。

そしてそのフランの頬がゆっくりとつりあがる。

部「おや？誰かここにあったカッターしらねえか？」

そんな事をいいながらカッターをしまい忘れた大島酒蔵の従業員が辺りを見渡しながら、すぐ近くにいた従業員に問う。

部「さあ？知りませんよ？あ、フランちゃん知らな」

とその従業員はフランを見て一瞬びくついた。フランは今気付いたようにその従業員の方を見ているがその小さな手には従業員が探していたカッターが握られているのだ。

部「ふ、フランちゃん！？」

フ「へ？あ・・・な、何もしてないよ！」

とカッターと従業員を交互に見たフランはそんな言葉とカッターを投げ捨て、隣の部屋に慌てて走って行ってしまった。それを見て従業員達は顔を見合わせ首をかしげる。

フランが逃げ込んだ部屋は最初この大島酒蔵に連れてこられた時に寝かされていた場所だ。

フ「ふう・・・ばれてないよね・・・あんなことしたら怒られるかな？」

隣の部屋から怪しげにひょっこりと顔を出すと従業員達はもういない。代わりに正面に階段が見える。前に祖母が足を踏み外した階段だ。

そしてその上から前と同じように祖母が降りてきた。目の前が見えないくらいにうずたかく積み上げた洗濯物を持って。

フランはフラフラと部屋から出ると、階段の正面に立つ。そこは丁度前に祖母に頭突きされた場所。そこでフランはまたしても念を送り出す。

フ「踏み外せ・・・こけろ・・・」

相も変わらずのフラン。しかし新之助が見たら顔をだらしなく緩ませて微笑んでいるかもしれないその光景。

今まで少しは世話になっただろう人物に呪いの言葉を吐くとはいい根性をしている。呪いの言葉を送るあたりあまりいい思い出しはないのだろうか。

すると祖母はまたバランスを崩し階段から足を踏み外す。呪いの効果は絶大だったようだ。フランは呪術氏になれるかもしれない。

洗濯物を盛大に舞い上げて祖母は体制を崩す。

フ「おお！」

それにフランは目を輝かせる。が、祖母の脚力は異常だ。前はフランの頭に頭突きをかますほどの距離まで跳躍した。

無論、今回もまたその強力な脚力でフランへ向かって跳んできた。人を呪わば穴二つ。

フ「きたな！」

だがフランも馬鹿ではない。一度犯したミスを二度も犯すような愚か者では決して

ゴツンッ！

すごい音を立てて激突する祖母とフランの額。そしてそれを支点にして祖母は体勢を立て直しスタツと床に両足をつけて着地する。

あろうことか、フランは祖母の頭突きに対抗して頭を突き出したのだ。

バ「ふう。すまないねえ。また助けてもらっちゃってえ・・・あれ？ちっこいのどこ行った。」

フランは祖母の目の前から消えていた。きよろきよろしていると下の方でゴロゴロと転がるような音とうなり声が聞こえる。

祖母が見るとそこには額を押さえながら床をゴロゴロと転げまわるフランがいた。フランは勝てると思ったのだろうが想像以上の激痛に悶えている。全く、馬鹿が付くほど可愛らしいとはこのことかもしれない。そして吸血鬼のフランに勝ってしまう祖母の頭は一体どうなっているのだろうか。

バ「大丈夫かい？」

フ「いたい・・・」

涙声で額に氷嚢を押し付けながらフランはそう言う。いくら吸血鬼で傷はすぐ治るといっても痛覚はある。痛いものは痛い。

バ「あはははは、全くおかしな子だよお」

祖母は自ら当たってきたフランのその物言いに思わず笑ってしまう。それに機嫌を損ねたのか、フランは食って掛かろうとする。

フ「このくそばあ！いつもなんでこっちに跳んでくるのよ！！」
バ「まあまあ、それでも食べるかい？」

そう言って出してきたのは棒状のアイスだった。

フ「食べるう！」

先程までの機嫌の悪さはどこへやら。その辺は昔から全く成長していないらしい。それをフランは覚えてもいないのだろうが。

フランはもらったアイスをぺろぺろと舐め始める。

バ「あんた新之助と仲良くやってるねえ。」

フ「うん！」

バ「新之助は好きかい？」

フ「大好き！」

バ「そうかいそうかい。じゃあ、新之助と結婚してお嫁さんにでもなるかい？」

フ「け、結婚！？私が！？」

バ「ははは、冗談さあ。あんたはちっこすぎるよお」

フ「ちっこくないよ！それに新之助は私にめろめろだもん！」

バ「それはそれで困るんだけどねえ・・・」

昼間の真上から降り注ぐ太陽は二人がいる廊下には届かない。

しかし入道雲がもくもくと浮き出てくる青い空は見える。雲の形が見るたびに変わるその珍しくも無いが飽きもしない空を眺めながら、祖母とフランはその廊下から足を下ろし、ぶらぶらさせアイスを食べている。

バ「新之助にも早くお嫁さんをもって欲しいもんだねえ。」

フ「ふーん・・・」

フランは何か考えるようにアイスをぺろぺろ舐めながら片手を突いて空を眺める。

バ「そういやあ、もうすぐあんたが来て一ヶ月だねえ。そろそろ帰

るのかい？」

フ「・・・うん」

フランの顔が急に曇ってしまふ。今度は何も変わらない地面を見ている。

バ「なんだい、浮かない顔して。戻りたくないのかえ？」

フ「戻りたいよ！・・・戻りたい・・・けど・・・」

バ「けどどうしたんだい？何でもばあちゃんに言ってみな」

祖母はしわくちやの口元を吊り上げて柔らかく微笑む。その仕草はどこか新之助に似ていた。これも血のつながりなのだろうか。

だからそんな祖母に、フランはここに来る前の紅魔館であつた事、皆を嫌いだと、更に死ねなどと言つた事を全て話したみた。

バ「なるほどねえ」

フ「皆私の事嫌いになつてたらどうしよう？」

もう棒だけになったアイスの棒をくわえながらしよんぼりするフランは抱きしめたいほど可愛らしいがそこにいるのは新之助でなく祖母だけだ。

祖母はフランのくわえている棒を引き抜いて自分の棒と一緒にアイスを包んでいた袋の中に入れてやる。

バ「ならここにおるとええ。」

フ「え？・・・いいの？」

バ「かまうもんかい。ちびっ子は遠慮なんかしないでいいのさあ」

フ「・・・うん！」

フランは正直に嬉しかった。こんな楽しいところにいつまでも入れるのだから。

その可愛らしい笑顔に祖母も感化されたのかフランを掴み上げる。そして困惑するフランを膝に座らせてやった。更にフランの肩に肘を置くように後ろから手を回してフランの胸の前で手を組む。

フランは特に抵抗しないがまだ困惑気味だ。

バ「こうしてると昔を思い出すねえ……。」

祖母はひとつため息をついて、そして懐かしそうにこんな事を言う。

昔を思い出すとは新之助の小さい頃だろうか。それとも

フ「新之助もこんな風に座ってたの？」

バ「そうさあ。あんたみたいにちっこい頃あたしの膝の上に乗っかってねえ。自分の特等席だって言って離れないのさあ。そこは父親譲りだねえ。」

フ「父親？」

バ「ああ、もういないがね。あたしの息子さ。」

フランは首をかしげる。

祖母は二代に渡り膝の上で育ててきたのだろう。自分の息子である新之助の父親と新之助、その両方の小さい頃を見る、ということは吸血鬼だとどれくらいの年月を重ねなければならぬのだろうか。

吸血鬼のフランには気の遠くなる話だろう、ちょっと想像できない。

フランはそんな想像もできない思考を放棄し少し前に聞いた事、フランがこの計画を聞いた時に新之助が言っていた事を思い出した。

フ「事故で死んだんでしょ？」

バ「・・・そんな事誰から聞いたんだい」

急に祖母の顔が険しくなる。フランは首をかしげて振り返るように祖母を見る。

フ「新之助からだよ？」

バ「新之助が事故って言ったのかい？」

フランが頷くと祖母の険しい顔がため息をつくと同時に残念そう
な、もの悲しげな顔になっていく。そして二人を見下ろしている入
道雲と祖母の目が合う。

バ「・・・ありゃあね。事故なんかじゃないのさ」

フ「え？」

バ「殺されたんだよ」

そう言い捨てる祖母。フランは首が疲れてきたのか、祖母の胸に
頭の頂点を押し当て真上をむいてその祖母を真下から見上げる。

フ「まじで？」

と文の真似をする。

バ「ああ、マジさ。おおマジさね」

フ「誰に殺されたの？」

バ「さあてねえ。誰だろうねえ」

そう言って意地悪くひっひっひと笑う。祖母は誰が殺したか知っているのだろう。それを教えてやらならいと、フランに意地悪をするような笑いを見せる。

バ「でもまあ事故じゃあないさあ」

フ「ふーん。でも新之助は事故だって」

フランは納得かないといった表情で祖母を見上げて言う。しかし祖母の表情は何一つ崩れない。

バ「あの子はそう言うだろうねえ。そう思わないとやっていけないんだろうよ」

フ「？」

バ「あの子はねえ、殺した犯人はもう分かってるのさ」

フ「じゃあ仕返しに行かないと」

バ「あははは。あんたあたしに似てるねえ」

フランはそのしわくちゃの顔でそんな事を言われれば当然というような顔をする。

バ「なんだいその顔は」

祖母は上を向いて不満そうな顔をしているフランの頬を掴み引く張ったりしている。

フ「ふいふあい（いたい）」

祖母がその手を離してやるとフランは頬をさする。そしてその頭の上からまた祖母の声が聞こえてくる。

バ「新之助が言うんだよ。僕はあきらめないって、そんな事をして無駄だとわからせてやるんだってねえ」

フランはわけがわからなかった。犯人がわかっているなら仕返しにいけないだけの話なのに、と。そして祖母が言った新之助が言ったであろう言葉もフランには理解できなかった。その全貌を知らないフランには分かりえないことだ。

だからフランはその思考もついに放棄してしまった。

フ「ふーん。新之助カッコイイね」

などと適当な事を言って。

バ「そりゃああたしの孫だからねえ！当たり前さね！」

と胸を張って祖母は高笑いをする。

もう夏も終わりなのだろう。日陰と言う事もあるのかそんなに暑くはない。逆に少し寒いくらいだ。

風が凜ぎ、静かな空には入道雲が二人を見下ろしている。

そして祖母から伝わってくる体温でフランはうとうとし始める。逆もまた然りだった。

夏の終わりのその涼しいひとときはゆっくりと過ぎていった。

新「じゃあ僕は用があるから先に帰るよ」

午後の授業が終わり、新之助は肩にバッグを背負うと教室をすぐに出て行こうとする。

しかし、それを学友達に止められる。今日は祭りの日。それに学生が食いつかないわけが無い。

友「何だよ新之助！祭りいこうぜ！」

新「また今度ね」

新之助はそんな学友を丁寧に断り教室を後にしようとするが勘のいい学友の一言が新之助を呼び止める。

友「もしかしてあの吸血鬼の子と行くんじゃない？」

新「え?!・・・何でわかつ・・・」

友「そ、そうなのか!？」

友「私も行きたい!あの子とおしゃべりしてみたい!」

友「俺も俺も!あの子めっちゃかわいいよな!」

などと勝手に盛り上がりだす。

新「だめだめ。フランちゃんびっくりしちゃうだろ?」

そんな学友を片手で面倒くさそうに断りそんな事を言う。

しかしそれは失敗だった。

友「フランちゃんだって」

友「そんなふうと呼んでるのか！うらやましいやつめ！」

友「独り占めにするつもりね！許さないわ！」

友「そうだそうだ！そんなことすると罰が当たるぞ！」

新「と、とにかく急ぐから！」

前にも増して突っかかってくる学友にもう手に負えないと見るや否や新之助は一目散に走り出した。フランと一緒に祭りに行きたくて仕方ないのだろう。

友「ああ、またな！ひひひ」

友「祭りであおうね！ふふふ」

そんな事を言いながら笑っている。恐らく祭りで新之助たちを探すのだろう。フランはただでさえ目立つ。新之助はすぐに見つかるだろう

そして新之助は捕まえられた時のことを考えると憂鬱だった。フランに自分のことを何と吹き込まれるかわかったものではない。

しかしその足取りは段々と軽くなり、そして顔は笑顔だった。

新之助は楽しみだった。フランと一緒に祭りに行く事が。フランはあれが欲しいこれが欲しい、あれがやりたいこれがやりたいと新之助にねだるだろう。それを新之助が叶えてやるのだ。その時のフランの笑顔を考えただけで顔がほころぶというものだろう。

嬉々として階段を駆け下りて大学の正門から出た所で新之助は足を止める。

新「ん？」

キラリと何かが光った気がしたのだ。

続いて胸を何かが突き抜けるような衝撃。

その衝撃でコトリと落ちる眼鏡。

膝に力が入らずガクリと視界が落ちる。

新「・・・え？」

気がつく和新之助はうつぶせになって倒れていた。そして胸の辺りから湧き出る熱いもの。それは段々と体の外へ流れていく。それと反比例するように力が抜けていく。

新「なんだ・・・これ・・・」

誰かの悲鳴が聞こえたかと思うと、新之助の視界は真っ暗になった。

「任務完了だ」

第十六章（後書き）

見事に新之助に罰が当たってしまいましたね。ナムナムこれによってフランの今後がガラッと変わってきます。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第十七章（前書き）

今回は新之助が撃たれた後まだ大島酒蔵にそのことが知らされていないところから始まります。

フランと祖母の絡みが前回ありましたが今回も少しあります。

第十七章

フ「ん・・・」

外は灯をつけるかつけないか悩むような茜色。キキキキとヒグラシが鳴く頃に、フランは目を覚ます。そこには薄暗くなった天井がそこには映し出されていた。

下には布団は敷かれておらず、い草のいい匂いがする畳でフランの体には薄い毛布を掛けられているだけだった。

フランは体を起こし、ひとつ欠伸をすると涙が溢れそうな目を思いつき瞑って体を伸ばす。

そして辺りを見渡すとそこはテレビや机が置いてある部屋だった。それらは夕焼けの、柔らかい光を吸収した空がわずかに反射した色によって茜色に染められている。

フ「・・・新之助まだ帰ってないのかな？」

フランは枕の横に置かれた帽子をかぶり、眠り眼で店へつながる扉の方へ歩いていく。新之助はフランを起こすのをためらって店で仕事をしているのかもしれない、と思ったのだ。今の時間なら店には誰かいるはずで、そこにいなくても誰かが新之助が帰ったかどうかを知っているはずだ。

バ「おや、ちっこいの、起きたのかい？」

フランが扉に手をかけようとした時、後ろから声をかけられる。

新之助の祖母だ。

フ「新之助は？」

フランはよっぽど待ち遠しいのだろう、第一声がこれだ。

バ「まだかえってないねえ。あの馬鹿はどこをほつつきあるいてんだか」

フ「そう・・・」

茜色の滲んだフランの顔がうつむき、残念そうな色が加わる。祖母はため息混じりで呆れ顔だったが、そんなフランの様子に気付いたのか。更にフランに声をかけてくる。

バ「あんた暇かい？」

フ「え？・・・うん」

バ「じゃあちつと洗濯物を入れるの手伝ってくれないかい？」

新之助が帰ってこなければ特にやることも無い。もうすぐ帰ってくるなら祭りに行くので呼子の仕事もやらなくてもいいだろうと、フランは黙って頷く。

日の当たっていた庭には空に反射された、茜色で染まった洗濯物がびっしりと干されている。この量を取り込むのはひと苦労だろう。

庭は高い垣根によって囲まれており日の光はもう届かない。

フランは自分の足には大きすぎるサンダルを履いてパタリパタリと音を立てながら祖母と共に外に出る。

干された洗濯物を取るにはフランの背はあまりにも低すぎるので、祖母が取り外した物を順々に預かっていく。

前が見えないほど洗濯物を積み上げると二人が少し前に座っていた廊下へ乱暴に放り投げていく。

その従順に手伝いをしてくれるフランを満足げに見る祖母だったが当のフランの顔はさえない。新之助が帰ってこないのと寝起きと言う事もあいまってテンションが上がらないのだろう。

バ「そんな顔せんでもじきに帰ってくるさあ」

そんなフランを見かねてまた祖母が声をかける。

フ「うん・・・」

しかしフランの言葉はそれだけ。

祖母はため息を一つつくどフランの頭に手を置いて、フランの顔と同じ高さくらいにしゃがみこみ、顔を近づける。

バ「んな顔してたらあ、新之助に嫌われるよおっ」

フ「え？」

と、うつむき、フランの元氣のない表情が心配そうな表情に変わって祖母を見上げる。嫌われる、と言われた事に反応してしまったのだろう。

それを見て祖母は声を上げて笑う。

バ「あんた本当にあの子のことが好きなんだねえ。」
フ「うう・・・」

そしてまたフランはうつむいてしまう。今度は恥ずかしそうな表情で。

しかしそれが嬉しかったのか祖母はフランの頭を軽く撫でてやる。

バ「あの子がそんな事で嫌いになるわけないさあ！そんな浅い男に育てた覚えは無いからねえ！」

フランはその嬉しそうな祖母の顔を見る。しわくちゃん顔をより一層しわくちゃんにしてフランに微笑んでいる。

バ「あんただってそんな浅い男を好きになった覚えは無いだろう？」

そんな祖母が笑ってつぶれた目をフランに向けてそんな事を言う。

フ「うん！」

そしてフランはそんな祖母に今度は元気良く返事をするのだった。その顔には元気が戻り、更には笑顔も戻っていた。

バ「さて、じゃあ新之助が帰ってくる前に全部片付けちまうよお！」
フ「うん！」

全ての洗濯物を取り込むと、廊下には洗濯物がうずたかく積み上げられていた。

それを満足げに見る祖母とフラン。洗濯物取り込めば次にする事は決まっている。

部屋の中で隣に洗濯物を置いて正座する祖母。

バ「ほら、これをこうしてこうやって畳むんだ。」

フ「うゝ・・・こう？」

祖母によって畳まれた洗濯物は端が綺麗に揃えられ、まるで服屋にきっちり畳まれて置かれている服のようだ。

しかしフランの畳むそれは客が服を見るために開いた後乱雑に置いていったようなそれ。

バ「不器用だねえあんた。ここをこうやるんだよお」

フ「むゝ・・・」

フランのフラストレーションが徐々にたまっていく。

バ「そんなんじやお嫁にいけやしないよ」

そして遂に底の浅いフランの器からフラストレーションが溢れ出した。

フ「うるさいばあ！こんな事できなくなっちゃっていいもん！」

バ「何だってえ！？誰がババアだい！あたしゃまだぴちぴちの75さね！」

フ「・・・」

自分よりも何倍も低いその歳に「十分ババアじゃん」とは言えず、ネタでいったであろう祖母もフランの歳の認識の甘さからか、フランの予想しない反応に困っている。

その何とも微妙な空気に何やら猫の鳴き声が。

フランが横を見るとさっきまで洗濯物が干されていた庭にあの子猫が座って顔を洗いながら鳴いていた。

猫「ニャ〜」

フ「ニャーだ!!」

フランは洗濯物を投げ出す。

バ「あ、こら待ちなあ!」

フランは下瞼を人差し指で引きながら舌を出し、祖母に悪態をつきながら廊下の方へ走っていく。

そして廊下の下に飛び降りて自分の足には大きいサンダルを履いてパタパタと音を立てながら子猫の方へ近づいていく。

しかしその音に驚いたのか子猫は垣根を辿って逃げていってしまう。

フ「まってまって」

フランは顔をだらしなくほころばせて、その追いかけてこに乗り、その後を追う。

バ「やれやれだねえ」

そんなフ란の姿に祖母も苦笑いだ。

その時、店の方から誰か大声を張り上げる。

部「大変だ！ 若がつ若がつ！」

それは大島酒蔵の従業員だった。その声に気がついて祖母が扉を開けて店に入っていく。

バ「どうしたね、騒がしい。お客様の迷惑になるだろう」

必死に走ってきたのかその従業員は息切れ切れになって倒れこんでいる。しかしその顔は真剣で、更に苦痛で顔を歪めている表情も併せ持っていた。

バ「新之助がどうかしたのかい？」

その従業員の只ならぬ雰囲気は祖母も表情を歪め、問いかける。

部「下校中に何者かに狙撃されました・・・」

バ「なっ・・・」

部「心臓を打ち抜かれて重体です・・・生きているのが不思議なくらいで・・・恐らく・・・恐らく・・・助からない・・・そうです・・・」

その言葉を聞いたとたんに祖母の体が崩れ落ちる。

部「女将！」

従業員達が慌てて祖母の体を支える。

部「女将！しっかりしてください！」

バ「そんな・・・嘘だろう・・・新之助が・・・そんな・・・」

部「おい！部屋ん中運ぶぞ！」

部「おう！」

祖母は目を見開いて何やらぶつぶつ言っている。従業員達はそんな祖母を机などが置いてある部屋に運び入れる。

その店には換気の為だろう、小さく開けられ、木の格子が備え付けられた小さな窓があった。そしてそこには赤く光る二つの瞳が覗いていた。

フ「ばばぁ・・・それに新之助が狙撃されたって・・・どういうこと・・・？」

フランは猫が逃げてしまい追いつけなさそうなのであきらめたのだが、面白そうなので普段日に照らされて行けない場所へ行ってみようと、垣根沿いに歩いていったのだ。

その時大きな声を聞きすぐそこにあった窓にぶら下がつて中を見ていたのだった。先ほどあった一部始終を。

部「くそっ！」

従業員の一人がガンツと床を殴り悪態をつく。そしてそのまま足早に酒が飾られている棚の方へ歩いていく。

その棚の向こうには何やら木箱らしきものが。

従業員がその木箱を取り出し床に置く。そして金属でできた留め金を外すと中からでてきたのは二丁の銃だった。

部「そんなものどうするつもりだっ!？」

それを見て従業員の一人が怒鳴る。

部「決まってるだろ! そんなことするのは小島酒蔵のやつら以外に
いねえ!」

そしてそれに負けじと銃を持ち出した従業員も怒鳴り返す。

部「落ち着け! そんなことしたってどうしようもないだろう! しら
をきられておわりだ!」

部「じゃあこのまま黙ってろっていうのかよ!」

部「若がまだ死んでもいないのに俺たちが勝手な行動をとるわけに
はいかねえ!」

銃を持っている従業員はその言葉に苦しそうに頷いて銃を置く。

部「とりあえず若の意識が戻るまでおとなしくしてようぜ」

銃を置いた従業員の方をぽんと叩いて優しい声調で言う。しかし
銃を置いた従業員は納得がいかないようだ。

部「でも、もし若が・・・」

死んでしまった時はどうするのだろうか。その言葉に先程肩に手を置いていた従業員も顔を険しいものに変える。

部「その時はその時だっ」

フ「・・・」

周りでその光景を見ていた従業員達も真剣な表情で頷いた。

部「それとフラン御嬢にはこの事は言うな」

部「ああ、若になついていたからな」

とフランを気遣うような部下の発言。しかし格子を備え付けられた穴には二つの赤く光る瞳はもう無かった。

フランはその壁をはさんだその穴の下にうずくまっていた。

フ（なんで？何で私から奪うの？自由も、大事な人も、何もかも・・・）

このままでは夏祭りにいけないどころかずっといてもいいと言われた大島酒蔵にいられなくなる。大島酒蔵にいる者はいてもいいと言うだろう。しかし新之助のいない大島酒蔵にフランはその価値を見出す事はできない。

フ（なんで）

フランの紅の瞳が更に赤みを増していく。そしてその顔からは次第に表情が消えていった。

夕日は完全に落ち、辺りは真っ暗になる。BGMがヒグラシの鳴き声から鈴虫の鳴き声に変わる。

これから書き入れ時という時間帯にもかかわらず、店はもう閉められている。

テレビや机がある部屋には従業員達が集まって何やら話している。それは新之助の事や今後の店の事について。更には小島酒蔵の事について。

そこに祖母の姿は無い。恐らくはフランに気付かれないように二階に運ばれているのだろう。

時には怒鳴り声が聞こえてくるその部屋。その部屋に不意に今までどこにいたのかわからないフランが顔を出す。

従業員は皆それを見て一瞬言葉をなくしてしまう。フランにはまだ気付かれていないと思っているのだから当然だろう。

だがそんなあからさまな従業員の行動でフランに感付かれてしまうと思った従業員の一人が口を開こうとする。

しかし一瞬早くフランが先に口を開いた。

フ「ねえ・・・」

部「ん？どうしたの？」

口を開こうとした従業員がそれに答える。

フ「新之助は？」

部「あ、ああ・・・えとね・・・その・・・学校の皆で旅行いくんだって。それでしばらく帰ってこないよ。」

フ「そう・・・」

フランは隣の部屋で練習でもしてきたのだろうか。その言葉を聞いて思いつき残念そうな顔をする。その従業員もそのまま黙ってしまう。

フランがその部屋から出て行くと従業員達は安心したような安堵の表情になるがまた険しい表情へ戻っていく。

フ「小島酒蔵・・・」

その会議も一通り終わったのか、従業員達は皆して黙り込んでいく。その表情には疲れの色が滲み出している。

そこで従業員の一人がお茶を入れてくると言って席を離れる。そして別の従業員がフランも呼ぼうと言う。祭りにもいけず寂しがつているだろうフランを気遣ったのだろう。

しかしそのフランの姿がどこにも見当たらない。

部「ねえフランちゃん知らない？」

部「御嬢はさっきまでそこにいたはずだが。」

部「そう・・・おかしいわねえ。」

部「まさかさっきの話聞かれてたんじゃないのか？」

部「え？」

部「だって小島酒蔵の場所さっきバイトに聞いてたぞ？」

部「何！？何でそれを早く言わねえ！？」

従業員の一人が飄々と言い放つその従業員の胸倉を掴み上げる。

部「い、いや、何でそんな事聞いたのかって言ったんだけど・・・
パーティで見たって言ってたから・・・」

その後続けて従業員の叫び声にも似た大きな声が大島酒蔵に轟く。
それはこの計画を破綻させる以外の何ものでもない事を明示する事
象だった。

部「拳銃が二丁なくなってるぞ！」

その従業員の手には空になった木箱が・・・

第十七章（後書き）

祖母の話し方はですがこのままでは変な喋り方をする女の子に見えなくも無いので一応補足しておきますととなりのトトロに出てくるおばあちゃんのような感じです。

今回はフランが銃を乱射します。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では〜。

第十八章（前書き）

話切るところ間違えました・・・ってことで大島酒蔵のところから。
更にレミリアと咲夜の描写を忘れていました・・・何ともはや・・・
狼少年参上！と言う事でレミリアと咲夜の動向をはさみたいと思います。

第十八章

部「おい・・・どうするんだ？」

部「今すぐおいかけねえと・・・」

皆黙り込む。

いつもなら真っ先に走っていくであろう新之助は今は危篤状態。

従業員の中で誰かがフランを止めに走ろうというものはいなかった。

それもそのはずだ。少し仲良くなったからと言っても実際はありとあらゆるものを破壊する、手の付けられない悪魔だ。

更に今は銃を持っている。新之助ならまだしも従業員が止めに行ったが最後。聞く耳を持たずに襲ってくるかもしれない。

皆フランが怖かった。

どうすることもできず従業員達が皆その場でたたずんでいる。当主は危篤、天使のような笑顔を振りまいてくれたフランは二丁の拳銃を持って小島酒蔵に向かってしまった。

大島酒蔵はこれからどうするのだろうかと従業員の顔に憔悴の色がにじみ出てくる。

その時、店に誰かが入ってきた。

それは従業員達がいつもの事と、そのまま見逃してしまいそうな違和感の無い自然な入り方。

新「皆？どうかした？」
部「若?!」

大島酒蔵の当主、大島新之助だった。

従業員が集まって憔悴しきった表情をしていたので新之助がそう問う。

新之助は心臓を撃たれて危篤状態ではなかったのか。

従業員達の顔は幽霊でも見ているかのような顔と喜びの顔が入り混じっている。しかしみんなの目には涙が滲み出している。

追い詰められた精神状態から一気に開放された時このような状況になるのだろう。

そしてその新之助が幽霊ではないと確信するに値する人物が新之助の後ろにいた。青と赤のツートンカラーという不思議な衣装を身にまとった名医、八意永琳だ。

永「こんばんわ」

咲「お嬢様。もうすぐ妹様の計画も終了しますね」

そこはレミリアがフ란の過去を語っていた月の光が差し込む場所。

いつものように紅茶を飲み、いつものように月に照らされる変わらない景色。それをボーッと眺めているレミリア。

唯一違う事と言えば月がもうすぐ満月になると言う事だろうか。

フ란が出て行った時、その日の夜は満月だった。その月が満ちて満月になると言う事はフ란の計画が終了することを意味する。

咲「何事もなくてよかったです」

だから咲夜は笑顔で嬉しそうに言う。

フ란は脱走する事も無く、怒りに任せて人を襲う事も無く、逆に人里の恩恵を受け、色々な事を学び常識を学んでいる。たぶん。

文の新聞を通してフ란の人里での動向は紅魔館に、と言うよりも幻想郷全土に伝わっている。

この計画は大成功だ、と咲夜は確信していた。紅魔館の住人も、更には幻想郷に住むフ란と縁のあるものは全員そう思っていただろう。

しかし唯一人だけ計画の成功を危ぶむ者がいた。

それは運命を操る程度の能力を持つ、フ란の実の姉であるレミリア

アールスカーレットだ。

レ「そうかしら？」

咲「え？」

レミリアはいつものように月の光に照らされた景色をボーッと眺めながら一言。

その一言で安心して緩みきっていた咲夜の胸の奥が急にざわつき始める。

こちらを振り向きもしないレミリアに、今はもうやきもきすることはないが、その一言に胸のざわつきを咲夜は抑える事ができない。

少女の姿でありながら何百年の時を生き、更には運命を操るなどと言いたいような能力を持っているのだ。その一言がどれだけの意味を示すのか。

それは咲夜の安心しきっていた心にざわつきを与えるのには十分すぎるほどだった。

咲「・・・どういう・・・ことでしょうか？」

咲夜は今にも喉で詰まってかすれてしまいそうな声でレミリアに問う。それは自分で問いかけた質問にもかかわらずその返答を望んでいないような、逆に拒んでいるかのような声音で。

レミリアはそんな咲夜を心配する様子などかけらも見せず、この計画において明暗を分ける言葉をさらっと言いつ放つ。

レ「あの子は人に危害を加える運命にあるわ」

それは咲夜の聞きたくなかった答え。

咲夜の目がまん丸に見開かれ、胸のざわめきが更に大きくなる。更に呼吸が乱れ心臓の鼓動が段々と大きくなる。まるで呼吸の仕方を忘れてしまったかのようにだ。

フランにとってこの計画はとても過酷なもの。咲夜はそう思っていた。この30日間、計画の成功を祈り、フランがこの紅魔館に無事に帰ってくることを願っていた。

咲「そ、そんなこと・・・わかるの・・・ですか？」

だから信じたくは無かった。自分の何十倍も生きている吸血鬼で主でもあるその少女の言葉を。

しかし、更にその主の小さな口から出てくる言葉は冷酷なもの。

レ「運命を操る程度の能力、ということはどんな運命が起こりうるか知っていて当然でしょう」

少し震えている咲夜をよそにそんな言葉を無表情な声で淡々と喋り続けるレミリア。そしてすまし顔で紅茶をすすする。

レミリアには焦りもフランを心配するそぶりも見られない。いつもと変わらない様子。

人に危害を加えること。それはつまりフランの事実上の死を意味する。

だからそんなレミリアの無関心な態度が咲夜の気持ちを逆撫でした。

咲「お嬢様は心配ではないのですか!？」

咲夜は声を荒げてレミリアに言い放つ。

それはレミリアが本当にフ란の事を大事に思っているのだろうかという疑いの表れ。

人里に自ら赴き、頭を地に着け土下座をし、あまつさえ涙を流して実の妹であるフ란の許しを請うあの姿は幻だったのかと。

レミリアはフランに対する思いを謝罪と言った。では謝罪以外の思いはレミリアには無いのだろうか。

咲夜には信じられなかった。あの人里で見せたレミリアの姿は謝罪などと言うちんけな理由だけから来るものではないと。

それにレミリアが言うように謝罪のためだけと言うのなら、フランがもし危害を加え天界に一生幽閉される事になった時、できる謝罪もできなくなってしまう。

それについてはどうなのか。それとも謝罪をする必要などなくなつて内心ではほっとしているのだろうか。

咲夜はそんな邪推に自己嫌悪が生まれ出ようとしたその時。

レ「あなたの目に私がどう映っているのか疑問だわ？」

レミリアはそんな事を言う。

質問を質問で返されると人は何とも小馬鹿にされているようで腹が立つのだろう。

咲夜の中には自己嫌悪はもうない。あるのはそんな事を言い放つレミリアに対しての怒りだけ。

咲夜はそんなに気が長いほうではない。それは人里でレミリアの言いつけを無視して町民を斬りつけようとした事で証明されている。

しかし不思議な事にレミリアの質問を質問で返したその目は咲夜を小馬鹿にしたものではない。だからと言って怒っているわけでもない。ただ咲夜を見つめているだけ。

咲夜は自分達の為に必死になってくれている。レミリアはそれを知っているからこそ怒りもしないし馬鹿にもしない。

だがそれはレミリアの内に秘める思いを押し込めて。

そしてそれを肝心の咲夜はわかっていなかった。

咲夜はそんなレミリアにそれ以上怒る事もできず言い返すこともできず、拳をギュッと握り絞める。

そのささやかな抵抗と、咲夜がレミリアの瞳を睨むように見つめる。

その咲夜の瞳をレミリアは無表情の瞳で咲夜の瞳を見つめ返す。

それは二人がまるでその中に写っている自分自身を見ようとしているようだ。相手の目には自分はどうか映っているのか理解しろとも言うように。

その熱い視線と冷たい視線で両者何か感じ取ったのか同時に目線を外す。

そして先に動いたのは咲夜だった。

咲「私は今から妹様の所へ」

そう言いながら背を向けてフランの所へ向かおうとする咲夜をレミリアの一言が止める。

レ「青いわね」

咲夜が振り返るとレミリアはもうすまし顔でカップを手にとっている。しかし目だけは咲夜を見つめている。

自分の従える主であり、更に自分よりも多くの時を生きている少女に、質問を質問で返され青いなどと見下されながらも咲夜はそれが仕方のない事で更には自然な事だとさえ思っている。

咲「これが青いというのはなら私は青いままで結構です！」

だから堂々とレミリアに振り返り、全てを肯定してそう言い放つ。咲夜の顔にはどこか吹っ切れた雰囲気漂う。

従者である咲夜をいつも見下してきたレミリアに一矢報いてやっ

たとも思っているのだろう。

レ「どこかで聞いたような、有象無象の言葉を並べ立てて、私を言い負かしたつもり？ 甘く見られたものね」

レミリアのほうが一枚上手だった。そんなどこにでもあるような安い言葉ではレミリアはびくとしなかった。

そして言い負かされて咲夜はぐうつとうなるのだった。

咲「・・・私はこのまま黙って見ているなんてできません！」

どこまでも青い咲夜。言い負かされて後は情に訴えかけるしかないとも思っただろうか。

レミリアはひとつため息をつく。

レ「あなたはこの計画の本質を分かっているようにね」
咲「本質？」

レ「これはあの子が一人で乗り越えないといけない・・・いえそうじゃないと意味が無いの・・・あなたにだってわかるでしょう？」

フランを身内の誰かが出向いて手を貸すような事をすればフランはそれに甘えて何が起こってもどうせ誰かが来てくれると思うだろう。だから今後も何をやってもいい、そう思ってしまう。

そうならないためにわざわざフラン一人を人里に送り込んだ。そこで咲夜などがしゃばっていけばその計画は水の泡となる。

ここで行って水の泡とし、またこの計画を立ててまた人里へ送り

込むと言う事もできるだろうが、成功するまでセーブポイントからやり直すゲームのような計画に価値等ない。

だが咲夜にも譲れない理由がある。

咲「しかし・・・このままだとオセロマニアの所で幽閉されるんですよ!？それでもいいのですか!？」

フランが天界に連れて行かれて一生過ごすくらいなら、今からフランを止めてこの計画を水の泡に帰した方が何倍もましだ。

レ「それがあの子の運命というのならそれはしょうがないことよ」

レミリアはそっけなくそんな事を言い捨てる。

咲「そんなん・・・」

咲夜は前にもましてレミリアを睨みつける。

咲「ではもし妹様が人に危害を加え、天界に連れて行かれることになったらどうするのですか?!」

青い咲夜の言いそうな事だと、そこでレミリアは初めて頬を緩めて、目を細めてふふっと鼻で笑う。

そしてその言葉は青い咲夜にはいい肥料になったことだろう。

レ「決まっているでしょう? フランを強奪して幻想郷を去るわ」
咲「なっ」

レミリアは大昔、フランを背負って吸血鬼の町から逃げ出した時のようにまた、二人でどこか遠くへ行こうとでも言うのだろうか。

目を丸くしながらも咲夜はレミリアの目を見る。それが嘘か本当か見極めるために。

レミリアの目は細められて笑っているものの、それは燃えるように赤い瞳のように強く熱い視線、と言うわけではなかった。

その視線はうつむいてどこか寂しげだ。

咲夜はその寂しげに笑ってうつむいているレミリアの小さい体がより小さく見えた。

実際その事を考えると寂しいのだろう。二人で幻想郷で暮らし始め、長い時間をかけてゆっくりと築き上げた幻想郷での友好関係。それは毎日が楽しく輝いていたことだろう。その楽しい毎日が過酷な日々に変わるのだから無理も無い。

だからレミリアは寂しげに言うのだ。

レ「仕方ないでしょう？ここにいたらフランが幽閉されると言うのならそうするしかないじゃない？」

レミリアは罰が悪そうに笑っている。まるでいたずらをして怒られている普通の女の子のようだ。

咲夜が考えていたようにレミリアはフランを見放したのではなかった。

獅子は我が子を千尋の谷に落とすと言うことわざがある。親は子を谷に突き落とした後、もしその命に危険が迫ったならどうするか。そのまま放置するか助けるか。

どうやらレミリアは後者だったらしい。攻め際と引き際をちゃんとわきまえていた。

レミリアはフランの事を心配してないような態度をとっていた。今フランに手助けをしても意味が無い。ならば最後まで、どんな運命が待っているようにその結果を受け入れる。

それが失敗したとしても成功したとしてもだ。

そしてフランに、本当の危険が迫った時、手を差し伸べてやるのだ。一緒に幻想郷を去るという形で。

それがレミリアの厳しさであり優しさだった。

だからレミリアは自嘲気味に笑いながら咲夜を見て、そしてすまなさそうに咲夜に問う。

レ「あなたはこんな私を青いと笑うかしら？」

咲「申し訳ありませんでした！」

腰を綺麗に曲げ、膝に手を重ねて頭を垂れた咲夜の口から出てきた言葉はそんな謝罪の言葉。

表面上ではかみ合わないこのやり取りも二人の間ではちゃんと会話になっているだろう。

レ「いいのよ」

とレミリアは一言だけ。それだけでこれまでのやり取りのかたがつく。

ここでこの話題は一区切りついた、とレミリアは思ったのだろう。話をする前と同じく月の光に照らされた景色を寂しげに眺めている。それは見納めになるからなのだろうか。

しかし咲夜はまだかたがついていなかった。これは咲夜にとっても大切な事。

咲「あ、あの！」

レ「ん？何？」

咲夜はあることを進言してきた。

咲「もしも……いえ、万が一妹様の計画が失敗してお二人が幻想郷を離れる事があればなのですが……」

そんな弱気な咲夜が恐る恐ると言った感じで顔をあげてレミリアを伺うように見る。

レ「続けて」

咲「私もついて行ってもいいでしょうか？」

そんな問いにレミリアは驚かされる。幻想郷の人間が追ってくる事はないだろうが吸血鬼二人が、しかもまだ小さい子供が平穩に暮らせる場所などそう簡単に見つける事はできないだろう。

そんな二人に紅魔館を離れてまでついてくるなど・・・と思ったがレミリアは何となくそんな気はしていた。それは二人が咲夜の好物だからと言う理由だけではないだろう。

だからレミリアは目を細め意地悪な笑みを浮かべて言うのだ。

レ「非常食としてなら」

と

第十八章（後書き）

レミリアは咲夜の目に映っている自分の姿を見て咲夜に自分の思いが伝わらないと思ったからすまなさそうに話したと解釈してくれれば幸いです。

次回にフランが暴れだします

そしてエンディングへ・・・

ここまで読んでいただきありがとうございます
では～

第十九章（前書き）

前回の雰囲気をぶち壊してフランの狂喜乱舞がはじまります。
今回は少し長いです。（きるタイミングが・・・）

そして今更ですが吸血鬼は人の何倍もの力を持つという設定を足しておきます

第十九章

満月に近い月が照らす夜、ドンドンドンと太鼓の音が町に鳴り響く。

祭りの行われている場所は遠くから見てもその上空が真昼と思えるくらいに明るい。

その明るい空に背を向けて、祭りのせいで人通りの無い道をゆっくりと歩いていく少女がいた。紅の瞳を怪しく光らせて色素の薄いサイドテールをゆらゆらと揺らしながら。

そして祭りだというのにうつむきがちに歩く少女が。その小さな両手には二丁の銃が握られている。

その表情はうつむいて読み取る事ができなかったが、しばらくするとその表情が月夜の下に晒される事となる。

それは小島酒蔵と書いてある看板を掲げた店を見上げたからだ。

そのフランの表情は笑顔だった。しかしそれは狂気で満ちたもの。紅の瞳からは今にも狂気が溢れ出し、触れたもの全てを狂わせんとばかりにキラキラ光を放っている。

バキッ

それは祭りの為なのか、閉じられた店の戸をフランが蹴り破る音。

戸は真っ二つに折れて店の中へ吹っ飛ばされていた。

さすがは人間の10倍以上の力を誇る吸血鬼だ。幼女の蹴りでも威力は大人並みだ。

そして店の中にいた従業員がそれに気付く。

従「だれでい！」

複数の従業員が入り口の方へやってくる。その従業員の手には皆が皆、木刀やらナイフやら凶器が握っている。

しかしそんなのお構い無しにといった具合にフランが一步二歩と入り口から入ってくる。

従「おめえは・・・」

その光景に小島酒蔵の従業員は目を丸くして驚いている。それは人里で常識を学び中のフランがやってきたことに対してはもちろんだがどこか、困惑気味で宛が外れたような表情。

おそらく従業員達は新之助が狙撃された事を知っていてその仕返しに大島酒蔵の従業員が乗り込んでくると踏んでいたのだろう。

しかし実際に復讐にやってきたのは狂気に駆られ、二丁の銃を両手に握り締めたフランだった。

フランは歩みを止めず小さな歩みで従業員達に近づいていく。その顔には薄ら笑いを浮かべて。

そして、ドオオオオン！と、体を振動させるほどに強烈な音が町

中に鳴り響いた。それは祭りで打ち上げられる花火の音。

それに呼応するかのように従業員が一人が叫ぶ。

従「やっちまえええ！」

開戦だ。

従業員達が一斉にフランに向かって襲い掛かる。

フランの片方の唇がつりあがる。それは口裂け女のように目のすぐ下まで引き上げられる。真っ白に光る鋭い牙を見せて。

そしてそのフランの手に握られている銃口が従業員に向けられる。

パアアアン！

うめき声と共に一人の従業員が倒れる。しかし他の従業員達の勢いは止まらない。

従「怯むな！！相手は一人だ！」

一気に距離をつめられ従業員の一人がフランを捕まえようとする。フランはそれをひらりとかわしざまに一発、そしてその横から木刀を振り下ろそうとする従業員を見もせずに一発。

フランの顔に生暖かい赤いものが跳ねる。

そのうめき声を上げて倒れていく従業員でできた道を風のような速さですり抜けて店の中の方へ進撃していく。

しかしまだ従業員はいたようだ。大勢の従業員が騒ぎを聞きつけて中の方から次々にでてくる。

後ろも前も従業員達によってふさがれてしまった。そしてそのフランを取り囲むように輪になる従業員達。

十数名の従業員達によって囲まれ、絶体絶命のフランだがその顔には未だ薄ら笑いを浮かべている。

不意に身がかがめたと思うとフランが跳躍しその身が宙に舞う。それは従業員の頭上を跳び越えるようなものではない。その場で少しジャンプしただけ。

しかしそれによって周りを囲む十数名の従業員が全員うめき声を上げて倒れていく。周りで見ていた従業員達も目を疑う光景だ。

そしてそれは能力などではないことは従業員達にもわかる。

倒れている従業員分の銃声が聞こえたのだから。

フランは軽く跳躍すると同時に、フィギュアスケート選手のように体を回転させ、全ての従業員がその紅の瞳に映るその一瞬をついて銃弾を撃ち込んだのだ。

そして倒れた従業員を見てフランはまた怪しく笑う。

フ「うふっ・・・楽しい・・・楽しいよおお!!」

そう叫ぶとキャハハと狂ったように笑い出す。大昔に起きた、吸

血鬼の町の時のように。

従業員達もそんな狂ったフランに怖気づいたのか逃げ出すものもいる。

フ「ねえ・・・遊んでよ・・・もっと遊んでよおお！」

返り血を浴びたフランの顔は悪魔そのもの。フランは逃げ出す従業員達も逃がそうとはしなかった。次々にうめき声を上げてうつぶせに倒れていく。

そして

カチッ

それはフランの銃が弾切れを起こした音だ。フランはマガジンを外し床にポトリと落とす。

従「弾切れだ！やっちゃまええええ！！」

それをチャンスと見たのか従業員の一人がそう叫ぶ。しかし従業員の数ももう少ない。

その内の二人が手にナイフを持ってフランの後ろと前から襲い掛かった。

フランはのんきに予備の弾創を二つ取り出す。

そして身を低くして襲い掛かるその二人の従業員の眼前にフランが投げたものであろう弾創が現れる。従業員二人はそれを避けなが

ら前進する、とほぼ同時に側頭部に衝撃が走った。

フランが弾創を投げ、それを空になった銃で二つ同時に従業員の側頭部に叩き込んだのだ。その空になった銃には先程叩きつけた満タンの弾創がすっぽりと納まっている。

放り投げた弾創を空中で銃の空いた弾創の穴にはめ込んだのだ。

それを従業員の側頭部を強打する事で奥まできっちりはめ込んだと言う事だ。

フ「リロード完了」

フランは先程弾切れだ！などと叫んだ従業員に不敵な怪しい笑みを浮かべて一言そう言った。

それはまさに攻防一体の神技だった。

そんな神技を見せられては従業員達は逃げるしかない。しかしそんな従業員をは次々にフランに捕まって・・・

小島酒蔵の奥では小島当主とその側近がのんびりと酒を飲みながら花火を見ていた。

側「何やら店のほうが騒がしいですね。」

小「ふん、大方大島酒蔵の奴らが復讐に着たんだろう。」

そう言って酒を一口飲む小島当主の顔はフランとはまた違う悪魔

の笑みを浮かべていた。

側「では警察を呼びましょうか？」

小「まだ早い。存分に痛めつけてからだ」

側「そうですか。しかしうまくいきましたね」

小「ああ、これで大島酒蔵も終わりだろう」

最初から従業員達の手凶器が握られていたのはそういう訳だった。

小島酒蔵の思惑は復讐に來た大島酒蔵の従業員を返り討ちにし、その従業員達を全員警察に突き出すことだ。

そして捕まった大島酒蔵が一方的に勘違いし恨みを持っていた小島酒蔵を襲ったという事で片付けられるだろう。

これで大島酒蔵はつぶれ小島酒蔵の思惑通り言うわけだ。

しかしその思惑は外れる事になる。

小「ん？」

ズルズルズルと何やら引きずる音が聞こえる。小島当主がそちらを見ると戸が開く。

小「おお、終わっ」

と目の前には小島酒蔵の従業員の体が。

小「ぐはっ！」

側「な、何やつ！」

その入り口には二丁の銃を持ち、顔に返り血をたっぷり浴びたフランが立っていた。

従「当主・・・すいやせん・・・」

投げられた従業員にここまで案内させたのだろう。従業員は住まなさそうに小島当主に謝罪する。

しかし小島当主はそれを蹴り飛ばす。

小「役に立たん奴らだ！！おい！あれをもってこい！！」
側「は、はい！！」

そう言って何やら側近に奥へ取りに行かせる小島当主。

フ「終わりよ」

小「くっ！」

フランは小島当主に銃口を向ける。それと同時に小島当主も従業員にぶつかられ、そこから起き上がれず座ったままの体勢で胸から出した銃をフランに向ける。

二つの銃口が二人に向けられる。

フ「お前がここの当主ね」

そう言うフランの表情は未だ薄ら笑いが張り付いている。

小「い、いいのか?! わ、わ、わしを撃ったらお前は幽閉されるんだぞ!？」

その言葉にフランは無表情になる。

霊夢は言った。人に危害を加えると天界で一生暮らす事になると。

フランは怒りで我を忘れ、狂気に駆られるままに、その衝動を抑える事ができずに小島酒蔵の従業員に危害を加えた。もう天界で暮らす事は確定している。

だからそんな事はもう知った事ではないのだ。

フ「もういい・・・私の未来なんかたかがしれてる・・・これが私の運命なんだよ・・・」

小「そ、そんなんっ」

フランはその自分の言葉に思案する。

フ（運命・・・か・・・ねえさまも知ってたのかな・・・）

フランはもう天界で暮らす運命にある。だからか、自暴自棄になり全て悪い方へ考えてしまう。

フ（来てくれないってことは・・・やっぱり私のこと嫌いになっちゃったのかな・・・）

いつも困った時は助けてくれた実の姉のレミリアはフランの所へは来てくれない。それはあの時大嫌いと言ってしまったからなのか、と。

小「と、とりあえず落ち着くんだ！わしを撃てばお前の処分がもつと悪くなるぞ！」

そしてそんな光景を興味津々に眺めるものが。

文「あやや、面白いことになってますねえ、これはいいネタです。おや」

小島酒蔵の垣根から覗いているのは射命丸文だ。記者である文はフランの後をつけていたのだ。記者にとってこれほど興味をそそる現場に遭遇することははそうそうないだろう。

その文が何かに気付いた。

フ「そんな事、知ったこっちゃな」

新「フランちゃん！」

フランと小島当主の間に割って入った者はフランと小島当主が死んだと思っていた人物、大島新之助だった。

二人とも幽霊を見るような目で、走ってきたのか、息を切らし肩で息をしている新之助を見ている。

新「フランちゃん！だめだ！そんなことしたら君は一生幽閉されてしまう！」

両の手を広げて小島当主をかばう新之助。

フ「新之助・・・いきて・・・」

フランは新之助が生きていたことが素直に嬉しかったのだろう。その顔にはもう狂気の欠片すらない。紅の瞳からは狂気は消えうせ逆に大粒の涙が溢れ出してきた。

フ「よかった・・・ぐすっ・・・本当に・・・」

そう言うとフランは黙り込む。そして表情が見えないほどにうつむいてしまう。

新「フラン・・・ちゃん？」

フ「もう・・・もう遅いんだよ新之助え・・・」

そのフランの声はかすれている。

新「え？」

フ「・・・私・・・もう人を・・・もう遅いんだよっ」

新之助も見えてきただろう。フランが行った暴挙を。それによって新之助が現れたところでもう何も変わらない。全てが遅かったのだ。

新「そんなこと・・・」

フ「私はもう・・・閻魔のところで一生幽閉される運命なんだよ！」

フランは銃を構え直し、かすれ声でそう叫ぶ。

驚いたことにフランの顔にはまた狂気が戻っていた。大粒の涙を流す紅の目には狂気のようなギラギラと怪しい光が灯っている。そしてその口元は笑っている。

新「フランちゃん・・・」

フ「どいてよ！こいつを殺してやらなきゃ気がすまない！新之助を撃ったのもこいつなんだから！」

小「ひい！」

そう言いながら笑うフランの手に持たれた銃はまっすぐ小島当主に向けられている。

しかしその狙いを新之助が体を入れて邪魔をする。

新「落ち着いて」

そう言うとな新之助は一步フランに近づく。

フ「こ、こないで！どいてよ！」

フランはそれにびくつくように後退りする。

新「どかない、そして小島さんを撃たせはしない」

そしてまた一步近づく。

フ「何で！？何でよ！！？何でそんな奴助けるのよ！こいつは新之助を殺そうとした！」

新「やめるんだ、フランちゃん」

フランには理解できなかった。新之助を撃ったのはほぼ小島当主の仕業で決まりだ。なのに何故それを止めるのか。あまつさえフランは人を撃って天界行きが確定している。それは新之助も分かっているはずだ。

ならば小島当主を撃ったところでその処遇が変わる事もない。それに小島当主を撃つということは新之助にとっても復讐で喜ばしい事ではないのか。

フランは考える。その狂気に満ち溢れた頭で。

そうしてその頭でその答えが導き出された。

フ「・・・わかった」

そう言うフランの銃口はまっすぐに新之助に向けられている。

それが答えだった。

新之助はその光景に信じられないといったように目を丸くし歩みを止める。

フ「・・・お・・・お前も・・・お前もそいつの・・・な、な、なか・・・仲間だったんだな!？」

フランはそんな事あって欲しくないと願いながら、恐る恐るといった様子で叫び散らす。そのフランの体は震えている。

恐らくそうであった時のことが怖くてたまらないのだろう。

新「フランちゃん? 何言ってるの?」

そう言って新之助はフランを落ち着かせようと微笑みかける。

フ「最初から私を・・・閻魔のところへ連れて行くつもりだったんだ！・・・！・・・！　そいつと共謀して！・・・！」

そして悪いことにフランの狂気が、フランを落ち着かせようと微笑む新之助の顔を悪魔の笑みに変える。それがフランの導き出した答えを確信に変えた。

それは同時にこの計画に加担した幻想郷の住民も皆、自分を天界に連れて行くための口実だと勘違いして。

新「聞いてフランちゃん」

フ「うるさいうるさいうるさい！ お前もそいつも皆殺してやる！！」

新「僕は」

新之助はまた一歩フランに歩み寄ろうとしたその時

フ「死ねええええええええええ！」

フランの紅の瞳孔が見開かれ

（また殺してしまうの？）

人差し指に力が込められ

(好きな人を、愛する人を)

引き金が引かれた。

（あの時みたい）

弾は新之助のほほをかすめてとんでいった。床には新之助の頬から垂れた血がポトリポトリと滴り落ちる。

フ「う、ぐっ……」(何……これ……)

軽い目眩を覚えたフランはもう片方の銃を持った手で頭を押さえつけ何やらもだえている。

フ(私には……好きな人なんか……あの時って……何なのよ！)

新之助がまた一步近づく。

フランがそれに気づき、びくつくように標準を新之助の頭に合わせ直す。

フ「こ、これは警告なんだから！次は当てるからね！」

新之助はまた一步近づく。その言葉で確信を得たのか先程までよりも力強く。

フ「本当に撃つからね！」

新之助はもう止まらない。二歩三步とフランへ迫る。

フ「こないでよおおお！」

数発の銃弾が飛んでいくが新之助にはもうかすりもなかった。

フ「うう・・・」

そして、新之助の胸にフランの持っている銃口が当たる。

新「フランちゃん・・・これで外れないよ」

フ「くっ・・・」

フランは引き金を引くことができない。それは外しようがないから。

新之助は新之助でフランを、どこか安心できるような意地悪な笑顔で見下ろしている。

そんな余裕な新之助にフランは睨み返すことしかできなかった。しかしその涙で潤んだ紅の瞳からは禍々しい狂気は消え失せ、後に残ったものはあどけない少女のようなそれだ。

新之助はまた一步近づく。新之助の胸に当てられた銃は抵抗なく引き下がる。

フランはあきらめたように腕をだらんと垂らし、続けて両の手からガタリと銃が落ちる。

フ「新之助は意地悪だよ・・・」

新「可愛いと意地悪したくなるってやつかな」

フ「精神年齢ひくすぎるよ・・・ばかっ・・・」

新「そうかも・・・」

そしていつものフランに戻り、可愛らしく上目遣いで睨みつけるフランを優しく抱きしめてやる。フランの体はこのまま強く抱きし

めたらどこまで腕が食い込んでいくのか分からないくらいに柔らかい。

新「僕は君を助けたんだ」

フ「……私……撃っちゃったよ?……人を……いっぱい……」

フランは震えている。

新「大丈夫……僕がなんとかするから」

何とかとは何なのだろうか。それはフランを安心させるためについた嘘。もう新之助にはどうする事もできないだろう。霊夢に頼んで町民に頼めば誰かしら味方してくれる者もいるはずだ。

しかし被害をこうむった当の小島当主がそれを許さないだろう。

新之助は震えるフランを見る。この小さな体で自分の為にここまですてくれた小さな吸血鬼の娘を。

何とか打開する方法は無いものか。これではあまりにフランが気の毒だ。

大島酒蔵のために復讐をしてくれたフラン。しかし新之助は生きていてそれはする必要のなかった復讐。そのせいで天界にて一生暮らす事になる。

傍から見れば詐欺にかかった不幸な人物にも見えなくも無い。

フ「わだじ……いぎだぐない……閻魔様のどごろになんか……」

いぎだぐ・・・ないよ・・・」

そう言って新之助の胸で声をあげてむせび泣くフラン。

一度は天界に行くこと受け入れた。しかしフランは新之助の優しさで狂気が消え失せ、また自分はここに留まりたいと思ってしまった。

だから新之助に素直にそう訴える。

だがそれはもうどうする事もできない。

このままいくとレミリアがフランを強奪し咲夜も一緒についてくることになるだろうが。

それでもこの先が苦難に満ちていることは確かだ。

新「わかった。なんとかする・・・なんとかするから」

だから泣かないでというように新之助がフランを強く抱きしめる。

抱きしめるとは不思議な安心感を与えるのだろう。フランの震えが段々小さくなっていく。

新「絶対に閻魔になんかに渡したりはしないから、僕の命に代えても」

先程まで新之助の胸に顔を当てていなかったフランがそんな優しく微笑む新之助の顔を見上げて問う。

フ「・・・新之助は・・・なんでそこまで・・・？」

女の子は分かりきった質問をしたがる傾向にあるのか。フランも恐らくは分かりきっているであろう。

それが恥ずかしくなったのかフランは顔をまたうつむかせる。

しかし一度もそれを聞いた事がない。だから実際に言って欲しいのだろう。

新之助は顔を赤くしそんなフランの頭を見つめる。

そして

新「僕は・・・キミが」

パアアン！

うつむいているフランの横を何かが倒れていく。

そして次にフランが見たものは床にうつぶせになって倒れている新之助だった。

第十九章（後書き）

あとがき

もうすぐ終わりですね。

動画にしようと思って書いたシナリオを小説にすると色々と変化してもしかしたらつじつまが合っていない描写があるかも知れません。ご了承ください・・・

そしていくつかあるエンディングのうちどれにしようか迷っています。

なので少し時間がかかるかもしれません。

と、ここまで読んでいただきありがとうございます。

では～

第二十章

フ「へ？」

フランは間抜けな声を上げて呆然と立ち尽くしている。何が起ったのか分かっていないのだろう。

今まで自分をきつく暖かく抱きしめてくれていた新之助が今は床にうつぶせになって倒れている。ピクリとも動かない。

小「まさか生きていたとはな。大金を払って伝説のスナイパーを雇ったというのに」

ついに本性を見せた小島当主。その手には硝煙がもくもくと立ち上がっている銃が握られていた。

その硝煙の後ろからでてきた小島当主の顔は悪魔そのもの。

しかしフランはそんな言葉聞いてはいなかった。

フ「しんの・・・す・・・け？」

フランは目を丸くして倒れている新之助をただ見下ろしている。

木製の床に倒れている新之助の背中には小さな穴がぽっかりと口を開け、その穴は暗く、そして赤い。更にその空いた穴の位置から心臓に当たっているだろう事が分かる。そして倒れた衝撃からか新之助の眼鏡が外れ顔の近くに転がっている。

その眼鏡がかけられていた新之助の目は閉じられ、もう開く気配が無い。

フランは膝を折る。両の膝が床を叩き、フランのサイドテールがフワリと揺れる。

目を見開いたまま、新之助の背中にフランの手が恐る恐る伸ばされる。その手によって大島酒蔵の青いはっぴがクシャリと握られる。

フ「ねえ・・・新之助・・・どうしたの？」

新之助の反応は無い。

フ「さつき・・・なんて・・・言おうと・・・して・・・」

フランは未だ目を見開いたまま、まだ信じられないと言ったように新之助の体を揺らし続ける。

先程の抱きしめられた温もりがまだ残っている内に新之助は倒れ、もう動かない。

フランの頭はそれに付いていけないのだろう。

脳で処理しきれない情報が入ってくると人はパニックを起こす。そのせいかフランはずっと起きるはずのない新之助の背中をゆすっている。

しかし新之助の体は動く事は無い。無理も無いだろう、昨日の今日ではない。今日の今日で心臓に銃弾を受けたのだ。

今永琳が来たとしても助かりはしないだろう。

小「フン、まあいい、これで目的は達した」

そう言うとその場で立ち上がり悪魔のような顔でフランを見下ろす。

そのフランは未だ何かに取り憑かれたように新之助の体を揺らしている。

フ「ねえ・・・しんのすけえ・・・起きてよお・・・しんのすけえっ・・・ぐすっ」

だんだんその情報を処理できてきたのだろう、フランの目からはまた大粒の涙が溢れてくる。

見開かれた目は段々と細くなり、急に狭くなったダムから水が溢れ出してくるように目から涙がこぼれ、フランの白い頬を伝う。

フランの頭は新之助の身に起こった事をもう理解しているだろう。それでも尚、フランはゆする事を止めようとはしない。

もしかしたら起き上がるかもしれない、生き返ってまた自分を抱きしめてくれるかもしれないという一縷の望みを込めて。

だが新之助の体は動かない。動くはずが無いのだ。

そしてそんな茶番は終わりだとばかりに小島当主がフランに銃口を向ける。

小「後はこの吸血鬼の娘を片付けるだけだな」

小島当主は悪魔のような顔で片頬を吊り上げる。

パアアン！

フ「ぐうつ・・・」

フランの体にすごい衝撃が走り、うめき声と共にその小さな体が涙で綺麗な軌跡を描きながら吹っ飛ばされ、床に叩きつけられる。

小「怖気の走る再会はもう十分だろう？」

フランの顔の前にはもう目を開ける事のない新之助の顔が。

フ（新之助・・・私のせいで・・・）

フランはいつまでも過去をひきずって泣き喚き、ただ思いにふける、少女らしい少女ではない。

今自分にできる事は何か、するべきことは何なのか。

それはもう決まっている。

フランは両の手を床に押し当てて体を起こす。

フ「・・・なんで？」

そして小島当主に疑問を投げかける。

小「ん？」

フ「新之助は・・・」

小「ああ？」

ブツブツ言っているフランの聞き取りにくい声に方眉をつり上げて苛立ちを見せながら聞き返す小島当主。

その小島当主が次の瞬間びくりと体をすくませる事になる。

フ「新之助はおまえも救おうとした!!」

フランは瞼を力一杯に閉め体が折り曲がるほどに思いっきり叫ぶ。

フ「なのに何で!!!」

何故自分を助けてくれた新之助を撃つのか、何故そんな酷い事ができるのかと、眉間にしわを寄せ小島当主を潤んだ紅の瞳で睨みつける。

新之助は小島当主を守った。しかしその守っている新之助の背中を小島当主はためらいもせず、しかも的確に心臓を撃ち抜いた。

その行いは人であって人にあらずといった表現があまりにも当てはまりすぎる程に冷酷なもの。人間からは冷酷と称される吸血鬼であるフランでさえそう思う程人情味に欠ける行為。

小「はっ、邪魔なんだよお。大島酒蔵がなあ。先代を殺した時に店を閉めておけばよかったのになあ」

そんな事を言い捨て、悪魔の形相でヒッヒッヒと笑う小島当主。

フ「今、なんて・・・」

フランはぽかんと口を開けて信じられないといった様子で目を丸くしている。

フランの耳はその小島当主の言葉を聞きのがさなかった。小島当主は確かに「先代を殺した」と言った。

大島酒蔵の前当主である新之助の両親達は、新之助が言うには「事故」で死んだと、フランはそう聞いている。

だが新之助の祖母は「殺された」と。

祖母より新之助の言う事を信じ適当に流していたフランだが、それが今の小島当主の発言で誰が正しく、そして誰がそんなつらい現実に関心を持ってきたかを理解した。

小「おっと、こいつは口が滑ったな。」

小島当主はそんな滑った口を隠しもせずに関心を持って突いて呆けているフランを見下ろす。

小「まあいいどうせ死ぬんだから・・・そうだ、ワシが命令してあいつの親を殺させたのさ。」

この世にもし神に対峙する悪魔がいたとしたらこの男の事を言うのだろう。

フランは祖母が言った事を思い出す。

「そんなことしたって無駄だとわからせてやる」

新之助がそう言ったと祖母が言った。それは新之助流の小島当主に対する復讐だったのだろう。

新之助はフランや文のおかげで新しい酒を売る事に成功した。それによってある意味では小島酒蔵に復讐は果たせたのだろう。

だが小島当主はまた繰り返した。こんなにも酷い事を。

フランは震えている。それは他の何者でもない、純粋な怒りで。

フ「このおおおおおおおおおおおおお！」
小「くっ!？」

フランは雄叫びを上げる。ビリビリとその衝撃が小島当主にも伝わったのだろう。

それはフランの小島当主に対する宣戦布告。復讐をするための。

だからか、その雄叫びをかき消すように銃声が十数発。それはフランの全身に全て命中した。

それはフランの雄叫びに恐れ戦いた小島当主が反射的に撃ったもの。フランの小さな体がゆらゆらと揺れる。

だがフランは倒れない。普通の人間なら死んでしまっているであろう数の銃弾を受けてもフランは床に両足をつけてしっかりと立ちあがる。

フ「ぐっ・・・許さない・・・絶対に」

フランはよろよろと立ち上がり床に落ちている銃を拾い上げる。

小「ちっやはり吸血鬼はこの程度ではしなんか！」

側「当主！持ってきました！」

小「でかした！」

そこにばたばたと小島当主の側近が何かを大事そうに抱えてやってきた。

小島当主が側近に持ってこさせたものは新しい銃だった。それを側近の手から掻っ攫う。そして引き金に指をかけながらその銃口をフランに向ける。

フ「許さない！！！」

フランも拾い上げた銃口を小島当主に向ける。

フランの視線と小島当主の視線が交差し更にその銃口互いに向けられた。

パアアン！

と一発の銃声が鳴り響き二発の弾丸が互いの銃口から発射された。

フ「ぐあっ」

小「ぐっ」

互いの弾丸は互いの体に命中したようだ。双方小さなうめき声を上げる。

しかし勝った負けたで言えば負けたのはフランだろう。小島酒蔵はその場で踏みとどまり、フランは地面に這いつくばっている。

小島当主は撃たれた肩を押さえもせず、地を這いつくばるフランを見てニヤニヤと笑っている。

小「どうした？ 肩など狙って、人間に哀れみを持つなど妖怪の名折れじゃないか。」

フ「ぐっ・・・このっ」

フランはまた床を両の手で突き体を起こそうとする。しかし

フ「っ!？」

フランの視界がガクリと傾く。それも当然だった。床を突く両の手の片方が無いのだから体勢を崩すのは自然なことだ。

小島当主の側近が持ってきたものは銀の弾丸が込められた銃だった。恐らくフランが来ることも予想していたのだろう。その銃弾がフランの肩付近に当たったのだ。

吸血鬼は体を何度貫かれようと頭に銃弾を打ち込まれようとたいしたことではない。

しかしそれはその素材が銀ではない場合だ。

吸血鬼にとって銀の弾丸はすさまじい威力を発揮したらしい。腕が肩の付け根からなくなっていてその断面は袖によって見えないがその白い袖が少し赤く染まっている。さらに控えめといった具合に

床に血が滴り落ちている。

フ「ふえ・・・う・・・あ・・・」

フランの紅の瞳が段々見開かれていく。そして

フ「うわあああああああ！」

銀の弾丸で腕を吹き飛ばされた痛みで悶え苦しんでいる。

一方、肩に弾丸を受けた小島当主は痛がる様子もなく、未だ地べたを這いつくばっているフランを見てニヤニヤしている。

そしてゆっくりとフランに歩み寄る。

フランはそれに気付くが、腕が無いせいで上手く体が起こせないせいか顔だけを上げて小島当主を睨み付ける。

しかしその顔は激痛に歪められている。

そしてその顔は次第に驚きのものに変わっていく。

側「ひいっ」

小「ん？おっと、こりゃいかん。」

側近の者も顔を引きつらせている。

それは信じられないことに小島当主の頭から二本の触覚が生えて
いるのだ。

側「と、当主！？これは一体！？」

小「傷を治すために力を使ったからか」

小島当主はそう呟くと、銀の弾丸を撃ち込まれたことによってフランの手から放れた銃を拾い上げ、更に信じられないことにその銃口を側近に向ける。

側「え？」

側近の胸に風穴が開く。

フ「なっ」

側近はよろよろと壁に背中が当たるまで後退し、壁に赤い線を書いて座り込む。

小「ふん、いけない子だ吸血鬼の娘え。人を撃ってはいけないと教わらなかったのか？」

フ「私撃ってない！」

小「ああん？これはお前が持ってきた銃だろう？違うか？」

フ「あ・・・」

小「ふんっここまでくるのに何人も撃ったんだ、一人くらい変わりはしないだろう？」

そんな小島当主の言葉に何も言い返すことができないフランは苦し紛れに対抗できる言葉を見つけた。そしてそれは悪い事に小島当主の怒りのつぼを刺激したらしい。

フ「あ、あいつはあんたの仲間じゃない！」

小「なんだと！？」

そのフ란の言葉にいきなり鬼の形相でフ란のサイドテールを驚づかみにした。そして鬼のように怒った悪魔の顔を近づける。フランは片腕が無いせいで抵抗できない。

フ「あぐうっ」

小「馬鹿かおまえは!？」

フ「!？」

小「妖怪の癖に人間を仲間だと!？奴らは駒だ!わしのために働くただの駒だ!そうだろう!？」

妖怪らしい妖怪とはこの事だろう。妖怪らしい考えで人間を妖怪らしく扱い、考え、見下す。

小「妖怪の癖に何を駒の心配をしているのだ!？駒の代えなどいくらでもいる!違うか!？」

フ「ぐう・・・」

怒りで我を忘れているのかフ란の髪を驚づかみにしている腕を震えるように揺らす。いくら吸血鬼でも痛いものはいたいのだろう。フランは揺らされるたびに小さくうめく。

だがその問いにフランははっきりと答えることができる。

フ「・・・代えなんか無い」

小「あ？」

一言そういうと小島当主の目が先程よりも大きく見開かれ、悪魔のような顔を更に近づけられる。

しかしそんな脅しに屈するフランではない。

フ「代えなんか無い・・・あんたを守ろうとした新之助も、あんたの仲間も、あんたも」

フランは顔から怒りの感情を消し、妖怪である小島当主を諭すように語りかける。

フ「もうその人と喋ることもできないし・・・触れることもできないんだ」

それはフランが人里へやってきた日、新之助がフランに言った言葉だ。だからフランは明確な答えを用意することができた。

小「ふん・・・」

フ「人は死んだら・・・」

小「もういい」

フ「死んだらね・・・」

小「もういいといっているだろう!」

フ「コンティニューできないんだよ!」

小「黙れ小娘!」

小島当主はフランのサイドテールをなぎ払うように投げ捨てる。それに連動しフランの小さな体が宙を舞い床に叩きつけられる。

そしてそのフランの頭に硬いものが殴りつけられるように押し付けられる。

フ「あう・・・」

小「お前は何回コンティニューできるのだ? その回数だけ銀の銃弾

を撃ち込んでやろう」

いくらフランが吸血鬼でも頭に先程の銀の弾丸を受ければひとたまりも無いだろう。もちろんゲームではないのだ。コンティニューなどではしない。

小「しねっ吸血鬼の娘！」

フ「ぐっ」

パ
ア
ア
ン！

第二十章（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

そして命が危ないフランですが文は何をしているのか。

文は記者なのでその動向に手出しする事は禁止されているという事で沈黙・・・という設定でお願いします。

悩んでいたエンディングですが全部混ぜて少し切ない感じと微妙な感じで終わりたいと思います。

有終の美が飾れたらいいな・・・

ではでは

第二十一章（前書き）

やはり年度末は忙しくなりますね。

そしてエンディングの構成を考えながら書かないといけなかったの
でなかなか難儀しました。

そしてまた紅魔館からです。そしてまた喧嘩します・・・
それではどうぞ！

第二十一章

紅魔館

紅魔館では先程たしなめられた咲夜が未だそわそわしている。レミリアが一口紅茶をすする度に上の空で紅茶を注いでいるのだ。おかげでレミリアのティーカップの中身はいつも満杯でなくなることが無い。

上の空でこぼさずに紅茶を告げる咲夜もさすがだが、この嫌がらせにも近い行為にレミリアの内に秘める色々な物が限界だ。

レ「咲夜、もうお腹一杯よ」

とレミリアは我慢と胃袋の限界を咲夜に呆れ顔で告げる。

咲「も、申し訳ありませんっ・・・」

咲夜は肩をすくませながらレミリアの一言に気付き、傾けているティーポットを、注ぎ口をナフキンで受けながら引き上げる。

レミリアは片肘を突いて頬杖を突き、咲夜を横目で疑いの目でじっと見つめる。

咲夜は慌てて取り繕うように背筋を伸ばし、表情をすまし顔に変えて仮面をつけるがレミリアの視線は否応無しにすり抜けてくる。

人間はその結果が分かっているようにいまいと、発表されるその時まで何かが起き、自分にとって良い結果が起こるかもしれないと妙

な期待や希望抱くものだ。

だからもしかしたら違う結果になるかもしれない、または自分が行けばどうにかなるかもしれない、などと勘違いをして。

それに対しレミリアはそんな人間を呆れ顔で見ている。これは人間と妖怪の差なのだろうか。

その思いを全て見透かしたレミリアはため息を一つ。咲夜はそのため息に潔く意味の無い仮面を外しレミリアに尋ねる。

咲「あのひとつ質問が・・・」

レミリアは首をかしげる。

咲「お嬢様は妹様が人に危害を加えるとおっしゃりましたが・・・」

レ「その先を知りたいと？」

危害を加える運命とは言ったが天界に行く運命、もしくは幻想郷を離れる運命等、その後の運命は明らかにされていない。

咲夜はコクリと頷いた。

メイドだからか、先のことを事前に知り準備をしておきたいということなのだろうか。それともこの落ち着かない気持ちを何とかしたいのか。

レ「分からないわ」

レミリアは無表情になり窓の外に顔を向けて一言そう言った。

分からないとは一体どういうことなのか。先程まで自信満々に語っていた運命をそんな無責任な一言で済ますレミリアに怪訝そうな顔をして「分からない？」と聞き返す。

レ「ええ、何にも見えないの」

レミリアは以前無表情で窓の外を眺めている。

その言葉に咲夜は気分を害する表情をするどころか小さな希望の光を見たかのように表情を明るくした。大方レミリアの運命を操る能力は紛い物で、先程言った言葉は虚言だとも思っているのだろう。

レミリアは主に対してそんな失礼な態度を取るメイドを見て、人間とは何とも愚かな生き物なのだろう、という言葉のため息に変えて吐き出した。

そしてそんな咲夜の妄想の中にある希望の光をかき消すようにレミリアは自分の能力を説明してやる。

レ「いい？よく聞きなさい、このダメイド」

咲「だ、ダメイド!？」

レ「人の人生にはね、初めに一本の道が用意されているものなの。そしてその道の先にはまた何本かの分かれ道が用意されているわ。それは小さな選択肢から大きな選択肢、いろいろよ。気の向くまま赴くままにあなたの頬をビンタするかしないか、あなたがフランを助けに行くか行かないか、この紅茶を限界が過ぎても呑むか飲まないか」

レミリアの睨むように咲夜に視線を送っている。それに顔を背けることもできず、咲夜は震えながら、罰が悪そうに口をすぼめ、冷や汗を垂らしている。

レ「その枝分かれした道はどこかに合流している事もあるしとんでもないところへ行ってしまうかもしれないわ。その枝分かれした道を選んでいくことでその人の人生が決まっていく。その人が歩んで行く軌跡やその先の道を私達は運命と呼ぶわね。私はその用意されている道の一つに誘導する事ができるのよ」

咲「は、はあ・・・では見えないと言う事は一体どういう」

いつもは時間を止めても自分は動けるのだが、今は逆に自分の時間を止められてしまったかのようにその口が固まった。いや、口は動いているが声がでていないだけだ。

咲夜の頭の中で思考が空転する。もしそうだとしたら先程言ったレミリアの言葉はやはり嘘になる。更にはフランを幻想郷から強奪して逃げるどころの話ではなくなってしまう。

レ「そう。道が途切れるとは人生の終わり。つまり」

咲夜は目を閉じ口を閉じる。

レ「死を意味する」

レミリアがそう言い切るや否や咲夜の目が見開かれ更に薄暗い廊下が真昼のように明るくなる。

咲夜の手にいつの間にか握られていた銀色の懐中時計が白く光っ

ているのだ。

そして咲夜の口が開かれる。眉毛を吊り上げ眉間にしわを刻んで。

咲「お嬢様、私は何か勘違いをしていたようです」

咲夜の目にはもう迷いが無い。あの時と同じ、霊夢や町民を傷つけようとした時と同じだ。

レ「そうね、その通りだと思うわ」

レミリアはレミリアで真っ直ぐに咲夜を見据えている。

その通りだとはどれを示すのか。咲夜がレミリアの覚悟を思い違えていた事だろうか。天界に行く事になれば強奪し幻想郷を離れる。それは嫌だがフランのためなら仕方ない。

しかし、もしその前にフランが死ねばどうなるか。

咲「私は妹様を連れて幻想郷を去ります」

どうしようもなかったとさじを投げ、高価な墓石を建て花を添えるのか、レミリアはそれでいいのか。

咲「そして金輪際お嬢様とは縁を」

レ「咲夜・・・その先を言うとなあなたはつらい運命を送る事になるわよ？」

咲「それでも構いません!!」

その言葉に呼応して時計の光がさらに大きくなる。

咲夜はもう覚悟を決めている。これ以上何を言っても無駄だろう。

レ「私は嫌よ」

すぐさま言い返されたその短い言葉には言葉は同情や哀れみの思いを相手に植え付け、更には自分のした事が間違っているのではないかと考えさせるもの。あまつさえ咲夜にいて欲しいと願うささやかな願いををその短い言葉に埋め込んで。

咲夜の持っている懐中時計の光が一瞬鈍る。

レミリアの発する言葉はどれも忠誠を誓わざるをえないようなカリスマ性溢れる言葉。

だが同じことを何度もやればその耐性がつくと言うもの。それはいつも身近にいて従順に従うメイドである咲夜でも例外ではない。

咲「・・・いつもそうですね」

レミリアはうつむいて呟くように静かに語りかける咲夜の言葉に首をかしげる。

咲「いつもそう・・・どんな言葉を使えば相手を上手く言いくるめられるか・・・本当に熟知されていらっしゃる・・・本当に」

その言葉の裏に秘められた思いとは何か。自らを言いくるめられた事に対して賞賛しているのだろうか。

レミリアにはそれがあきらめの意を示す言葉にでも思えたのだろ

う。

しかし次の瞬間咲夜の口からレミリアにとって信じられない言葉が発せられる。

咲「なら・・・そんなに嫌なら無理やりにでもやめさせたらどうですか？」

静かに放たれた咲夜の言葉は一線を越えたもの。

咲夜の言葉は賞賛したのではなかった。そんな言葉で自分を言いくるめようとするレミリアに対し、甘く見るなど、過小評価するなという思いの裏側を表すものだった。

咲「お嬢様にはそのすばらしい能力があるのですから！！」

まるで女優にでもなったかのようにうつむいた姿勢から頭を上げ、それと同時に両手を広げて発せられたその言葉は従者として、人として、決して言うてはいけない言葉。

その言葉を咲夜は言ってしまった。その表情にはあまつさえ不適な笑みを貼り付けて。

それはどんな言葉でももう自分を言いくるめる事ができないという強い意志の表れに他ならない。

更には言いくるめる事ができないなら力づくで、自分の能力でどうにかしてみろと言う挑戦状でもあるだろう。

そんな咲夜に対しレミリアは怒りに任せて力づくで咲夜を服従さ

せるだろうか、以前のように咲夜の頬をひっぱたくのだろうか、それともまたカリスマ性溢れる言葉で言いくるめるか。

そのレミリアが取った行動は一瞬にして咲夜の薄っぺらな不適な笑みをはがさせた。

咲「っ!？」

月の光に照らされて青白く光るレミリアの頬に、一筋の光る筋が浮かび上がったのだ。レミリアの桃色の唇が小さな楕円を描いて。

それはどんな相手をも言いくるめることができる強力な言葉。しかもそれは咲夜が嫌う交渉術などましてはすばらしい能力でもない。

レミリアの内から出た純粹な言葉だった。

咲夜はレミリアに一礼する。

そして今まで周りを真昼のように照らしていた時計の光は消えた。

そして同時に咲夜もその場から姿を消した。

急に辺りが静かになる。

残ったものは月の光とそれに照らされて輝くティーカップに並々と注がれた紅茶、そして頬に涙で輝く軌跡を描いたレミリアだけだった。

そしてレミリアの目から流れ落ちた涙が頬を伝い、小さく開けられた桃色の唇の横を通り過ぎ、端整な形をしている顎にたどり着い

た。そのたどり着いた涙は床に落ちその静寂を破るだけだ。

そしてしかるべくその静寂が破られた。しかしそれは床に落ちたからではなくそれをこぼすまいとその下に差し出されたナフキンに落ちた音によって。

咲「ナフキンが紅茶で汚れてしまったので取り替えて参りました」

咲夜は片膝をつき椅子に座っているレミリアの頬を拭う。

レ「・・・そう」

レミリアはどこか安心したように目を細め、優しく咲夜を見つめ、なされるがままに頬を拭わせる。

咲「この運命もお嬢様の能力で？」

レ「そんなの見もしなかったわ」

どこか怒ったように、そして無表情な顔でそんな事を言う咲夜にレミリアは優しい笑顔でそう言った。

見えるのにあえて見なかった。それは咲夜を信じているという証拠に他ならない。

しかし咲夜の胸の中にはまだ疑念が渦巻いている。フランが死ぬかもしれないというのに見て見ぬフリをするレミリアに。

咲「お嬢様・・・私はもう・・・何を信じて・・・どうすべきなのかわかりません」

ポンッ

とそんな悲痛な声を放つ咲夜の頭の上に手を置いてまるで子供をあやすように頭をなでてやる。

レ「あなたは、あの子の能力を知っているわよね？」

咲「は、はい・・・知ってます。ありとあらゆる物を破壊する能力・・・ですよね」

目を点にしてレミリアを見上げている咲夜は慌ててその問いに答える。

レ「私は思うのよ。道が途切れているのはあの子は自分の決められている運命を壊しているからじゃないかって。それはもちろん自分だけじゃなくあの子のすぐ近くにいる新之助という男の運命も巻き込んで」

咲「運命をぶち壊すってやつですか・・・？」

そこで咲夜は久々に笑顔を現す。

咲「なんだか青臭い言葉ですね」

だからレミリアは笑って言い返す。

レ「あなたはそんな青臭い言葉が好きなんでしょう？」

咲「嫌いではないですね」

小島酒蔵

フランの頭に突きつけられた銀の弾丸の入った銃が火を噴いた。しかしフランの頭は吹き飛んでなどいなかった。逆に小島当主の手が黒く焼け焦げている。

小「なっ・・・なぜっ？」

フ「馬鹿なヤツ・・・」

どうやら咲夜は行かなくて正解だったらしい。フランのまだ残っている腕の拳がキュツと握られていた。

それは紛れもなく、フランのありとあらゆる物を破壊する能力。

小「まさかっ・・・腕を吹っ飛ばしたからっ・・・！」

フランは腕が吹っ飛ばされたことによってリングが切り離され封印が解けていたのだ。

フランは怪しい笑みを浮かべてゆっくりと立ち上がる。

フ「覚悟はできてる・・・よね？」

小「ま、待ってくれ！」

今更何を待てと言うのだろうか。

フランはもう止まらない。止まるはずがない。

残っている手には不気味に歪んだ時計の針のような剣が握られている。

フ「レーヴァテイン」

小「す、スペルカード無しで出すなんてルール違反ではないのか！？」

フ「そんなルール破壊してやる」

片手が使えないためスペルカードルールなど不要なのだろう。

そしてフランの片腕が振り上げられる。その手に握られる不気味な剣にエネルギーが込められていく。それに吸い寄せられるかのようにフランのサイドテールがふわふわとゆれ身に纏う衣服までもゆらゆらとゆれている。

その集まるエネルギーの光に照らされながらフランの唇が鋭い牙が見えるほどに吊り上げられる。

それはまるで悪魔の笑み。

それもそのはずだ、スカーレットデビルといわれるレミアスカーレットの妹、フランドールⅡスカーレットなのだから。

フ「あんたは何回コンティニューできる？」

小「やめろおおおおお！」

振りかざされた剣が一気に振り下ろされ、その剣先から出る赤い光で小島当主がなぎ払われる。

小「がはあ！」

小島酒蔵は壁に叩きつけられぼろぼろになっている。本来ならば

肉片など残らず飛び散っているだろう。そうならないのはフランが手加減しているからだ。

フ「まだ、気をうしなわないでよね？　今は新之助の分、そしてこれは新之助の両親の分！」

手加減はこのためだった。続けて小島当主に赤い光がなぎ払われる。

小「ぐはあ！」

フ「これはババアの分！」

小「げほお！」

フ「そしてこれは私の怒りだあああああ！」

そしてまた振りかざされた剣には今までよりも更に強力なエネルギーを溜め込んでいる。

小「もうやめ・・・」

フ「死ねええええええええええ！」

フランの剣から放たれたエネルギーは派手に小島酒蔵を破壊しながら小島当主を襲った。

フ「はあはあはあ・・・」

やりきってご満悦なのかフランは息を切らせながら不気味に笑う。

「あら？ とどめは刺さないの？」

そこで後ろから声をかけられた。それは青と赤のツートンカラー

という珍妙な服装をしている八意永琳だった。恐らく新之助を追って来たのだろう。

小島当主は生きていた。フランは最後の一撃を寸前で止めていたのだ。

フ「新之助が殺すなって言った・・・だから殺さないだけ」
永「・・・そう」

フランは不満タラタラに不気味な笑みを消して言う。それに永琳は少し意外そうな顔をして微笑んだ。そしてフランの頭に手を載せてなでてやった。

フランがそれを恥ずかしそうに押しのけるか否かといった時、店につながる扉を蹴破って何者かが飛び込んできた。

そのものは黒髪に赤い大きなリボンをつけ、その体は紅白の巫女装束に包まれている。更には側頭部に祭りにでも行っていたのである。後ろともいえる、ひょっとこの仮面が張り付いている。

霊「そこまでよ！」

博麗霊夢だった。騒ぎを聞きつけてやってきたのだろうか。その手にはスペルカードが握られている。

まさか暴れているフランを取り押さえにきたのだろうか。フランは慌てて永琳の後ろへ逃げ隠れる。

しかしそんなフランの不安をよそに霊夢はその横を走り抜けていく。

霊「これは私の怒りよ!!」

どうやら狙いは小島当主だったらしい。

霊「霊符! 夢想封印!」

ドオオオオン!

フ「・・・」

永「・・・」

霊「あの時はよくも邪魔してくれたわね。あんたは地獄行きよ」

あの時とは会議の時だろう。

霊夢はそう言いながらせっかくフランが寸止めして、半殺しにしていた小島当主を瀕死にして縄で縛り上げた。

フランはこの人物こそ常識を学ばせないといけないのではないかと考えるがはっと気付いたように永琳に振り返る。

フ「そうだ永琳! 新之助が銃で撃たれて!」

永「また?」

フ「お願い! 新之助を助けて!」

永琳の服を鷲掴みにし必死に懇願するフランだが永琳の顔は困惑気味だ。

永「と言ってもねえ・・・この様子じゃあ・・・手の打ちようが・・・」

フ「そ、そんな！」

心臓を打たれて床に倒れている新之助を見下ろしながら言う。いくら永琳でも心臓を打たれては手の打ちようが無いのだろう。学校の前で狙撃されて生きていたのだって運がいいだけだったのだろう。

しかしそんな事フランは知った事ではない。何もせずに諦めるなんて絶対にしたくないはずだ。

フ「何でもいいから！！新之助を生き返らせてよ！！！」

フランは涙ながらに叫びながら訴える。

その悲痛な叫びに永琳は目を丸くしている。それは人間にそこまですれ込むフランの気持ちに対してか。

永琳はしゃがみこんでハンカチを出してフランの涙を拭ってやる。

永「ゴメンナサイねフランさん。何か誤解を生むような事を言ったよね」

フ「ふえ？」

永琳はそんな間抜けな声を出すフランに信じられないことを言う。

永「新之助さんは生きているわよ」

フランは目を丸くして永琳の顔を見つめる。それは仏のように優しい笑顔。母性に溢れ安心できる包容力のある表情だ。嘘をついているとは思えない。

フランは慌てて新之助の方を見るが新之助は動かない。

永「あなた新之助さんを噛んだ事があるでしょう？」

フ「へ！?・・・え・・・えと・・・」

フランは未だ小島当主を踏んづけて遊んでいる霊夢をちらりと見る。

永「大丈夫、誰にも言わないわよ。でもこんな状況で隠しても仕方がないと思うけど？」

フランはそれに気付いたように恥ずかしそうに頷く。

永「ふふ、最初は驚いたわよ。診療所に新之助さんが担ぎこまれてきたんだもの。その時は弾丸に心臓を貫かれていてね」

手の施しようが無かったが吸血鬼化していたおかげで新之助は助かったのだった。だからこんなに早く歩きまわれるようになったと言う事だ。

永「だから今も生きていると思うわよ？」

手の施しようが無いと言ったのは施す必要が無かったただけだった。

フランは新之助の命を自分のせいで落としてしまったと思っていたが違っていたようだ。それどころかフランが新之助を救ったと言ってもいいだろう。

その永琳の言葉でフランの紅の瞳が次第に涙で隠れていく。

フランは両膝を付いて新之助を抱き寄せる。

フ「よかった・・・本当に・・・よかった・・・」

そして今度は自分が新之助を引き寄せて強く抱きしめてやるのだ
った。

第二十一章（後書き）

喧嘩するほど仲がいいって言いますがよく喧嘩しますね。全く成長しないメイドをお送りしました。

そしてここからは今後のフランの処分を書いた上でエンディングを書いていこうと思います。エンディングと言うよりもその後って言う感じで？

とまああと4，5話くらい続くと思います。

では～

第二十二話（前書き）

最近忙しく間が一週間もあいてしまった・・・

ってそんなに期待している人はいないと思いますが・・・

今回は後始末みたいな感じですね。そして何本かフラグを立ててと
いった感じです。

注

四季映姫・ヤマザナドゥ（「山」）

第二十二話

フランが噛んだ事によって新之助の運命は変わった。フランは新之助の死という運命をぶち壊したのだ。更には両親を殺された悲しみと憎悪という名の鎖さえぶった切った。

更にそんなフランに抱きしめられている新之助は願ったり叶ったりだろう。当の本人は氣を失って知る由はないのだが。

永「フランさん」

大切なものを抱きしめるように新之助を抱きかかえているフランに永琳が声をかける。その手には先程銀の弾丸を打ち込まれて吹っ飛ばされたフランの腕が握られている。

永「片腕じゃ抱えにくいでしょう？」

そう言ってフランにその腕を差し出す。しかしフランは首を振る。

フランは新之助が生きていて本当に嬉しいのだろう。永琳が話しかけても振り向きもせず新之助を抱きかかえている。

しかしそれは嬉しさという明るい気持ちからだだけでは無い。間も無くして起こりえるであろう、新之助との別れの悲しみからも来ている。

フランは約束を破った。人を傷つけ、この計画の大原則である誓いを破ってしまった。だからここにすることが出来る時間はもうあまりないだろう。

ならば大事な人と少しでも長く、少しでも近くにいたい、というフランの素直な気持ちに首を振らせたのだった。それはいくら不恰好でどれだけ抱きしめにくい姿であってもだ。

そのフランの胸中を察する事ができない永琳ではない。こうしてずっと片腕で抱きしめているフランを見てもいいのだが、騒ぎを聞きつけて人が押し寄せてこないとも限らない。

花火の音で銃声は打ち消せているだろう。しかしフランの放ったレーヴァテインのせいで壁と言う壁が壊れている。そして霊夢の夢想封印のせいで天井が吹き抜けになってしまっている。

幸い祭りのおかげで人はあまりいないものの永琳としては騒ぎが大きくなる前に小島酒蔵から引き上げたいところだった。

だからこの強情な娘をどうやって動かすか。

すると急に困った顔をして肩をすくめる。

永「新之助さんが起きたらどんな顔するかしらねえ？ また気を失ったりして」

そんなフランに話しかける永琳の言葉にピクリとしたのかしないのか分からないがサイドテールがゆらりと大きく揺れた。どうやら効いているらしい。

永「ショック死するかもしれないわねえ。心の病は人間も妖怪も共通だから心配だわ。せっかく拾った命なのに」

人の体を治療する事を得意とする永琳のそんな戯言は効果抜群だったようだ。

フ「永琳！腕返して！」

フランは新之助を抱えたまま永琳の方を振り返る。それに永琳は笑顔で答えてやる。

そしてフランの取れた腕から見えている骨をコンと指ではじく。

永「うんっ骨密度よしっ肌年齢よしっ吸血鬼にしては良好よ」

と、ちぎれた腕でマッドサイエンティストさながらのジョークを飛ばす永琳。フランは何のリアクションも見せず腕を受け取るが、霊夢に至っては眉をひそめて横目に永琳を見る。あの竹林にある永遠亭でどんな惨劇が行われているのか一度検査しに行かなければ、と胸中で呟いている事だろう。

永「ずっと傷口同士を合わせていたら数分でつなが・・・」

と、そこで永琳は妙な感覚に襲われる。それはフランに腕輪を付けた日の事を思い出したからだ。そう、今持っているのは計画の初日にリングをつけた左手ではなく右手だった。

ならばリングは今もフランの体にくっついている左手にはめられているはずだ。なのに能力を使えている。これは一体どういうことか。

永「あなた・・・リングを壊したの？」

驚きの表情を見せる永琳に対し驚きの表情で返すフラン。そしてまた新之助を噛んでしまった事がばれた時のように罰の悪い顔をして顔を背ける。

その町民を危険にさせるような行為に霊夢が黙ってはいない。フランの方へずかずかと歩み寄る。

霊「あんたいつから」

フ「ち、違うよ！私が壊したんじゃないもん！」

文「確かに！少なくとも新之助さんが入る前まではリングはついていたはずですよ！あの時フランさんは小島当主を殺すつもりでした！しかし能力を使わず銃で対抗しました！」

突如出てきた文は誰も聞いてもいないことをぺらぺらと、さも探偵が推理するように喋り倒す。

フ・霊「出たなパパラッチ」

文「やだなあ二人とも仲がいいんですね。服の色合いも似てますし」

霊「・・・で、リングの話は？」

文「テレビから出てくるやつですか？」

霊「え？何？死ぬの？」

文「あやや、そんなに怒らなくても・・・」

フ「あの虫が私に数十発撃ち込んだ時に壊れちゃった」

フランは右腕を押さえながら罰が悪そうに言う。あの虫とは小島当主のことだろう。

しかしそれにまた困惑の表情を見せる文。

文「あれれえ〜おかしいですねえ」

霊「何がおかしいのよ？」

文「小島当主が銀の弾丸を撃つ時に力を使っていればそんな傷を負わずに済んだのでは？」

銀の銃を持った時に弾幕なり能力なりを使えば簡単に殺せたはずと言うのが文の主張だ。

フ「だって・・・まだ手加減がよくわからなくて・・・殺しちゃうかもしれないかったし・・・」

新之助が殺すなと言ったから殺さなかったとフランは言った。だから普通の人間に能力を使えば殺してしまうと、そうフランは思ったのだろう。

霊「へえ、あんたでもそんな事考えるのね」
文「ほほう、と言う事は妖怪だということが分かったから安心してぶっ放したと？」

フランは黙って頷く。それを見て文は手帳へものすごいスピードでメモしている。

どうやら文の巧みな話術でフランはいつの間にか取材受けさせられていたらしい。人の探究心は底が知れない。

霊夢はそんな文のパパラッチ魂にもう呆れ顔だ。

そしてそんな事を我関せずといった様に側近の容態を見る永琳。

一応そんな側近を心配していたフランもそれに気付き視線を向ける。

永「ん？ああ、大丈夫よ、急所は外れてるから」

フランの視線に気付いた永琳が安心させるように言う。

永「これで死人は0人ね」

文「死者数0と」

霊「ここにくるまでに何人か倒れてるの見たけど？」

永「全員急所を外れていたわ、命に別状無しよ。フランさんはわざと外して撃ったのよね？」

フ「わ、わかんない」

文「フランさん、そこは当たり前よ！とかもって強気に！」

と煽る文に吹かれてフランもなびく。そして満足げに捏造した事実を書き上げる。そんな文をパラッチと呼ぶ、と霊夢がフランに教えてやる様はまるで中の良い姉妹のようだ。

霊夢とフランが姉妹なら母親は永琳だろう。そのカラスを突いて遊んでいる姉妹にもうゴハンだと気付かせるように永琳がパンパンと手を叩き鐘を鳴らす。

永「さ、早く負傷者を診療所へ運ぶわよ。人が押し寄せてきたらまずいわ」

永琳は負傷している側近を肩に担ぐ。

霊「それもそうね。文！あんたも手伝うのよ！」

そう言って霊夢は縄で縛り上げた小島当主を引きずっていく。

文「えー・・・私は記者ですよ!？」

霊「そうだったわね、そこに倒れてる人がいても助けずに、写真ばかり撮るのが記者なのよね？」

文「そんな何処かの国の事件を連想させる事を言わないでくださいよ・・・あれは記者として最低だと思います!」

霊「ふふっ」

文「あやや・・・」

そうやってカラスを突っつきまわして腕が使えないフランの代わりに新之助を啜えさせる事に成功した。

霊夢達は店から出ようと店の中を進んで行く。店の中には応急処置を施されたと思われる従業員達が壁にもたれかかってうずくまるように座っている。

しかしフランを見ると体をびくつかせて物陰に隠れたり身を縮めたりしている。永琳がそんなフランを見ておびえる従業員にすぐ人を連れてくるから少し待ってると言って安心させてやる。

フランに至っては罰が悪そうにうつむいて3人の後を付いている。

すると店の前から足音が聞こえてきた。それに霊夢が気付く。

霊「まずいわね」

永「そうね、騒ぎが大きくなってしまいわ」

文「記事は新鮮さが命だと言うのに!」

その時、小島酒蔵の店に入って来た者は大島酒蔵の従業員達だった。そのものは店の中の惨状を見て皆一様に目を丸くし口をぽか

んと開けている。

部「うわっ、戦争でもあっただか?!」

部「ん? 霊夢さんに永琳さんまで? 何でこんなところに?」

部「本当だ、パパラッチもいるべ」

部「お、お嬢!?! まさかお嬢が!?!」

そして文に背負われている新之助を見てまた驚く従業員達。しかしその手には鈍器やら刃物やらが握られている。新之助の復讐にきたのか、はたまたフランを助けにきたのか、もしくは病み上がりの新之助を心配してかは分からないが、そんな従業員達に説明が面倒になったのか永琳は軽いため息をつく。

永「あなた達、ちょっと手伝ってくれる?」

永琳は大島酒蔵の従業員達に負傷している者達を運ばせた。ライバル同士であるが今回の事件の事は小島酒蔵の従業員達は知らなかったらしい、とその事を従業員に新之助を任せた文が説明し負傷者を運ぶように促していた。説明しながらも巧みに取材も行っていたことは言うまでもない。

だからかやれやれといった具合にだが負傷者を運んでやる従業員達。

小島当主はというと霊夢が縄で縛り上げているがそれをいいことに大島酒蔵の従業員がリンチする、なんて事がありえるので何故か都合よく持っていた姿が見えなくなる札を小島当主に張ってやり過ぎた。

その札で小島当主が突然消えていたので永琳とフランも首をかし

げていた。更に文の取材にも霊夢はノーコメントだった。

診療所

永「これで全員ね」

文「全員で負傷者21名、死者無しっ」と

永琳が時々出張で出向く小さな診療所は負傷者で一杯になってしまった。

文「しかし疲れましたね、私に永琳さんの手伝いをさせた霊夢さんはいずこへ？ フランさんにも色々聞きたい事があるのですが」

と色々手伝わされてさすがに疲れの色を見せる文。そして豆電球の下で忙しそうに大量のカルテに筆を走らせる永琳に尋ねる。

永「霊夢さんは新之助さんが眠っている病室でフランさんが暴れないように見張っているはずよ。リングが壊れちゃったから」

文の方を見もせずにカリカリと音を立てながらため息混じりに言う。それを聞いて文はずるいと言。

夏の終わりの夜の病室には鈴虫の鳴き声が響き、さらに窓から入ってくる風が風鈴を奏でる。

その風がカルテをめくり上げそれを永琳の手が押さえる。そしてふと永琳が手を止めて上の空になる。

永「そう言えばフランさんはどうなるのかしらねえ」

まるで独り言のようにボーっとして呟く永琳の横顔はどこか哀愁に満ちている。

文「どうでしょうね、少なくとも霊夢さんは罪を咎めるというところはないでしょうが」

文は肩をすくめて両掌を天井に向ける。そしてすぐそばにあった椅子に腰掛けたため息をつく。永琳は未だ上の空。

そして鈴虫と風鈴の音がそのたった今できた沈黙を舞台にデュエットを始める。

夏の終わり、もうすぐ秋がやってくる。秋の心と書いて愁。

フランは人を傷付けた。それを霊夢が咎めなくとも頭の固い聞き分けの悪い閻魔様が天界から睨みを効かせている。

二人ともフランと仲良しでも良く話す中でもない。しかし一度や二度話したりしたことがある幻想郷の住人が幽閉され二度と会えなくなるというのは後味が悪く、切ないものなのだろう。フランのような元気な娘ならなおさらだ。

永「さて」

そう言ってデュエットをぶち壊して永琳が立ち上がる。

永「一区切りついたしフランさんの所へ行きましようか」
文「行きましよう！」

文は今まで手当てで忙殺され、フランを取材できなかったためか元氣よく立ち上がる。

二人がすぐ近くの病室に入って行くと長椅子に腰掛けた霊夢が腕を組んで扉を開けた永琳と文に氣付き首を振って二人を見る。更に人差し指を天井にむけてしいーっと口の前で立てる。

文「あやや」

永「まあ」

その病室のベッドには新之助が眠っていた。そしてその横で椅子に座り新之助のお腹の辺りを枕代わりにして眠っている天使がいた。その金髪の実は氣持ちよさそうにすやすやと寢息を立てて長い上下のまつ毛を重ね合わせていた。咲夜が見たら卒倒してしまいそうなほどに可愛らしい天使の寝顔に文も思わずカメラを握るのを忘れてしまうくらいだ。開け放たれている窓から入ってくる風がフランの髪をなでるとくすぐったそうに顔を新之助のお腹にうずめる。

霊「取材なら後にしなさい」

そんなフランを氣遣ってか霊夢が小さな声で文にささやく。そして文もそんな無粋な事などしないと、しかし取材ができないからか残念そうに笑いながら霊夢に反抗の視線を向ける。

文「一言二言聞きたかったのですがこれでは仕方ないですね。私の独断と偏見で記事を書いてきます」

そう言って窓の方へ向かう文。

永「もう行くの？」

文「この光景は少しもつたいないですけどね」
霊「ならもう少し見てたらいんじゃない？」
文「いったでしょう、記事は鮮度が命だって」

そして軽くウィンクをして開け放たれた窓から静かに飛び立って行った。

霊「変な事書かなきゃ良いけど・・・」

永「どうかしらねえ」

文「あのくわすれてました」

二人が振り返るとそこには頭をぼりぼりと申し訳なさそうに書きながら笑う文の姿が。恐らく高速で引き返してきたのだろう。

霊「どこからでてるのよ・・・」

永「何か忘れ物？」

文「はい、この寝顔を撮ってもいいでしょうか？」

霊・永「だめ」

文「あやや・・・」

その少し後

天界

山「フランドールⅡスカーレットは黒だ」

第二十二話（後書き）

文のあれれーはコナン君を連想し書いてみました。

そして何か説明しているような感じになったかもしれないですね。

次回は少し時間軸がずれるかも知れません。最後のその少し後の前から書いていきたいと思います。

さてこれで後2話くらいでエンディングでその後少し続く感じですかねえ。

後4話くらいでしょうか。

第二十三章（前書き）

今回は文が飛び出していたところからです。
場面が二、三度とびます。

第二十三章

夏の夜、少しだけ欠けた月が咲く夜空にニヤニヤしながら編集部へ記事を書きに戻る文が機嫌よく10回転ひねりを決めながら飛んでいた。

文「さあ記事記事！どう記事を書こうかなあゝ・・・人に危害を加えてしまったフランドールⅡスカーレット！しかし死者はなくさらに妖怪である小島酒造の当主捕縛に成功！しかし当主を攻撃した時の表情は気持ちよかったという表情！これは自分の欲求を満たすためなのか！？それとも！？黒か白か！今後いったいどうなるのか！？うゝんこれなら今後も考えて記事を書きやすく」

そんなご機嫌な文に世にも奇妙な現象が起こった。

頭の中で何かが弾けるような、何かが落ちて壊れるような音が聞こえたのだ。それは別に文の脳が弾けたわけではない。まるで頭蓋骨を壁にして跳ね返るように頭の中で反響するのだった。

不思議な事にそれは文にとって耳障りな雑音ではなく、逆に頭の奥の何かに語りかけるような今までに味わった事のない響きに似た感覚だった。その不思議な現象に文の頭の中で今まで作られていた記事がいったん壊され、また組み上げられていく。それはまるでパズルでも組み上げるように文の頭の中で綺麗にはめられ、作りなおされていく。

文は飛んだままその不思議な感覚にされるがまだ。

そして忘れていた動作を今思い出したように瞬きをする。そこに

は少しかけた月が。

文「・・・そう・・・だ」

紅魔館

そんな時、紅魔館では深夜というのに椅子から立ち上がり窓の外
の月で照らされる景色を眺めるレミリアがいた。

吸血鬼は苦手な太陽を避けるため普通は夜行性なのだが、不思議な
ことにレミリアやフランは昼に動く事が多い。それは幻想郷の住民
に合わせて本来の習慣とは逆に夜眠るという吸血鬼にあるまじき生
活習慣を送っているからだ。

夜皆が眠っている間、起きていても暇なのだろう。

そしてそんなレミリアに咲夜が慌てて駆け寄る。それはレミリア
が今まで飲んでいたカップを落としてしまったからだ。咲夜が暴走
しかけた人里で開かれた会議の時のように。

レ「私もまだ青いわね」

そう小さく呟いて月明かりの下で輝く景色を眺めるレミリア。

咲「お嬢様！お怪我は？！」

落として砕け散ったカップの破片でレミリアが怪我をしていないかを確認しに来る咲夜。カップを落としたくらいで負う怪我などすぐ治ってしまうのだが従者の立場として一応聞いておく。

レ「大丈夫よ」

そう一言言うと慌てて駆け寄った咲夜にニコリと満足げな笑顔で見下ろす。そんなレミリアを屈みながら見上げつついつの間にか手に持った放棄とちりとりで割れてしまったカップの破片を片付ける。

レ「それよりも準備なさい」

咲「へ？何の準備ですか？」

人里

永「そう言えば、大島酒蔵の人たちが見えないけど、どうかしたの？」

姿が見えなくなるまでほんの数秒だっただろう文を見送った永琳が振り返って霊夢に問う。フランにやられた小島酒蔵の負傷者を運んで来てれたのは大島酒蔵の従業員達だ。

目が回るほど忙しかった永琳は新之助の病室の方へたむろしていた大島酒蔵の従業員達をちらりと見てはいた。

しかしいつの間にかいなくなっていた。その従業員達が自分達の、

しかも大丈夫と宣言してしまっただがまだ気を失っている当主を放っておくとはどういう事なのだろうか。

霊「ああ、あの人たちならずいぶん前に帰って行ったわよ？」

そう言いながらまた長椅子に腰を下ろす霊夢。

永「自分達の当主を置いて？」

怪訝そうな顔をして聞き返す永琳に何か合点がいったらしい霊夢が軽く何度か頷きながら優しく微笑む。

霊「他のお客さんの迷惑になるからって、早く帰って明日の準備しておくんだって。若ならきつとそう言うからってね。それに」

今日はフランが来て丁度一ヶ月。だから従業員達は自分達は邪魔だろうとフランに気を遣って帰って行ったのだった。

永「なるほど」

霊「しかも深々とフランに頭下げるんだから驚きよね」

永琳は備え付けられていた棚から毛布を取り出しながら霊夢のその言葉に振り返る。霊夢はフランの寝顔を見ながら無表情だ。

霊「自分達のすべきことをフラン一人に任せてすまないって・・・」

そこで霊夢は少し表情を曇らせる。

フラン一人に任せる。それは幻想郷の管理者の霊夢とて同じ事だ。

この一大事に何も知らずに祭りに行き浮かれて仮面までつける始末だったからだ。

新之助が撃たれた事をもっと早く知っていればフランが復讐しに行く事もなかったかもしれない。最終日だというのに気を抜きすぎていた。今まで何事もなく計画が進んでいたから気を抜いてしまうのも仕方がないのだが、結果フランは天界で幽閉されてしまうという事になってしまった。少しの自己嫌悪も起こさないとすれば博麗の巫女を名乗る資格はないだろう。

永「あなたがそんな顔をするなんて珍しいわね」

永琳は無表情でそう言って天使のように眠るフランの背中にそっと毛布を掛けてやる。

霊「そりゃあ・・・私だってちょっとは責任を感じて」

永「違うでしょ」

そう言って霊夢の目の前で立ち止まる永琳。霊夢はわからないというふうに永琳を見上げる。

永「あなたは起こった事を後悔して、くよくよするような女の子じゃないはずよ？」

霊「それって無神経って事？」

そんな手痛い永琳のエールに霊夢は片眉を下げて苦笑いし、更に憎まれ口を叩いてささやかな抵抗をしてやる。

永「今日は泊まるんでしょう？」

その永琳は笑顔で毛布を霊夢に向けてくる。その顔は放って帰るなんていったら張り倒すぞと言わんばかりの笑みに見えないことはない。

霊「もう見たい番組終わっちゃったからね」

永琳はそれだけ減らず口が叩ければ上等と、フフツと鼻で笑いながら霊夢に毛布を手渡してやる。

霊夢はリングの封印から開放されたフランを見張らなければならぬ。更に横には瀕死になった小島当主もいる。目が覚める頃には傷も治っている事だろう、と手当てはしてもらえなかった小島当主。拘束しておくのに勝手に直るものを元氣にしてやる必要もないのだが。

永琳は長椅子に座っている霊夢の横に腰を下ろす。

霊「怪我した人達はもういいの？」

それを目で追いながら負傷者を放っておいて良いのかと永琳に疑惑の目を向ける。

永「ええ、粗方治療は終わったわ。後は勝手に直るでしょ」
霊「そう」

安心したようにため息混じりに言う霊夢は少し疲れているようだ。無理もないだろう。祭りではしゃいでいたのが大半だろうが、もう日付も変わってしまっている。そして今日一日で色々な事がありすぎた。さらにあの霊夢が自己嫌悪に陥るような状況だ。自己嫌悪とは心身ともに疲れるものだ。

永「あなたも少し眠ったら？」

霊「厳しくするのか甘くするのかどっちかにしてよね」

先程から人の心配ばかりをし、疲れ気味の霊夢に少し優しくした矢先に憎まれ口を叩かれる永琳。

永「じゃああなたはどちらがお好み？」

だからそんな霊夢にぐうの音もでないほどの言葉を打ち込んでやる。修行をまともにしない霊夢には厳しさなど呼びではない。だからと言って甘々などむずがゆく感じるのだろう。これも呼びではない。

永琳は霊夢の性格を逆手に取りそんな事を言うのだからたちが悪い。霊夢は肩をすくめてぐったりと壁に背を向けてもたれかかる。

霊「好きにして・・・」

永「そのつもり」

永琳はニコリと笑って掌サイズの本を開いて黙読し始めた。そんな永琳を横目で一瞥してため息をつき霊夢はフランの見張りに戻る。

計画の終わりの夜が、そして夏の終わりの夜がしんと更けていく。

少し欠けた月も輝き疲れて地平線のベッドへ倒れこもうとする頃。

病室では霊夢が永琳にもたれかかるように眠っている。身長差からか霊夢が永琳の肩に頭を置く。そして永琳もさすがに眠くなったのか、丁度良い高さにある霊夢の頭に頭を置いて眠っている。その様子はまるで恋人同士のようなうだ。

虫も眠ってしまったって鳴き声が聞こえないとても静かな夜。

その小さな寝息さえこの静寂を舞台に演奏できそうなほどに静かな夜だ。

そして二人を照らすように真っ暗な病室に真横から月のスポットライトが差しこんでくる。

と、ここでそのスポットライトに反射して光り輝く小さな二つの玉が現れる。それは未だ恋人同士のように寄り添って眠る二人のものではない。そしてフ란の瞳の紅の光でもない。

新「ん・・・」

そこで目を覚ましたのは一日に心臓を二回も撃たれたにもかかわらずフ란に噛まれた事によって吸血鬼化して助かった大島酒蔵当主、大島新之助だった。

真横から差し込んでくる月の光に気付き、眩しそうに目を細める。そして目を背けたその先は天使のような寝顔を皆に披露していたフランが居た場所。そこには小島酒蔵での激闘で付いたと思われる赤い血の斑点がポツリポツリと付いている帽子。フランがいつも被っていた白い帽子だった。

新「フランちゃん・・・そんなっ・・・」

新之助は目を丸くしてそう呟く。そして二発の弾丸を受けた心臓がその音を段々大きくして力強く鼓動する。更に力いっぱい見開かれた新之助の目から涙が零れ落ちてきた。月の光でその涙がきらりと光って落ちる。

そしてフランが被っていたその帽子を握り締める。

新之助は気がそんなに強い方ではない。しかし泣き虫でもない。ならば何故その新之助が泣いているのか。

それは消えていたからだ。今新之助の手に握られている帽子の持ち主が姿を消していたのだ。

新「僕の・・・せいだ・・・」

新之助も知らないわけではないだろうこの計画の契約を。人を傷つけたらどうなるか。

そう、フランは永琳と霊夢、そして新之助が眠っている間に天界に連れ去られてしまったのだ。それは新之助の仇という、しなくても良い復讐のせいだ。

だから新之助は涙を流しているのだ。

新之助はフランを守ると約束した。震えるフランをきつく、強く、抱きしめて約束したというのに、それはフランを安心させてやるためだけに行った儀式的なもの、見せ掛けだけの飾り、それ以外の何者でもなくなってしまうた。

しかしそれは仕方のない事なのだ。新之助は氣を失っていた。そして連れ去られた事にさえ氣付かなかったのだから。

だからと余計に悔しいのだ。何もできないというこの無力感。それはずっと前フランを守ってやる事ができなくなったレミリアと同じような感覚だろうか。

レミリアの時は助けがきた。しかし今回はもうフランは連れ去られていなくなっている。もうどうする事もできない。新之助には何もしてやることができないのだ。

新「くそっ！」

体をくの字に曲げてベッドが揺れるほどに声を張り上げた声はその静寂の夜を一瞬にしてぶち壊した。普段そんな怒鳴り声を上げた事がないせい、はたまた病み上がりだからかゲホゲホとむせる新之助。

静寂を破ったその新之助に不満の声がどこからともなく聞こえてくる。この病室には永琳と霊夢もいるのだ。深夜にそんな大きな声を出せば不満の一つや二つは出てくるだろう。

「うるさいなあ・・・」

そんな不満の言葉が聞こえる。しかし新之助は妙な感覚に襲われる。その声は霊夢や永琳達に当てはめるにはあまりにも幼すぎる。

ふと自分の脇の布団を見てみるともぞもぞと動いている。新之助は軽くめくると白い肌についている、眠たいのか半分になった紅の光を手でごしごしこすっている少女が新之助を見上げている。

それは色素の薄い金髪をくくり上げている髪留めを外し、更に肩をあらわにした下着姿で完全に寝に入ろうとしている。

フ「起きちゃったじゃない！」

いつも自分勝手に、天真爛漫で、だから純粹で、今まで新之助を心配していた事など微塵も感じさせないそんな言葉を吐き捨て、紅の瞳を真っ赤に燃やしてたらす不満の言葉さえ元氣に変えてくれるその少女は紛れもなくフランだった。

新之助はもう考える暇もなかった。それくらいに嬉しく、愛おしく、そして激しい感情が新之助をそうさせた。

新「よかった！本当によかった！」

新之助はきよんとしていいるフランをただ強く抱きしめるのだった。

第二十三章（後書き）

今回はフランはまだ連れて行けなかったですが次回小町に迎えに来させようと思います（たぶん）

そして政治とマスコミどちらが勝つかの戦いになると思います。

ではで〜

第二十四話（前書き）

またやってしまいました。新聞が出てくるのは次回になってしまいました。

そして今回は小野塚小町が出てきます。

小野塚小町・・・「町」

第二十四話

霊（あんな格好して・・・はしたない。ちょっと注意を）

永（まあまあ、もう少し見てましよう）

もちろん霊夢と永琳も起きていた。新之助の声で起きないような愚鈍な二人ではない。

霊（てかいつの間に私の頭を枕代わりにしてくれちゃってるのかしら？）

永（あなただって私の凝り固まった肩を枕代わりにしてるじゃない。結構痛いよ？）

などと小さな声で言い争いをしている二人を尻目に新之助は未だにきよんとんとして、何故抱きしめられているかわからないフランを開放してやる。

フ「何で泣いてるの？」

新「え？」

新之助はおそろおそろる頬に手を当てる。その涙でぬれた手を見ると、なんでもないと言いながら腕で涙をこすり取る。

そしてこの夜には寒そうな格好で新之助の体に馬乗りになるフラン。新之助の布団にもぐりこんで寝ていたフランを抱きしめるために引っ張り出してしまったからだ。

だから新之助は布団の上に放り出されていた、フランに掛けられていただろう毛布を手取る。その下からは小島当主の放った弾丸

によって穴だらけになった服が出てきた。

見るとフランの着ている下着にもちらほら穴が開いている。

新之助は少し複雑な表情でそれを見つめてフランを毛布で優しく包んでやる。

フ「ありがとう」

フランはニコリと天使スマイルでお礼を言う。それに合わせて新之助も微笑む。

しかし馬乗りになっているフランの手が弾丸を受けた新之助の胸に当たると表情が少しだけ歪み、口からはうめき声が漏れ出した。吸血鬼化しているとは言え完全ではないのだろう。まだ傷は完全には癒えていないようだ。

フ「あ、ごめんなさい・・・」

新「あ、ああ・・・大丈夫だよ。それに僕が助かったのはフランちゃんに噛んでくれたおかげなんだし。逆にありがとうって言わないとね」

フ「うん！」

もうお礼を言われて人里に来た時のようにつんけんするフランではない。素直に受け入れて満面の笑みを見せる。フランはくれると言われれば自分の欲しくないもの以外ならば何の躊躇もなくもらう素直な娘だ。

それはそれが本来のあり方かのように無理がない笑顔だった。そしてお礼を言った方もそれほどの笑顔が返ってくればお礼の言いい

甲斐があるというものだ。

新「それで、ちょっと聞きたいんだけど、僕が気を失った後どうなったのかな？」

フ「えと・・・えとね・・・」

フランは天井を仰ぎ見て小島酒蔵であった事を思い出そうとするフラン。そのしぐさも計算しているかのように可愛らしい。新之助は病み上がりだというのにだらしなく顔を緩める。病は気から、これですこしは怪我也治るかもしれない。別の病気は絶賛進行中だろうが。

しかしまだ幼いフランにはその説明は少し難しかったようだ。

フ「私が小島当主をぶっ飛ばした」

フランはニカッと笑うが、その全てを端折って結果だけを言ったフランの説明に新之助は緩ませた表情を苦笑いに変えるしかない。

それで見えていられなくなったのだろう。霊夢が永琳の静止を振り切ってでしゃばってきた。

霊「はいはい、そこまでよ。フラン、あんたはそこから降りなさい。そんなはしたない格好して全くっ」

フ「えっ」

霊「えっじゃないわよ。あんたにはまだ1000年早いわ」

その霊夢の言葉にフランは首をかしげる。

フ「早いつて何が早いのか？」

霊「だからあんたが」

そこまで言って霊夢が言葉を止める。

霊「あんたが・・・その・・・」

霊夢の顔が見る見るうちに真っ赤に染まっていく。

永「全く仕方がないわね。」

と、ここで見かねた永琳が助け舟を出してやる事にしたらしい。医学に秀でた永琳なら比喻を交えて柔らかく説明してくれるだろう。と霊夢はそう思っていたのだが、どうやら違らしい。

永「フランさん、いい？よく聞いて。墓穴を掘るって言うのは今の霊夢さんみたいな事をいうのよ？」

霊「そっち!？」

永「え？他に何があるの？」

霊「だから！フランと新之助さんが・・・」

それを見て永琳はニヤニヤ、新之助は苦笑いを、フランは首をかしげている。そして霊夢の顔は真っ赤に熟れた林檎のようだ。

霊「と、とにかくフラン！降りて服を着なさい！」

フ「えー・・・だってぼろぼろになっちゃったんだもん」

吸血鬼とはいえやはりフランも女の子。新之助の前であんなぼろは着たくないらしい。フランは毛布の下にあったぼろぼろの服をジト目で見つめて言う。

霊「大島酒蔵の人たちが持ってきてくれた代えの服があるから、それを着なさい」

霊夢はため息交じりに長椅子に置かれた紙袋を指差し、もう片方の手で顔を押さえて着替える事を促す。見ると霊夢が座っていた長椅子の横に紙袋が置いてある。フランが寝ている間に従業員が気をきかせて持ってきてくれたらしい。

フ「本当!？」

フランはパツと表情を明るくし、ベッドから飛び降りて中から服を取り出す。一人で着れる?などと茶々を入れる永琳を睨みつけながらフランは服をよたよたと着始める。

そんな光景を口惜しそうに見つめていたところを霊夢に睨まれる新之助。霊夢が着替えるフランのカーテンとなって新之助の前に立ちほだかる。

霊「私が説明するわ」

最初からいるわけではなかったのではほとんど文に聞いた事なのだが、霊夢は知っている事を、小島酒蔵であった騒ぎを説明してやる。その説明を新之助は真剣に黙って聞いていた。

そこで着替えを終えたフランが最後の仕上げに永琳にサイドテールをくくり上げてもらう。そして最初自分が座って寝ていた椅子に飛び乗る。

フ「お待たせ!」

新「あ、フランちゃんもう腕は大丈夫?」

霊夢から聞いたフランの腕の事を心配して聞く新之助。それに全然平気！と白い牙を見せて笑うフラン。

新「そっか、フランちゃんはすごいな」

フ「吸血鬼なら普通だよ。あ」

椅子に腰掛けたフランが何か言い考えが浮かんだ様に気付いたように嬉しそうに声を上げる。

フ「そうだ！このまま新之助も吸血鬼になっちゃえばいいんだよ！」

このまま放っておけば新之助は吸血鬼になれるだろう。そうなればフランは大好きな人とずっと一緒に過ごすことができる。それこそ永久と言えるような膨大な時間を。

新「あはは、それいいね・・・でも・・・太陽と一生お別れはなんだか寂しいなあ」

フ「だったら私が新之助の太陽になって」

と、そこでフランは言葉を切って固まってしまう。あまり乗り気でない新之助に自分が太陽になる事でその問題を解決しようと、レミリアに教えてもらった文言を並べ立てようとした。

その時に脳裏に何かが浮かんだのだ。新之助に銃を向けた時、大事な人を自分の手で殺してしまうかもしれないという時に感じた不思議な、そして妙に懐かしい感じ。

新「どうかした？」

しかし突然黙り込んでしまったフランを心配した新之助に、今まで考えていたものが頭の中から追い出されていく。それにフランはなんでもないと首を振り、更にそれをごまかすようにそうだ!と叫ぶ。

フ「あいつ新之助の両親も殺したって言ってた!」

フランは小島当主を殺さなかった。それは新之助に殺さないで欲しいと、その身を挺してまでかばうほどに懇願されたから。しかしそのせいで新之助は撃たれフランも殺されかけた。だからだろうか、フランは新之助を睨みつける。

新「あ、ああ・・・そうだね」

その視線に新之助は少し体を仰け反らせてしまう。それほどにフランは怒っている。よほど止められたことが悔しかったのだろうか。

霊「全く、許せないわよね。今からもう少しお灸を据えておく?」

小島当主を半殺しにした霊夢がにやりと笑って長いすの横に未だ透明になって縄で縛られている小島当主のほうをちらりと見る。

新「じよ、冗談は辞めてくださいよ、霊夢さん・・・」

霊「でもあのくらいの妖怪ならたくさん封印してきたけど?」

新「それじゃあまた憎しみが増えるだけです。僕はそんな事したくないんですよ」

どこかで聞いたようなそんな言葉。誰かが誰かを殺せばその仲間がまたその誰かを殺しに来るという無限地獄。いや、それは誰かがいなくなれば終わる地獄。またはその途中で誰かが復讐をやめれば

終わる事。それに新之助は買って出た。しかしそこに待っているものは憎しみと絶望のスパイラルだ。

新之助もさぞ思い悩んだだろう。昔あった遠い国で起きた悲劇のヴァンパイアハンターのように。

新「だから・・・フランちゃんもごめんね。不完全燃焼だったかな？」

未だに怒って新之助を睨むフランにすまなさそうに顔を向ける。

フ「ちがうよ！私が怒ってるのはそんな事じゃないもん！」

新「え？」

フ「両親は事故で死んだって新之助は私に言った！」

フランの口から出てきた言葉は新之助も霊夢も予想できなかったのだろう。口をぽっかりとあけてフランを見ている。更に新之助が思い悩んでいた事、それをそんな事で片付けてしまうフラン。

フ「新之助の嘘つき！」

フランはプイッとそっぽを向いてしまう。口を尖らせ頬を膨らませシリアスな内容の事など今まで聞いていなかったかのようなそのしぐさ。

フランは不完全燃焼だから怒っていたわけではない。それは新之助に嘘をつかれてただ怒るという単純明快な事だったのだ。新之助の裏の事情などそんな事、にして。

新「ぷっ」

と不意に新之助が噴出してしまふ。続けて霊夢も噴出して笑ってしまう。フランがそんな事を言うものだからそんな重要な事で悩んでいる自分が馬鹿らしくなったのだろう。そしてそんな自分勝手なフランに霊夢は笑うしかなかったのだろう。

そんな二人にフランの顔は鳩が豆鉄砲を食らったかのようなのだ。

フ「な、何がおかしいのよ!」

霊「あんたねえ、もうちょっと新之助さんのことも考えてあげなさいよっ」

霊夢は新之助を気遣いながらも未だにケタケタと笑っている。

新「さすがはフランちゃんだ。今まで悩んでたことが馬鹿らしく思えてくるよ」

フ「どゆこと?」

未だ鳩から進化できないフランに霊夢が笑いながら、そしてじれったそうにフランの頭に叩くように手を置く。

霊「もうっあんたが好きで好きでたまらないってことよ!」

フ「いたい・・・」

そんな不平をもらすフランの頭をワシャワシャとかき回してやる霊夢。もう夜が明けそうだというのにこの病室はやけに騒がしい。そんな光景を永琳も楽しそうに見つめている。

しかしそんな和やかな雰囲気も長くは続かないらしい。開け放たれた窓からこの世で、そして今この瞬間で一番見たくないものが現

れてしまったのだから。

その何者かの雰囲気、に霊夢が気付き、続いて永琳、フランド、そして人間である新之助さえがその気配に気付く。

窓の枠に白装束の足袋に赤い草履を履いた足が掛かるのが見える。少し癖のある髪の毛を二つに結った女。その女の手には大きな大きな鎌が握られていた。

町「皆さん、どうもこんばんわ」

この夜に不気味に光る鎌と怪しい笑みを浮かべたその女は小野塚小町。死んで魂になった亡霊を迷う事のないようにあの世へ連れて行く死神だ。

町「待たせたね」

窓からゆっくりとした動作で入ってくるその姿は、さすがは死神と言ったところだろうか。死がついていても神。どこか神秘的で触れる事ができないような雰囲気をかもし出している。フランドも新之助も口をぽかんと開けてその神々しい光景を見つめている。

そんな神々しくゆっくりと、しかし堂々と入ってくる死神を霊夢は窓の外へ蹴り飛ばした。

町「あだっ」

霊夢の不意打ちキックで窓から転げ落ちる小町。霊夢は静かに窓を閉めてカーテンを閉めた。

霊「ふう、蹴りだしてやったわ」

町「何がふうだい」

小町はいつの間にか霊夢の後ろに立って蹴られたところをさすっている。恐らく小町有能力、距離を操る程度の能力でこの病室までの距離を縮めてやってきたのだろう。

霊「あんた達はいつの間にか人の後ろに沸く趣味でもあるの？」

町「なんだい人をゴキブリみたいに」

霊「そうね、あんたはサボテンだったわね」

永「そのサボテンさんにはお引取り願いたいところだけど？」

いつもサボってあちらこちらでサボの付く仇名を付けられて親しまれている小町。その小町がここにやってきた理由は一つしかない。

町「それがそういうわけにもいかないんだよねえ。怖いお方が睨んでるもんでね」

フランも新之助も今まで小町を見たことがなかったのだろう。顔を見合わせる。それもそのはずだ。死神など見るとすればそれは死ぬ時だけだからだ。

町「あんたがフランドールⅡスカーレットだね。あたいは小野塚小町」

フ「・・・何か用？」

町「この鎌を見て何か気付かないかい？」

フ「・・・稲刈り？」

町「そうそう、これをこうやってざくっさくっ・・・とったどおとおお！って違う！」

フ「つまんない」

町「あ、あんたらの乳突っ込みのほうがよくつまんないよ!」
永「へえ・・・私達の漫才を愚弄する気? あなた・・・死ぬわよ?」
町「おっと、その弓を納めな、これ以上命を粗末にするなんて、い
ただけないねえ」

永「粗末になるのは誰の命かしら?」

町「あたいのだ」

永「・・・負けたわ・・・ひとつなぎの大秘宝には勝てないわね」

霊「負けちゃうんだ・・・」

新「何ですかこの寸劇は・・・」

その終わりを締めくくった新之助に小町が視線を向ける。

町「おや、おかしいねえ。あんたは寿命が尽きかけていて目をつけ
てたはず」

小町は新之助を目を細めてじーっと見つめる。

霊「どうせまたサボったんでしょ」

町「あはは、でも増えてるからいいや」

新之助は何かを感じ取ったのか、はっと表情をこわばらせる。寿
命が増えているという言葉に覚えがあったのだろう。そしてフラン
が稲刈りと言ったあの大きな鎌。

新「もしかしてあなたは死神様!？」

町「おやあ? あんた人間にしては察しがいいねえ。そうさ、あた
いはその死神様さあ。そしてフランドール!」
フ「っ?!」

小町はそう言ってフランを指差す。その指はフランの目の前に突

きつけられる。

フランはその死の宣告の前振りとも言えるその言葉にびくりと体をすくませる。

ついに来る時が来たらしい。契約を破ったフランに罰が下る時が。

小町は指差した手を広げてフランに掌を差し出す。そしてニコリ。

町「行こうか、天界へ」

第二十四話（後書き）

うーん、小町はこんな感じでよかったのだろうか・・・今更ながら動画で見た小町と原作とは大分違っていた事を改めて知りました。なので1話の小町とは少し違ったかも知れませんがそれは寛容な目で見てくれると幸いです。

次回でトントンと行けば後2話ですか。そして後始末という感じで1〜2話という感じです。

ここまで呼んでくれてありがとうございました。

では〜

第二十五話（前書き）

今回は小町が鬼畜と化してしまいます。小町はこんなキャラではないというのは重々承知ですが四季がでるまで見ていただければ・・・

と四季がでてくるのはこの話の最後なので最後まで見てくださいますように言っているようなものですが・・・更に次の話を読まなければわけがわからないかもしれません・・・

とりあえずどうぞ

四季・・・「山」

第二十五話

小町から差し出された手にフランの表情は険しい。眉間にしわを寄せて差し出された小町の手を睨みつける。

町「なんだ、緊張してんのかい？大丈夫、世間話でもしながらゆっくり行くからさ。これでも皆には評判いいんだよ」

小町は険しいフランの表情を見て安心させてやろうとも思っただろうか、普段とぼけた表情をしているのに仏のように柔らかい表情で微笑みかける。

しかしフランにとって柔らかく微笑む小町の表情は、天界という地獄へと誘う悪魔の打算的な笑顔以外の何者でもない。

フランの表情がますます険しくなる。そしてついにそっぽを向いてしまう。

町「・・・あのさあ、もう天界行きは決まってんだ、ここでごねたって何にも変わらないよ？」

そしていつまでもその手を取らないフランに痺れを切らしたのか、いつも暢気な声調の小町が突如イラつくようにそして脅すような口調になってフランを促す。

そのいつもと違う小町に霊夢、そして永琳まで訝しげに小町の顔に視線を向ける。更にフランに限っては小町の目に視線を上げ、そして小町の言い方が気に入らなかったのだろう、紅の瞳を滾らせて睨みつける。

空気がぴりぴりと震えている。それは小町に向けられているフランの威圧感。しかし小町はそのプレッシャーに眉一つ動かさない。

フランは今腕輪をしていない。ここでフランが暴れだす事は十分にありえる。もしこんな所でフランが暴れようものならこの診療所は軽く破壊されてしまうだろう。更にここには大勢のけが人がいる。せっかくフランが殺さないでいた小島酒蔵の従業員も瓦礫の下敷きになってしまう。

町「なんだいその目は、気にいらないねえ」

そして更に小町がフランを睨み返す。と同時にぴりぴりとした空気が一気に張り詰めたものになる。それは小町とフランの視線がぶつかり合って。

そんな時、新之助はというと情けない事に一触即発のその空気に飲まれて一言も発する事ができないでいた。普通の人間が死神と吸血鬼の高レベルな睨み合いについていけるわけがないのだが。

町「ずいぶん飄々としてるからとくに覚悟はできてると思ってただけだねえ」

フランは覚悟はできていた。新之助が気を失った時、片腕になりながらも新之助をきつく抱きしめ放そうとはしなかった。それはもうすぐ新之助に一生会えなくなると思ったからだ。新之助の布団に潜り込んだのも単に寝にくいからではないだろう。

しかしそこで新之助の温もりを知り、更に小町が来る前の和やかな雰囲気がフランの覚悟を知らないうちに碎いていったのだった。

そして

町「あ、もしかして誰か助けに来てくれるとでも思ってるのかい？
それで時間稼ぎでもしてる？」

フ「・・・」

フランは心の片隅で無意識に思ってしまった。もしかしたら
天界に行かずにずっとこのまま平和に暮らせるのではないかと。

だから新之助やその周りの友人、更には死神とは思わなかったと
はいえ新顔の小町にまで普段どおりに話してしまっていたのだ。

そんな無意識のうちにあった柔らかいところをつつかれたフラン
は小町から一瞬目をそらしてしまう。

しかしそんなフランを小町は嘲るように笑う。

町「誰も来やしないよ」

小町の声が突如冷たいものに変わる。

氷を背中に滑り込まされ、つい体をすくませてしまうほどに温度
の低いその言葉はフランの背中にスーッと入っていったようだ。フ
ランはびくつきながらそらした視線を床のどこか一点に固定して更
に目を見開く。そのフランの体は震えている。

フランが恐れているもの。それは天界に幽閉される事はもちろん
だが、そんな事よりももっと恐れるものがあった。

町「あんたみたいな厄介者、誰も迎えに来るわけないだろ？」

フランが最も恐れるもの。それは紅魔館の住人や紅魔館を訪れる者達に嫌われてしまう事だ。

町「忘れちまったわけじゃないだろうね？ここに来る前にあった事。あたいはちゃんと覚えてるよ」

フ「え！？なんで」

町「今まで世話になった人達に嫌いだ死ねだと叫び散らして」

フ「それは・・・」

町「自分が天界に連れてかれそうになったら助けを請う？虫が良すぎるんじゃないかい？」

霊「小町！いくらなんでも言いすぎよ！」

耐え切れなくなった霊夢が小町を制止させようとするが小町の掌が先に霊夢の顔に向けられ逆に静止させられる。

町「あたいは今フランドールと喋ってるんだ。邪魔すんじゃないよ」

小町は霊夢の方を見もせずにはフランを見つめている。

そしてそれが災いしたのか、小町がニヤリと笑う。

町「霊夢が助けてくれる」

フランは霊夢の挙動に思わず視線を向けてしまっていた。フランはびくつきながらはっと気付いたように小町に視線を戻す。だが時すでに遅し、だ。

フ「こ、これはっ」

町「やっぱりね。あんた」

フ「違うっ」

町「違うこたあないだろ？あんたは皆に甘えてんのさ」

フ「違う！」

町「誰かが何とかしてくれるって」

フ「違う！！」

町「だから自分が何をしたって」

フ「違うって言ってるじゃない！！！」

小町の言葉を遮り、目を思いっきり瞑り、体をくの字に曲げて思いつき叫ぶと同時に、フランの右手に時計の針のような剣、レーヴァテインが出現する。

霊「フラン！？」

永「ダメよ！フランさん！」

フ「あんたに何がわるって言うのよ！」

フランは小町に向けて剣を振りかざす。霊夢が止めようとするが距離的に間に合わない。

永琳も身を乗り出すが一呼吸遅かったようだ。

しかしそれはフランがレーヴァテインを振り降ろす行為に対してではない。フランを止める者に一呼吸遅れたのだ。

新「やめるんだ」

それは他の誰でもない、フランをこんな騒ぎに巻き込んでしまった、そしてフランが連れて行かれたと勘違いして悔し涙を流した新之助だった。

新之助はベッドから転がり落ちるようにしてフランと小町の間に割って入った。そして小島当主にそうしたように小町を背にしてフランに向かって両の手を大きく広げる。

フ「新之助・・・」

新「落ち着いて」

フランは止まった。止まるしかないのだ。どんなに激昂してもそこには絶対に手を出してはいけない人がいる。それはこの人里に来て誰に教えられるでもなく自分で学んだ事。小島酒蔵でもそれは経験済みだ。

しかし不思議なことにこれは新之助が小町を助けたのではなく、新之助がフランを助けた構図になる。フランが天界の使いの死神に手を出せばどうなるか。結果は明々白々だ。

更に悪い事に周りの皆がフランを助けようとすればするほどフランは泥沼にはまっていく状況。小町は新之助に止められているフランにそれ見たことかと頬を吊り上げ笑みを浮かべている。

町「さ、茶番は終わりだよ。これであんたが嫌いな連中と一緒に住まなくてすむ」

フ「違う・・・」

もう弁明のしようがないと感じたのか、その声は小さく、そして震えている。

町「ああ、そっか、そうだねえ・・・ごめんよ。それは違うよねえ」

小町は頭をぼりぼりと掻き、へらへらと笑いながら言う。そして

次の瞬間とどめとばかりにとんでもない言葉を吐き出した。

町「あんたを嫌いな連中と一緒に暮らさなくてすむ、が正しいね」
霊「小町！」

フランは涙を目に一杯ためて拳を握り震えて俯いてしまっている。

覚悟を捨ててしまった事、誰かが助けてくれるなどという希望を持ってしまったこと、更にはそれを言い当てられ罵倒され、しかしそれを爆発させる事も叶わない空しさがフランをそうさせたのだ。

町「よかったじゃないか、自分を嫌いな連中なんかと一緒に暮らし
ても面白くないだろうからね」

霊「いい加減に」

霊夢がついに痺れを切らし、ありったけの札を握り締めて小町に迫ってくる。

その時小町が霊夢の方へ手を向ける。

霊「しろおおおおお！？」

不思議なことに霊夢が小町から遠ざかっていく。小町の距離を操る能力だ。霊夢は米粒のように遠くなっていく。しかし見れば霊夢の立っているところは病室の中だ。その病室がまるで歪められて更に伸ばされたように変形している。

霊「へるぷみー！」

永「霊夢さん・・・」

町「全く騒がしいね、あたいは今フランドールと」

新「いい加減にして下さい！」
フ「ッ？」

小町の言葉を大きな声で叫んで遮ったのは手を広げて小町の方を向きもしない新之助だった。フランを助けるためでないと体が動かないくらい怖かったであろう新之助が今度は叫んだのだ。

そんな新之助の必死の叫びに小町は面倒くさそうにため息をつく。

町「今度はあんたかい」

新「死神様・・・いくらなんでも酷すぎませんか？」

町「なんだい、あんたもそのちっこいのをかばうのかい？」

新「いけませんか？」

町「まったく・・・どうしてだろうね。人ってのは自分の気に食わない事があるとすぐこれだ。少しの不満くらい我慢できないのかね」

そんなどこかで聞いたような人間への不満を吐き捨てて小町は肩をすくませて永琳の方を見る。だが永琳は無表情で無反応だ。

そして新之助はフランと小町の間にいる。引き離すわけにはいかないらしい。小町は能力を使わない。

新「あなたも同じではないですか？」

町「なんだって？」

新「あなただってフランちゃんの実行が気にいらぬから、こんな事してるんじゃないんですか！？」

新之助が首だけを後ろに向けて、横目で小町を睨みつける。

町「・・・あんた死神に喧嘩売るつもりかい？」

そして今度は小町の目が新之助を睨みつける。先程フランが小町を睨みつけたように空気がぴりぴりと震える。新之助はそれがとても恐ろしかっただろう。気の弱い人間なら気を失って失神しているかもしれない。

新「だ、だったら」

しかし何か理由が、大義名分があれば人間は強くなれるものだ。それは良くも悪くも。

新「だったらどうだと言うんですか!？」

新之助は今度は体全体を小町に向ける。

町「・・・そこをどかないとあんた、死ぬよ?」

新「一度は死んだ身です」

新之助の足は震えている。ぶるぶると遠くにいる霊夢からでもわかるほどに震えている。手も体も。それは傍から見れば笑ってしまいうようなほどだ。

しかしそんな笑ってしまいそうな新之助の行為はフランを守るという覚悟からきている。だからいくら震えようが笑われようが退く事はない。

町「そうかい・・・じゃあ持ってくよ!あんたの魂!」

小町の持っている鎌が新之助を襲う。月の光に鎌の刃がキラリと光る。その鎌の先端は新之助の首に真っ直ぐに向かっていく。新之

助はその先の光景が怖かったのだろう、目をぎゅっと瞑り備える。

次に目を開けたときはどこを見ているだろう。低い視線で床を見ているだろうか、はたまた床に寝転がって仰向けになり天井を見上げているだろうか。

しかしあわよくば次ぎに開ける目の前の光景は自分の好きなものが移って欲しいと思う。

ガッ

と何かがぶつかり合う音をする。

フ「新之助は強いね」

そしてフランの声が後ろからではなく前から聞こえてくる。新之助は恐る恐る目を開けるとそこには信じられない光景が広がっていた。

いつの間にか新之助をすり抜けて小町と新之助の間にフランがいた。そのフランの手にはレーヴァテインが握られている。そのレーヴァテインはいつもならば破壊する道具。しかし今は自分の大切な何かを守るために使われている。

町（あれ？ 鎌が動かないぞ？）

その小さな体のどこにそんな力があるのだろうか和小町は不思議に思っている事だろう。

新「フラン・・・ちゃん？」

小町の鎌を止めているフランはなにやら罰が悪そうにうつむいている。しかしそのよく見えない表情は怒ってはいない。月の光に照らしだされているフランの表情は逆に微笑んでいるように見える。

フ「私、覚悟はできてたよ？」

なにやら弁明するように俯きながら新之助に言葉を投げかけるフラン。

震える新之助を見もしないのはその光景がおかしいからではないだろう。自分の覚悟のなさに対して新之助の覚悟は相当なものだった。だからそんな新之助に合わせる顔がないのだ。

フ「でも皆といると・・・もっとこっちで皆と遊びたいな～って・・・ちよっと思っちゃった」

願ってはけない事、それをフランは思ってしまった。そのフランは照れるように笑う。その笑顔はどこか悲しげだ。

新「フランちゃん・・・」

フ「私分かったんだ・・・今まで普通に遊べてた事って、とっても幸せな事だったんだって」

新「な、なら・・・僕が何とかして」

それは今更思ったところでどうにもならない。そして言ったところで新之助や霊夢に迷惑をかけるだけだ。

だから言えなかった。地上で暮らしたい、天界になど行きたくないと。しかしその本音をフランが今言った。

それが意味すること、それは

フ「でも、やっぱいいや」

決別。ここで別れると決めているのなら何を言おうと何も迷惑をかけることもない。

新「え？」

見るとフランは先程まで俯けていた顔を上げて新之助を見上げている。それは今までにないにこやかな表情で。

天使のようなその笑顔、いつもの新之助なら顔がほころび、でれでれと鼻の下を伸ばしていたことだろう。だが今の新之助の表情はそんな柔軟性を持ち合わせてはいなかった。

しかしそんな凝り固まった表情でもぶち壊してくれるのかフランのはずだ。だがそうならないのはフランのその笑顔があまりにも自然すぎる不自然な笑顔だったからだ。

フ「だって私、覚悟できてるもん」

新之助はもう何を言ったら良いか、自分が今何をすべきなのかわからなくなっていた。

フランはもういいと言っている。ならば助ける必要などないのではないか。更に今のフランはどこか吹っ切れたような良い表情をしている。ならばここにいてくれと抱きしめ、とどめる事はせず、ただ悲しそうな顔をして送り出してやればいいのではないか。

しかし新之助はフランに行つて欲しくない。その大義名分を掲げてフランを力の限り抱きしめて離さなければいいのか。

町「んじやあ行くかい？」

小町は鎌を元に戻し体と平行になるように床にトンと突き立てる。

フ「うん」

新之助がそんな思案をめぐらせている間にフランは振り返り小町の手を取っていた。

新「そ・んな・まっ

そんな弱々しく筋の通っていない新之助の声ではフランは振り向きもしない。

町「へえ……じゃあもう紅魔館の皆と暮らせなくてもいいのかい」

小町もそんな新之助を無視して吹っ切れたようないい表情のフラインに話しかける。

フ「いいよ」

町「嫌いだから？」

フランはもう覚悟を決めたというのに小町はまだ何か気にいらないのか、そんな意地悪な事を間髪いれずに聞いてくる。

フ「ちがうよっ」

小町の意地悪にフランはすぐさま反応し小町を睨みつける。

フ「あの時は殺したい程嫌いだっただけ！」

町「じゃあ今は？」

フ「今は」

と、ここでフランは俯いて横目で小町の様子を伺うように見る。
本音を言ったらまた意地悪な言葉が飛んでくるとでも思ったのだろう。

町「あはは、やっぱいいよ。あんたのその顔だけで十分さ」

フランは不思議そうな目で小町を一瞥し、自分の顔を両手で挟んで少しこねてみたりしている。そんなフランを見て小町はケラケラと笑っている。

町「んじゃ」

小町がフランの小さな手を握って引き寄せる。フランが連れて行かれる。

新「っ」

そんなのは絶対ごめんだ、と新之助は心の中で叫ぶ。しかし実際に声に出して言う事ができない。それはフランを救うという大義名分が意味を成さなくなったから。

フランは助けを求めてはいない。ならば新之助が助けたいから助ければいいのではないか。それだと小町の言ったような人間に成り

下がってしまふ。

と、ここまで思ったのとほぼ同時、新之助はフランに向かって走っていた。なぜなら新之助は普通の人間だったから。

フ「し、新之助!？」

新「行かないでくれ! フランちゃん!」

新之助が後ろからフランを抱きしめる。フランに行って欲しくないという人間の浅ましい願望を思いっきり表に出した新之助のその行為。

新「もう一度考え直してくれないか?! 僕が何とかするから!」

フ「新之助・・・その・・・」

新「フランちゃん!」

フ「お胸に手が」

フランはそれを新之助を引き離す呪文のように照れながら言う。

新「あ、ごめん、気付かなくて」

フ「む」

新之助は手を離しフランを開放したが逆にフランの睨むような視線が新之助に突き刺さる。

それを見て小町は笑う。それはあざ笑うのではなく本当に楽しそうにケラケラと笑うのだ。

町「四季様、こんなもんでどうでしょうか?」

そして今までの声調が嘘のような間の抜けた声で扉の方へ首だけを動かし、そんな事を言うのだった。

その病室の扉から入ってきたのはまだ小さな少女で霊夢と同じくらいかやや低いといった背丈。しかし顔つきは大人びていてどこか神々しさの雰囲気纏っている。手には笏のようなものを持っていてそれを胸の辺りに立てて入ってくる。

たいそうな帽子を被り扉からゆっくりと入ってくる者、それは幻想郷の死者を管理している神、所謂閻魔と言われている者、四季映姫だった。

山「やりすぎだ、馬鹿者」

第二十五話（後書き）

小町の鬼畜文句を書いているとすこし楽しくなっていました。前に言っていた文の記事は次回にでてきます（申し訳ないです）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第二十六話（前書き）

前々回の四季映姫の台詞で終わった所くらいからです

注意

四季映姫の口調は原作とは全く違います。ご了承ください。

結界が壊れたら幻想卿がなくなるなんていう事が何処かの設定であった気がしますがそれは今回はなしということ。

第二十六話

少し前

天界

町「今なんと？」

山「フランドールは黒だと言ったんだ」

小町はそんなフランへの判決に先程のフランを罵倒していた時とは全く逆の感情を顔に表す。更に口をぽかんと開けて呆然としている。

山「何かおかしいか？」

四季はただ目を瞑り椅子に座って腕を組んでいる。四季からはなにやら不満に似た威圧感がぴりぴりと感じられる。その静かな四季の威圧感に小町の開いている口はおずおずと塞がったものの、そのまま閉じてしまい何も言えずにいる。

山「奴は契約を破った。契約を破ればどうなるか忘れたわけではないだろう？」

四季はやっと目を開けた。しかしそれは小町に何か問う、と言うよりもただ小町を睨みつけただけのような目。しかも片方の目はまだ閉じられている。

四季の身長は低く、椅子に座っていれば当然背の高い小町からは見下ろされる形になる。というのに下から片目で見上げてくる四季

の視線はなんとも言えない迫力がある。

町「で、でも、少しはフランドールの努力を考慮して」

山「甘いな、小町」

四季にびくつきながらも、先程まで塞がって開かなかった口をこじ開け、抵抗しようとしたところで四季の有無を言わさぬ一言で釘を刺され、また口を塞がれてしまう小町。

山「白は白、黒は黒だ」

町（相変わらず）

口を塞がれば心の中で不満を叫ぶしかない。きっぱりと言い放つ四季に愚痴の一つでも言いたくなっただろう。

だが心の内に秘めた言葉というものは反響し顔に出てしまうもの。それを長年上司をしている四季が気付かないわけがなかった。

山「頑固だな、なんて思っている顔だな、それは」

四季は小町の心の口まで塞いでしまった。言い当てられた小町は縮こまって沈黙するしかない。

しかし部下を威圧することだけが上司の仕事ではない。縮こまる小町を一瞥すると両目を瞑って深いため息をする。と同時に先程の不満に似た怒りも吐き出されたのか、机に片肘を突いて頬杖を突き、気の抜けた態度をとる。

山「私も鬼ではない。今回の件、少しは奴の努力を考慮して懲役1万年くらいにしてやってもいいと思っている」

町「はあ」（この方は本気でこんな事思ってるからなあ）

妥協案を提案しているのだろうが妥協案になっているとは言いがたい。

それは小町が何を考えているのか表情でわかるくらい長い付き合いならばその逆もまた然りだ。どうやらネタではないらしい。

山「ただ」

町「ただ？」

山「上の連中にごねられてな」

町「ああ・・・」

そこでまたため息をつく四季。そして小町にもなにか心当たりがあるのだろう。つい口からその言葉が出てしまう。

山「察しがよくて助かる」

小町の哀れみの視線に四季が残念そうに鼻で笑ってそんな事を言う。

数百年前フ란の羽は戦争の火種となった。それ程の意味がフ란の七色の羽には込められていた。

では今はどうか。幻想郷に移り住んだフ란は長い間地下に閉じ込められていたせいか周りに迷惑をかけるということはあまりなかった。

しかしそれはフ란の力があまりにも危険だからということからだ。なのにフ란が徐々に外で遊ぶようになった。

その事が幻想郷を管理する四季、更にその上の者達に危機感を与えていた。それはフランの『ありとあらゆる物を破壊する能力』が原因だった。

霊夢や町民も気付いたようにその力は人里の結界を破壊してしまう恐れがある。そうなれば幻想郷と人里がつながる事になってしまふ。そしてこれを好機と、押し寄せる妖怪がいけないという保障はどこにもない。またその場合の被害は計り知れない。

いつの時代もフランにとって住みにくい世界のようなのだ。

山「お前が思っている通りだ。上も奴の能力には前々から目をつけていた」

ため息を推進力にして四季は椅子に寄りかかる。

前々から幻想郷にいい影響を与えない、目障りなフランを排除し、危険因子を消そうと考えていたのだろう。そして危険な能力を持ったフランが幻想郷で暴れていればいずれ町民が気付き、このような事が起きるだろう、と天界も予想していたに違いない。

そこへ天界が待ち望んだ今回の計画が降って沸いた。

そこでさりげなく、フランを天界に幽閉してみてはどうか、と提案すればフランにとってそれ程身にしみる罰はない、と皆飛びつくだろう。その奥には天界のどす黒い思惑が渦巻いていた事など知る由もなく。

そんなどす黒い色で背景を塗り潰されればどうなるか、その背景

で少しでもフランが罪を犯せばどうなるか、火を見るよりも明らかだ。

今の状況は天界にとっては柵から牡丹餅、フランにとっては最悪だろう。

そして判断を下すのは幻想郷地域の死者の管理を任されている四季。天界から何を言われたのかは言うまでもない。四季の苛立ちはそこから来ていた。

町「だからフランドールを上と言われるまま閉じ込めよう？」

山「ふん、私とてそんな事に甘んじる気はさらさらないんだがな」

四季は背もたれに体重を預け暢気に天を仰いで何か考えている。

町「だったら上に言い返してやればいいじゃないですか」

そこへ小町がその暢気な四季に提案をする。その語気は強められ更には上司を睨みつけるような視線で。しかしそれは何の効力も持たない青臭い提案。上に進言するならば必要なものがある。

山「どうした小町、いつものお前らしくないな。何処かのメイド見たいだぞ？」

町「あ、あたいののは本物ですからね！」

山「私へのあてつけか？」

上は恐らくフランが契約を破ったと大義名分を掲げ、フランという危険因子を排除する、という目標を遂げようとするだろう。それを防ぐならば、それに見合うネタが必要だ。

それにぶつけるにはフランが努力をしているという事など余りにも小さすぎる。町民を傷つけた罪はそれ程重い。

「あやや？ どうしたんですかお二人とも」

そんなシリアス（？）な場面で笑顔で、更にひょうきんな声で二人の後ろに立っているものがいた。

文「特に小町さん、あなたが真剣な顔するなんてお米でも降るんじゃないですか？」

新聞記者の射命丸文だった。

町「あんたかい・・・今取り込み中だよ」

文「あやや、別にい・つ・も、のように世間話をしにきたわけではないんですよ？」

山「ほう」

町「山に帰れ天狗。お前の口には災いが満ちている」

文「言われなくてもすぐ立ち去りますとも。これをばら撒かないといけないですから」

文の手には新聞の束が握られていた。その一枚を小町に手渡す。

文「はい、どうぞ」

町「新聞？」

文「では私はこれで」

文はさっそうと飛び立ち、わずか数秒で見えなくなってしまった。

町「これは・・・」

山「ん？どうした」

見出し

お手柄！正義のヒロイン登場！？町にはびこる妖怪を見事に逮捕！
天使の悪魔フランドールⅡスカーレット！！

と書かれ、フ란の写真が何枚か貼られていた。そして霊夢が小島当主を半殺しにしている写真、更にその下にはけが人の人数や名前が丁寧に記載されていた。

町「しかし物事も捉えようですね。これってもしかして上に対抗できぬネタに」

山「ならん」

四季は即座にそう吐き捨てる。

町「即答ですか」

山「こんな紙切れ、上に持っていても鼻紙にされて終わりだ」

町「鼻を噛んでいるときに顔面パンチを食らわせて黙らせるというのはどうでしょう？」

山「名案だがこちらは断頭台の露と消えるだろうな」

町「安心してください。あたいが責任を持って地獄へ連れて行きますので」

山「露と消えるのは私だけか？しかも地獄」

町「あたいは何も知らなかった」

山「・・・死んだ人間は『ほ』の付くものになるらしいな」

町「ほ？」

山「知らぬがほ」

町「ほ、ほととぎす！」

山「信長は言った、鳴かぬなら、殺し」

町「家康でお願いしますってそんな事ではなく、一度くらい試してみましよう」

山「ダメだ、小さすぎる。こんな事じゃ上は見向きもしてくれんだろう」

町「そんなぁ・・・ん？」

小町が何かに気付いたようにその記事の一つをじっと睨みつける。そして慌ててその豊満な胸に仕舞い込んだであろう折りたたまれた紙を取り出す。

しかし取り出した時に慌てた為か着物がはだけて大事なところが見えてしまいそうだ。

町「これを見てください」

山「別にうらやましくなんかないぞ！断じて私は」

町「違いますよ、こっちです、これを見てください！」

山「ん？」

小町は新聞に記載された記事の一つを指差す。それと小町の胸から取り出された紙に書かれているものを見比べる四季。

町「これなら上も黙らせる事は可能では？」

山「成程な、これならばいけるかもしれん」

人里

霊「で？その上を黙らせるってネタはなんなのよ」

小町によって遠くへ移動させられていた霊夢が小町を座布団代わりににしてそんな事を問う。

町「ならそこからどきなよ！」

遠くから走ってきた霊夢に札を投げつけられ、床に倒れたところを霊夢に上から乗られていたのだ。そしてその小町に事情を全て話させていた。

霊夢は渋々といった感じで小町の上から退き、更に手を貸してやる。

小町は着物に付いた汚れを払い、更に胸の隙間から紙切れを出す。

町「まずはこれを見なよ」

霊「文が書いた新聞じゃない。こんなちんけな記事でどうにかなる
とでも？」

町「ここを見な」

小町が指差したのは新聞に書かれていた負傷者のリストだった。

霊「これが何だって？」

町「これと見比べてみなって」

霊「うゝん？」

永「同じ名前が20人くらいいるわね」

霊「確かに……それに大島……新之助？」

新「え？」

皆が新之助を見る。その新之助はフランと顔を見合わせる。何かなにやらわけがわからない。そのネタとはなんだというのだろうか。

永「ああこれって」

小町が持っていた紙は何か、永琳は気付いたようだ。それはこのリストと文の作った負傷者のリスト、更には昨日何が起ころうとして変わりに何が起きたかを考えれば分かるはずだ。

そして小町は死神なのだ。

町「そう、これは昨日死ぬはずだった人間の名前だよ」

昨日、新之助は撃たれて死ぬ運命だった。それで小町も新之助の寿命が延びていると言ったのだろう。

更に新之助が撃たれた事で大島酒蔵の従業員達が敵討ちに小島酒蔵を襲い双方かなりの死者がでた事が小町のリストでわかる。そのリストには大島酒蔵の従業員も大勢載っていたのだ。

新「そうだったのか・・・」

さすがに顔から血の気が引いてく新之助。

フ「よかったね、皆死ななくて」

フランは分かっているまいだろう。何故その人たちが死ななかったか、自分のした事がいかに重要な事かを。

フランが新之助に噛み付き、更に新之助の回復を大島酒蔵の従業員が待っている間に小島酒蔵を強襲した事によって双方に死人が一人も出なかった事を。

ニコリと笑うフランがとても愛おしく感じたのか、また新之助はフランを抱きしめる。フランはまたキョトン顔だが、新之助の顔にはフランにもらった暖かい言葉で血の気が戻る。更には笑顔が戻っていく。

そしてこれならば上を黙らせるに十分すぎるだろう。フランが人を傷つけた為に数十人の命を救ったのだから。

霊「成程。これをネタに上を黙らせようってわけね」

山「そうだ。もう報告は済ませてある」

しかしそう言う四季の顔は険しい。

山「ただ、上もこのままでは引き下がれないらしい」

霊「？」

永「さっきの小町さんの事と何か関係が？」

山「その通りだ」

そう言って四季がフランを睨みつける。

山「フランドールに危険がないことを証明しろ、だそうだ。だから小町を奴への当て馬にしたわけだが、少々やりすぎたらしい」

町「ええ！？四季様が怒らせろって言うから、じゃないと首にするって言ったからあたいは仕方なくそうしただけなんですよ！？」

霊「じゃあ失敗って事？」

山「いや、このネタはよほどの効果があったらしくてな、『フランドールが破壊行動を行う事』という上にしてはかなり弱腰の条件を提示してきたのだ」

町「何言ってるんですか？四季様が掛け合ってそこまで条件を引き下

げ」

言うのを遮って四季が小町の頭に拳骨を食らわせる。小町はきゃんなどと普段の言動からは想像しがたい声を上げて悲鳴を上げた。

恐らくフランの為に自分がそこまでしたことが恥ずかしかったのだろう。普段はお堅いというイメージがあるが四季もまた心優しい人物なのだ。

そしてフランはその心優しい人間、新之助に止められて上からの条件は棄却された。

そこで一つ咳払いをする四季。

山「でだ」

四季が小さな歩みでゆっくりフランの前まで歩いていく。そして手に持った笏のような鏡を体の前に立てる。どこか儀式がかったその行ないにはどこか神々しさがある。

その雰囲気には皆その四季をただ見つめるだけだ。

山「フランドール、お前が人を傷つけた事は事実だ。小町が人の寿命を知っていたから今回の事は水に流してやっても良い、という事にはなった、が小町に挑発されてお前はレーヴァティンを握り締めた。お前はあの時一体何をしようとした？」

それは問いでは無く確認。

あの時フランは自分の激しい感情を抑えきれずレーヴァティンで

周りを破壊しようとした。それは四季にも分かりきっている。

山「こんな所であんなもの振り回せばどうなるか、お前にもわかるはずだ」

フ「・・・ごめんなさい」

そのフランも怒られていることは分かる。だから素直にそう言ったのだがそれはもう意味を成さなかったらしい。

山「謝罪などいらん。これからお前に下す判決はお前がレーヴァテインを振りかざした時、既に決まっていたのだからな」

フ「え？」

その確認とは何かを決める為に行われる前段階だったらしい。

山「フランドール！スカーレット！お前に判決を下す！」

突如四季は小さな口を大きく開けて更に声を精一杯張って言い放つ。その突然の判決宣言にごくりと唾を飲む暇さえなく、皆一様に体をびくつかせる。

そして

山「判決！黒！！」

有罪だった。

フ「！」

新「え？！」

霊「ちょ！？」

町「ぶっ」

山「お前の犯した罪は重い！懲役1万年の刑に処する！」

町「ちょっ！？四季様！？」

小町が霊夢を引き止めたように四季もまた片腕の掌を小町に向けて黙らせる。

山「または！」

四季はずいっと前に出てフランに近寄る。

フ「ふえ？」

山「一万年の鉄槌の刑に処す！！」

フ「ぎゃん！」

山「罪の重さを知るがいい」

四季の手を握り締めた鉄拳がフランの頭頂部へめり込んだ、かと思うとそのまま床を突き破りフランの頭がめり込んでしまった。

山「これにて一件落着だ！！！」

町（言いたかっただけか）「ぎゃん！」

第二十六話（後書き）

四季の拳骨は痛そうですね。南無南無。

そしてこれでフランは無罪放免となりました。この計画はハッピーエンドですね。

次回はちよつと色々な後始末をしてフランの別れと帰宅って感じで終了です。

そしてその後といった感じで2話くらいです。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ではでは。

第二十七章（前書き）

忙しそうでなかなか更新できず気がつけば3週間近く空いてしまいました。本当に申し訳ありません。

そして今回は間が空いたにも関わらずそんなに濃い内容でもない事をご了承ください。

四季映姫ですが原作と言動が全然違ってしまっていますがそれもご了承ください。

第二十七章

山「そこにいる人間に感謝するがいい。フランドールⅡスカーレット」

霊「たぶん聞こえてないと思うけど・・・」

フランの頭が床にめり込んだまま体はびくびくと動いている。その四季の幼女暴行に驚いた新之助が急いでフランを床から引きずり出す。

新之助に引きずり出されたフランは目をぐるぐる回し、倒れそうに倒れない人形のようにゆらゆらと揺れている。四季の拳骨は相当効いたらしい。

それを新之助が抱きかかえるように支えてやる。

新「大丈夫？」

フランは新之助に全体重を預けて一言、痛いと今にも泣きそうな声で呟く様に言う。

しかしそんなフランを新之助は哀れみの顔では見ることができない。町民を傷つけ、契約を破った罪はこの一撃で消え去ったのだ。フランには悪いが新之助の顔には哀れみの要素よりも嬉しさの要素の方が強い表情が張り付いている。

そしてそんなフランに小町が哀れみの言葉をかける。しかし顔は楽しそうに、あまつさえゲラゲラと笑いながら。

町「そりゃ痛いよ。いつもあたいを殴ってんだからさ」

いつも殴られている小町はその痛さが身にしみて分かっているのだろう。

変な仲間意識を持った小町は腰を屈めてフランの頭に手を載せて撫でてやる。

町「よしよし、大丈夫だったかチビ助」

バシッ

町「え？」

小町はまるで鳩が豆鉄砲を食らった時のような顔をしてその信じられない状況を呆然と見ている。それが気付け葉になったかのように朦朧とした意識をはっきりさせたフランは自分の頭を撫でる小町の手を払いのけたのだ。

皆から親しまれている小町はこのフランからのあしらわれ方に現実味が沸かないらしい。小町は訳が分からず手をさすりフランを見つめる。

夢でも見ているかのようなそのフランの行動に、訳も分からずもう一度恐る恐る手を伸ばしてしまう小町。

バシッ

フ「あんた嫌い！」

町「ええ?!」

どうやらフランは先程の小町の応対が気に食わなかったらしい。小町もやりすぎた感があるが先程のフランへの応対は演技。

しかしフランはあまりよく事態を理解していなかった。

そしてそんな中に笑いを見出した一人の巫女が思わず噴出してしまふ。

霊「格好悪っ」

噴出し、更にそんな事を言う巫女を小町は睨みつけるが、生憎そんな負け犬の睨みにびくつく程その巫女の根性は細くは無い。

町「笑ってないで説明してやりなよ！」

霊「いくら出すの？」

などと毒まで吐く始末。

山「ははは、嫌われたようだな、小町」

町「四季様から何か言ってやって下さいよ・・・」

そして上司である四季にさえ笑われる小町。もう泣きそうになりながら四季に懇願する。

山「ふむ、しょうがない奴だ」

不甲斐ない部下の頼みにやれやれといった感じで小町に哀れみの目を向けた四季はフランの方へ歩み寄る。そしてそっと手を頭に載せて諭すように語りだす。

山「フランドール、今までの小町の言動は全て演技だったんだ。許してやれ」

バシッ

山「え？」

新「え？」

にこやかだった四季の表情が一瞬の内に鳩が驚いた顔に退化してしまう。

フランはあろう事か四季の手をも払いのけた。あの世への天国と地獄への道標、閻魔の手を払いのけてしまったフランに新之助はもう驚きを飛び越えて笑顔から表情が変わらなくなってしまった。

先程小町がされた光景に笑いを見出した巫女はいうまでもなく、第三者から見る状況とはそういうものなのだろう、現在その状況に陥っている四季の部下もまたその中に笑いを見出してしまったらしい。

町（やばいって霊夢w）

霊（何がよw）

町（これ面白すぎるw）

霊（言わないでw（笑ってるのが）ばれるっw）

さすがに小町と四季では分類が違うのだろう。霊夢と小町は四季に背を向けて必死に笑いをこらえている。それがばれればどうなるか結果は見えているからだろう。

町「あ、また手を伸ばしたよw」

霊「も、もうやめて！あなたのライフは0よ！w」

バシッ

町「だーっはっはっは！さすがっさすが四季様！あなたは皆がやれないことを平気でやってのける！」

霊「ひいーひいー死ぬ死ぬ！死んじゅう！笑い死んじゅう！地獄は、地獄だけは勘弁してえええ！」

山「貴様ら……」

ついに小町と霊夢は笑いをこらえきれずに腹を抱え、あまつさえ涙を流しながら床をごろごろと転げまわって爆笑し始めてしまう。

この後、床には新たに二つの穴が開けられ、更に正座させられ説教をされる事になった事は言うまでもない。

山「お前は死が付いていても神なのだぞ！もっと自覚を持った行動をしろ！」

町「あの時は仕方無かったんです……ああするしかなかったんです……ぷくくっ」

山「霊夢！お前も巫女としての自覚が足りんのではないか！？」

霊「ちっ、反省してまゝす」

山「くっ……貴様ら！反省するか喧嘩を売るかどっちかに」

四季が二人に説教をする最中いつの間にか四季の後ろにいた永琳がそっと四季を抱きしめた。そのため説教が中断されてしまう。

永「まあまあ、閻魔さん」

山「八意永琳？」

二人の攻めに四季があまりにも可愛そうに見えたのか、四季が振り返ると永琳が母親のような笑みを四季に向けていた。

永「せっかくのフランさんが解放されるっていうのに、いつまでそんな説教を続けるつもり？おめでたい雰囲気がぶち壊しよ？」

こんなめでたい場面で説教など場違いもいいとこだ。だからもうその辺は無礼講で許してやれということなのだろう。その聖母マリアのような笑みに四季のずたずたに引き裂かれたプライドも少しずつ繕われていく、と思われた。

永「あ、それと床の修理代はちゃんと請求しますから」
山「・・・」

そんな笑みでこんな言葉を吐きかけられた四季のプライドはもう言うまでもないだろう。

霊「あげてさげるか、やるわね」
町「四季様・・・ぷくくっ」

その光景を眺めていたフランがはっと気付いたように新之助の服を握る。

フ「新之助！新之助！！」
新「ん？」

フ「私もアイツを辱めたい！」

握った服をクイクイツと引っ張り四季を指差しながら言う小さな悪魔の顔はとても生き生きとしている。そこにいる可愛らしい生き

物は500年近く生きている吸血鬼とは思えないほど見た目どおりの、楽しそうなものを目の前にうずうずしている小さな子供だった。

新「あはは、全くどこでそんな言葉覚えたんだい？」

フ「おねえ様が言ってた」

新「そっか・・・大丈夫、君が一番辱めたから」

フ「本当？」

新「本当だよ」

そういつて困惑気味に首をかしげる。その悪魔のしぐさは新之助をとりこにするしぐさそのもの。この悪魔になら心を売り渡してもいいと新之助が思っている時、

山「その人間！」

四季が怒りに任せてそう叫んだ。その人間とは新之助しかない。

先程までだらしくデレデレしていた間の抜けた顔に、四季の怒鳴り声を挟まれた新之助は背筋をびくつかせ、更に声を裏返して返事し四季のほうを振り向く。

山「説明してやれ」

その四季の怒りに満ちた表情と短いが迫力のある言葉に新之助はおずおずと頷くしかない。

新之助はフランに死神である小町が何故あんな行動をとったかを丁寧に説明してやる。さすがのフランも新之助の話には真剣に耳を傾けてはいたがそのうち飽きてきたのか横から垂れているサイドテ

ールを弄ったり新之助が説明途中にする手でのジェスチャーを猫のようにぱっと両手で挟んだりしていた。

新「わかった？」

フ「わかったー！」

分かってはいないだろう。

よく笑ってごまかすと言うがフランは笑いでごまかし、更には可愛さも交えてごまかそうとした。そんな卑怯なごまかされ方をされ、あまつさえ両手で手を掴まれた新之助は魂を明け渡す契約の握手をしている様にも見えなくも無い。

新「あはは、偉いね」

フランを褒めながら新之助は顔をほころばせ頭をなでてやる。もちろんその手は叩き落される事はない。

山「人選・・・間違っていないか？」

四季は疲れた表情でため息混じりに独り言のように呟く

霊「女の子は優しく育てろっていうでしょ？」

といつの間にか横に立っていた霊夢がフランを見ながら口を開く。そんな霊夢の言うような甘い考えに四季が賛同できるわけがない。

四季がもの問いげに横を見るとそこにはわが子を見守る母親のように優しい顔をしている幻想郷の地上の管理者である巫女、博麗霊夢がそこにはいた。

やっと巫女らしい顔を見せた霊夢に、いつもそんな顔をしていればいいのにと四季は心の中で呟きながらその清閑な横顔を見つめる。

が、あいまいな事が嫌いな四季は先程の甘い事がやはりお気に召さないらしい。すぐに難しい顔に変わる。そしてまたフランを見ながら霊夢の意見に黒い色を塗りたくる。

山「その案には賛同できないな。甘く育てるとろくなことはない」
霊「別に厳しくするなどは言っていないわ。ただ厳しくする事だけが人のためになるなんて思うなって事よ」

四季は霊夢のその言葉を頭に置いて顔をデレデレに緩ませている新之助を見つめる。しかしその顔に厳しさなど一欠けらも無い。

山「そういうものなのか？」

霊「そういうものよ。拳骨ばかりしているとさっきみたいに手をはたかれて・・・手を・・・て・・・ふっ・・・」

山「くっ」

ここでまた説教するわけにも行かず、やはりいつもの巫女だと四季はため息に説教を載せて吐き出した。

そしていつまでもこうしているわけにもいかない。やることはまだある。

四季は一つ大きな咳払いをし、皆の注目を集める。

山「フランドールの処分はこれで良いとして」

四季が長いすの横に目を向ける。そこは小島当主がいるところだ。今は霊夢が丁度持っていた札で姿が見えないが。

山「もう目を覚ましているのだろうか？」

四季がそう言うのと微かに何かが動いたような気配がする。霊夢が歩み寄って札をはがすとぼろ雑巾のようになった小島当主が姿を現した。

小島当主は体をびくつかせ顔をうつむかせる。どうやら気がついてるようだ。

新「小島さん……」

そんな小島当主の姿に驚いたのか同情したのか分からないような声で新之助が呟く。その呟きにも小島当主は無反応だ。

その小島当主をぼろ雑巾のようにしたフランは殺さないでくれといわれた事を思い出す。もしかしたら傷つける事さえもしてはいけなかったのではないかと小島当主を見る新之助の横顔を心配そうに見つめる。

その新之助の視線を妨害するかのように四季が二人の間に立ち、儀式的な振る舞いで笏を体の前に掲げる。どうやらフランと同じ様に処分を下すつもりなのだろう。

山「小島酒蔵当主、小島雄大！」

そんなに大きくはないが、しかし周りにはっきりと聞こえる声で四季が縛られた小島当主の名前を呼び上げる。そんな声にまたして

もビクつき体をすくめる小島当主。

山「お前が犯した罪は重い！ 論議するまでも無くお前は黒だ！」

小島当主は無言だがうなだれるように肩を落とす。

山「しかしだ、今回のような特例で無い限り天国か地獄か、死んだ者達にそのどちらに行くかを決める事が仕事であり、私に与えられた権利だ。よってまだ生きているものを裁く権利は幻想郷の地上の管理者である博麗霊夢に一任する事が望ましいと考える」
霊「相変わらず固いわね」

今回のような特例とはフランの計画についての事だろう。今回のような特別な事が無い限り妖怪が人間を傷つけたり殺したりといった事象は地上の管理者霊夢に任せるといふ事が言いたいのだろう。

つまり小島当主を煮るも焼くも霊夢の一任で決まるという事。

霊「ならさくつと封印して小町に引き取ってもらおうかしら」

霊夢は手に札を持ち小島当主を見る。小島当主は小さな悲鳴を上げて縛られながら後ずさる。その姿はまるで芋虫のようだ。

その時、小島当主を殺さないでくれと懇願した新之助の口が開く。恐らくは霊夢の封印を止めようというのだろう。昔両親を殺され、現在は自分も打たれたというのにだ。新之助は憎くて憎くてたまらないだろう。

しかし小島当主を殺せばまた憎しみが繰り返す。だからずっと我慢してきた。大島酒蔵を大きくする事で仕返しをしようと、心に一

本の、憎しみに折られる事のない芯を持って。

だから殺さないでくれと霊夢に言おうとしたのだろう。それによって新之助の内にある憎しみは取り去られる事は無いだろうが。

しかし新之助の開いた口から言葉が出ることはなかった。

フ「待って霊夢！」

霊「ん？」

意外な事に新之助の口から言葉を奪ったのはフランだった。

フ「そいつ、殺すの？」

その意外な一言に霊夢はフランの方へ向き直る。そして腰に手を当てため息をつき一言、何か問題でも？と問い返す。

フ「殺さないでって言ったら・・・怒る？」

霊「は？」

それにはそこにいた全員が驚きを隠せないでいる。皆一様に口をぽかんと開けてフランを見る。

新「フランちゃん？」

フ「だ、だって新之助が殺すなって言ったから」

フランはそういうと照れくさそうにもじもじしながら俯いてしま
う。

自分のしたいことに忠実なフラン。本当にそう思っているのだろ

う。

本当は小島当主を殺したいと思っていた。しかし新之助に殺さないで欲しいと言われたから今は殺したくないと思っている。

単純にただそれだけの事だった。

一様に驚いている顔の中、新之助の顔だけは驚きに混じって笑みが混じる。もしも憎しみを一緒に分かち合い共有してくれる人がいるならば、その憎しみは少しは緩和されるものなのかもしれない。

小「ほ、本当か！？それは助かる！ワシはまだ死にたくはないからな！」

ここで初めてまともな言葉を発した小島当主。しかしそれは新之助への謝罪ではなくただ無様に生にしがみ付く救いようのない言葉。

そんな小島当主を呆れ顔で一瞥し、またフランに向き直る霊夢。少しの間もじもじしているフランを見つめた霊夢はとんでもない事を言い出した。

霊「いいわ、フラン。あんたが決めなさい」
フ「え？」

第二十七章（後書き）

闇魔フルボッコという罰当たりな感じになってしまいました。がこんな場面では無礼講で済まされるはずですよ。そして次回は後片付けを全部終わらせてエンディングにつなげて行こうと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第二十八章（前書き）

前回は小島当主の処遇を霊夢がフランに丸投げしたところからでしたね。

フランはまだ幼いため（500歳を超えていますが）正しい判断ができるかどうか、そしてその判断の大切さを書いてみました。ではどうぞ～

第二十八章

突如小島当主の処遇をフランに丸投げした霊夢。

霊「妖怪同士、丁度いいじゃない。こいつの処遇はあんたに任せるわ」

フランに丸投げするなど一体この巫女は何を考えているのだろうか、と回りの皆は疑問に思っている事だろう。第一に考えられる事は面倒だから丸投げした、ということだが霊夢の表情は真剣そのものの。

それもそのはずだ。人一人ならぬ妖怪一匹の命をフランの意思に任せたのだ。命の重さくらい霊夢は知っている。それがどれだけ重要な事か。

霊「でも一つだけ言っておくわ。あんたがこの妖怪をどうしようとそれはあんたの責任よ。私は一切関知しないわ。だからよく考えて決めなさい」

フ「えー・・・」

霊夢の意図は命の重さをフランに教えることだった。そして正しい選択だろうと間違った選択だろうと、フランが選択したその瞬間、本当の意味で成長できると。

実のところ小島当主の処遇などどちらでも構わないと霊夢は思っている。

人を殺したのだから退治するのは当然だ。しかしその被害者は殺

さないで欲しいと言っている。ならばその処遇に代弁してきた、霊夢にとってはケチをつけてきたフランに全てを任せる。そうすれば面倒ごと、フランの教育、自分にけちをつけたフランへの報復が一気にできるというわけだ。

霊（我ながらナイスアイディアだわ）

それらは面倒ごとを回避した時の副産物と考えられなくもないが、相変わらず変なところにだけ知恵が回る巫女だ。霊夢は余裕綽々といった感じで皆の視線を浴びながらも長椅子にどかりと腰を下ろす。そしてため息を一つ、更に大袈裟に足を振り上げて膝を組む。

そんな霊夢に対して急に丸投げされたフランはたまったものではない。どうしていいかわからず口をぽかんと開け、見開いた目で霊夢を追うことしかできない。

フランは新之助の気持ちを代弁して言っただけでそれ以外は考えていなかった。しかし今は妖怪一匹の命を自分が決めないといけない状況に陥っている。小島当主の処遇に対してフランの頭の中に新之助の気持ち以外の考えで埋め尽くされていく。自分は何をすればいいのか、何がしたかったのか。

しかしフランにはまだ幼すぎたようだ。段々と埋め尽くされていく頭の中が真っ白になっていく。どうやら考える事を放棄したらしい。

フ「わ、私どうしたらいいか分かんないよ・・・霊夢に任せる」

フランはそう言って霊夢を見ながらへらへらと笑い、頭を掻く。そしてすまなさそう表情で丸投げされたものを返してくる。

そんなフランにため息をつき、仕方がないと丸投げされたものを
全て請け負い小島当主の処遇を決めるほど霊夢は優しくはなかった。

霊「なあに？こんな時だけ子供だからって投げ出すの？」

まるで先程の小町の酷い演技が再開されたかのような発言が霊夢
の口から飛び出してくる。それがトラウマだったのか、はたまた凶
星だったのかフランはぎゅっと手を握る。

フ「だ、だって」

急にそんな理不尽な事を言われても困るとでも言いたかったのか。
しかしその言葉は霊夢の言葉によって遮られる。

霊「あら？子供だからってところは否定しないのね」

フ「う・・・」

そんな霊夢の追い討ちのようなかまかけにぐうの音しか出ないフ
ラン。それにはさすがにため息をつく霊夢。

霊「全く・・・じゃあ小町にでも決めてもらいましょ。小町はコ
ン君逆バージョンだけど、どっちも子供のフランよりましょねえ」

町「誰が巨乳だい」

霊「ね？」

フ「う、うん・・・」

町「・・・」

フランはじーっと小町を見つめる。霊夢いわく体は大人、頭脳は
子供らしい。小町は死神で死者を連れて行くことが仕事。これを踏

まえば小町に任せたらどうなるかフランにでも分かりそうなものだ。

しかしサボリ癖があると話していたことはフランも聞いている。更にそれを踏まえたうえで小町に任せたらどうなるか。

フ「巨乳に任せる」

それがフランの答えだった。

霊「・・・やっぱだめ、あんたが決めなさい」

フ「えええええ！？」

霊「これは幻想郷管理者の巫女である私の命令よ」

霊夢は足組みから更に腕組みまでして体を少し仰け反らせる。

フ「うー・・・」

まるで独裁者のような霊夢をフランは唸りながら困ったように睨むしかない。

そしてフランは渋々といった感じで小島当主を横目でちらりと見る。

小「頼む！助けてくれ！もう人を殺したりしない！頼む！許してくれえええええ・・・」

それに気付いた小島当主は心得たと言わんばかりに大きな声を出して助けを求める。

こんな暢気に話し合っている霊夢達とその当事者の緊張感は違ったようだ。更に必死にフランに助けを求める小島当主の姿がフランをますます追い詰める。

フ「し、新之助えー、どうしよう」

フランはもうどうしていいかわからず新之助に助けを求める。新之助ならば自分のことが大好きでいつも助けてくれる。フランはそう思っていた。しかし新之助の口から出た言葉はいつもどおりではあるがいつもどおりではない言葉だった。

新「フランちゃんの好きなようにしたらいいよ」

新之助は一言、笑顔でそう言った。だがその言葉は今のフランにとって呪いの言葉でしかない。

今まで誰がなんと言おうと自分の好きなようにやってきたフラン。だから好きなようにすればいいと言われる事はむしろ喜ばしい事。しかしそれに責任が伴うという霊夢の言葉がそれを呪いの言葉に変える。

新之助は大島酒蔵という店を任されている。だからフランの背負う責任の重さは分かっているはずだ。その上でフランの好きなようにすればいいという事は霊夢と同じことを思っているのだろう。今まで一切教育してこなかった新之助が今初めて教育者らしい発言をした。それはいつもと変わらない言葉で。

だがしかるべくその言葉にフランは口を尖らせ頬を膨らませるだけだった。

新「フランちゃんなら大丈夫」

フ「新之助の意地悪！」

だから新之助はすこし笑って、フランに励ましの言葉を送る。なんとも軽いその一言にフランは不満の表情を隠せない。しかし新之助は依然として軽く笑っている。

何故困ったフランを目の前にしてそんな風に笑っていられるのか。それはフランの事を信じているからに他ならない。フランなら正しい判断を下す事ができるはずという余裕の表れだった。

それが伝わったのか。その変わらない笑顔がフランの肩に乗った重石を降ろしたらしい。

フランは新之助に釣られるように鼻で笑って新之助を見つめなおす。

フ「じゃあ・・・私の好きなようにしていいんだよね？」

新「うん」

少しの間新之助の目をじーっと見つめたフランは不意に振り返って小島当主の方を向く。小島当主はとうとうこの時が来たかと振り返ったフランを見ながらごくりと息を飲む。

フ「判決！」

と突然フランはそう叫んだ。小島当主の処遇が決まる。小島当主以外の者も一様に息を吞んだ。そして下された判決は

フ「死刑！！！」

新「え？」

その判決に思わず声が漏れてしまう新之助。更に他のものまで怪訝な表情になり疑問の声を漏らす。どちらでもいいと思った霊夢でさえ何故そんな判決になったのか少し納得がいかない。

やはりフランにはまだ早すぎたのか。そう思いながら何故そんな判決になったのか聞こうと長椅子から腰を上げるようとする。しかしフランは待つてはくれなかった。

フランは右手を小島当主の方へ伸ばし、その手をゆっくり握りだしたのだ。

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』

これを行使するつもりだ。

霊「フラン！」

これにはさすがの霊夢も慌てて長椅子から跳び上がる。

小「や、やめろおおお！」

霊夢は一足遅かったようだ。フランの右手はしっかりと握られた。

それを見た霊夢は何を思ったのか、両腕で顔の前に壁を作る。小島当主が破裂するとも思っただろうか。

確かにその能力を人に使えばどうなるのか誰にも分からない。小町も霊夢ほどとはいかないが少し身構えている。

しかしそれは小島当主を見れば分かること。恐る恐る霊夢は両腕の隙間から小島当主を見ると痛みに耐える為か目を思いつき瞑っている。だがその体には何も変化はない。

と次の瞬間フランがまた口を開く。

フ「または！」

フランはそう叫ぶとその握られた拳を思いつき振り上げた。

そして

フ「フランちゃんパンチの刑に処す!!」

本日4つ目の穴が床に開いたのだった。

フ「これにて!・・・これにてっ・・・えと・・・」

町「一件落着」

フ「一件落着!!」

霊「言いたかったのね」

フランは小島当主を生かすことを選んだ。これがフランの好きなようにやった結果だ。フランは殺したい、しかし自分が大好きな新之助は殺して欲しくない。そのジレンマで決まったこと。それは一発殴るという事だった。恐らくは先程の四季の真似をしたただけだろう。子供は大人を見て育つ、という事なのだろうか。

とにもかくにも小島当主の処遇はこれで一件落着ということだ。そしてフランが能力を使わなかったことへの安心感からか霊夢と小

町はふうつとため息をつく。

しかしそんな心労一杯の霊夢や小町をよそに笑っているものがある。それは新之助と永琳と四季だった。

新之助は一件落着きといって満足しているフランが面白いから笑っているのだろう。永琳は永琳で笑っているのではなく微笑んでいると言った方がいいかもしれない。自分の子の成長を見守るような優しい目で微笑んでいる。

しかし四季は少し違う。口を一杯に開けて大笑いしている。

町「し、四季様？もしかして脳みそ破壊されちゃいました？」

山「なわけがないだろう馬鹿者。ただ単にこ奴の判決が面白かっただけだよ」

やはり四季と小町や霊夢の笑いのつばは少々違うらしい。

そう言って四季はうんうんと何度か頷きこれは一本取られたかと呟いている。

山「しかしだ。これでは刑が軽すぎると思わないか？」

その言葉はフランだけでなくその部屋にいるもの全員に語りかけられていた。フランの判決に皆一様に納得しているからだ。更に四季にはこれに口を挟む権限はない。これは恐らく皆の同意を求めている。

四季はぐるっと部屋にいる皆の顔を見回す。

霊「あんたも面倒な性格してるわね」

そこで霊夢がため息混じりにそんな事を言う。しかし、確かに四季の性格で、人殺しを犯した妖怪である小島当主の処遇がパンチ一発で収まるなど、納得できるわけがない。

山「まあまあ、別に批判しているわけではない。これは提案なんだが」

霊「提案？」

幻想郷の事に天界の四季が口出しする事はよろしくない。その事は四季自らも言っていることだ。だからこれは幻想郷の管理者である霊夢に対する提案という事を明示する四季。

山「天界への長期滞在者に突然キャンセルされてな」

霊「は？」

山「私としてはせっかく用意した部屋を空けておくのは勿体ないと思う」

霊「・・・ああ、そういうことね」

長期滞在者とはフランのことだろう。フランが幽閉される部屋はすでに用意されていたらしい。四季の提案はその部屋を有効活用できないかということだった。

霊「だってさ、フラン」

フ「へ？」

霊「この虫を天界に招待したいんだって」

霊夢は小島当主の処遇を一任したフランに確認する。この処遇を決めたのはフランなのだ。フランの了承を取らなければならぬ事は

当然だ。

小「それって・・・まさか・・・」

小町によって引きずりだされた小島当主。フランの拳骨で意識朦朧とする中、更に追い討ちをかけられる。歪む視界の中で小島当主が見たものは意地悪そうに歪む顔。それは霊夢と四季の笑顔だった。

山「お前を招待しよう、小島雄大」

霊「よかったわね、高級スイートルームがあんたを待ってるわ」

小「そ、そんなぁ・・・」

山「大丈夫だ、1000年ほど出してやる」

小「・・・」

町「その間たっぷりと楽しみなよ」

そんな四季達の言い回しにフランはついていけなかったらしい。何を思ったのか突拍子もないことを言い出した。

フ「わ、私も行きたい!」

もうそんな事を言われた日には声を上げて笑うしかない。

皆一様に噴出し、キョトン顔のフランを囲み、そして笑うのだった。

第二十八章（後書き）

大切なのは小島当主の生死ではなく、その判断の責任に重点を置いてみました。

そしてそれを理解したうえでの判断ができたのであれば、頭脳も体も子供のフランですが心は大人になれたのではないかと思います。

そして宣言ではあと2話と書いていたように思いますがまたしても狂いが生じて・・・

私の言う次回はこうなります、という事はあまり気にしないでください。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ではで～

第二十九章（前書き）

前回フランの珍妙な発言で幕を閉じました。今回は少しごちゃごちゃとして最後には綺麗に主要人物以外を一掃しようと思います。やはり最終回は二人の会話がなくてすよね。

チルノ・・・「？」

大妖精・・・「大」

リグル・・・「リ」

今回はこの三人が出てきます。ではどうぞ

第二十九章

町「じゃああたいはこいつを連れて行くよ」

わけが分からなく、キョトン顔のフランをひとしきり笑った小町はそう言って小島当主を縛っている縄を引っ張るように握る。もちろんフランは連れては行かない。

そして小町は不満顔に表情を染められたフランを尻目にうきうき顔で小島当主に話しかける。

町「道中何故あんな事をしたかたっぷりと聞いてやっからね！覚悟しなよ！」

山「馬鹿者！速やかに連行せんか！」

そんな堂々とサボリ宣言をした小町に四季が渴を入れる。そんな渴に小町はすまなさそうに笑いながら頭をぽりぽりと掻くことしかできない。しかしそれでも小町はゆっくりと小島当主の事情聴取をしながら天界へ連れて行くことだろう。

山「その顔は分かっていない顔だな」

町「だ、大丈夫ですよ！速やかに連行します！」

それを見越してか四季の説教が始まる、と思われたその時。

紫「ならここで聞いていけばいいじゃない」

突如小町の頭上の空間に隙間が現れた。それは隙間を操る八雲紫の仕業だろう。今までどこで聞いていたのか、小町と四季のやり取

りにそんな提案を呟く。

しかしその隙間から出てきたのは紫ではなく、一人の少女だった。小島当主と同じ触覚を生やし緑色の髪に背中には黒い羽を生やした妖怪、リグル・ナイトバグだ。

小町の頭上の隙間から出てきたリグル。その真下にいた小町はたったものではない。

町「きゃん！」

などと可愛らしい声を上げてリグルの蹴りをもらいあまつさえその上にのしかかれる。

リ「あ、ご、ごめんなさい！」

リグルはフランも知っている。外で遊ぶようになってからすぐ出会うことになった妖怪だった。それは紅魔館の周りでよく妖精達と遊んでいたから。フランも何度か遊んだ事がある。

フ「リグル!？」

その思いがけない妖怪の登場にフランだけでなく、そこにいる皆が一樣に困惑の表情を浮かべる。しかし一番の驚きの声を上げたのは小島当主だった。

小「リ、リグル！」

リ「お久しぶりです。おじさま」

小島当主はリグルの名前を驚きの表情で叫ぶように呼んだ。どう

やら知り合いらしい。もうその場にいる何人かは察しがついたらしく、ため息をつくものと未だにぽかんと口を開けるものとに分かれてしまう。

しかし一人だけそのどちらにも当てはまらない表情をしているものがいた。それはフランだった。リグルは確かに「おじさま」といった。その言葉にフランは眉を歪めている。

フランの脳裏に何かが横切る。大昔にあった吸血鬼の町であった事。レミリアの事、フランが恋焦がれた人物の事、そして戦争と惨劇の事。フランの閉ざされた記憶。

まるでその閉ざされた記憶の扉を開く呪文のようにその言葉をボソボソと繰り返している。そしてついには俯いて黙り込んでしまう。

山「全く・・・お前はいつも状況をややこしくするな」

町（だれもあたいの心配はしてくれないっと）

フランの異変に気付いた新之助がどうかしたのかとフランに尋ねようとするが、そんな四季の言葉で視線が四季の向けている視線の先に流される。四季の視線の先には空間が引き裂かれ隙間ができていた。そこには上半身をというよりも肩から上を出し、隙間に腕を置いてリラックスしている八雲紫の姿があった。それはまるで気持ちよさそうに風呂に入っている姿にも見えなくもない。

紫「当事者には全ての事情を知る権利があるわ。そうでしょう？」

目を細めて不適に笑いながらそんな事を言う紫はどこか楽しそうだ。そして四季はそのもっともらしい意見にふんっと鼻を鳴らす。

山「ただこの状況を面白がっているだけだろう」

とぼっさり斬る。凶星だったからだろうか、それともあまり関わりたくないからか、それ以上討論するつもりはないらしい。紫はそれには笑みを返すだけだった。

小島当主に丁寧にお辞儀をしたリグルは振り返って皆の方に向き直る。そして一言謝罪の言葉を述べてまた丁寧にお辞儀をする。

小「リグル・・・すまん・・・もうお前に酒を送ってやる事はできなくなってしまった」

この言葉で先程のぽかんと口を開けているグループも納得が言ったらしい。霊夢もため息をつき腕組みをし、更に呆れ顔だ。小島当主はリグルに酒を送っていたらしい。恐らく上手い酒を送るために酒蔵を大きくする予定が大島酒蔵ができた事で危うくなったのだろう。

リ「うん・・・隙間から全部聞いてた」

そのリグルの言葉で小島当主は顔をうつむかせ黙り込んでしまう。

どうやらリグルは別の所で、紫の作った隙間から漏れる声で今までの事を見聞きしていたらしい。リグルはどこか残念そうに笑いながら小島当主を見つめる。リグルの表情から小島当主がリグルの為に酒を造ってきた事、その為に人を殺した事、それらに賛同しているか否か、それが分かってしまったのだろう。

そんな小島当主に攻める事も助ける事もできないリグルは黙り込んでしまう。そして自分のした事を分かってくれないリグルに何も

期待できない事は明白になった今、小島当主も何も言う事ができない。

霊「それで？」

これ以上会話はなく、言葉に詰まった両者に霊夢が助け舟とばかりに言葉をつなぐ。

霊「あんたは何しにきたのよ？」

恐らくは紫が一方的に放り出し、その場にいる者の反応を見て楽しんでいただけだろう。隙間から顔を出している紫の表情がそれを証明している。

だからリグルは霊夢の問いに答える事ができない。リグル自身何かをしようとここへ来たわけではないのだ。

霊「こいつを何とかしようって言うならそれは無理な話よ」
リ「いえ」

そんな霊夢の助け舟にリグルが乗船してくる。

リ「おじさまがしたことは許される事ではありません。そして本当なら死刑のところを、こんな軽い刑で許してくれて、本当にありがとうございます」

霊「お礼ならフランに言いいなさい。私が決めた事じゃないしね」

この刑を決めたのはフランだ。霊夢がフランに決めろと言ったのだがこれはやはりフランに言うべきだろう。

リグルは視線を移動させるが当のフランは表情が読めないほど未だうつむいている。

小「ワシは・・・ワシは間違っていない・・・」
霊「ん？」

突如、小島当主が震える声でそんな事を言い出した。

小「この町に先に店を開いたのはワシだ！それなのに大島の奴らが酒蔵を開いた！しかもワシらよりも大きくなっていった！だから殺した！！その何が間違っているというのだ！！」

小島当主は後からできた大島酒蔵に客を持っていかれたことが気に入らなかつたらしい。全く子供のように、そして滑稽な理屈だがこんな理屈はそこら中に散らばっているのが世の中だ。戦争や喧嘩の火種でさえそこら中に散らばっている。

霊「なに子供みたいな事」
フ「じゃあ、この虫、殺してみる？」

そんな小島当主の言葉に少し顔を上げ、更に霊夢の言葉を遮りながらそんな言葉を言う。そのフランの表情は笑っていた。しかしそれは滑稽な理屈を喚く小島当主をあざ笑うものではない。それは怖気の走る薄ら笑いだった。そしてその顔には狂気に満ちた紅の目。

フ「この虫を殺したら新之助の感じた痛みが分かるでしょ？ねえ？」
小「ぐ・・・」

この虫、とはリグルの事だろう。小島当主にとってリグルは大事なのだろう事がこれまでの会話から読み取れる。そしてそれはフラ

ンでも分かる。だからフランはリグルを殺して新之助がどれだけ辛い思いをしてきたかを小島当主にあじあわせようと言うのだ。

子供のような理屈には子供のフランの方が一枚上手らしい。

そんなフランの言葉に小島当主は何も言えずにうなづいてしまう。リグルの命の心配もあるだろうがフランの冷たい笑みが怖かったからの方が大きいかもしれない。現にフランの表情は片方の唇がつりあがり、更に紅の目は先程よりいっそう赤く輝いている。

小島当主とフラン、両者の睨み合いが続く。睨み合いというよりも蛇に睨まれた蛙と蛇と言ったほうがしっくりくるかもしれない。

そんな睨み合いがつまらないのか紫がセンスで口元を隠しながら小さくあくびをする。と、また上空に隙間が現れた。そこからでてきたのは氷の妖精であるチルノと大妖精だった。言うまでもなく落ちてくる場所は小町の頭上だ。

町「きゃん！」

二人は交互に穴から落とされ順に小町の頭に落ちていく。

？「絶対だめ！」

チルノは小町を踏んづけながら開口一番そう言った。

霊「チルノ！？」

？「リグルを殺したらあたいがあんたをぶっ飛ばすからね！」

大「ちょ、ちょっとチルノちゃん！相手はあの紅魔館の妹さんなんだよ！？殺されちゃうよ？！」

どうやらこの二人もこの先程の会話を聞いていたらしい。

？「リグルはあたいの友達だもん！それにあたいは最強だもん！」

チルノはこの状況を理解してはいないだろうがフランがリグルを殺すということは理解しているらしい。そしてリグルはチルノや大妖精と友達だ。友達が殺されるのを黙ってみていられるほどチルノは馬鹿ではないらしい。

再び騒がしくなったその場を見て紫がまたクスクスと笑っている。完全な愉快犯だ。それを永琳と霊夢は呆れ顔で、四季に至っては睨んでいる。

キュッ

といつの間にかフランの右手がチルノに向かって握られていた。

ピチューン！

チルノは小さな氷の粒になってコトリと床に落ちた。

大「だから言ったのに・・・」

リ「また・・・」

新「フランちゃん！？」

そんな光景を見て人間である新之助が驚かないわけがなかった。フランの能力はあらゆるものを破壊する。だからチルノが死んだと思っただろう。

霊「ああ、大丈夫よ新之助さん。すぐ元に戻るから」
新「そ、そう・・・ですか・・・」

と、新之助の心配は霊夢のアシストですぐにとかれたが、フランの方を見ると心配そうに新之助の方を横目で見ている。妖精や吸血鬼の冗談は人間には少々酷すぎる。だからそれで勘違いされ、嫌われたらという事を心配でもしていたのだろう。

町「んで？ どうすんのさ？ その虫を殺すのか殺さないのか、それでまたこのちびっ子に殺されたい奴らが来てあたいを踏んづけるのか」

センスで口を隠してクスクスと笑っている紫を見て不満そうに小町が言う。踏まれて倒され、起き上がるのも面倒なのか、小町は寝そべったまま頬杖をついている。

紫「安心して、もういないわ」

町「・・・で？ ちびっ子はその虫を殺すのかい？ 殺さないのかい？」

その言葉にフランはプイツと顔を背けそして「言ってみただけ」と一言言うだけだ。どうやら小島当主よりフランのほうが大人だったらしい。リグルを殺したところで何も変わらない。更にはチルノのようなリグルと友達の妖怪や妖精に付きまとわれるだけだ。

そしてそのそっぽを向いた視線の先には新之助の姿がある。新之助は満足そうに笑っている。しかしフランはそれには微笑み返さず恥ずかしそうにまたうつむいてしまう。

町「そうかい。じゃああたいはこいつを連れてくよ」

もうフランに睨まれてぐうの音もでない小島当主の縄を握って更

にリグルも連れてゆくといい出す小町。リグルは当然戸惑った。天界に行く時は死ぬ時なのだ。

町「ああ、大丈夫天界に行く前に降ろしてあげっからさ。こいつとも話したいだろ？」

会話を楽しむなら二人より三人、三人より四人だ。

町「ついでにその氷と妖精も乗ってきな。幻想郷通るし」

リグルと大妖精は仲良く「はい！」返事する。

町「それとキックの分はきっちり返すからね」

リ・大「「え・・・」」

町「冗談だよ」

小町達が窓の外に出るとそこには不思議なことにぼろぼろの船が宙に浮いていた。その船にそれぞれ乗り込む。

町「よし！船がでるぞおお！」

そして少し明るい空を小町が乗り込んだ船がゆっくりと進んでいく。

霊「朝から元気ね・・・」

ひと段落着いたところで永琳は新之助にベッドで横になる事を促す。まだ完全に傷が癒えたわけではない。しかし吸血鬼化している

今なら多少の無茶なら大丈夫な気もするが。

霊「さあて後は朝までフランを見張って帰るってどこかしら」

山「御苦労だったな、霊夢」

霊「あんたもこんな所まで御苦労な事ね」

山「なあに、面白いものが見れたから私は満足だ」

霊（暇人か）

霊夢はそんな事を言いながらんぐつと体を伸ばす。夜明けまであと一時間というところだろうか。その間ずっとフランを見張っているらしい。

永「せっかくの最後なんだから二人きりにしてあげたら？」

と永琳が新之助とフランの方を見て気を利かせる。新之助は少し照れながらだが嬉しそうだ。フランはフランで首をかしげている。

霊「甘いわね。フランが暴れたりしたら危ないでしょ？」

フ「そんなことしないもん！」

霊「はいはい」

と噛み付くフランを片手で制しながら霊夢はあくびをする。このまま日が昇るのを見てからフランを幻想郷に帰すらしい。しかし最後の最後まで二人でゆっくりさせてやりたいと言うのが永琳の考えだ。そこで永琳が仕掛ける事にした。

永「そういえば、小島酒蔵の当主は妖怪よね？」

突如永琳が何かを思い出すように天井を見ながらそんな事を言う。

霊「ええ、そうよ？何よ、突然？」

永「人里にずっといたのよね？」

霊「・・・ええ、そうね」

永「ずっと、よね」

霊「そう・・・ね・・・」

段々霊夢の顔色が変わっていく。どうやら霊夢は気付いたらしい。永琳が何を言いたいか、そして霊夢に管理を任せている八雲紫がそれに気付けばどうなるか。それは火を見るより明らかだ。

永「何処かのたいそうな神社のたいそうな巫女さんはずっと気づかなかったのかしら？」

霊「それは・・・その・・・」

妖怪から人里を守る役目である博麗神社の巫女、博麗霊夢は人里に潜んでいた妖怪にずっと気付いていなかった。

山「なるほど」

と四季も少し笑いながらそんな事を言う。

どうやら霊夢も年貢の納め時のようだ。だが最後に巫女らしからぬ悪あがきに出る霊夢。

霊「これは異変！異変よ！異変に違いないわ！」

そんな足掻きに永琳と四季、フランや新之助まで目を細め冷たい視線を送る。そして無駄な足掻きとばかりに霊夢の背後に隙間が現れる。

紫「霊夢ちよつと来なさい」

そして霊夢の背後から出てきた二本の腕が霊夢の脇を抜けてささやかな胸を驚づかみにし、更に引きずり込もうとする。

霊「ひゃっ！ちよっ！紫！どこ掴んでるのよ！」

紫「これから修行タイムよ。その腐った精神を鍛えなおしてあげるわ」

霊「いやあああああああ！」

霊夢の上半身が飲み込まれたところで四季が永琳の視線に気付く。

山「おっと、私も一つ忘れていた。八雲紫、私も先程の件でお前にすこし言いたい事がある」

芝居か本心かは分からないが先程の紫の愉快犯ぶりが目に余った事を口実にこの場から立ち去るつもりらしい。

四季は霊夢の足を掴んで一緒に穴に吸い込まれようとする。恐らく四季の説教という災厄が霊夢と紫に降り注ぐに違いない。しかしそんな事紫にはたまった事ではない。

紫「れ、霊夢！そのお方を・・・蹴り飛ばしなさい！」

何を思ったのか紫はそんな事を言い出した。前に四季の説教でも受けたことがあるのだろう。よっぽど四季の説教が堪えるらしい。

霊「毒を食らわば皿までってやつよ。ざまあ」

紫「修行を半分にしてあげる」

霊「・・・」

山「あたっ、いたたた、いたいいたい！こら霊夢！」

霊「ごめんね四季！悲しいけどこれって戦争なのよね！！」

山「貴様ら！！二人とも黒だ黒！！！」

四季は自分の推進力を使ってその隙間へ突っ込んでいった。

永「全く騒がしい連中ね」

新「あはは・・・お見事です」

先程まで騒がしかった部屋には永琳とフランと新之助だけ。外からは鳥のさえずりがちらほらと聞こえてくる。

永「じゃあ私もそろそろ様子を見に行ってくるわ」

様子とは患者の様子でも見に行くのだろう。永琳は軽く背伸びをし、すたすたと出口の方へ向かっていく。そして外に出て扉を閉める時、ドアの隙間から顔を出しながら永琳がフランの名前を呼んだ。

永「フランさん」

フ「何？」

永「がんばって」

永琳は妖艶に笑ってそんな事を言う。それにはフランは首をかしげる事しかできない。

フ「何を？」

永「ふふ、冗談よ」

だがフランはその意味を知る由もないだろう。

第二十九章（後書き）

チルノは何故か親分肌の印章があるので友達思いのいい奴にしてリグル救出係りにして見ました。すぐやられてしまいました。・・・そして最後は永琳に綺麗に掃除してもらいました。そして次回はその掃除して綺麗になった舞台で何か思い出したフランと新之助の話をしてって感じです。

もしかしたら二話になるかもしれませんが・・・

それとレビューを書いてくださった方、本当にありがとうございます。私の小説にレビューを書いていただけるとなんて夢のようです。しかしこれで舞い上がる事が無いよう残り少ないですが尽力してこの作品を書き上げたいと思います。

ここまで読んで頂きありがとうございます。

では

第三十章（前書き）

どうもこんにちは。

やはり予想していた通り長くなってしまいました。今回は新之助とフランに残された最後の日をどう過ごすかですね。

フランの今までであった事や背景を考えながら書いていくとなかなか難しいですね。

かなり手間取ったので何を言ってるのか分からなくなったら申し訳ないです。

ではどうぞ！

第三十章

永琳が気を利かせて二人きりになった病室。そこは騒がしかった先程までとは一変し、とても静かだ。それは騒がしい連中がいなくなったこともあるだろうがもう一つ理由があった。

いつもなら新之助に話しかけ尽きる事のない会話を楽しむフラン。一人でも十分騒がしいその元気なフランが先程から俯いたまま黙っているからだ。

だから何かあったのかと心配した新之助が先に声を話しかけるとにした。

新「フランちゃん、どうかした？」

フ「え？」

新「あのリグルって子がでてきたあたりから様子がおかしかったから」

フ「そ、そんなことないよ」

新「そっか」

はっと顔を上げたかと思うとそんな事を言う。だがフランは目を合わせない。そしてまた顔を俯けて黙ってしまう。

フランの頭の中には暗い渦が渦巻いていた。それはフランの失っていた記憶が蘇ったからだ。リグルの一言だけで思い出したのではない。新之助を撃ってしまいそうになった時にも兆候は出ていた。それがリグルの一言でより鮮明になり、その暗い記憶がフランの頭の中で渦巻き苦しめていたのだ。

昔自分の犯した惨劇。人間との平和を願っていた事。しかしその人間を自らが殺しに殺した事。

そしてその人間である新之助を前に自分はまた馬鹿な理想を抱いてしまっていた事。そんなジレンマにフランは複雑な心境だった。

そんな事を知る由もない人間の新之助が優しく接してくれればくる程フランの胸が締め付けられる。自分は新之助と話す資格などない。自分は人間を惨たらしく殺した殺人鬼。人間を好きになる資格などない。

『人間が好きだ』、『人間と平和に暮らしたい』、そんな事を言えば新之助は二つ返事で快く賛同してくれるだろう。しかし周りの人間達は恐らくこう言うだろう。

『大勢の人間を殺しておいてなんて調子のいい奴だ。また同じ事を繰り返すに決まっている』

と。ならば人間など関係なく新之助という一人の人間を好きになったのだと開き直ったかどうか。そうなったらもう目を当てられない状況になるのは目に見えている。フランは昔、恋焦がれた恋人である人間まで殺している。

だからフランは新之助と目を合わせられないでいた。もうこのまま沈黙し、人里を去り、また来たいなどと思わないように、未練の残らないようにしよう、などと考えていたのだ。

新「そういえばフランちゃんはもうすぐ帰っちゃうんだよね」
フ「・・・うん」

新「よかったね。やっと帰ることができて」

フ「うん・・・」

だから新之助が話しかけてもそんなそっけない返事しか返ってこない。フランに話すつもりがないのだから当然の結果だ。フランは返事をするために向けた顔をまた俯かせて沈黙する。

新「やっぱり心配？皆が受け入れてくれるかどうか」

顔を俯けている、そして黙って元気のないフランを見て何を勘違いしたのか新之助は紅魔館に帰った時の事をフランが心配していると思っただけらしい。

フ「別に・・・」

フランは背けている顔をより背けてそっけなく言う。

しかしいつまでもそんなそっけない態度を見せていると新之助が少しかわいそうに思えてくる。別に新之助に意地悪がしたいのではない。

フ「・・・ちょっと」

だからフランはそむけた顔を少し戻し、頬を膨らませてこんな事を言う。これがフランの出した妥協案だとすれば失笑ものだがその仕草はなんとも可愛らしいものだった。

そしてほんの少しだがいつものフランに戻ったので新之助は軽く微笑む。それはそんなフランがおかしかった事もあるのかもしれないが。

一方のフランはと言うと紅魔館に帰る事、これをすっかり忘れていた。だからその新之助の一言で今思い出した。

人里に来る前に最悪の別れ方をしてしまったのだ。どんな顔で再会すればいいのか、顔を合わせた時なんと言えればいいのか、更に紅魔館に帰ってくるなど言われたらどうしようか。そんな考えがぐるぐると頭の中を駆け巡る。

紅魔館を追い出された場合居場所がない。住む場所がなくなったらどうなるのだろうか。

だからそれは先ほど頬を膨らませて言った『ちよっと』どころの心配ではなくなっていた。

フランの表情が急激に曇っていく。先程の暗い渦がそんな心配によってかき消されてしまうほどに。

今まで養ってもらっていたフランは一体どうすればいいのか想像もできない。

だからか、次に新之助が言う一言に過剰に反応してしまう。

新「ならこのまま・・・僕らと一緒に暮らさない？」
フ「へ？」

不意を突かれた、そして心配の種が解消できるその一言にフランはそっぽを向いた顔を振って新之助のほうに向き直り目を合わせてしまう。新之助の目は真剣だ。

新之助の瞳とフランの紅の瞳が互いの姿を映し出す。

それがフランの目にどのようなように映ったかは分からないがすぐに視線を下げる。そして逃げるように俯いてしまう。それは新之助という人間と一緒に暮らす事など過去の記憶が蘇った今できるはずがないからだ。

新「あ・・・その・・・ずっとじゃなくてもいいし、帰りたくなったら帰っても全然いいし、でも遊びに着たくなったらいつでも来てくれてもいいっていうか・・・」

フランの心境を知らない新之助はすぐに視線をそらされ何馬鹿なことを言っているのかと思われていると思ったのだろう。傍から見たらプロポーズにも見えなくもない。恐らくフランは気付いてはいないだろうが。

新「もしフランちゃんさえよかったらなんだけど」

だから新之助も視線をそらし、頭をぽりぽりと掻きながら恥ずかしそうに付け加えてそう言い繕う。

フ「新之助はあのばぁと同じ事言うんだね」
新「え？」

不意に、フランは独り言のように小さな声で呟く。その時フランの口元が笑った。それはその新之助の挙動がおかしいからではない。

それは嘲り笑うような笑みだった。

新之助はとっさに聞き返すがそれは聞き取りにくかったから聞き返したのか、新之助の祖母が同じ事を言ったのか確かめようとした

のか分からない。

そんな事どうでもいいようにフランは俯いたまま突然何の脈絡のないことを言い出した。

フ「新之助は私のこと好き？」
新「うん。好きだよ」

そんなフランの問いに即答し微笑む新之助。フランはもう驚きもしない。それはそれだけの時間を共有してきたからだ。

だがそれに相反してフランの表情は不気味な笑みが浮かび上がってくる。フランの牙ちらりと見えるほどに。

フ「ちょっと聞いて欲しい事があるんだけど」
新「ん？」

フ「私ね、紅魔館にくる前の少しの間、記憶がなかったんだ」
新「記憶が？」

フ「うん。それでね、その記憶をさっき思い出したの」
新「へえ、どうだったの？」

新之助は嬉しそうにその記憶の内容を尋ねる。

新之助はフランの形だけの笑顔に気づかない。自分自身の過去話など信用されていなければそうそう話してくれるものではない。だから新之助はそれが嬉しかったのだ。

だがそれはフランが吊るした、信用という餌を付けた釣り針だった。

フ「いっぱい人間が死んでた」
新「・・・え？」

釣り針が新之助の喉の奥にぐさりと音を立てて突き刺さる。あまりの痛さに新之助は笑顔のまま表情が返ることもできず固まってしまう。

そんな物騒な事を言うフランは未だ笑顔だ。その笑顔が作り物の笑みだと言う事が新之助にも今分かった。分かったところでそれはもうどうする事もできない。返しが付いた釣り針はもうすでに深く突き刺さっている。身を引き裂かねば取る事はできないだろう。

フ「それは吸血鬼ハンターっていう人達なんだけどね、皆血まみれになってて、バラバラでぐちゃぐちゃなの」

そう言って『あはは』と笑うフランに新之助は息を呑むことしかできない、わけではなかった。そんな物騒な事は人里でフランが来てから何度も経験している。

だからせめてもの抵抗とその釣り針の付いた糸を引っ張ってみる。

新「・・・ふ、フランちゃんは・・・大丈夫だったの？」

フ「私も血まみれだったよ。全部返り血だったけど」

新「返り血？」

フ「全部私が殺したんだもん」

ここでフランは初めて楽しそうに笑った。それは無邪気な笑顔だった。でもやはりどこか嘘の笑顔。絶句する新之助の喉にまた針が食い込んでいく。

フ「襲ってくるハンターも、逃げるハンターも、許しを請うハンターも皆ぐちゃぐちゃにしたの」
新「で、でもそれは・・・ハンターだったから・・・仕方なかったんじゃない」

新之助はどうにかして話しについていこうと苦し紛れに、かすれた声でそんな事を言う。

しかし自分の命を狙うハンターだからと言って逃げる者、まして許しを請う者まで殺していいわけがない。と言うのは人間である新之助の、戦争を知らない者達の甘い考えなのだろうか。そんな場面に遭遇した事も戦争を経験したこともない新之助がそう言ったのはフランに対し少しでもそれを肯定し味方である形を作りたかったからか。

だがそんな新之助の取り繕う言葉は途切れ途切れで力がない。その力なき言葉はフランの言葉の前では何の効果も示さない。

フ「昔ね。ハンターの中に私の好きな人がいたの」

新「ハンターに？」

フ「うん。その人も私が殺しちゃってみたい」

新「・・・それはフランちゃんの意味？」

フ「・・・そう・・・私の意志・・・」

あれは事故のようなものだったがフランは少し迷ってそう言った。それは自分に言い聞かせるようにも伺える。

だがこれは新之助を突き放すためにこんな昔の話をしているのだ。今更自分の意思ではないなどと言えるはずがない。

そしてあがけばあがくほど新之助の喉に突き刺さった針は深く突き刺さっていく。もうこの針を取り除く事は不可能だ。岸も近い。後はフランに釣り上げられ調理され別れを待つだけ。

フ「楽しかった・・・嬉しかった！気持ちよかった！！人を殺す事が！！」
新「・・・」

そうしてまた「あははは」と不気味に笑う。こうなったフランはもう歯止めが掛からない。それはこんな自分を笑ってくれと言わんばかりだ。

この言葉の真意は自分は大量殺人をしたどうしようもない殺戮者だから一緒に暮らそうなどと言ってくれるなというメッセージに他ならない。

新之助にもその思いは痛いほど伝わっただろう。

フ「・・・これが本当の私なんだよ。笑っちゃうでしょ・・・頭がおかしいでしょ？怖いでしょ？・・・嫌いでしょ」
新「僕は好きだよ」

そんなフランの問いに新之助は即答する。

それは食い込んだ針を利用し逆にフランを引きずりこもうとする。フランはそんな不意を付く新之助の反撃に慌てふためきバランスを崩していることだろう。

それを明示するように俯いたまま目を見開いて固まってしまおうフラン。

その時フランの頭には昔ベンチで二人で座り楽しく話していたあの時の記憶が鮮明に映し出されていた。ハンターである自分の事が嫌いじゃないのかと聞かれ好きだと即答するフラン。それにダリスが面食らったようにフランもまた面食らっているのだ。

それと同時に頭にその時自分が抱いていた感情が一気に流れ込んでくる。

それは今の新之助の気持ちと全く同じ。昔フランがダリスに抱いていた純粹な恋心と全く同じはずだ。

だからそれをフランが分からないわけがなかったのだ。

新「それは昔のフランちゃんでしょ？記憶が戻ったからって昔のフランちゃんに戻るわけじゃない。違う？」

フ「ち、違う・・・」

今度はフランが抵抗をするが抵抗すればするほどバランスを崩し新之助のいる場所へ引きずりこまれそうになる。

新「そう・・・ならやっぱ一緒に暮らさない？」

フ「ど、どうしてそうなるのよ！会話が成り立ってな」

そのフランの今にも消えそうな声で言った抵抗など欠片も関係ない新之助の一言。それにフランが抵抗した事でまた引きずりこまれる事になってしまった。

もう二度と言わせないつもりが逆に言わせてしまった。その新之助の表情には先程よりも強い意思が見て取れる。どうやらフランの

目論みは失敗だったらしい。

フランは言葉を途中で切ってまた顔を俯かせてしまう。それはその顔につけた薄っぺらな薄ら笑いが剥れ落ちていたからだ。

今までフランの能力におびえて自ら進んで近寄る者などいなかった。紅魔館にいる者も優しく接してくれる者はいら。しかし皆どこかフランを恐れていた。だから自ら進んで一緒にいようという者はいなかった。

フランの周りにはいつも誰かいてくれる。しかしいつも一人だった。

それはフランが一番分かっていたし感じていた。だから自ら進んで外に出ようとも思わなかった。外に出たら皆が恐れ傷つくだけ。フランは誰かを傷つけないとは思っていなかった。むしろ仲良くしたいと思っていた。でも自分の能力のせいで皆恐れはなれて行く。そして結果的に周りの者を傷付け、そんな事叶わなくなっていた。

しかし今はどうだろうか。ただの人間である新之助がフランと一緒に暮らしたいと言ってくれた。それはフランが、そしてフランの両親、更には昔自らの手で殺してしまったダリスが思い描いた理想だった。

そんな自分の酷い過去を聞いたうえで受け入れてくれた。あまつさえ一緒に暮らしたいと言ってくれた。

フランは頭の中で自問自答する。自分は本当にその提案に乗ってもいいのかと、こんな自分を快く受け入れてくれるのかと。好きな人と一緒に過ごしてもいいのかと。

しかし、それでもやはり多くの人間を殺してきた罪の意識はそう簡単に頭の中から消し去ることができない。人間である新之助たちと暮らしてきたから尚更それが反動の波となって襲ってくる。

人里で暮らすわけにはいかない。フランの中でそれは不動のものとなっていた。フランは多くの人間を殺した。だからそんな事はできるとはいえない。

だからフランは最後の賭けに出ることにした。これを言えば新之助はもう一緒に暮らそうなどと言えなくなるはずだからだ。それは

フ「じゃあこのままでもいいよ・・・」

新「え？」

フ「このまま私と同じ吸血鬼になってよ！！」

フランは言い訳のない子供のように身を屈めたまま思いつきそう叫んだ。まるで床に八つ当たりしているかのように。

新之助はまだ吸血鬼化を止める薬を投薬されてはいない。しかし先にあったように新之助は吸血鬼は嫌だと太陽とお別れは嫌だと言っていた。

吸血鬼になれば形式的にはフランと一緒に住んでも問題ない。フランが惨たらしく殺しに殺した人間と吸血鬼ではなく同じ種族である吸血鬼と吸血鬼になるのだ。そして同じ時を過ごし、ほぼ永久に一緒にいられることになる。

一見理想的に見えるその考えだが、それは無理な相談だ。いくら

フランの頼みでもついていけるものといけないものがある。もちろんフランはそれを分かって言っている。

そんなフランはまるで竹取物語に出てきた無理難題を押し付けるかぐや姫だ。現にそれは新之助の意思とは違うところになってしまふ。然るべく、新之助は即答した時とは打って変わって黙りこくってしまった。

そしてこの沈黙がフランに反撃の隙を与える事になる。と思われた

フ「ほらね！ やっぱり」

新「太陽になってくれるんだよね？」

フ「ふえ？」

フランに反撃の隙はなかった。あの時フランは途中で言うのを中断してしまっている。自分が太陽の代わりになるからと。その条件ならば新之助は

新「フランちゃんが太陽になってくれるなら僕は吸血鬼になる」

かぐや姫さながらの無理難題が突破されてしまった。フランの最後の切り札が砕け散った。

フランにもうなすすべが無い。

その瞬間、フランは体が揺れるほど大きく息を吸ってぐっと思を止めた。かと思うと嗚咽のようなうめき声と共に歯を食いしばる。そして目を思いつき瞑り、更には被っている帽子をしわができてもう戻らないのではないかと思う程強く両手で掴む。そしてずるずると震える手で下ろし顔の上半分を帽子で覆う。終いには脇を閉め、

完全に表情を隠してしまった。

それはそんな回答をした新之助になんて言えいいのか分からなかったから。いや、答えは分かっているはずなのに言う事ができなかったから。

新之助がもう何もできないように釣り上げばらばらに調理しサヨナラするはずだったフラン。

しかし、もうフランの姿は岸から消えていた。フランは引きずり込まれていた。そしてもう何もできなくなっていた。今はもうただその流れに身を任せ漂うだけ。

だがそこはとても暖かく心地よかった。そして体の中から言いようのない感情が溢れ出してくる。

それを明示するように思いっきり瞑ったはずの目から大粒の涙が瞼を掻き分けてぼろぼろと這い出してくる。その涙はフランの長いまつ毛を伝い、鼻や頬、更に唇を伝ってスカートへ落下していく。落ちた大粒の涙は弾けて飛散し無色透明の花を咲かせる。

歯を食いしばり泣き声を出さずうめき声だけを出すフラン。それが新之助の目にはどう移っていたのか。それを見て新之助が驚きの表情で布団を跳ね飛ばし、ベッドから転がり落ちる勢いでフランに迫る。

新「フランちゃん！？どこか痛いの！？」

どうやらフランが何故泣いているのか分かってはいないらしい。自分の言った事がフランにとってどれだけ重要な意味を持つか新之

助は分かつてはいないのだろう。だからこそフランは新之助の言葉を信じたし新之助もまたフランと一緒にいたいと願ったのだが。

今までフランが思い描いていた事。昔叶うことのなかった、そして自らの手でぶち壊した理想。

その理想がこの人里にはあるのかもしれない。

新「ふらんちゃ」

震えながら泣くフランの細い肩をいつものように掴み、抱き寄せようとするが新之助の両腕が空をきる。それはフランが体をひねって逸らしたから。そしてそのせいでバランスを崩した新之助の体が前のめりに倒れていく。

新「ん」

バランスを崩した新之助の体が制止する。それはフランが新之助を支えたから。

フランの内に溢れ出る感情が涙だけでは収まりきらなかった。だからフランはこの時こんな行動を取ったのだろう。

支えたものは柔らかくクッション機能抜群のもの。しかしそれは湿っていてしょっぱくそして少し甘い物。それが新之助の口に押し当てられた。

新之助はその場で固まってしまい動く事ができない。

更にはその場の全ての動きが止まり、時間が止まったと感じるほ

どに静かになる。

驚く程柔らかいその感触に二人はしばらくの間酔いしれていたことだろう。

そしてフランのクスクスと笑う声でその夢のような時間は終わりを告げる。

フ「ふふっ、だうまさうれたっ」

新「へ？」

笑ってそんな事を言うフランに新之助はそんな間の抜けた声しか出す事ができない。そして嘘泣きでもしていたのかと思えるほどフランの表情には満面の笑みがこぼれている。だが涙でぐちゃぐちゃになっているので泣いていたことは確かだ。

しかしそれはあまりの嬉しさから来る涙。さながら天気の良い空から降ってくる雨、天気雨を連想させるもの。

フ「私のファーストキスだぞっ」

顔をよく熟れた林檍のように真っ赤に上気させたフランがそんな事を言う。だから新之助はいつまでも呆けているわけには行かなかった。そんなフランを抱きしめずにはいらなかったのだ。

新「僕と一緒に暮らそう！」

新之助はフランを力の限りフランを抱き寄せて強く抱きしめる。

フ「むうゝ新之助え・・・痛い・・・」

新「あ、ごめん」

フ「女性はもっと優しく扱わないとダメなんだよ？」

昔フランが大人ぶって女性の扱いを新之助にも言って聞かせる。そんなフランに頭が上がらない新之助。もし一緒に暮らすのなら新之助はフランの尻に敷かれる事だろう。

フ「でもチューは気持ちよかったよ」

偉そうに説教を垂れていたかと思うと急にもじもじしながら上目遣いでそんな事を言うのだから新之助はもうジェットコースターに乗っている気分だ。

だからまた次の波が来ないうちにフランの肩を優しく、しかししっかりと掴む。そしてフランの潤んだ紅の瞳をじっと見据えて言う。

新「君の事をもっと知りたい」

新之助は優しい声でフランに語り掛ける。しかし新之助の目は優しいが真剣だ。だからフランも新之助の目を真っ直ぐに見上げる。

新「君の過去も、君の生い立ちも、君が歩いてきた道であった事全部。そしてこれからある未来の事も」

それを聞いてフランはまた目から涙が溢れてくる。しかし今度はその泣いている顔を新之助に見せて。

新「君と暮らせるならこのまま吸血鬼になる」
フ「嬉しい・・・」

もう我慢する必要も隠す必要もない。フランはその言葉が聞けただけでよかった。

フランがにっこりと笑ってそういうと細めた目から大粒の涙が上気した頬を伝って流れ落ちた。

見詰め合った二人はもう一度顔を近づけ合う。そして

永「W A W A W A 忘れ物♪」

フ「ラヴ・ミー・ドゥー!!!」

新「!」

フランは突然の訪問者に思いっきり新之助を殴り飛ばしてしまった。新之助は宙に舞い上がり、ベッドの上に落下し、赤い花を咲かせて気を失った。

第三十章（後書き）

フランは新之助に無理難題を押し付けましたがあれは試しただけなんですよね。

そう言ってくれるだけでよかったと思えるようなフランの願望と言えなうかなんというか。

ラストのラヴミードゥーはセクシーコマンドーという技です。「すごいよマサルさん」で出て来る文言なのですが・・・分かる人はいないかな・・・

とりあえず隙を見せた相手をぶっ飛ばす時に言う言葉（何でもいいです）。

次回はついに人里を出て幻想郷に帰ります。
つまりフラン成長計画の終了です。

ここまで読んでいただきありがとうございました。
では～

第三十一章

フ「うわあああああん！」

永「もう、どうしてそんなに泣くのかしら」

永琳がわんわんと大泣きするフランをなだめている。それは新之助を殴り飛ばし気を失ってしまったからではない。

永琳が帰ってきた理由、それは新之助の吸血鬼化を止めるための薬を作る為に必要なものを採りにきたからだ。それは必要なフランの体液を採取する為。

新之助の吸血鬼化を止める事。それはフランが試しに言ってみただけで本当にそうして欲しいわけではなかった。だからフランは素直に応じたのだが、その方法がフランにとって日光の次に恐ろしいものだったからだ。

フ「注射嫌あああ！」

それはフランの体液を採取するために永琳が持ち出した注射器が原因だった。フランは注射器を見るや否や顔を真っ青にして永琳から逃げ回っていた。しかし追い詰められ最後の抵抗と力の限り大泣きしているのだ。大泣きすればどうにかなるとでも思っているのだろうか。

その辺りのところはまだまだ子供のような。

永「銃弾浴びても泣かなかったくせに」

フ「注射は嫌なおおお！」

永「泣き止まないなら泣き止む薬を入れた注射もしちゃうわよ」
フ「うう・・・」

ようやく観念したのか、大声で泣く事を止めたものの以前目からは涙が溢れ出してくる。体は針が上手く刺すことができないくらいにプルプルと震わせて。

永「フランさん・・・大丈夫、そんなに痛くないから」
フ「うう・・・ぐすっ・・・」

いくら永琳でも震える腕に正確に針を刺す事などできない。

永「はぁ・・・もう、しょうがないわね。また今度にするわ」
フ「本当?!」

永「嘘」

フランが安心し、体の震えが止まったところを見計らって永琳が見事な注射捌きでフランの腕に注射針を打ち込んだ。フランは声にならない叫びを上げてその後しばらくの間泣いていたという。

フランによって殴り飛ばされた新之助は永琳によってベッドに寝かされ布団を掛けられていた。

フ「新之助・・・大丈夫かな？」

先程まで泣いていたフランは目をこすりながら新之助の容態を見ている永琳に問いかける。

永「心配しないで。意識を失っているだけだから。でもこの様子じゃ当分起きないわね」
フ「そう」

新之助の容態を一通り見終わった永琳が肩をすくめて言う。

永「どうする？もう帰る？」

フ「え？」

永「もうすぐ夜が明けるわ。日が照るとあなた帰りにくくなるでしょ？」

フ「あ・・・うん」

日が照ると吸血鬼であるフランが外を出歩くのは難しくなる。なら太陽が出ていない今のうちに人里を出たほうがいい。幻想郷に入れば日が出ていようと日の当たらない森を通って進めば紅魔館に着くだろう。だから出るなら今しかない。

永「霊夢さんはああ言ったけど、新之助さんもこうだしこれ以上ここに理由もないでしょう？」

フ「そう・・・だね」

永「それともやっぱり起きるまで待ってる？お昼になっちゃいそうだけど」

歯切れの悪いフランを不審に思っただけそう聞き直す永琳。何も言わずに帰るのは気が引けるのか、それともやはり寂しいのか。

しかしフランはそんな永琳の提案に首を振る。

フ「ううん。いい、帰る」

永「ふふ、いいの？」

きっぱり言い切るフランが面白かったのか、それとも見ていて気持ちよかったのか、永琳は優しく笑ってそう問い返す。現にフランは何か吹っ切れたような顔をしている。フランと新之助の間に何があったか永琳は知る由も無い。だが永琳の事だ、大体の事は分かっているのだろう。

フ「うん、またいつでも会えるし」

計画は全てとはいかないが上手くいった。だからまたいつでも新之助に会う事はできる。それは周りも認めてくれることだろう。

次また会えるなら別れの挨拶など不要。少しの間離れるだけだ。もしかしたら次の日にはまた人里へふらりとやってきているかもしれない。そして縁台で二人腰掛けながらまた色々な話をするのだ。

永「そう、じゃあ私についてきて。霊夢さんが結界を弱めてあるところがあるから案内するわ」
フ「うん」

最後にまた新之助の寝顔をちらりと見る。新之助の顔はフランに殴られたにもかかわらずとても気持ちよさそうだ。

それを見て安心したように軽く微笑み、フランは永琳の後に続いてその病室を後にしたのだった。

二人が診療所を出ると永琳はきちんと戸に鍵をかけている。その永琳を尻目にフランは少し驚いたように辺りを見回している。それは外の空気は先程の病室とは全く違った空気だったからだ。フラン

は太陽が出るよりも早く起きた事があまり無かったのだろう。

そこは夏の終わりとはいえまだ夏なのに肌寒く、そして少し湿った空気。吸い込んだら気持ちよく、体の中に新鮮な空気が入ってくる。

空を見れば雲は無く、しかも星もない。あとは白と深い青のグラデーションが広がっているだけ。それは未だ顔を見せない太陽が描いた単調な空だった。

しかしその単調で何も無い空にフランは熱い視線を向けていた。その空がフランには何故かとても気持ちよかったのだ。

永「どうしたの？」

フ「え？」

永「空なんか眺めて、そんなに面白い？」

フ「なんかいいなって」

鍵をかけ終えた永琳も空を見ながらフランに問いかけてきた。こんな何にも無い空を見て何が楽しいのかと言いたげだ。

しかし何も無い空への憧れは裏を返せば悩みがある自分の、もやもやとした今の状況から逃げ出したい深層心理でもある、と言うのは少し解釈が間違っているかも知れないが少なくとも、フランの内に秘めた悩み事はそんな今にも逃げ出したいものだ。

それに気付いてか、永琳が不意にフランの柔らかな場所を突いてきた。

永「やっぱり皆と会うのが怖い？」

フ「なっ!？」

不意を突かれたフランは永琳に振り向き、口をパクパクさせながら必死に平静を装っている、つもりだろうがそんな演技力フランには無かった。

フ「そ、そ、そんな事っ、ないっ」

結局動揺しながらそんな事を言ってしまう。永琳はそれを見て笑っているのもう隠す事は無理だろう。

永「そう? 相談に乗ってあげようと思ったんだけどな」
フ「え? 本当!？」

などとフランが言い、更にしまったとばかりに俯く。永琳にはそれがとても可愛らしく思えたのかフランを後ろから抱きしめた。

永「全く、可愛い子ね」
フ「ちょ、ちょっと」

フランは恥ずかしそうに後ろから回された手を振りほどこうとする。

フ「私はこちら見えても500年以上生きてるんだからね!」

永「私はその100倍は生きてるわよ?」

フ「へ? マジ?」

永「ふふ、嘘よ。でもあなたより年上は確かよ」(本当は万倍以上だけだね)

フ「ふ、ふん・・・」

それを聞いてか、それとも抵抗しても放さない永琳に諦めたのか、はたまた少し寒いこの空気の中抱きしめられるのはとても暖かく気持ちよかったからなのか、フランは大人しくなる。

永「差し詰めあんな別れ方したから何話して良いか分からないってどこかしら？」

フ「うん・・・」

永「大丈夫よ。皆あんな事なんとも思っていないわ」

幻想郷を出た日、紅魔館で皆に言ったこと。永琳は励ますつもりで言ったのだろうがそれが逆に仇となって返ってくるようになった。

フ「それは私がああいうことするって分かってるからだよね・・・」
永「え、ええ・・・」

とたんにフランは悲しそうな顔をする。

フランはあの時、言っではいけない事を言ってしまった、と思っているだろう。しかし紅魔館の皆にしてみればいつもの事、またいつものようにフランが変な事を言っているだけだと思っていたことだろう。だからそれは特に気にする事ではない。永琳はそう思っていた。

しかしフランは自分が皆にそう思われていたことが悲しかった。自分はある事言いたくなかったのに、と。

だがフランの何万倍も生きている永琳だ。すぐに崩された体制を立て直す。

永「でもあなたは変わったでしょう？」

フ「変わった？」

フランはわけが分からず思わず顔を上げてしまう。そこには不敵な笑みを浮かべフランを見下ろしている永琳の顔があった。しかしその顔は不敵な笑みが張り付いているにも関わらずとても安心できる笑みも張り付いていた。

その永琳の優しい表情をフランは口をぽかんと開けて見つめていた。そして更にその永琳の口から言葉が発せられる。

永「少なくとももうあんな事は言わない、違う？」

それはフランが人里に来て変わり、そしてもう二度とあんな酷い事を言わないと信じているぞという永琳の信頼から出た言葉だった。

人に信頼される事、それは時に重荷となる事もあるだろうが今のフランにとってこれ以上に嬉しいことは無い。

フ「もう言わない！」

だからフランはまじめな顔で叫ぶように元気よく言ったのだった。

永「ふふ、行きましょう」

永琳が差し出した手をフランが握って再び歩き出す。その姿は傍から見れば母親とその手を握っている子供だ。などと永琳はそんな事を考えながら楽しそうに歩いている。

しかしフランはというと紅魔館の皆と再会した時、なんて言えばいいかを考えていた。あんな事を言ってしまったのだ、やはり謝ら

なければいけない。しかし許してもらえなかったら？紅魔館から追
い出されたら？そんな思いがまた頭の中に渦巻いてくる。

永「その橋を渡ったところに薄くなった結界があるからそこを通
って幻想郷に帰りなさい」

そんな胃の痛くなるような事を考えている内はまだよかった。し
かし永琳の言葉でそのリミットが刻一刻と過ぎていく事を再認識さ
せられる。

フ「う、うん」

もうあまり時間が無い。後は結界を抜けて森の中を進みながらゆ
っくり考えるしかない。

永「もし紅魔館を追い出されたら」
フ「え？」

不意に永琳がそんな演技でもないことを言い出す。

永「永遠亭に来なさい。遊びたいなら一日中暇なお姫様もいるし、
それにあなたみたいな子供なら大歓迎よ」

未だ二の足を踏んでいる、そしてもしかしたら紅魔館に帰らない
かもしれないフランにそんな事を言う。しかし子供だ何だと言え
ば気丈に振舞いたがるフランだ。

フ「私子供じゃないもん！」

フランは永琳の手を払い退ける。

フ「それに」

永「ん？」

フ「逃げてても何にもならないし」

永「そう」

それは紅魔館の皆と向き合って生きていこうと言うフランの意志。

フ「でも遊びに行くだけなら言ってあげてもいいよ」

永琳はフランの背中を上手く押したらしい。しかしフランがそんな事を言うものだからつい噴出してしまう。

永「ふふっ、楽しみに待ってるわ」

フ「じゃあね、バイバイ！」

永「バイバイ」

フランは永琳に手を振りながら振り向いて前を向く。

そして歩き出した。

一人で歩き出した。

紅魔館の皆と向き合っていくという道を。

それは急な上り坂になっているかもしれない。崖になっているかもしれない。しかしどんな険しい道だろうとフランは進んでいけるだろう。人里で新之助や他の人間達と仲良くなる事ができたのだ。それは幻想郷も例外ではきつと無いだろう。

町の外へと続く橋。その先には幻想郷へ通じる一本の道が見える。

フランは橋の前で立ち止まる。それはその橋を渡りたくないからではない。人里と幻想郷の境界線。出発前に行きたくない駄々をこねていた人里も思いのほか楽しかった。その楽しかった記憶を思い出していた。

振り返ると永琳が首をかしげているのが分かる。その後ろには一ヶ月間自分が過ごした人里がある。そして楽しかった思い出が。

フランは前を向く。そしてまた歩き出した。その一步一步を噛み締めるように。

その橋を渡ると変なものに突き当たる。目の前には何も無いはずなのに見えない壁がある。フランは恐る恐る手を伸ばしそれに触れてみると少しびりびりする。それは霊夢が通れるようにした結界だった。

フランは前に結界に触れた事がある。すると全身に電気が走ったようにびりびりと痺れ、立っていられなくなったのだ。それは魔理沙にそそのかされてしたという事は言うまでもない。

だが今の結界は触れば少しびりびりするだけで前ほどの威力は無い。

だからフランは思い切って飛び込んだ。目をつぶって手で顔を覆いながら一気に突き抜けた。

すると不思議な事に何かに突き当たった。それは結界ではない。何か別の物体。人里から見た限り橋の向こう側には何も無かったは

ずだ。

しかしフランは別の何かを感じていた。それは匂いだった。いつも嗅いでいたような、しかしとても懐かしい匂い。更に優しく、柔らかく、少し甘い、いつも自分を包み込んでいてくれた安心できる匂い。

そしてそれは一番大好きだった匂い。

「痛いじゃない」

そして一番好きだった声。

一番聞きたかった声。

フランは恐る恐る目を開けるとそこには自分と同じような胸に赤いリボンが見える。顔を上げるとそこにはフランの姉、レミリアが自分を見下ろしている。

フ「お、おねえ様?!」

レ「なあに?」

フランは驚いてレミリアの胸から離れようとするがレミリアは自分の胸に飛び込んできたフランをしっかりと受け止めて放そうとはしない。せめて合ってしまった視線を外そうとするがその先には咲夜がいた。フランは驚くようにまた視線を逆方向へ向けるがそこにはパチュリーの姿が。その後ろには美鈴もいた。

そして皆一様に微笑んでいる。

しかしフランにとってこれは予想外だった。まさか人里と幻想郷の境界まで、しかも皆揃って迎えに来ているとは思っていなかったからだ。幻想郷の森の中で何を言うか考えようと思っていたのだが。その当てが外れたフランは動揺しすぎて何を言えいいのか分からなくなってしまった。あまつさえレミリアはそんなフランを放してはくれない。

フ「あ、あう・・・」
レ「フラン？」

紅魔館の皆は何故フランがこうなっているのか分からないらしい。それは霊夢が新しく作った結界が原因だった。これは幻想郷からは見えるが人里からは見えない仕様になっているらしい。小島当主に付けていた、丁度持っていたという札もその実験の肯定で生まれたのだろう。これは人々の心配を少しでも和らげるためでもあるのだろうか。

フ「あ、あの・・・おねえ様！」
レ「何かしら？」

レミリアはそんなフランを更に抱き寄せる。そうすればするほどフランは余裕が無くなっていく。

だがフランには言うべき事がある。それはこの一ヶ月間ずっと心に引っかかっていた事だ。

フ「わ、私・・・皆の事嫌いだって言ったけどあれ嘘だからね!!」

目をつぶりながら思いっきりそう言い切るフラン。今のフランに

はそれが精一杯だった。だが心にずっと引っかかっていたものを今外した。言わなければならない事を今言ったのだ。

しかし何の反応も返ってこない。

フランが言った嘘。しかしあの時は本当に嫌いだとそう思っていた事。それを見越してみんな冷めた目で見ているのだろうか、そんな嘘に私達は騙されないぞと。

フランは恐る恐る目を開ける。

すると意外な事にその顔は疑いの表情ではなかった。しかし微笑みも消えていた。その皆の表情は一樣にキョトンとしている。何故そんな表情をしているのかフランには分からなかった。そして皆もまた顔を見合わせている。

フ「あ、あのね！皆に死ねって言ったけどそんなの全然思っ
て、その、あの」
レ「フラン」

そんな一杯一杯のフランの名をレミリアが呼んだ。

レ「そうじゃないでしょ？」

フ「へ？」

レ「帰ったらまず言う事があるでしょう？」

帰ったらまず言う事それは紅魔館に行く途中で考えようと思った事。しかしそんな複雑な事を紅魔館の皆は期待はしていなかった。ただ誰しもが帰った時、自分の家に帰ったときにまず言う言葉。それは

フ「た、ただ・・・いま」

レ「お帰り、フラン」

レミリアはその言葉をずっと待っていたのだろう。そしてなかなか言わないフランのせいでそれがより大きくなったのだ。フランの体を放さなかった事もそれが原因だった。

レミリアはただそうしたかった。フランをただきつく抱きしめたかっただけだった。

パ「お帰り、妹様」

咲「御帰りなさいませ、妹様！」

メ「お帰りなさい！さみしかったですよ！妹様！」

皆が口々にフランにお帰りと言ってくれる。そんな中レミリアは思いっきりフランを抱きしめた。フランがどうなろうと知った事ではないかのようにきつく、とてもきつく、強く、優しく抱きしめたのだった。

レ「心配したんだからね・・・馬鹿フランっ」

そんなレミリアの目からは大粒の涙がこぼれて落ちた。そしてその涙はレミリアの胸に押し付けられているフランの顔にポツリと落ちていく。

レミリアに心配されているとは全く予想していなかったフラン。あまつさえ涙を流してくれるなど思いもよらなかった。だからそれが嬉しかったのか、はたまたレミリアに強く抱きしめられすぎて絞られたからなのか、フランの目からも大粒の涙が溢れ出てきた。

フ「おねえさま・・・ごめんなさい・・・」

そう呟いてフランはレミリアの胸に顔を押し付け、声を上げてむせび泣き始めてしまった。紅魔館の皆に温かく見守られながらフランはずっと泣いていた。

少し肌寒い空気の中、永琳とはまた違う、とても暖かい光にフランは包まれていることだろう。

幽「あらあら、一足遅かったようね」

するとどこからともなく幽々子がやってきた。

夢「だから言ったじゃないですか、フランさんは紅魔館に帰るって」

その後ろにはやれやれとため息をついてそんな事を言っている妖夢の姿がある。どうやらフランを自分達のところへ住ませようとして来たらしい。

魔「全く・・・せっかくの再会なんだから空気読めよな」

そうすると茂みから魔理沙も出てきた。紅魔館の皆に気を遣って今まで隠れていたらしい。

夢「魔理沙さんも来ていましたか」

幽「妖夢、今からでもフランちゃんを奪うわよ」

夢「えええ!？」

魔「野暮な事するんじゃないやねえぜ。やるってならマスパを」

咲「あなた達の存在が野暮だわ。騒ぐならほかで騒いでくれる？」

今ここに妖夢VS魔理沙VS咲夜の構図が作成された。

しかしそんな中フランは見向きもしないで未だレミリアの腕の中で泣いていた。よほど自分を受け入れてくれた事が嬉しかったのだろう。ここに来るまでのいろいろな懸念が全て解決したのだ。これほど嬉しい事はない。

文「はい！皆さんがお待ちかねのあややですよー！」

魔「誰も待ってないっての」

咲「あなたも刻まれたいようねパラッチ」

レ「またややこしいのが来たわね」

文「あやや・・・酷い言われようですが私がここに来たのは写真を撮るためです！」

そんな分かりきっている事を堂々と宣言する文に皆臨戦態勢だ。せつかくの再会にパシャパシャ写真など撮られた時にはいい雰囲気
のぶち壊しどころではない。

文「あ、違いますって！落ち着いてください！」

咲「十数えるうちに消えなさい。さもなければ串刺しよ」

文「ちょ、ちょっと」

咲「八、九、じゅ」

文「私は全体写真をとりに来たんです！！」

咲「・・・全体写真？」

文「そうですよ。せつかく計画が終わったんですから記念にーと思
って」

魔「ああ、いいなそれ」

レ「天狗にしてはいいこと思いつくじゃない」

するとどこからともなく小町が現れ一緒に連れられたチルノとリグル、大妖精が姿を現した。

町「全体写真と聞いて。あたかも混ぜなよ」

？「あたいセンターがいい！」

大「チルノちゃん・・・」

リ「端に行っていよう・・・」

そしてそんな楽しい事に気付かない、そして参加しない八雲紫ではなかった。

紫「私達を忘れてもらっては困るわ」

町「あ、ちょっと」

小町がそういう終えるまもなく小町の頭上から四季と霊夢が降ってきた。

山「これは丁度いいクッションがあったな」

霊「そうね、フカフカだわ」

魔「なんだか珍しい組み合わせだな」

霊「子守唄を聞いていたのよ」

山「何が子守唄だって？」

町「早くときなよ」

すると結界の中から永琳がやってきた。倒れている小町の頭を踏んづけて。

町「・・・」

永「あら、ごめんなさい。なんだか楽しそうな雰囲気でしたから」

文「おや、続々と集まってきましたねえ。皆さん写りたがり屋さんですか？じゃあ並んでください」

いつの間にか文がカメラを台の上に設置し終えている。

レ「ほら、フラン」

フ「ふえ？」

未だレミリアの胸で泣いているフランの顔を両手で優しく持ち上げてやる。

レ「ふふ、前より泣き虫になったのかしら？」

レミリアはフランの涙をハンカチで軽く拭いてやる。そしてフランを抱いたまま器用に反転させカメラの方を向かせる。フランの頭の上に顎を置いて、腕はフランをぎゅっと抱きしめたまま。

フランはフランで今まで泣いていた顔をカメラで写されるのが嫌なのか不機嫌だ。ブスツとした表情でカメラから目を逸らす。

文「撮りますよー、フランさん笑ってくださいーい」

フランとフランを後ろから抱きしめるレミリアを中心にその後ろに咲夜、そして紅魔館の皆が固まりその周りを囲むように魔理沙や霊夢達が並ぶ。そして右上には集合写真に欠席した者よろしく、紫が隙間からひょっこり上半身を出している。

その時、まるで皆を祝福するかのように背後から太陽が顔をだす。しかし吸血鬼にとって太陽は天敵である。

だからレミリアとフランの背後にいた咲夜が手馴れた手つきで日傘を差してやる。

レミリアはフランを抱きしめながら小さく咲夜に『ありがとう』と呟く。そして未だにブスツとしているフランを覗き見たレミリアが少し微笑んでフランの頭から顔を下ろす。更にフランの頬に自分の頬をペタリと貼り付けて。

レ「フラン」

フ「？」

レ「愛してるわ」

西洋の習慣か、東方ではあまり聞かれないそんな言葉。その言葉が呪文となってだろうか、フランの顔が不機嫌な表情から驚きに変わり、そして笑顔になる。更に白いキバを見せて、涙で潤んだ目を細めて。

そしてそのシャッターチャンス逃す文ではなかった。

カシャリ！

ニヤリと表情を唇を吊り上げた文が撮った写真にはカメラ目線の者は一人もいなかった。文が合図を出さなかった事もあるが、それはレミリアの呪文で皆の視線がある場所に集まった時にシャッターが切られた為。

その時の皆の顔は赤面している者、驚いている者、微笑んでいる者、色々だったがその視線は全てレミリアとフランに注がれていた。

この写真は後に記事になった事は言うまでもない。後で文は合図

を出せと皆から口々に攻められることになるがこれはこれでいいネタになる事だろう。

そしてこの写真は紅魔館のとある部屋の片隅にもひっそりと飾られる事になるのだった。

第三十一章（後書き）

と言うわけでフランの成長計画が一通り終わりました。

この作品を書いていて思いましたが何も教育らしい教育してないな
〜と・・・

本当にこれでよかったかは謎ですがフランは何かが変わったと思います。

何が変わったかは私にもよくわかりません。

そして最後の集合写真ですがこれから思いついたんですよね。きっかけは「Angel Beats!」と言う作品の皆が集合して徐々に増えていくと言うエンディングを見て思いつきました。

集合写真からどうなったらこの状況になるか考えていたらこんな風になってしまいましたね。そこで題材になりやすい闇を抱えたフランを主人公にして。

その過去も途中から付け加えたのですが書いていく内に本編に混ざりこんでくるほどになってしまいました。

と、あとがきとは何を書いていいのかあまり分からないのでこれくらいにしておきます。最後にこの集合写真では「Brave Song」または「一番の宝物」と言う曲でしめようと思っていたので是非この曲を聴きながら更にAngel Beats!のエンディングと重ねて思い浮かべてみて欲しいと思います。自分が描ければいいのですがそんな才能は・・・

ここまで読んでいただきありがとうございました。

計画は終了しましたがもう少し続きます。

後は後片付けみたいなものですが。

ではで

第三十二章（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです。色々と環境が変わり慌ただしくなっています・・・

さて今回は撮影が終わった後ですね。軽いノリとシリアスが薄い文章で挟まれてギャップについていけないかもしれませんがご了承ください。

第三十二章

魔「さ、これからどうする？紅魔館へ行ってから博麗神社へ向かうか？それともこのまま神社へ行くか？」

写真撮影が終わると魔理沙が未だレミリアの胸に張り付いているフランを覗き込みながらふとそんな事を言い出した。何故か博麗神社へ行く事が決まっているかのような口ぶりだ。博麗神社で何かあるのだろうか。

フ「何で博麗神社？」

魔「ああ、言っただけだったわけ？やっぱめでたい事の後には宴会だろう？」

レミリアの胸に張り付いているフランが不思議そうな顔を魔理沙の方へ上げて当然の質問をすると魔理沙もさも当然のようにそんな事を言う。

宴会と言えば飲んで騒いでのドンちゃん騒ぎ。

だから宴会と聞いたフランはさっきまでの不機嫌そうだった顔をぱっと明るくさせて目を丸くした。

さっき鳴いたカラスがもう笑った。と言う言葉が相応しいが、先程まで危惧していた問題があっけなく解決してしまったのだ。これも当然と言えば当然なのだろう。

フ「宴会！？行く行く！神社行く！」

そして宴会と言う言葉にフランだけでなく、周りにいた各々帰宅しようとした者達も足を止め、その内容に聞き耳を立てている。

魔「でも帰ったばかりなのにいきなり神社でいいのか？」

フ「私は紅魔館じゃなく皆のところへ帰ってきたんだもん。それが何処でも関係ないよ」

人里から一ヶ月ぶりに帰ってきたのだ。一番初めに紅魔館に行かずに博麗神社に行くなんて、と。それが魔理沙の主張だろうが、そんな一般的な常識など持ち合わせてはいないのが幻想郷の住人だ。

花より団子、色気より食い気の連中の集まりと言っても過言ではない。(たぶん)

だからそんなフランの発する花を魔理沙が冷めた視線でばらばら切りにし、更に言葉を重ねてみじん切りにした。

魔「はいはい、全くお前は青臭い餓鬼だな。臭いお喋りはこれくらいにしておこうぜ。なんだかむずがゆくなってくるぜ」

フ「私臭くなんかないもん！」

魔「いやいや、褒めたんだぜ？ 乳臭いから青臭いに格上げだ」

臭いと言われたと勘違いしたフランを片手で制止しながらひっひっひと意地悪な笑みを見せる魔理沙。

霊「はいはい。しつもん」

すると突然学生のように手を上げて「質問」と間延びした声をあげる霊夢。魔理沙は片手でフランを抑えながら気不味そう霊夢のほうを見る。

魔「何だよ霊夢、脇なんか見せて」

霊「いい脇でしょ？」

魔「ああ、そうだな。じゃあ皆神社へ行こうぜ！」

一同「おー！！」

霊「はいはい、ストップストップ」

魔「何だよ霊夢、皆行く気満々だったのに、ノリ悪いぜ？」

霊「宴会って何？」

魔「フランお帰り〜って言う宴会」

霊「いや、そうじゃなくて」

魔「ん？」

霊「ん？じゃねーわよ！私初耳なんですけど？！」

魔「ああ、だって今決めたから」

霊「はあ？！」

魔「あ、いや、その・・・ノリ？だぜ」

霊「あんたねえ！何の権限があって神聖な博麗神社を妖怪の宴の場にしようってのよ！」

魔「ま、まあまあ、固い事言うなよ。フランが帰ってきたんだぜ？めでたいんだぜ？これを今日祝わなくていつ祝うんだ？」

霊「私としては問題のタネが芽を出して戻ってきただけなんだけど？！」

魔「その芽はきつといい方向へ成長してるさ。ほら、あの太陽に向かってな」

魔理沙は朝日を指差しながらその眩しい太陽に熱い視線をおくる。霊夢はそんな魔理沙に目を細めて冷たい視線を送る。フランに至っては見ようとしたところをレミリアに取り押さえられた。

霊「さぞや立派な灰になるでしょうね」

目を細めた霊夢はそう言い捨てて両の掌を天に向け首を振った。

魔「はは、上手いこと言うなあ霊夢、よっ日本一！」

霊「その安いよいしょ止めてくれないかしら・・・」

魔理沙の下心見え見えのその安いよいしょに逆に恥ずかしくなった霊夢はため息を一つ。そして顔を背けた視線の丁度先。レミリアに取り押さえられたフランが心配そうに霊夢を見上げている。

霊「まあいいわ。今のフランなら」

以前のフランならかんしゃくを起こして神社を壊しかねないが今のフランならば暴れる可能性もそれ程ないだろう。そして霊夢が思っていたよりもずっと成長していた。それは霊夢も分かっている。

それに最後の日に羽目を外して祭りに行った挙句、あんな事になってしまった。神社を宴会場にするくらいですむならば安いものだろう。

だから霊夢はため息をついて渋々了承した。

魔「さっすが霊夢だぜ。なら神社に向かおうぜ」

霊「勝手にすれば？」

とため息をついて腰に手を当てる霊夢。

しかしここで魔理沙は不思議な光景を見る。いや、魔理沙だけではない。そこにいる全員が何か違和感のようなものを感じた。

それはため息をついた霊夢の視線がパチュリーに注がれていたた

め。そしてそのパチュリーもまた霊夢に視線を向けていたのだ。

これは偶然目が合っただけと言われればそれまでだが。普段この二人が世間話をするところなどあまり見る機会が無い。話しているとしても何を話しているか全く予想が付かない。それほどこの視線の違和感は大きかった。

それもあったのだが更に皆の不信感を掻き立てたのはパチュリーが霊夢の視線に反応すると同時に頷いたのだ。

魔「ん？」

霊「何でも無いわ」

魔理沙は他の者達と顔を見合わせるが皆一様に頭の上にはてなを浮かべたような表情をしている。ただし四季と紫だけはそっぽを向いて沈黙。当の霊夢とパチュリーはもう視線を外し何事も無かったかのように目を瞑っている。更に霊夢は頭痛でも起きたかのように額に手を当てて何か考え込んでいる。

霊夢とパチュリー。この組み合わせで思いつくものと言えばこの計画を企てた中心人物であるということだけだ。

その一瞬の出来事。それは後に今の浮かれたフランをどん底に陥れる事になる予兆だった。それが分かるのはもうす少し後の話だが。

霊「宴会・・・ね、まあいいわ。それで？準備はどうするのよ？」

宴会と言えば煌びやかな飾りつけ、など花より団子の連中には不要なものだろう。大量の食料とその場を盛り上げる宴会芸、それさえあれば十分と言っている。

だが魔理沙は今決めたと言った。とても宴ができるような料理を用意しているとは考えにくい。

しかしその背景とは逆に魔理沙の顔は余裕そのものだ。その自信はどこから来るのか。

魔理沙はその自信の根源であろう方向を見てこういった。

魔「出来てるよな？」

咲「何でこっちを見るのよ」

どうやら魔理沙はフランの為に用意されたご馳走を当てにしているらしい。宴会芸はどうか分からないがレミリアならさぞ豪華なご馳走を用意していることだろう。一ヶ月ぶりに帰ってきた愛する妹のためだ、用意してないわけがない。と言うのが魔理沙の予想だろう。

フ「さくやあゝ宴会やりたい」

咲「え・・・しかし・・・」

当然こんな大人数など予想はしていないので今のままでは食料的に無理がある。そして紅魔館のメイド長と言えど従える身。従者にその決定権は無い。

フランはいつも食事等を用意しているのは咲夜だから、という安直な考えで咲夜にすがっただけだろうが、それで咲夜がどんな顔をし、誰の意見を仰ぐかは言うまでもない。

レ「ふふ、いいわ、足りない分はこちらで用意する。買出しお願い

ね、咲夜」

咲「本気ですか？お嬢様？」

とは咲夜の常識で考えれば当然と言えば当然と言える。小さな宴会とはいえ開くのに多少の費用は掛かる。

しかしそんな事はレミリアの経済力なら痛くないだろう。ならば咲夜が危惧していることは何か。

それは自分の主がちゃんと金を払うに値するものかどうかを分かっているかだ。今日の前にいる者たちにその価値があるかどうか。

そして今、咲夜の目に皆はどう映っているのか。咲夜はそこにいる皆の顔を舐めるように見回した。

咲（その日の食費さえに困ってそうな脇巫女・・・）

霊「何よ」

咲（そしてたかる気満々の快速ゴキブリ魔女）

魔「お前今なんか失礼な事考えただろ？」

咲（それに加えてブラックホールの胃袋を持ってそうな西行寺幽々子）

幽「あらあ？なんだか見つめられてるわ」

夢「幽々子様をカービィかなにかだと勘違いしてるのではないでしょうか？」

咲（更にはこれ見よがしの巨乳共、絶対偽パイに違いないわ）

永「ジェラシーの気を感じるわ」

町「結構重いんだよ？肩こるし」

メ「あ、あの・・・何で私も睨まれてるんでしょうか？」

咲「極めつけはあの三馬鹿妖精共・・・」

一「はうう・・・」

ニ「こ、声に出てますが・・・」

九「スイカバーが食べたい!」

咲「はぁ・・・何だかやる気が・・・」(私はお嬢様達だけにお食事を御つくりして差し上げたいのに・・・)

レ「大勢の方が楽しいでしょ?それに神社なら霊夢もいるし一石二鳥じゃない」

咲「頭大丈夫ですか?お嬢様」

フ「咲夜」

咲「妹様?」

咲夜が声の方を見下ろすといつの間にか咲夜の腰にフランが抱きついて見上げている。

フ「お願い」

そして上目遣いでそんな事を言われた日には鼻血を出さずにはいられないだろう。咲夜に限り。

咲「喜んで!」

フ「咲夜ありがとうー!」

魔「ちゃんとお礼言えるように」

と、いつも弾幕ごっこの相手をしてやった魔理沙はお礼を言われた事がなかったたのでそのフランが新鮮に思えたのだろう。いつも悔しがるか気絶しているかのどちらかだからだが。

しかし咲夜の死角、そこにあるフランの表情は二つ名の通りだった。

魔「・・・まあ色々成長したってことだ・・・よな・・・」

霊「さあ、皆行くわよ」

その霊夢の一言で皆一步を踏み出し始める。夏の終わりの早朝、一行は神社に向かった。

魔「やっぱ宴会といえどもりあがる芸をしなくちゃな」

パ「芸って・・・あなたは何をやるのよ？」

魔「やっぱ盛り上げるには歌だろ？」

パ「あなたの自己満足じゃない」

魔「人聞きの悪い事言うなよ！私はフ란の為を思ってたなあ」

パ「じゃあ私も一緒に歌うわ。見張りのために」

魔「別にいいけど私の歌は激しいぜ？」

パ「大歓迎だわ」

メ「じゃあ私は太極拳でも」

魔「それ盛り上がるのか？」

メ「もりあがりますとも！」

夢「剣舞なら私に任せて下さい！」

魔「お、何だよ妖夢、いつに無くやる気だな！やったれやったれ！」

霊「ちよっと！神社を壊すような事はやめてよね！」

魔「そうだ！物騒な事すんじゃないぜ！自重しろ！」

夢「どっちですか・・・」

などと楽しそうに何をやるかフ란がいる前で決めている。隠し芸ではないので良いのだろうがそんな事をすればサプライズ的な楽しさの要素は皆無だろう。

そんな楽しそうな輪に主役であるフ란は入る余地は無い。だからその輪と日傘をさしてくれている咲夜を挟みその日傘の影にいるレミリアの少し後ろをフ란は歩いていった。

周りは朝とはいえ夏。診療所から出た直後の気持ちのいい空気は何処かへ行き、周りはもうすでに暑くなってきた。

博麗神社へ続く道。脇には木々が生い茂り、反対側には小川が流れている。さんさんと降り注ぐ太陽光受け、川面や草、生い茂る木々はきらきらと輝いている。

しかしそれを輝かせる太陽は吸血鬼にとって敵でしかない。咲夜の日傘によって作り出される日陰はあまりにも小さい。

その小さな陰から出れば日光の餌食。言わば足を踏み外せば死の崖の上だ。だがその影はフランがいるにも関わらず、レミリアに合わせてか、それともレミリアが影に合わせてか、一寸たりともその身を太陽の下に晒させるような事はしない。

レミリアはそんな動く崖っぷちを臆せずすたすたと歩いている。咲夜への信頼か、それともレミリアの絶妙な歩みか。慣れたものである。

そんなレミリアをボーッと眺めながらフランは一番安全な影の中央を歩いている。

そして何を思ったのか急にフランはレミリアの背中に飛び乗った。

レ「きゃっ!？」

動く崖っぷちを何の恐怖も持たず、すたすたと歩くレミリアもそのフランの行動には恐怖を隠しきれなかっただろう。

レ「フラン?!」

フ「ずっと前にこうしてくれたよね」

それは昔、気を失ったフランを追っ手から逃げるためにした事。軽くよろめいた体制を建て直し少し俯いてからレミリアは言葉をつむぎだした。

レ「・・・思い出したの？」

フ「うん」

レ「そう・・・」

そう言えばレミリアはフランが記憶を取り戻した事をまだ知らなかった。話したのは新之助だけ。

レミリアはあの時の記憶が蘇ってくる。より鮮明になって。

ハンターの追っ手から無我夢中で逃げていた時、フランの意識がほんの少し戻ったあの時と同じようにレミリアは恐る恐る声のするほうへ顔を向けようとした。

ぺたっ

レミリアの顔は少し動いて止まった。それはフランの暖かく柔らかいほっぺたによって妨げられたから。

フ「こうやって・・・してくれたよね」

太陽に追われ、運命を受け入れたあの時と同じように。

レ「そう・・・ね」

レミリアはぽつりぽつりと言葉をはくと目を瞑り、あの時と同じように、猫のように進行を妨げたフ란の頬を自分の頬で撫でてやる。フ란は気持ちよさそうに目を細め、より一層レミリアを抱きしめる。

レ「ごめんなさい」

そして次にレミリアの口から出た言葉。それは謝罪の言葉だった。

フ「なんで謝るの？」

レミリアはフ란を先程愛していると言った。しかしそれはフ란を笑わせるために付いた何か。

フ란への愛。レミリアは以前それをフ란に対する謝罪だと言った。それを聞いた咲夜も不可解な面持ちでその会話の成り行きを見つめている。

レ「あれは私のミスよ。あの私が時ダリスを殺していれば・・・」
フ「え？」

レ「あの時の事をあなたはまだ覚えてるかしら？」

あの時とは孤児院である城の一室で悲劇が起こった時。

レ「私はハンターを殺せると確信して槍を振りかぶったわ。でもあの時見てしまったの。ダリスの歪んだ・・・悲痛な表情を」
フ「・・・」

レ「私はダリスを刺す事ができなかった・・・体が動かなかった・・・
・どうして言いか・・・」

俯きがちのレミリアの声は段々小さくなっていく。

言い訳。

それが相応しいレミリアの言い草。それが自分への自己嫌悪を煽ったのかそれともそうフランに言われた時にどうしようかなどと考えてしまったのか。そして最後に「分からなかった」と今にも消えそうな声で小さく呟いた。

レ「これは私が犯した罪」

レミリアが言う謝罪とはそういう経緯があったらしい。フランの為に土下座したり幻想郷を捨ててどこか遠くへ逃げると言ったレミリア。

だからフランが深い悲しみに落ち、狂気に駆られ人々を気の済むまで殺し、それを快楽と感じてしまう殺人鬼にしまった自分が許せなかったのだ。

それを罪と称して自分を攻め立てる程に。

レ「それをあなたは・・・」

許してくれるか、など聞けるはずが無い。自分取った行動を罪と称するレミリアにそんな事いえるはずが無かった。

だがそれはレミリアの考えすぎでフランは全くそんな事思っていないだろう。逆に至れり尽くせりと言ってもいい。

しかしレミリアはその罪と言う呪縛を自らに押し付ける事でそれ

をフランへの謝罪としていた。

フランにとってその謝罪は心地よいものだろうが実の妹にそんな謝罪の関係など無用の長物だろう。

レミリアの呪縛、それをレミリアから解き放つにはどうしたらよいか。

それはフランにとって簡単な事だった。なぜならフランは「ありとあらゆる物を破壊する能力」を持っている。そしてフランは自称魔法少女らしい。

フ「ありがとう」

それは罪だと思っていた行為に発するだけでそれを天の恵みへ変える呪文。

レ「・・・そこは怒るところじゃないかしら？あの時ダリスを殺して窓から捨てていれば・・・いえ、あなたを無理やりにも連れ出していればあんな事には」

フ「でも今の皆に会えなかったかもしれないよ？」

失ったものは大きい、しかし得たものもまた大きいのだ。それが正しいか間違いか。それはどんな神でも知る由は無いだろう。

レ「それは・・・そうだけど・・・」

フ「幻想郷は面白いし」

レ「フラン・・・」

フ「ありがとうっおねえさまっ」

ちゅっ

とフランはレミリアの頬に軽くキスをする。

レ「ふ、ふらん!？」

フ「ふふ、皆いろんな反応してて楽しいな」

500年を経て、今その呪縛からレミリアは解き放たれた。

レミリアは驚いてフランを見るがフランはケラケラと笑っている。そしてレミリアもため息をつきながら鼻で笑い、そして軽く微笑んだ。更にばたばたさせているフランの両足をがっしり掴んでやる。

あの時と同じように。

そしてその光景をだらしなく顔を緩ませているものがいた。

魔「おい咲夜、鼻血拭けよ」

なにやら大事な話をしているレミリアとフランの為に魔理沙たちは気を利かせて静かにしていたらしい。咲夜に至っては言うまでもない。

レ「皆って、他の誰かにしてあげたの？」

フ「うん。新之助」

レ「そう」

魔「おい咲夜、涙拭けよ」

フ「新之助の唇やわらかかったよ」

咲「なっ」

レ「あら、やるじゃないフラン」

魔「おいまて咲夜！どこへいく！」
咲「あの女垂らしを殺してきます」
魔「ぼっ、皆咲夜を止めろ！」
咲「私を止めても時は止まりませんよ！」
パ「わけが分からないわよ咲夜」
霊「うっとうしいわよ咲夜！」
メ「咲夜さん落ち着いて！」
魔「ああ！レミリアとフランが燃えてるぜ！」
霊「美鈴が刺されたわ！」
夢「誰か医者を！」
山「全く騒がしい連中だな」
町「ですね」

こうして幻想郷の住人は住人らしく博麗神社に向かったのだった。

第三十二章（後書き）

レミリアの呪縛はきつと解き放たれたと思います。

灰はちゃんと回収し元に戻ったらしいです。

次回は宴会の模様とその後のフランどん底事件だと思います。もしかしたら長くなって二話に分けるかもしれませんが。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第三十三章（前書き）

これは宴会の準備の光景を考えながら書いてみました。
フランは寝てるだけです。

設定はパチュリーは魔理沙ラブということを念頭に置いておいてくれたら幸いです。

第三十三章

一行は荒ぶる咲夜をどうにか落ち着かせ、ずいぶん時間が経ってしまったが神社に到着していた。そして宴会の準備をするために皆霊夢に従って裏にある倉庫から宴会に必要な机や食器等を運びだしていた。

魔「何だあ？二人とも寝てるのか？」

咲夜と組んで長机を運んでいた魔理沙は広間で眠っている吸血鬼姉妹、レミリアとフランを発見する。

朝と言ってももう日も高々、しかし昼にはまだ少し早い時間。霊夢が暮らしているであろう広すぎる境内の中に天使のような寝顔が二つ。板張りでひんやりと冷たそうな床にレミリアが倒れるように眠っている。そしてその隣にはフランが寄り添うように眠っている。

フランの腕が未だにレミリアのクビに回されている。レミリアはフランを神社までそのまま背負ってきたのだろう。そしてそのまま力尽き、倒れるように眠った様が容易く想像できる。

そこにあるのは絵に描いた仲のよい姉妹そのものだった。

咲「ああ、お嬢様は一晩中起きてたから」

レミリアはフランの為に人間である町民に土下座までする程だ。レミリアは自分の能力でフランの途切れた運命を見ていた。とても眠れる心境ではなかったのだろう。

霊「フランは途中で起きちゃったから。まだまだ子供ね」
魔「そうだな」

霊夢、と美鈴組みが魔理沙達の後ろに続く。

フランは布団の中で寝たたが新之助の勘違いで起こされてしまった。そこからはしゃいだり怒ったり決断したりと色々あった。それで疲れてしまったのだろう。

仲良く寝不足の仲良く昼寝だ。

魔「どうでもいいけど咲夜、鼻血拭けよ」

更にその後ろから美鈴が。

メ「全く、空がまだ真っ暗なうちから叩き起こされる身にもなって欲しいですね」

やれやれと言った感じで長机を縁台に降ろす。

紅魔館の住人はいても立ってもいられないレミリアにせがまれて数時間前から支度していたのだ。おかげで全員寝不足だろう、と思われたがそうでもないらしい。

魔「お前らは寝なくて平気なのかよ？」

咲「私は時間止めて仮眠したから」

メ「私は」

魔「居眠りだろ？」

霊「居眠りね」

メ「ふ、こうなる事を私は予測して」

咲「仕事をサボったと？」
メ「すみませんでした」

咲夜はいつもの事だと言うようにため息をついて机を降ろし手に付いた汚れをぽっぽと払う。

パ「レミィもまだまだ子供だと言う事よ。体も、精神的にもね」

準備を手伝いもせずどこから出したのか、縁台で本を読んでいるパチュリーが皆の方を見もせずそんな事を言う。手伝いをしないだけならいざ知らず、いけしゃあしゃあとそんな偉そうな事を言うパチュリーに皆何か言いたそうだ。

しかしこの貧弱紫もやしに机運びなど出来そうも無い、というのは皆承知している。だから手伝えと言っても逆に面倒なことになりそうなので皆黙っている。

それは本人も気付いているだろう。だから読んでいる本をパンツと自分の前髪が舞い上がるほど強く閉める。そして皆の方をキツとじと目で睨みつける。

パ「何よ」

魔「あ、いや・・・そういやお前は眠くないのか？」

紅魔館の皆はレミリアにたたき起こされたと言っていた。この不健康そうな娘から大事な睡眠時間を奪ったらどうなるか。下手をしたら命に関わるかもしれない。

魔「寝不足でひいひいむきゅうとか言ってそうなのにな」
パ「そんな事言うわけないでしょ。馬鹿ね」

魔「馬鹿とはひでえぜ」

パ「私は前に見つけた本が面白くて」

魔「へえ」

パ「ずっと読んでいたら昼と夜が逆転しちゃったの」

一同「あー・・・」

これがパチュリーの体が弱く紫もやしと言われる所以だ。スペルが最後まで唱えられないという、魔女にとって致命的な弱点。しかしそれに見合うほどあの地下の図書館には価値があるのだろう。

昔レミリアが住んでいた所にあった書物。人間達が吸血鬼と同じ力をもてるほどのものがそこにはある。それは魔理沙が盗み出して読みたくなる程だ。

パ「何よ」

魔「そんな事よりも早く準備しようぜ」

やることはまだまだあるのだ。談笑している場合ではない。霊夢はいつの間にか鼻血を出しながら天使を眺めている咲夜を急かす。咲夜は不本意ながらもレミリアとフランに頼まれたのだ。断る事は出来ない。口惜しそうにその場を後にする。

更に霊夢は茶の間でサボって寝ていた小町をたたき起こして指示を出す。指示を出してもなかなか動かない小町だが四季の名前を出すとセコセコと動き始めた。

そしてここから博麗神社が少しずつ慌ただしくなり始める。

魔「さてと、私は何をするかな」

次から次へと皿やお箸、鍋といった食器が倉庫から出されていく。しかしいちいち広間にまで持っていくわけにはいけないので倉庫の入り口のすぐ前にうず高く積まれていく。

魔「この皿でも運ぼうかねえっと」

魔理沙が積まれた皿の約半分くらいに手をかけて持ち上げようとした時。

霊「あ、魔理沙、あんたはやんなくていいわ」

と、霊夢のそんな言葉が耳に入ってくる。声の方向を見ると倉庫から桶のようなものを運び出してきた霊夢がいた。

やらなくていいとはどういうことか。よもや魔理沙に手伝いをさせるなんて恐れ多いからやらなくていい、などと言うわけではないだろう。

魔「なんだよ。せっかく運んでやろうと思ったのに」

霊「あんたがやったら余計な手間が増えるだけでしょ？」

余計な手間。それは別に魔理沙が不器用だから皿が割れてしまう、と言う事ではない。幻想郷でも指折りのトラブルメーカーである魔理沙に壊れやすいものを任せたくないと言う心理から来たものだった。

それは魔理沙も分かっている。しかしそんな事を言われてはいないと引き下がるほどトラブルメーカーである魔理沙は甘くない。

魔「酷いぜ霊夢。私だって役に立ちたいんだぜ？」

霊「そう。役に立ちたいならそのお皿から手を放して両手を挙げて、3歩上がった後ろを向いて手を壁に」

魔「おいおいおい、私はどこかの強盗犯かよ。」

パ「本、さっさと返してよね」

縁台で本を読んでいるパチュリーが本を読みながらそんな事を言う。図書館から盗んだ本はまだ返されていないらしい。

的確なパチュリーの突っ込みに少しの間、ささやかな沈黙がその場に流れた。

だがその沈黙など魔理沙にとってその後の展開を考えるために与えられたシンキングタイムに他ならなかったらしい。

魔「・・・霊夢！私はフランが帰ってきて嬉しいんだ！」

霊「は、はあ？いきなり何よ」

魔「フランの為に何かしてやりたいんだよ！お前はフランに会いに行くなんて言うしさ！計画最後の日だって心配で心配で家でずっと自宅でフランの無事を祈ってたんだぜ？！祭り行くのも忘れてだ！」

霊「へ、へえ・・・あんたが祭りに行かないなんて珍しいわね」

・・・」

霊夢は最後の日、祭りで浮かれてフランの異変に気付くのが遅れた。それが原因でフランはもう少しで天界に行く事になってしまったところだった。だから霊夢はそこを突かれると厳しいものがある。

だから若干棒読みで目をそらしながらそんな事を言う。そしてその隙を魔理沙は逃さない。最後の仕上げと、魔理沙は目を光らせ霊夢の両肩を掴む。更に霊夢の背けた目を自分の方へ向けさせじっと睨むように見つめる。

魔「私が行ってやればフランもあんな事にはならなかったかもしれない！」

霊「そ、それは・・・」

魔「霊夢もそう思うだろ!？」

霊「ええ・・・」

魔「なあ、頼むよ霊夢！手伝わせてくれよ！」

霊「わ、分かったわよ・・・じゃあその皿を広間に運んでちょうだい」

魔「おうよ」

霊夢はそう言うと言いつつ桶を置いて倉庫へ退散してしまった。

魔理沙はというともろんそれを見て満足げに白い歯を見せてニシシと忍び笑いをしている。実は魔理沙は最後の日に起こったことの一部始終を全て文から聞いていたのだ。

パ「最低ね」

魔「ん？何がだよっと」

魔理沙は皿を持ち上げ縁台で座っているパチュリーの方へ皿を運んでいく。

パ「人の弱みにつけこむむなんて」

魔「最高だろ。人の弱みに付け込んで自ら労働しようってんだぜ？ろ・う・ど・う・をさ」

手伝いもせずただ本を読んでいるだけのパチュリーに魔理沙はそ

んな事を言う。それでパチュリーに罪悪感を植えつけようとしているのだろう。

パ「今度は私の弱みにでもつけこむつもり？」

魔「お前の弱みにつけこむなら漬物でも漬け込んでたほうがよっぽどましだぜ」

魔理沙はパチュリーが投げる本をひよいひよいと避けながら器用に皿を居間に運んでいく。

縁台には隙間を使って買出しに行った妖夢達が置いておいたであろう食料が乱雑に置かれていた。妖夢達の姿が見えないので恐らく折り返し買出しに言っているのだろう。

その材料がおいてある縁台に空のように青い髪に青いリボンをつけた少女がいた。チルノだった。祭りで買ったのか、変な仮面を着けたチルノが食料をがさがたとあさっている。

？「あ！スイカバーだ！げっとー！」

何故アイスを放り出して折り返し買出しに言っているのだろうか。しかも夏に。という疑問は置いておいて、どうやらチルノはスイカバーを手に入れたらしい。そしてどうもこの暑さから自分の冷氣でアイスを守ろうという風でもない。

魔理沙がそう思ったのもつかの間、チルノは袋を開けてアイスを取り出した。

？「頂きまーす！」

魔「あ、こら！それ妖夢が買出しで買ってきたやつじゃねえか！」

？「うん！いただきますーす！」

魔「いただきますじゃねえ！」

パ「何を言っても無駄よ」

魔「ちっこの馬鹿！皿ブーメランをくらえ！」

スコーン

とチルノの頭に真っ直ぐに飛んで言った皿はチルノの空っぽの頭に直撃した。然るべくその皿は地に落ちて割れた。

？「何すんのよ魔理沙！」

魔「当然の制裁だ！皿ブーメランをくらえ！」

パ「どちらかというとフリスビーじゃないかしら？」

パチュリーつつこみも無視し魔理沙はチルノに皿を投げつけまくっている。

？「ぎゃあ！」

魔「お？」

？「いたいいたい！」

魔「おお？！」

？「ちょ、魔理沙！投げすぎ！」

魔「これはなかなか」

ヒュンツパリンツヒュンツパリンツヒュンツパリンツヒュンツパリンツ！

と、まっすぐ飛んでいく皿の軌道とその皿が割れる気持ちよさにどうやら魔理沙は癖になってしまったようだ。妖精で馬鹿とはいえチルノも痛みがないわけではない。何枚も皿を投げつけられるチル

ノはたまったものではないだろう。

すると倉庫の方から怪しい影が。それに気付いたパチュリーが慌てて取り繕うように言う。

パ「わ、私は本を読んでいただけよっ、何もしてないからっ」
「そう」

怪しい影はゆっくりと、一步ずつ確実に広間に続く道を通って魔理沙たちの方へ近づいていく。

魔「あはっはっはっは！こりゃ愉快愉快！」

霊「愉快？」

魔「ああ！愉快ゆか」

怪しい影は霊夢だった。霊夢のその一言で魔理沙の動きが止まった。まるでその瞬間取られた写真でも見ているかのように魔理沙の手から放たれようとしている皿が地面と水平になってとまっている。

魔「・・・よお霊夢」

魔理沙はパツと持っている皿を後ろ手に隠しながら振り向くとそこには無表情の霊夢が複数の皿を抱えて立っている。

霊「何が愉快なのかしら？」

魔「ゆ、愉快？あ、ああ愉快じゃなくて誘拐だよ誘拐」

霊「誘拐？」

魔「えと・・・そ、そう、スイカバーが・・・チルノに誘拐されて・・・さらわれた・・・なんつって」

霊夢は無表情のまま、ゆらゆらと魔理沙の方へ歩いていく。ざっざっざと霊夢が一步踏み出す。霊夢が一步踏み出すたびに魔理沙の顔が引きつり、冷や汗が頬を伝って流れ落ちていく。

そして

魔「ひいっ！」

魔理沙は霊夢に何かされると思ったのだろう。手で前方を覆う壁を作り身構えている。だが魔理沙の思いに反し、霊夢は魔理沙の横を通り過ぎ、頭を押さえているチルノのほうへ近づいていく。その周りには無残に割れた複数の皿が。

魔「あれ？」

魔理沙は手のガードを解いて振り返ると霊夢が縁台に皿を置いて頭を押さえているチルノに歩み寄っていた。

魔「助かった・・・のか・・・」

魔理沙は結局滝のように流れてきた冷や汗を手で拭いそんな事を呟いた。パチュリーも本で顔の下半分を隠し様子を心配そうに見つめている。

霊夢は怒っていないのか。と魔理沙は一瞬そう思ってしまった。そしてそれは無いとすぐさま考え直す。霊夢の失礼な物言いに予期せずしてしまった霊夢の弱みにつけこむという最低の行為をしてしまったのだ。そして更にその霊夢の期待を裏切った。

霊夢が怒っていないはずがない。

いつ爆発するか。魔理沙はビクビクしながら、パチュリーは開いた口を本で塞ぎながら見つめている。火のついた導火線がつけられた爆弾でも見ている気分だろう。しかも悪い事にその導火線は透明だ。

その爆弾である霊夢はというとチルノの隣でしゃがんでいる。

霊「チルノ。そのお面どうしたの？」

チルノに怪我が無いか心配してみている、など巫女らしい事をするわけもなく霊夢はチルノに問いかけている。

チルノが着けている仮面、それは霊夢があの日、祭りに行っていた時に見たものだった。チルノは妖精で人里に降りる事は霊夢も許可していない。なのに何故こんな所に祭りで売ってあった仮面をチルノが着けているのだろうか。

？「ん？これかっこいいでしょ！これ着けたら強くなれるんだって！魔理沙が言ってた！」

霊「へえ、そのお面魔理沙がくれたの？」

？「うん！」

魔「馬鹿っ」

霊「へえ」

霊夢の弱みにつけこんだ魔理沙の口上、これも魔理沙がでっち上げた嘘だった。魔理沙はあの時祭りに行っていたのだ。そして買った変てこなお面をチルノに着けさせ笑っていたのだ。

パ「救いようが無いわね」

弱みにつけこみ、その為に嘘をつき、それを承諾してくれた霊夢の期待を裏切った魔理沙。それにはパチュリーも呆れ顔のジト目だ。

魔「あ、あはは・・・そう！そうなんだ！忘れてたぜ！確かに私行ったなあ、ま・つ・り！」

霊「そう、そうなんだあ、へえ」

霊夢が立ち上がる。そして更にさっきまで無表情だった霊夢の顔に笑みがこぼれた。

これは導火線に付いている火が本体に到着した事を示す。

魔「あははははは・・・逃げるが勝ちだぜ！」

魔理沙はすぐそこに立てかけていた愛用の箒を手にする。逃走を決め込む気だ。いくら霊夢といえど魔理沙のスピードには着いてはいけないだろう。

魔理沙が空中へ逃げようと箒にまたがる。そして最後に霊夢を振り返る。しかしそこには魔理沙が逃げるのを中断せざるをえない光景が広がっていた。

霊「うっ」

霊夢が片手で顔を覆い、震えながら泣いているのだ。

魔「れ、霊夢？泣いているのか？」

霊「いいえ・・・笑っているのよ・・・あなたを・・・あなたなんかを信じてしまった私をね」

魔「霊夢？」

霊「私はあなたなら信じてもいいって思った・・・手伝ってくれるって言うてくれたことが嬉しかった。だから私は」

魔「霊夢・・・ごめんな・・・私・・・間違ってたぜ」

魔理沙は箒を投げ捨て震える霊夢に駆け寄り抱きしめる。

パ「ああ！」

魔「ごめんな霊夢、私本当に手伝いたかったんだぜ？でもスイカバ―がさ、食べられそうになって、いても立ってもいられなかった、だから」

霊「魔理沙」

霊夢も魔理沙を抱きしめる。口を大きく開けて本もポロリと落としたパチュリーは声を失っている。

魔「さあ霊夢、いつまで泣いてんだよ？さっさと準備をしようぜ？な？」

霊「そうね」

そう言っって顔を上げた霊夢の表情は笑っていた。それはとても穏やかで毒気の抜けた気持ちのよい表情、という表現と対極に位置する表情で。

霊「まずはこの害虫を駆除しないとねえ」

魔「霊夢・・・さん？」

霊「捕まえたわよ」

魔「あらあ・・・」

霊「覚悟はいいかしら？快速ゴツキーさん」

魔「・・・お、おうよ」

こうして宴会の準備は着実に遅れていったのであった。

第三十三章（後書き）

遅れに遅れた宴会ですがフランが目覚めるまでには終わっています。そして次回は夜、フランが目覚めた所から宴会の芸をしつつ前回のフランをどん底に陥れると宣言した人物到着。といったところです。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第三十四章（前書き）

どうもこんにちは。

今後の展開を考えていたのですがフランが例の人物に会う前に真実を話すか話さないかずっと決めかねていました。そしてやっと決まったと思ったら宴会芸のくだりを作りこんでいない事に気付き今更書き込んでいました・・・。

そして書いていたら長くなるものですね。一章で終わると思っていた宴会芸のくだりも二章にまたがりそうです。なので宴会芸前半という事で見てくださいらと思います。

注意

台詞

うどんげ・・・「う」
メリケンサック・・・拳を守るため、破壊力を挙げるためのものらしいです

第三十四章

遅れに遅れた宴会準備は魔理沙を隔離することでようやく完了した。

辺りはもう薄暗くなり、涼しい夜風が奏でる風鈴の音はとても風情がある。更に神社の周りで鳴く虫や蛙達の鳴き声もあいまってそこはさながら夏の終わりのオーケストラ会場のようだ。

そして風鈴の奏者は手が何本もあるらしい。未だ寝ているフランの頬を撫で、心地よい寝息を奏でている。

それは少しでも演奏の仕方を間違えればたちどころに壊れてしまいそうな繊細な天使の楽器。

しかしその楽器は繊細すぎたらしい。ついに奏者の集中力が切れ心地よい寝息が消えた。代わりに寝ぼけたような音色が聞こえてくる。

フ「ん・・・にゃ・・・」

そんな楽器の異変にいち早く気付いたのはすぐ傍に座っていた魔理沙だった。

魔「お、起きたかフラン」

フ「ん・・・まり・・・さ？」

フランがゆっくり目を開けると、そこには自分の顔を覗き込む魔理沙がいた。

何故魔理沙がフランの近くにいたのか。

実は魔理沙は霊夢に命令されてフランの見張りをしていた。前のスイカバーの件でこっぴどく叱られた魔理沙は渋々その命令を受けてずっとフランの傍に座っていたのだ。

魔理沙に下された命令はこうだ。

天使の寝顔を眺めるためにサボるメイドを追い払うこと。メイドである咲夜がサボらなければ準備はかなり早くなるというもの。

更には隙を突いて撮影しようとする、宴会の準備の邪魔になるパラッチも追い払える。そして魔理沙の邪魔もない。これにより宴会の準備は滞りなく進められるようになった。

しかし子供の寝顔になど興味のない魔理沙は不満タラタラだった。だからフランの寝顔にペンで悪戯をしようとしたのだが、そのたびに頭に刺さるナイフが数を増していく。だからので書くことを諦め、ずっと傍に座っていたのだ。

フランが体を起こすと掛けられた毛布がずれ落ち衣擦れの音がする。いつの間にかかけられていたそれがずり落ちていくのを眠り眼で追う。

そして周りがなんだか騒がしい。フランは顔を上げて周りを見渡す。そこには信じられないような光景が広がっていた。

神社の広間には長机が置かれ、その上には豪華な料理がずらりと並べられている。それは咲夜が調理した、フランの好みに合わせて

作られた特製の料理だ。

しかしフランが信じられないのはそんな事ではない。夏の風物詩の風鈴の音、秋の風物詩の虫の音、その音がかき消されそうなほどに周りにいる者たちが騒いでいたからだ。

どうやらフランは少し眠りすぎたらしい。フランの起床を待ちきれなく、皆先に宴会を始めてしまっていたのだ。

フ「え？」

主役であるフランを差し置いて皆酒を飲み、料理を食べながらやがやと話をしている。しかも大分出来上がっているようで顔を赤くし、従者組みは上司への愚痴をタラタラとこぼしている。

メ「私はほんの少しの間目を閉じて瞑想してただけなんです・・・でも咲夜さんったら・・・咲夜さんったら！私の頭にナイフをライオンの鬣のように何本も何本も突き立てていたんですよ！？信じられますか！？しかも私が目が覚めた時、目の前にいたんです。私の姿が映し出された鏡を持って、にこやかに「ライオン」って言うんですよ！？」

町「瞑想かゝあたかも前使ったなあゝ。拳骨が返ってきたけどさあ。二発も同じところに打って鏡餅とかいうんだよ。まいっちまうよねえ」

夢「幽々子様なんて自分が太ったのを私が作る料理のせいにするんですよ！酷すぎますよ！脂肪切断してやろうかと思いましたよ！」
う「私は実験台にされかけた事があります。ゴハンにひそかに入れられた薬が激薬で髪の毛がうどんになった事が・・・」

永琳の従者である鈴仙・優曇華院・因幡、兎の耳を頭に引っ付け

た少女。どうやら永琳の指示で宴会の準備を手伝いに来たようだ。そしてそのまま居座っているのだろう。

その愚痴の的になっている上司である年長組は麻雀を始めてしまっている。

山「また私の勝ちだな」

紫「さすがお上手です四季様」

幽「もう齒が立たないわねえ」

永「そうですね」

四季が勝ったもののなにやら不満げだ。負けたら負けたで酔いに任せて説教でもするのだろうか。

だからだろう、どうやらこれは接待麻雀らしい。わざと負けて四季の説教をさせまいとしているのだ。そして永琳はあまり乗り気ではない。可愛そうな事に数あわせで無理やりいれたのだ。

これは恐らく紫と幽々子の策略だろうがどうやら四季にはばれていたらしい。

山「八百長などやるんじゃない！私はこういうのが最も嫌いなのだ！」

不満を覚えた四季はこのままではいくまいとどなりちらす。それもそうだろう。その八百長やなんだと不正をしているものを裁く身なのだ。飲酒していることもあってその声は普段よりも大きい。

永「はぁ・・・だから言ったじゃないですか。こういうことになる」と

紫・幽「・・・」

紫と幽々子は観念したのか、俯いて肩を落としてシュンとしている。ここからまた長い説教がはじまるのかと。

山「ふむ・・・確かにこうなる事も分かる。お前達が私に遠慮しているのだな。それに気付かなかった私の無配慮がこのような事を引き起こした原因だったかもしれない」

この言葉に紫と幽々子は光明を見たのかパツと顔を明るくし取り繕うように矢継ぎ早に言葉をつむぐ。

紫「そ、そうですとも四季様！私達は無礼があつてはいけないと思つて・・・ね！？幽々子！」

幽「そ、そうよお、全部四季様が悪いのよお」
紫「馬鹿っ」

四季は幽々子のその言葉に紫と幽々子を睨みつける。

山「八意永琳、この二人をどう思う」

永「フランさんの教師としてご指導願いたいと思います」

そこでまた紫と幽々子は光明を見たようにパツと顔を明るくするがそれもやはりぬか喜びだったらしい。

山「教師？」

永「ええ、ただし反面教師としてですが」

山「悪影響を及ぼすだけだと思うがな」

永「ごもっともです」

そしてまた肩を落として縮こまる二人。全く豆電球のような表情を見せる二人だがここで四季が新たな提案をする。

山「おほおん！このままでは私もお前達も楽しめない、というわけで一つ罰ゲームを決めようじゃないか！」

永「罰ゲーム？」

紫（また変な事に・・・）

幽「何かしらあ？面白そう」

山「負けたものが衣服を脱ぐ！これでは負け放題できないだろう！」

と普段の四季からは想像できないほど大声を上げて笑っている。酒はここまで人を変えてしまうようだ。

山「ここは宴の席だ。負けたからといって説教などと無粋な事はしない。無礼講でいこうじゃないか」

紫「よろしいので？」

山「ああ。本気でかかってくるがいい」

幽「なら全力で行くわよお」

永「ふふ、いいわ、本気の麻雀・・・面白い、実に面白い」

紫「仕方がないわね・・・なら私もいかせてもらうわ・・・（いかさまを）全力で！」

等と勝手に熱くなっている。宴会で麻雀などどうかと思うがそれはそれで楽しそうだ。

しかしそんな光景が楽しそうであればあるほどフランの怒りは大きくなっていく。

少しは自重し主役が起きるまで食べ物に手をつけずに待っているのが普通だろうと、子供の思考回路のフランでもそう思う。

今まで寝ていたとはいえ主役であるフランは蚊帳の外。これにはさすがのフランも堪忍袋の緒が切れるというもの。

フ「魔理沙！」

とすぐ傍にいる魔理沙に行き場のない怒りの矛先を向けて睨みつける。

フ「主役は私っ……なの……に……」

しかしフランが非難の的にしようとした魔理沙だが、その的である魔理沙の手には骨付きのチキンが握られていた。

魔「え、あ、ああ……いや……これはその」

魔理沙は急いで手に持っていた骨付きチキンを後ろ手に隠すがもう遅い。怒りに震えていたフランは毛布を思いっきり握りそして

フ「ううう……不貞寝してやる!!」

そう一言言ってまた毛布を被ってしまった。

しかしずっとフランが起きるのを待っていた魔理沙はたまったものではない。またフランの不貞寝が覚めるまで待たなければならないからだ。

魔「おいおい！起きろよフラン！主役だろ！」
フ「やだっ！」

魔「やだっ！じゃねえぜ！ほら！これでもくって機嫌直せよ！」

と言って魔理沙は自分の手に持っていたチキンをフランのへの字に曲がった口にねじ込んだ。飴とは違い甘くはない。そして寝起きで肉など、胃がもたれて仕方ないだろう。

フ「んー！んー！」

魔「ほらほら、早く起きろ！胃にもたれるぞ！」

魔理沙はフランの首に手を回して捕らえフランが肉を吐き出さないように手で口を塞いでいる。

そして不意にヒュン！という音と共に魔理沙に向かって光る何かが飛んでくる。

魔「おわっ」

咲「妹様に何しくさりやがってるの？！魔理沙！」

それは丁度料理を持ってきた咲夜がフランに意地悪する魔理沙を見つけて投げたナイフだった。しかしさすが魔理沙というべきか、紙一重でかわしている。

魔「お前こそどういうつもりだ！こんな場所でナイフなんて投げるんじゃねえぜ！」

咲「妹様への暴行許すまじ！」

レ「どうでもいいけどフラン首が絞まって窒息しそうよ？」

レミリアはもう起きていたらしい。そしてやはりお嬢様でカリスマの持ち主だ。ユラユラと波打つワインが入ったグラスを手にしてる姿はとても堂に入っている。

魔「どうでもいいけどレミリア、頭に何か刺さってるぜ？」

優雅にウィングラスを持っているレミリアの額には先程咲夜が投げたナイフが突き刺さっていた。これがカリスマブレイクというやつだろう。

レ「どっかの駄・目イドがこの狭い場所でナイフを投げるからよ」
咲「も、申し訳ありませんお嬢様！」

どうでもいいがフランの首ははまだ魔理沙に掴まれている。しかも魔理沙が咲夜のナイフをそのまま、更にすばやく避けたせいでより一層絞まってしまっている。意識がもうないのかフランの足はブラブラと空中散歩だ。

レミリアの頭に刺さったナイフを咲夜が抜き取る間に魔理沙は「落ちた」という名の不貞寝をしたフランを起こしにかかる。

魔「おいフラン！起きろ！」

魔理沙は何度かフランの頬をパンパンと軽く叩いてみるが起きる気配がない。

パ「完全に落ちてるわね」

魔「お、落ちてるなんて悪い冗談はよせよ、これは不貞寝してるんだぜ？」

パ「自覚症状がある分まだましかしら」

魔「わ、私は落としてなんかないぜ、これは不貞寝だ」
パ「全く・・・宴会はいつ始まるのかしら」

パチュリーは不満そうにジト目でフランをゆっくり寝かせる魔理沙を見る。

魔「よ、よし、じゃあキスを試みよう。どっかの童話でキスで目覚めるってのを見た事がある」

パ「へ？」

魔「ほらフラン、目を覚まさないでキスしちゃうぜ」

と魔理沙は眠っているフランの唇に自分の唇を近づけようとする。両手をフランの顔の横に突いてゆっくりと着実にフランの唇に近づいていく魔理沙。

するとそこへ足音が近づいてくる。

それは紅白の巫女服に身を包んだ霊夢だった。両手には料理が乗ったお皿を載せている。霊夢もまた料理を運んできていたようだ。

霊「魔理沙、冗談でもそういうことは止めてよね」

魔「あ？なんでだよ？私はフランを起こそうと」

霊「起こすのはいいんだけど・・・また別の人が眠っちゃいそうだから」

霊夢は頭痛がしそうなほど顔をしかめ、ため息をつく。

魔「別の人？」

霊夢は両手に料理を持っているので魔理沙の背後を顎でしゃくつて示す。そこにはいつもジト目の目を見開き、口を大きく開けてプルプル震えながら絶句していたパチュリーがいた。

霊「というか気を失う・・・というか」
魔「？」

宴会

魔「さあ始まりましたフラン帰宅の宴！」

気絶したフランをどうにか起こし、甘い物を与え、幾分か機嫌をもどしていよいよ宴会芸が始まった。司会進行をするのはどうやら魔理沙らしい。いつの間にか用意された舞台の中央に立ち、「ニトリ製」と書かれたマイクを手に声を張り上げている。

パ「変なネーミングね」

魔「こまけえことはいいんだよ！さあ料理も酒も一杯用意した！お前のために用意したんだ！じゃんじゃん食えよ！フラン！」

フ「皆もう食べてたけどね」

咲「料理作ったのはほぼ私だけだね」

霊「準備も邪魔しかなかったしね」

パ「フランを落とすちゃうしね」

？「あたいったら最強ね」

魔「うるせー！今日はめでたい日なんだ！盛り上がっていきましょうぜ！

と、言うわけでこれから宴会芸を始めようと思う！！司会進行は幻想郷一の美少女でありながら魔女でもある非の打ち所がない憎い女の」

「とつとと進めなよ微少女！」

「そんなのいらない！それに美少女で魔法少女は私なんだから！」

「ひっこめブスー！」

魔「いやゝ合いの手ありがとうございます。合いの手をくれたためえらにマスタースパーク！」

「きゃー！」

「いやー！」

ぴちゅーん！

魔「えゝまず初めはエントリーナンバー一番！紅魔館のゲートキーパーによる太極・・・け・・・ん？・・・皆さんしばしお待ちをゝ」

魔理沙はそう言って幕が下ろされている舞台裏にそそくさと入って行ってしまう。

幕の裏に隠れて準備していた美鈴が何事かというような表情で魔理沙を出迎える。しかし魔理沙は美鈴以上に何事かという表情で美鈴を見つめている。

魔「お前本気か？」

メ「え？何がです？」

魔「出し物だよ出し物！太極拳なんかやった時にゃあお前、会場は静寂の嵐だぜ！」

メ「せ、静寂の嵐？え、えと・・・どういいうい・・・いや、しかし、私はこれしかなくてですね・・・」

美鈴は魔理沙の戯言など考えるだけ無駄なのでそれについての思考を止め、今自分にはこれしか芸が無い事を申し訳なさそうに頭を

かきながら、照れ笑いしながら魔理沙に告げる。

魔「私にいい考えがあるぜ」

魔理沙は顔をにやつかせ美鈴にある芸を提案しようとする。

メ「いえ、結構です」

しかし美鈴は魔理沙の提案も聞かずに拒否する。それもそのはず、幻想郷のトラブルメーカーである魔理沙なんかの言う事を聞いていたら命がいくつあっても足りはしない。それはいつもありとあらゆる罠を張ってそそのかし、紅魔館へ進入される美鈴ならではの考えだ。

だがそんな事で引く魔理沙ではないからトラブルメーカーの異名を持つのだろう。

魔「そうか。仕方がないな。絶対受けると思ってお前のためだけに用意したんだけどな」

メ「ふ、その手はくいませんよ。あなたに何度騙されてきたことか」

美鈴は今までに何度か魔理沙に騙された事があるのだろう。昼間の霊夢とのスイカバー事件も然りだ。魔理沙の悪戯は少し度が過ぎている。

だから美鈴はいつも以上に頑なに魔理沙の提案を拒んでいるのだ。

魔「はは、いや、今日はフランの宴だからな。台無しにしちゃ不味いと思っただけなんだ。ただそれだけなんだ」

メ「そうですか。じゃあ私の太極拳を披露して会場をワッと盛り上

げて見せましょう」

今度は情けを持って罨をかけに来たらしい。フランの為と最もな大義名分を語り美鈴を罨に嵌めようというのだろう。

しかしこれも昼間使った手。罨は使えば使うほど効果が薄くなる。それを明示するように美鈴はさらりと受け流す。

魔「そっ・・・か。分かった、じゃあアフターケアを考えておくぜ」
メ「って失敗する前提ですか?!」

魔「まあまあ、人生これからだ、次があるぜ?」

メ「ええ・・・え? えええええ?! 私また何もやってないんですけどお!? だから何で失敗した事になっちゃってるんですか!? きっと成功しますって!」

魔「そう・・・だな。まあ元気出せよ、な?」

魔理沙は残念そうな声で、テンション下がり気味にそう言った。今度は失敗という不安要素で罨に嵌める方向へ切り替えたらしい。口では強がってはいても心のどこかに絶対不安はあるものだ。

魔理沙はそこにつけこむきだ。

メ「お前が元気出せよ! 司会者なら立派に芸人を送り出すのが仕事でしょう!」

魔「ああ、元気で暮らせよ。あの世でな」

メ「私死ぬんですか!? 失敗したら死ぬんですか!?」

魔「ほら、せめてもの手向けだ」

メ「ちょ! 花言葉はどれもネガティブなヒヤシンスにマリーゴールド、ムスカリまで!? てかなんで持ってるんですか!?」

魔「よく知ってるな、このネガティブフラワーズの名を。大丈夫骨

は拾ってやるぜ」

メ「な、なんでこんな事で死なないといけないんですか！」

魔「こんな事・・・だと？」

メ「へ？」

魔「バカヤロウがー！」

メ「ぐはあ!？」

魔理沙は思いっきり美鈴の顎に強烈なアッパーをお見舞いした。

魔「どんな些細な事でも全力でやる!それが芸人魂なんだよ!スポ魂なんだよ!！」

メ「ぐっ・・・ス、スポ魂？」

魔「偉人は言った。何故ベストを尽くさないのか、と」

メ「な、なるほど・・・」

今度は肉体派の美鈴にスポ魂で罨を張りに来たらしい。そしてこれが功を奏したようだ。魔理沙による数多の罨の応酬により美鈴は罨に落ちた。

メ「魔理沙さん!ぜひ私にご教授下さい!あとメリケンサックで殴るのは勘弁して下さい」

魔「よろしい、耳をかすがよいぜ。あとメリケンサックはギャグだ」

メ「ギャグ・・・ですか・・・」

第三十四章（後書き）

何故でしょうか。終わりが見えそうで見えないですね。私的にはフ
ランが幻想郷に戻ってきた時点で後二章くらいだと思ったのですが
結構かかるものです。やりたいことをやってるとどうしても長くな
ってしまいますね。

そして後書きや感想を書いて下さった皆様にもうすぐ終わるなど
と嘘をついてしまった事を深くお詫びします。私の予想は倍率10
0倍くらいだと思っておいってください。

さあ、次回はたぶん前書きで書いた例のあの人が出てくると思い
ます。名前を言ってしまうと先の展開が分かってしまうかも知れな
いので書きませんがヴォルデモート卿ではありません。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

第三十五章　　ゝ宴会芸（後編）と鬼ゝ（前書き）

どうもこんにちわ。天澤です。

前回、次回は鬼が出てくるまでと宣言したのですが途中で付け加えた宴会芸が

長くなりすぎたため次回に回そう。と思ったのですがこの作品の趣旨となんだか違うなということでもとめてあっぷする事にしました。
（役2・5倍の量があります）

宴会芸は上げて落とすための上げを作っただけなので飛ばしてもらってもかまわないと思います。

そして計画は一応終わってはいるのでこれから章の後ろにサブタイトル的なものを着けたいと思います。

前書きがあまり長すぎるのもあれなのでどうぞゝ

注意

紅・美鈴・・・ホン・メイリン

八意永琳・・・ヤゴコロエイリン

第三十五章　　〈宴会芸（後編）と鬼〉

魔理沙が裏に隠れて数分、未だ帰ってこない。ぶーぶー言ったところで相手は魔理沙だ。みんなに呼ばれて出てくるような神経の持ち主ではないだろう。

それを分かっているのか、取り残された会場の皆はざわざわと雑談を始めたり飲み直したりしている。

そして主役のフランはというと。

フ「ねえねえ、これ本物？」

う「あ、あのっ、ちょっと放してください！いたったたたた！」

魔理沙が幕の裏に隠れてしまい暇をもてあましフランは優曇華の頭にくつついている耳をつまんだり引っ張ったりして遊んでいた。子供とはいえ吸血鬼で力があるフランに引っ張られるので優曇華はたまったものではない。

永「フランさん何してるの？」

そんな暇つぶしをしているフランの所へ麻雀を終えた永琳が宴会芸を見ようとやってきた。

う「あ！お師匠様！助けてください！この子力が強くて」

永「あらあら、いい大人が悪戯なんていけないわね」

以前永琳がフランを抱きしめようとした時、自分は子供ではない

と理由をつけて嫌がった。だからそれを逆手にとって優曇華の耳から手を放すように仕向ける。

フ「むう・・・永琳だって！」

一つ不満の声を絞り出したフランは優曇華の耳から手を放す。フランの手から放たれた優曇華はフランからさっと距離をとって耳をさすっている。

フランはというと永琳を睨みつけている。何故フランは怒っているのか。永琳は何のことか分からず首をかしげる事しかできない。

だから永琳はその疑問をフランに投げかけてみた。しかし返ってきた理由は子供っぽく単純な事だった。

フ「私が起きてないのに楽しそうに遊んでたじゃない！」

永「・・・麻雀のことかしら？」

フ「そうだよ！永琳も大人ならやったらいけない事といい事の区別くらいできるんじゃないかな！？」

フランはまだ根に持っていた。

悪戯を注意されたフランは仕返しに自分が寝ている間に永琳がしていた事を引き合いにだす。腕を組んで、顔には不適な笑みを浮かべて横目で永琳を見る。

反論できるものならしてみろというのだろう。

しかしそんな子供の言い分に屈する永琳ではない。

永「あれは遊んでいたんじゃないかって仕方なく付き合っていただけよ？大人の事情で」

フ「大人の事情？」

永「そう、大人の事情。あなたも大人なら分かるでしょう？」

フ「むむむ・・・」

大人の事情、それは子供にとって、大人が自分に都合のいい言葉を並べただけのただの文字の羅列だ。

それ以外の何者でもない。

そしてフランは自称大人の500歳近い子供だ。永琳はそこを突いて上手くごまかすつもりらしい。

フ「ふん！そんな事情なんて分かりたくないもん！」

ここまでフランを上手く操れば自然と永琳の表情も緩くなるというものだ。

永「じゃあ子供でいいの？」

フ「べ、別に、いいもーんだ」

永琳は半分隠してはいるがもう半分は隠しきれずに表情に出てしまっている。その証拠に後ずさるように距離を取った優曇華が呆れた顔で永琳を見ている。

永琳はにやけている。

永「そう、ならこっちに来なさい」

そう言って永琳は座って更にフランを膝の上に座らせる。

永「子供なんだからこんな事もしていいのよね？」

永琳はこれがかくせになってしまったのだろう。永琳は戸惑うフランをぎゅっと抱きしめる。

フ「そんなのいいわけっ」

そのせいで永琳の豊満な胸がフランの頭に押し付けられる。

フ「ないん・・・だから・・・」

そしてこれをやるとフランは恥ずかしそうに俯いて黙ってしまう。フランの母親も永琳の様に巨乳だったのかは分からないが、これをするとならば何故か安心してしまふのだろう。

やはりフランはまだまだ子供だった。

そしてこの少し照れくさそうな反応が永琳には更に快感を与えるらしい。とてもご満悦な表情でフルーツの乗った皿を取りフランの前に持ってくる。

永「ふふっ、はいこれ。食べる？」

う「あ、それ私の」
フ「食べる」

フランは少し戸惑いながらもそれを手に取り、もぐもぐと食べ始める。永琳は更に顔をほころばせて更にご満悦だ。傍から見たらまるで親子のようにも見える。

しかしそんな光景を面白くないといった面持ちで見つめるものがすぐ傍にいた。

咲「ちよつとあなた！妹様に何をしているの！」

それは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜だった。自称他称ロリコンの咲夜にはフランを独り占めにしている永琳が許せなかったのだろう。

永琳を指差して怒鳴り散らしてきた。

咲「嫌がっているでしょう！離れなさい！」

永「嫌がってないわよね？」

フ「う、うん・・・」

咲「はうあ！？妹様！あなたは胸の魔力で操られているだけなのです！ささっ、妹様！私の所へご避難を！」

咲夜が正座をしてフランを自分の膝へ来るように誘導する。その咲夜のめは恐ろしいほどに必死だ。

そこでフランは咲夜の胸と永琳の胸を交互にチラチラと見比べる。そして

フ「こっちがいい」

とぬかしたのだった。

町「いやあく胸の魔力は偉大だねえ」

山「胸に魔力などありはしない」

町「そうですか。ところで四季様」

山「なんだ」

町「何故全裸なのですか？」

山「聞くな」

町「はい」

演目1…燃えよドラゴン！

魔「お待たせしました。さあ仕切りなおしてエントリーナンバー一番！紅魔館のゲートキーパーでネタはモノマネ！中世ヨーロッパで行われた火刑！題して！火あぶりにされる魔女！」

ようやく魔理沙が幕の裏から出てきたかと思うと急に大声を張り上げてそんな台詞をはく。

そして魔理沙が言い切ると同時に舞台の幕が開いた。そこから現れたのは柱に手足を縛られている美鈴だった。

メ「も、燃えよドラゴン！」

と力の限り叫ぶのだった。

メ「……なんつって」

一同「……」

当然うけるわけもなく、声を発する者は誰もいない。魔理沙や美鈴が恐れていた通りに会場は静まり返ってしまった。

メ（ま、ままままっ魔理沙さん！どういふことですか！受けませんよ！）

美鈴はすぐ横で司会をしている魔理沙に小声で、しかし必死に助けを求める。

美鈴は魔理沙の提案で無理やりやらされたのだ。だから魔理沙なら何かフォローをしてくれるだろうと思っていた。

魔理沙は何か考えがあるのか、美鈴にニヤリと唇を吊り上げて笑みを返す。美鈴はそれで安心したようにほっとため息をつく。

何か考えがあるのだ。が、それは間違いだったようだ。

魔「えーリハーサルが終了したところで改めて宴会芸を始めたいと思います！」

メ「え？ちよつと！？魔理沙さん！？一体どういう」

魔「エントリーナンバー一番！紅魔館のタイムキーパー！十六夜咲夜！」

いまだ舞台の上で柱に縛られている美鈴を放置し演目を進める魔理沙。あまつさえ美鈴の演目をリハーサルという名目に変更し無かった事にして。

咲「承りました」

町「あいつタイムキーパーの意味わかってるのかねえ」

魔「演目は目隠しによるナイフ投げだぜ！そして標的となったのは」
「丁度そこで縛られている燃えよドラゴンだ！！」

メ「は？」

魔理沙は演目のプログラムを全て把握している。魔理沙は咲夜の演目を見て自分に危険が飛び火しないように美鈴を使ったのだ。

メ「は、はめやがったなああああああ！」

魔「えゝここでこの演目の説明をさせていただきます。目隠しをした咲夜がドラゴンにナイフを投げつけます」

美鈴の悲痛な叫びを無視しどんどん進めていく魔理沙。もう美鈴にはどうすることも出来やしない。

メ（まあ咲夜さんなら大丈夫、当たらないだろう・・・）

だから美鈴は諦めて現在の状況を冷静に確認する。

咲夜はナイフで100m離れた居眠りしている美鈴の眉間に命中させる事が出来るほどの腕の持ち主だ。そのコントロールがあれば例え目隠しでも失敗することはないだろう。

だから美鈴は安心しきっていた。

だがそれは外す事前提の話。

魔「そのナイフをドラゴンが全力でかわします」

メ「・・・はい？」

どうやらこの演目は当てる事前提らしい。

咲「いきます」

メ「え？」

百発百中の咲夜のナイフは目隠しをしていても九分九厘、美鈴の体というゴール枠内に入ってくるだろう。

咲「はっ！」

メ「ちよっ咲夜さん！」

そして然るべく、その乱れ飛ぶシュートは全てゴール枠内に入っていた。

咲「それ！」

メ「ちよっと！」

咲「えい！」

メ「えいって?! 可愛いと思ってるんですかあああああ！」

演目2…燃え尽きたドラゴン

咲夜のナイフ投げが終わり、続いてはレミリアらしい。何やら立ち上がって準備をしている。

魔「えゝ続きまして、レミリアによる」

メ「あのゝ魔理沙さん、その前にこの紐といってくれませんか？」

魔「目隠しをしてグングニルです」

メ「え？」

魔「その槍をドラゴンがギリでかわします」

メ「・・・あの、それって目隠し意味あるんですか？」

演目3…七色の羽

魔「続きましてエントリーナンバー3！みよんによる七色の羽！」
妖「はい！」

舞台の上に妖夢が緊張しているのか顔をこわばらせて上ってきた。

魔「次は妖夢か、七色の羽ってのは何だ？」

夢「まあ見てて下さい。咲夜さん！頼みます！」

咲「オッケー！行くわよ！」

いつの間にか咲夜が両手に持てるだけのナイフを持って舞台と皆を挟んだところに立っている。そしてその咲夜が腕を二回、ブンブンと振ると十数本のナイフが咲夜の手から放たれた。

ナイフは会場の皆の頭上を越えて妖夢に向かってヒュンヒュンと跳んでいく。

その危険な行為に皆一様にすこし頭を下げた警戒する。そして投げつけられた妖夢はというと。

キキキキン！

と、咲夜によって投げつけられたナイフを次々に打ち上げていく。そして妖夢の刀によって打ち上げられたナイフは宙をくるくると舞い、そして重力により当然の如く落ちてくる。

妖夢はそれを待ち構えていた様に下に受け皿を用意していた。しかしその受け皿はとても細く長い。

そう、妖夢は自前の刀二本をまるで鳥の羽のように左右に突き出し、ナイフをその刀の峰で全て受け止めたのだ。しかもその受け止めたナイフは刀に突き刺さっているように垂直に立っている。

更にはそのナイフには色が塗られ、妖夢を中心に赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の順（wiki調べ）に等間隔で綺麗に並べられている。つまりこれがフランの羽を模した

夢「七色の羽！」

というわけらしい。

これには会場は大盛り上がりでどっと歓声が沸きあがり、皆スタンディングオベーションだった。もちろんその羽の持ち主であるフランは感激して飛び跳ね、永琳の顎に頭突きを食らわしてしまった事は言うまでもない。

う「ししよおおおおお！」

演目4…魔理沙の歌

魔「最後は私とパチュリーによる歌で締めくくろうと思います！」
フ「つまんない」

そんなブーイングが魔理沙を襲う。それはいつも通りの野次で普段ならば素通りかマスパなのだろうがそれを言ったのがこの宴の主役だからたちが悪い。

魔「おいおい、せっかく練習したんだぜ？お前のために」

魔理沙はやれやれとばかりに掌を天にむけてわがまま放題の子供に言い聞かせるようにフランをたしなめる。

フ「じゃあねえあれやって！」

だが相手はフランだ。一筋縄ではいかない。然るべくフランは何かを思いついたようにそんな事をいいだす。

魔「人の話し聞いてるのか？」

フ「なぞかけ！」

魔「なぞかけ？私は歌いたいんだけどな」

咲「魔理沙！主役の、妹様の命令よ！素直に従いなさい！」

と、ここで魔理沙にとって面倒な人物がカットインしてくる。気に食わないことがあれば武力を持って言い聞かせる事請け合いのフランの従者、咲夜。

魔理沙は面倒ごとを避けるため不満の声を漏らす但反対はしない。

フ「お題はね〜えとね〜」

フランは決めていなかったらしい。なぞかけにはお題があり回答者はそれを元に謎かけをする。

フランは何か無いかと辺りをキョロキョロし始める。すると何かにフランの目が留まる。それは永琳の胸。そして先程比べた咲夜の胸に目に留まる。

フ「じゃあ咲夜の胸で！」

魔「ぶ」

咲「・・・妹様？冗談ですよね？」

フ「だめえ？」

咲「ダメというわけではないのですが・・・そのお・・・」

咲夜は恥ずかしそうに胸を手で隠しもじもじし始める。しかし笑顔で自分を見上げるフランがあまりに可愛いので断りきれない咲夜。

フ「いいよね？咲夜」

フランは咲夜にそう言って抱きついた。またそうして咲夜をたぶらかし、同意を求めるつもりだ。

咲「も、もちろんですとも！妹様！」

と、咲夜は半ばやけくそだがこうなるだろう。そしてフランは咲夜に見えないように悪魔のような笑みを浮かべたことは言うまでもない。

魔「本気かよ・・・」

咲「さあ、主役である妹様がこう言ってるのよ！？早くしなさい！」
魔「鼻血だすか涙出すかどっちかにしろよ」

魔理沙はささやかな抵抗をするがそんなもの今の状況には何の役にも立ちはしない。

もしも下手な事を言えば咲夜にサクッ、しかしもし魔理沙が自分の身を守ろうと保身の道をとれば会場の雰囲気は冷め更に今後ずつとチキン野郎といわれることになるだろう。恐らくは小町辺りが馬鹿にしてくるに違いない。

保身を取るか雰囲気を取るか。

フ「はあやあくう」

魔「ちっ」（この鬼畜娘がつ、今度弾幕ごっこでぼこす！）

とフランは妖艶な悪魔の笑みを浮かべ、白い牙を見せて楽しそうに魔理沙をせかす。

魔理沙は咲夜を刺激しないように、尚且つ一矢報いなければならぬ。この際会場の雰囲気はどうでもいいのだろう。チキンにも咲夜の餌食にもならない方法。それは

フ「まだあ？」

魔「しょうがねえなあ・・・」

魔理沙は歌のために用意したマイクを握り締め自分の口の高さまで持ち上げる。

魔「整いました!!」

そして声を張り上げてそう叫んだ。

始まってしまった。もう魔理沙は後には引けない。どちらに転んでもいい事などありはしない。有るのは体の痛みか心の痛みのどち

らかだ。

一体どうするつもりなのだろうか。

一同「いえーい！」

魔理沙の声に呼応するように会場の皆も合いの手を差し出す。魔理沙にはめられた美鈴は嬉しそうにより一層声を張り上げている。

魔「咲夜の胸と書きまして！」

一同「咲夜の胸と書きまして！？」

魔「永琳の胸と読む！」

一同「その心は！？」

皆ノリノリである。

人の不幸は蜜の味。人の不幸が目前という事と酒が入っていると
いうこともあいまって皆テンションが上がっている。だが幻想郷一
のトラブルメーカー魔理沙がこんな事で屈するわけが無かった。

というのはかいかぶりすぎだったのかもしれない。

魔「どちらもナイスバディでございます」

どうやら魔理沙は保身を取ったらしい。

当然会場はシーンと静まり返る。残ったものは涼しげな風鈴の音
とささやかな虫の鳴き声だけ。もしかしたらその涼しげな風の音ま
で聞こえるほどかもしれない。

レ「今夜は・・・冷えるわね」

とポツリ、レミリアが言葉を落とす。

パ「・・・なんだか急に悲しくなっちゃったわ」

そしてまたポツリ。

フ「私、魔理沙のこと誤解してたみたい」

夢「あなたはもう少しできる人だと思っていました。残念です」

？「つまんない」

メ「ざまあ」

雨の降り始め。ポツリ、ポツリと雫が落ち、その雨音の間隔が段々早くなるように、会場は次第に以前の盛り上がりを取り戻していった。

魔理沙はというと、雨が一粒も降らない静かな、しかし太陽の光も差してない薄暗い空間に一人たたずんでいた。

しかし雨水はどんなところにも浸入して雨漏りとなるものだ。

咲「魔理沙」

魔「なんだよ」

そんな魔理沙に咲夜が声をかけた。

咲「あなたこれ好きだったでしょう」

魔「・・・という風の吹き回しだよ」

咲夜は魔理沙の好物を更に盛ってやって来たのだ。そして魔理沙のそんなそっけない言葉。

しかし魔理沙は予想していた。咲夜は魔理沙が自分の胸をナイスと言ってくれた事に対しお礼をしにきた、という名目で持ってきたのだと。

だが魔理沙が咲夜に言った憎まれ口はかまかけだった。

咲「し、司会お疲れって意味だけど！？別にあなたがああ言ってくれたからとかそういうお礼とかじゃ絶対無いんだから！」

そう言って咲夜はその場から立ち去ってしまった。

魔理沙は自分が放ったかまかけによってあることを確信した。魔理沙が言った、あの会場を沈黙させた言葉の本当の意味を咲夜は分かっていたと。

普段の咲夜なら魔理沙に好物を自発的に持ってくるなどありえない。更に魔理沙のかまかけで、裏の意味を知り、毒を盛った皿を持つてくるということは考えにくい事が分かった。

つまり魔理沙の計画通りに言ったということだ。そしてその本当の意味を知っているであろう人物が魔理沙に歩み寄る。

町「魔理沙」

魔「よう、小町」

小町がニヤニヤとした顔で近づき魔理沙の首に腕を回す。

町「このチキン野郎」

一言そう言ってニシシシと悪戯に笑う小町。保身を取った魔理沙に一番にそう言うであろう人物、小町。だが小町はあの場で野次は飛ばさなかった。

つまりこの意味は小町に分かってそれ以外には表面的な意味しかわからないという事なのだ。

魔「おいっあれは」

町「わーかってるわかってるって、あの場であたいが野次を飛ばさなかっただろ？そういうことさ」

魔「お前に気付かれなかったら私は本物のチキンになるところだぜ」

と魔理沙はほっと胸をなでおろす。

町「しかしねえ、あのメイドの胸がねえ。だからあたいや永琳を睨んでたのかい。全く恐ろしいねえ」

魔「言うなよな？絶対に」

町「安心しなよ。あたいはこれでも口が堅いんだ。それにあんたの勇気に榮譽をたたえて口止め料はうな重でいいよ」

魔「口止め料とるのかよ・・・江戸っ子が聞いて呆れるぜ？」

町「じゃあ言っちゃおうかな」

魔「うな井で手を打とうじゃないか」

町「重で」

魔「井だ！」

町「重！」

魔「井！」

町「重！」

魔「井！」

咲「銃ドーン」

突如会場に銃声が轟き、小町と魔理沙の顔の間を弾丸がすり抜けて柱に命中した。

咲「な〜んてねっ。つい殺っちゃいそうになっちゃった。てへっ」

その銃弾を放ったのは今しがた魔理沙の好物を更に持って運んできた咲夜だった。

咲夜は恐ろしいほどににこやかな笑顔で銃を握り、更にその銃口を魔理沙と小町に向けていた。

魔「うおーい！　どういうつもりだよ咲夜！　なんで銃ぶっぱなしてんだ！　てかそんな銃どこから出した！？」

町「ちよっと！　なんであたいも狙ってんだい！」

咲夜の手には持たれている銃は二丁。一方は魔理沙を狙いもう一方は小町を狙っている。

咲「なるほど、ナイス・Nice・にせ・偽」

魔「な、ななな、何でそれを・・・いや何か誤解を」

町「やばいよ！　解説されてんじゃないかっ魔理沙！」

魔「一体どこの誰がときやがったんだ！？」

咲「不審に思ったパチュリー様が解いて下さったわ」

魔理沙がみるとパチュリーが魔理沙に向けてピースしている。

パ「ちよろいわ」

魔「ま、まじっすか・・・」

咲「さあ今宵は妹様の宴、派手に踊りなさい」

忘れられた美鈴と純粋なフランと悪ふざけの永琳

メ「はあ・・・私・・・なんだか死にたくなりました」
夢「まあまあ、いつかいいことがありますって」

美鈴は落ち込んでいた。宴会芸で全く受けず、更に咲夜やレミリアの的にされていただけなのだ。

だから宴会芸で一番受けた妖夢のそんな言葉に美鈴は我慢しきれずに逆切れした。

メ「あなたは七色の羽なんていってすごい事やってのけましたが私なんてただ縛られていただけですからね!？」

妖夢を押し倒しそうな勢いで両肩を掴んで詰め寄る美鈴。更に涙を流し妖夢の体をゆらゆらとゆする。

酒を飲んだら変貌する例の一番面倒なタイプである。

う「そ、そんなこと無いですよ!あの体をくねらせた避け見事でしたよ!」

メ「だって咲夜さんは主に胸しか狙いませんし・・・誰も私の名前を覚えてくれませんし・・・」

すかさず優曇華がフォローに入るが美鈴の心の傷は相当深い。更にさりげなく自分の名前を誰も覚えてくれないという不満を出す美鈴。

いつも元気な美鈴が俯いて暗いオーラに包まれていく。

メ「私なんて生きていてもしょうがないですよ・・・」

夢（やばいです優曇華さん！何とかこのゲートキーパーさんを元氣付けなければ！）

う（あ、そうだ！名前を呼んであげればいいんじゃないですか！？）

夢（それいいですね！それでこの人の名前はなんですか！？）

う（え？）

夢（え？）

う（・・・どうしましょう）

夢（聞くは一時の恥）

う（はあ）

夢（聞かぬは一生の恥です！）

う（なるほど、それで誰に聞くんですか？）

夢「あなたの名前を教えてください！」

妖夢もまた酔っているようだ。よりによって美鈴本人に聞いてしまった。

メ「・・・」

う（本人なんなん！？）

メ「いいんですよ・・・もう・・・誰も私の名前なんか・・・私の名前なんか・・・死んでやるうううううううう！」

慌てて優曇華と妖夢が暴れる美鈴を取り押さえる。しかし相手は拳法の達人だ。妖夢がいくら剣の達人とはいえ剣を持たねばただの

少女。

優曇華と二人掛かりでも美鈴は止まりはしない。

そしてそんな3人の行動をフランは見ていた。

しかしそれは美鈴がどんな自殺をするかをわくわくして眺めているのではない。驚いたことにフランは心配そうな顔をして美鈴を見ているのだ。

フ「・・・」

永「どうしたのフランさん」

その異変に気付いた永琳がフランに尋ねる。尋ねてきた永琳をフランは見上げるがその顔は深刻だ。

フ「ちょっと聞きたい事があるんだけど」

永「え？ なぁに？」

フランが永琳に聞いた事、それは美鈴の名前だった。自分が住む館の門番の名前が分からない事も驚きだが、今フランがそんな事を聞いてきた事も永琳には驚きだった。

だから永琳は何故そんな事を聞くのかとフランに問い返す。

フ「ドラゴン・・・なんか元気ないから、私が名前呼んであげると元気になるかなって思ってた」

永「あらあら」

永琳は目を丸くして驚いた。あの鬼畜と歌われたフランがそんな

優しい事を考える思考回路を持っているという事に。紅魔館での出発前のフランに比べればその変わり様は目を見張るものがある。

人里での経験はフランをここまで成長させたらしい。

それが永琳には嬉しかったのだろう。永琳は優しくフランの頭を撫でまわしてやる。フランはやはり喜びはしないが嫌がりもしない。

フ「むっ・・・それでなんていうの？」

そのフランから出たのはそんな不満の声と早く答えろという催促だけ。

永「ふふ、そうねえ」

永琳は何か考え事をするように少し顔を上げて天を仰ぐ。恐らくただで教えてもつまらないなどと余計な思考回路に電流を通しているのだろう。

そうして回路の電流が頭の上にある電球にピコンと光をつける。そしてパツと顔を明るくさせる永琳。

永「ヒント！私と一字違いです！」

フ「永琳と一字違い？・・・」

フランは怪訝そうな表情でオウムがえしする。

美鈴と永琳は一字違いだ。そのヒントをフランに教えて楽しんでいくのだろう。

フランはしばし黙考する。頭の中の記憶を隅から隅まで舐めるように見渡しその答えを探す。そして永琳と何度かつぶやいている。

しかし永琳と一字違いという簡単な問題なのにこの真剣さだ。これ見たら美鈴は逆に落ち込むだろう。

だから永琳はこの可愛い生き物の立派な成長の歩みを自分の心にだけ留めようと決めたのだった。

フ「あ！分かった！」

フランはそう叫ぶと永琳のスカートをちょいちょいと引いて屈むように促す。そしてゴニョゴニョと嬉しそうに屈んだ永琳に小声で耳打ちする。

永「っふふ、正解！きつと涙を流して喜ぶと思うわ」
フ「本当！？」

どうやらフランの答えは正解だったらしい。それが嬉しかったのだろうか、フランは永琳に御礼もせずに駆け出してしまう。そしてその勢いで暴れる美鈴の後ろから抱きつき、首に手を回す。

メ「うわ！？ど、どうし・・・どうなさったんですか妹様？」

一応酔っているとは言え主の妹だ。言葉遣いを直すところはさすがは従者というところか。

美鈴の後ろから抱きついたフランはふふんと自信満々に鼻で笑って美鈴の頬に自分の頬を思いっきりくつつける。

フ「私思い出したの、あなたの名前っ」
メ「へ？」

この時、美鈴も永琳と同じ考えだろう。あの鬼畜娘がこんな事を言いにくるなんてと。しかもわざわざ従者である美鈴のために。

フ「あなたの名前はゲートキーパーなんかじゃない。あなたの本当の名前は紅・・・」
メ「妹様・・・」

自分の名前をフランが思い出した。それを自分に言いに着てくれた。美鈴の目からはそれだけで涙が出てきてしまう。

今の美鈴にはフランが天使に見えていることだろう。今だけは。

フ「紅・永眠」
メ「・・・え？」
フ「ほんえいみん・・・なんだよ」

永琳と一字違い。確かに永眠でも通りはする。でも違う。それは美鈴を天国から地獄へ叩き落す呪文となってしまったようだ。

そう、フランは魔法少女だ。

そしてそれを知っていてそのままフランを行かせた永琳はというと涙を流して口を手で覆い震えるように笑っている。全く、たちが悪い。

美鈴の目からフライングして出た嬉し涙は枯れ、代わりに悲しみの涙がうれし涙の軌跡を辿って美鈴の頬を伝って流れ落ちる。そし

てそれを永琳が言ったように涙を流して喜んだと勘違いしたフランは喜びのあまり、より一層美鈴の首を絞める腕に力を込める。

美鈴は妖怪でしかも肉体派だ。フランの首を絞める力になどものともしない。だが心はフランの放った呪文によって締め付けられ壊れてしまった。

メ「どちくしょおおおおおおお！」

霊夢と落書き

夜も更け、満月が高々と昇る頃。宴会はまだまだ続いていた。フランはチルノ一緒に歌を歌い美鈴は自棄酒をして吐いてしまい優曇華に看病されている。他には上司の説教を聴かされたりそれに巻き込まれたり、色々だ。

そしてレミリアというと。

咲「お嬢様、どうぞワインです」

レ「ありがとうございます咲夜」

神社の縁台に座って外を眺めていた。外から入り込んでくる虫の音と中から聞こえてくる騒がしい音。

その狭間にレミリアはいた。

そしてそのレミリアに咲夜がワインを運んで来た。

宴会が始まった頃、月は顔を横に振っただけでその姿を見ることが出来た。しかし今は顔を上げて、更に目線をあげなければ見えなくなるほど天高く上っていた。しかし神社の屋根に隠れて見えないほどではない。

そんな月をレミリアは縁台に座ってボーっと眺めていたのだ。

咲「いい満月ですね」

そして月は綺麗な形をした満月だった。

フランが紅魔館から無理やり人里へ連れて行かれたのが満月だ。そしてそれから丁度一ヶ月。その間レミリアは気が気ではなかっただろう。

フランが人を傷つければその時点で天界行きなのだ。天界息となっても恐らく天界へ行く事は無いだろうが幻想郷を離れなければならない、という心配もあった。

しかし計画が終わった今、レミリアはその心配から解き放たれた。これはその反動からだろうか。

レ「そうね」

と一言。それ以上は何も言わない。

この静かで騒がしい夜をレミリアは堪能したいのだろう。そしてそれを気付かない咲夜ではない。咲夜はそれ以上何も言葉を発しないレミリアを一瞥し自分も空高く上った満月を見つめ沈黙する。

しかしその雰囲気はすぐに壊れる事になった。

レ「でも」

とレミリアが切り出したのだ。気を使って喋りかけず月を見ていた咲夜は少し驚いて肩をすくませる。更に横目でレミリアを見てそしてゆっくり顔をレミリアの方へ向けた。

レ「あなたは少し欠けた月のほうがいいんでしょう？」

続けてそんな事を言う。咲夜が完全にレミリアの方を向いた時にはすでに満月から目を背け、咲夜のほうを向いていた。

レミリアがした質問は昔城から逃げてきた時にアイリスに聞いた答えのある質問。

そしてそれはやはり当たりだったらしい。

咲「何故・・・分かったんですか？」

咲夜は少し驚いたようにぽかんと口を開けてレミリアを見つめている。

レ「ふふ、人間の考えそうな事よ」

レミリアはあの時と同じように少し笑ってまた月に視線を戻す。その笑いは嘲笑ではなくただ単におかしかったからだろう。

咲夜は頭にはてなを浮かべながら首を傾げ「はぁ」とため息のよ

うな気のない声で返す。

そして咲夜もまた夜空に輝く満月に視線を戻す。そして

咲「欠けた月はまだ先があるじゃないですか」

不意にそんな事をつぶやくのだった。アイリスとはまた違う見解。

そんな咲夜の見解にレミリアは興味をそそられ、顔を上げたまま横目で咲夜を見る。そしてどういふことかと聞き返す。

咲「これからまだ綺麗な丸になる余地があるじゃないですか」

満月は欠ける事はあってもこれ以上大きくはならない、ということだろう。

おみくじと同じで大吉を引けばその時は運気はいいだろう。だが今後はそれ以上運気は上がることも無く落ちるだけ。それならば小吉の方が良いという良くない結果を引いた者がポジティブ精神で言った負けず嫌いな持論だろう。

レ「ずっと満月ならいふ事ないじゃない」

大吉がずっと出ればそれに越した事はない。その見解は人間と吸血鬼の種族による違いなのだろうか。そしてそんなレミリアの意見が面白かったのか、咲夜はクスクスと笑いながらレミリアを見る。

咲「そうですが、人間にとって永遠とは憧れるものであって手に入れてはいけないものなんですよ」

レ「そう、馬鹿ね」

そしてレミリアがまた一言、今度は子供っぽい憎まれ口を叩く。
しかしそんな子供っぽい事を言うレミリアがおかしかったのか可愛
かったのかまたクスクスと笑う咲夜。

咲「そうですね、人間は馬鹿ですね」
レ「そうよっ大馬鹿よ」

咲夜に笑われて悔しかったのか。レミリアはそう言ってフンツと
顔を背ける。

咲「でも、だからでしょうか、満月を見てると不安になるんです」
レ「不安？」

咲「なんだか恐ろしい事が起こりそうで」

咲夜はまたまぶしいくらいに輝く月を見つめる。

満月とはこの後日経つにつれて徐々に欠けていくしかない。明
るい月から段々暗い月へ。だからそれで不安になるのだろうか。

実際、月の光に染められた咲夜の横顔はどこか不安そうだった。
その満月の光があまりにも強すぎるせいか、レミリアもなんだか不
安な気持ちになってしまう。

昔の、あの惨たらしい戦争が起こった日もまた、満月だった。

咲「あ、別に昔あった戦争がどうのこうのではなくってですねっ」

咲夜が気が付いた時にはもう遅く、レミリアは眉をしかめて不安
そうな表情をしていた。

レミリアもまだまだ子供だった。

咲「え、あ・・・そ、そうだ！それでその・・・少し質問なのですか」

レ「ダメよ」

咲夜は必死に取り繕うがレミリアを不安にさせた罪は重い。咲夜はもうレミリアに質問する事さえ許されないだろう。

だから咲夜はレミリアの膝に視線を降ろし口を尖らせて眉間にしわを寄せている。

魔「あ、やけに静かだと思ったら寝てたのか！」

口にチャックをされた咲夜の後ろから魔理沙がレミリアの膝を覗き込む。

咲夜が言いたかったのはこれだろう。霊夢がレミリアの膝ですやすや眠っているのだ。それはレミリアがうとうとしている霊夢をゆっくり寝かせて自分の膝に誘導したのだ。

永「霊夢さんも少ししか寝てないのよ」

続いて魔理沙のそんな言葉に気が付いた永琳がそう言った。

霊夢はフランよりも睡眠時間は短い。フランが寝た後で永琳と寄り添いながら音はしていた。

しかしそれもフランと新之助の声で目を覚ましてしまった。そし

て普段診療所で働く不規則な生活に慣れている永琳ならばともかく、普段は巫女らしく、早寝早起きをして規則的な生活をし、日中は修行もせず自堕落な生活をしている霊夢。そんな霊夢が朝から晩まで宴会の準備をしていたのだ。当然眠くなるだろう。

それは霊夢が自分の責任を全うしようとかんばったからだ。だから今はレミリアの膝枕でゆっくり寝かしてやろう。など考える魔理沙ではなかった。

魔「人がせっかく宴会を盛り上げようとしてるのに寝るとは笑止千万だぜ。よし落書きしてやろうぜ」

全く、これほどがんばった巫女に落書きなど罰当たりもいいところだ。当然レミリアがタリア顔負けのデイフェンスを見せる、がそんなものの、魔理沙に掛ければちよいと錠前が変わる。

魔「まあまあ、お前も何か書いてやれよ。レミリアLoveとかな」

そう言っただけ魔理沙は何本かペンをどこから取り出しレミリアに差し出した。レミリアはそれをひったくるように奪いそして霊夢の頬にキュッキュと書き始めた。

魔「額は私がもらったぜ」

魔理沙はペンのキャップをポンツと音を鳴らして外し、そして寝ている霊夢の額に何やらキュッキュと書き始めた。

魔「にく」

パ「予想通り過ぎて呆れるわね」

魔理沙がさっきまで喋っていたパチュリーが後ろからジト目で魔理沙を見ている。しかし魔理沙はそんなパチュリーの予想を裏切った。

魔「づきに」

パ「え？」

魔「力三つと」

にくづきに力三つ。つまり魔理沙は霊夢の額に脇と書いたらしい。

町「ぶっ」

更に後からきた小町が霊夢の額を覗き見た瞬間に噴出す。それと同時に書いた張本人の魔理沙でさえ噴出して笑ってしまう。

魔「だーっはっはっは！やばい！自分で書いて笑っちゃうぜ！」

パ「そんなの書いて・・・またおこ・・・怒られ・・・ぷっ・・・クククッ」

パチュリーですら澄ました顔を崩し、笑ってしまうその霊夢の額の脇という字。そこで咲夜が改めて「脇巫女ね」などというものだから更に魔理沙は腹を抱えて笑い、更に床をどんと叩いてしまう。下に住む住人がいたら間違いなく怒鳴り込んでくるだろう。

しかし魔理沙も必死だ。笑いの衝動を外へ逃がさなければ腹筋が壊れてしまうのだろう。魔理沙の手による連打は止まる事はない。

咲「じゃあ私も何か書こうかしら」

そう言って咲夜も魔理沙が放り投げたペンを取り、何やら霊夢の

頬にきゅつきゅと書き始めた。だが咲夜が書いた落書きはよりによってあの二文字

町「貧乳て・・・」

咲「ふふふ、霊夢には負けていない気がするわ」

怪しい笑みを浮かべそして満足そうな咲夜。貧乳が貧乳に貧乳と書くとは何事だろうか。呆れたことにどんぐりの背比べと言う他無い。

しかし当の本人の霊夢は特に気にしてはいないようだが。

そしてよく見ると霊夢の反対側の頬には「レミリア命」とちゃっかり書かれている。

（鬼）

そんな楽しそうな宴会もいつの間にか終わりが近づいていたようだ。それは宴会の勢いが徐々に弱まってきたからではない。

先程咲夜が何か恐ろしい事が起こると言った。それが現実のものになろうとしているのだ。そしてその恐ろしい事はもうすでに博麗神社のすぐ傍に迫っていたのだ。

いや、もうすでに神社の敷地内に侵入していた。

ゆっくりと近づいてくる。

縁台に座っていた咲夜とレミリアはその招かれざる客の気配を感じ取った。ピクリと体が動いたかと思うと咲夜はもうすでに立ち上がっていた。その異変に先程まで笑い転げていた魔理沙がうずくまりながらも咲夜の方を見る。

咲夜が身構え霊夢が膝を枕にしているため動けないレミリアの前に立っている。その手にはナイフが数本。

魔「咲夜? どう」

咲「そこにいるのはだれ?! 出て来なさい!!」

魔理沙の声を遮り気配のするほうへ声を張り上げる咲夜。

「どうもーこんばんわ」

すると返ってきたのはそんな軽い口調の声。更に続いて暗闇から月光の下に姿を晒した侵入者。

文「あやや!?! な、なんですか?! 何で臨戦態勢なんですか!?!」

咲「天狗?」

レ「きゃっ!?!」

フ「ぱぱらっちだ!」

神社の外の異変に気付いたのかフランがレミリアの背中に飛びつきながら叫ぶ。そのせいでレミリアは驚いて声を出してしまう。

他の連中もその騒ぎを聞きつけてどやどやと歩み寄って来た。

文「違いますよ! 清く正しい射命丸文です!!」

魔「あ、そういえばいなかったな。お前なら宴会に来て写真パシヤパシヤとってそうなのに」

それは新聞記者の射命丸文だった。文は宴会だというのに初めから終わりまでずっといなかった。姿を最後に確認したのは魔理沙でまだ日が照っている間だ。

そして確かに宴会の場は色々なシャッターチャンスがある宝島といってもいい。その場に居合わせないとは一体どういう事なのか。

魔「あゝあ、宴会芸すごかったのになあ。特に妖夢だ！妖夢は何をしたと思う?!」

と文をうらやましがらせるために不適な笑みを浮かべて勿体つけるように言う。魔理沙は意地悪だ。ゆっくり時間をかけて文をじらすつもりだろう。

文「七色の羽、とかですか？」

しかしさりと文は言い当ててしまう。これには魔理沙の肩が地についてしまいそうなほどにガクリと落ちる。

魔「な、何でお前がそんな事・・・まさかどこかに小型カメラが！？悪趣味な奴め！」

と慌てて周りを見渡し警戒する魔理沙。しかし文はそんな変態じみた事をするわけが無いだろうとぶんぶんと怒り出す。

文「違いますよ！私はある人に聞いたんです」

魔「ある人？」

文「ええ、この幻想郷の知識を全て知る人物ですよ」

魔「はあ？わけの分からない事を。それに宴会芸をほっぽって何でそんな所に」

文「私は記事の裏づけを月に一度そこで行っているんですよ。でまがあったら編集長にどやされますので。だから宴会にも行けなかったというか。でも宴会芸で何をやったかも魔理沙さんがどんな鬼畜プレイを美鈴さんにしたのかも全て私は知っていますよお。写真が取れなかったのは少々残念ですがね」

皆一体何の事か分からず頭の上にはてなを浮かべたまま顔をかしげる。しかし顔を傾げていないものもある。それはパチュリー、四季、紫だ。これはフランが幻想郷に帰ってきた時の霊夢とパチュリーあの不可解なアイコンタクトのメンバーと同じだ。

魔「それで？お前はその用事が終わったからここに来たのか？」

文「あ、いえ、私はもう少し記事と事実を照らし合わせたかったですぅ……」

魔「が？」

文「何故か急に博麗神社に行くと言われまして」

文はやれやれといった感じで癖なのか、手に持ったメモ帳で雨をしのぐように頭をこつこつと何度か叩く。

魔「博麗神社に行くって、誰が？」

文「それはですね……あ、来ました来ました」

文がそう言って首を振った先。月の光が届かない博麗神社を取り囲む木の陰に誰がいる。

ざっざっざつと、その者はゆっくりと皆の方へ歩いてくる。

月の光は上から降り注ぐ。だから最初は頭が見える、筈だった。
しかし月明かりの下に最初に姿を現したのは二本の角だった。

『鬼』

そんな言葉が相応しいその角の一方には何故か赤いリボンが。

続けて月明かりの下に姿を現したのは聡明そうな少女の顔。その少女の顔を包む髪は月光に当てられてだろうか、神秘的なエメラルド色に染まっている。

「やあ、皆さん、こんばんは」

暗闇から月明かりの下へ姿を現したのは歴史を操る能力を持つ半人半獣。

その名を上白沢慧音という。

第三十五章　　ゝ宴会芸（後編）と鬼ゝ（後書き）

さあついにでましたフランを地獄へ叩き落とす鬼。

この上白沢慧音という妖怪は皆さん知ってのとおり歴史を食べたり創ったりすることが出来る妖怪です。

ここまで言ったら慧音が何をするのか分かってしまうかも知れませんが更にその上を行きたいと思います。まあそうでないとそうする理由がなくなるのですが。

ちなみに魔理沙のNiceバディですがNiceとパソコンで打ったらにせになるんですね。まあそれだけです。

そして・・・二つ目のレビューありがとうございます。本当に嬉しいです。

これでまた小説を書くモチベーションがあがるというものです。しかしこれで舞い上がることなく最後まで尽力しこの小説を書き上げたいと思います！

ここまで読んで頂きありがとうございました。

ではゝ

第三十六章　　（宴会会EX）（前書き）

どうもこんにちは。

前回慧音が来たところで終わりましたが今回はその慧音の満月に見せる力を使ったところを想像して書いて描いてみました。これは私の個人的な描写なため分けが分からないと思いますがあまり疑問を持たずに呼んでくれれば幸いです。

そしてよくネタである「粉バナナ」とは「これは罌だ」の空耳らしいですね。私は最初「こんなばかな」の空耳だと思っていました。

とこれを踏まえてどうぞ。

第三十六章　（宴会芸EX）

古より、鬼とは恐ろしい物、悪い物の象徴であり、また鬼才、鬼神、鬼嫁など様々な強さの象徴としても使われる。そして鬼の形相と比喻されるように世にも恐ろしく、しわが隆起し、でこぼことした顔、頭には二本の角に根元には巻き毛の髪が生え、更にその屈強な体には虎の毛皮を巻いている、というのが相場である。

しかしやってきた鬼は角こそ湾曲した、長く立派な二本の角だが、髪の毛は艶やかなエメラルドに染まったロングのストレート、体には虎柄ではなく藍色の衣服を纏い、その衣服で包み込まれた体はお世辞にも屈強とは言えない華奢な体つきだ。更に鬼の形相という表現とは程遠い聡明な顔立ちをしている。鬼というよりも女神の方がしっくりくる鬼である。

この少女、上白沢慧音は歴史を操る能力を持つ。その正体は人間であり獣でもある半人半獣という類の妖怪だ。しかし普段は持ち前の知識を生かし子供達を前に金棒ではなく、教鞭を手にとっている変わった妖怪だ。

霊「来たわね」

と、不意に寝ているはずの霊夢の声が聞こえる。皆がその声のするほうを見ると頭は未だレミリアの膝の上、しかし霊夢の目と口が開かれている。

月明かりで照らされた霊夢の横顔はとても妖艶で、更に寝起きだからだろう、細められた目と長いまつ毛がそれに拍車をかける。霊夢は曲がりなりにも巫女なのだ。月の魔力もあいまってゆっくりと

起き上がる様もまた女神のようだ。

落書きがなければ。

魔「おわっ霊夢?!起きてたのか!?!」

その女神の寝起きの神聖な雰囲気をぶち壊す落書きを書いた張本人であり元凶の魔理沙がびくりと体をすくませ霊夢の方を伺う。

霊夢が目覚めたのは落書きをしたすぐあとだ。だから落書きをした張本人のレミリア、咲夜も少しドキッとしてしまう。魔理沙が恐る恐る「寝ていても気付くものなのか」と聞くと

霊「慧音の妖気を感じたのよ」

と、一つあくびをし、涙を滲ませながら面倒くさそうに答える。

霊「だいたい、上級巫女は寝ていてもいなくても周りで何が起きてるか瞬時に分かるものなのよ」

魔「そ、そうか・・・そう・・・だよな・・・ぷっ・・・くく・・・上級・・・ふふっ・・・巫女だもんな」

これだけの落書きを盛大に浴びてよくそれだけの文句が言えるものである。しかも自信満々の顔で言うのだから手に負えない。魔理沙が噴出してしまうのも無理はない。

魔理沙は思わず近くにいた小町の胸という避難場所に飛び込んだ。

町「ま、魔理沙!?!」

魔「私はどうしたらいい!?!どうしたらいいんだ!小町!」

町「・・・知らないよ」

魔理沙は小町の胸で泣いた。ただしそれは笑いながら。そしてその後ろではパチュリーが絶句しているのは言うまでもない。

咲「霊夢、あたいの脇にキスをしなよって言ってみなさいよ」

と笑いを押さえきれない魔理沙に追い討ちをかけるように咲夜がそんなことを言う。魔理沙とは違い咲夜は冷静だ。こんな事では笑いはしない。

だが魔理沙は違う。咲夜のそんな言葉に体がピクピクと小刻みに揺れ始める。咲夜はドSだ。それを分かっているやっっているのだから。

霊「はあ？何で私がそんなこと、それにこの神聖な脇を触らせるわけないでしょ」

自分の脇に相当な自信を持っているのだろう。他称脇巫女は自信満々にそう言い放ちあまつさえ腕を上げて脇を見せ付ける始末だ。おでこに「脇」と落書きされた顔で。

だが咲夜はそれを狙っていたのだろう、ニヤリと一つ忍んで笑う。

咲「ていうかあ！あなたの脇にキスなんかしたいと思う人なんていると思っているの!？」

霊「む」

その自信満々に脇を見せ付ける霊夢の逆を突いて攻め入る咲夜。

咲「こちらから願い下げだって言ってるのよ！おーっほっほっほっほ！」

霊「ひ、一人くらいいるはずよ！」

咲「そんな物好きいたら見てみた、ん？」

咲夜は何かにスカートの裾を引っ張られる。これから更に霊夢を思いつきりなじってやろうと思っていた咲夜はうざったそうにその主を見る。咲夜は無視したかったのだがそれは出来なかった。なぜなら他ならぬ咲夜の主であるレミリアだった。

レ「咲夜！咲夜！！どっちの脇にキスをすればいいの！？脇！？それともおでこ！？」

霊「いたわね・・・」

咲「おぜう・・・」

文「あややー！霊夢さんの寝起きの顔かっこ笑いももらっちゃいますね！」

文はそう言って楽しそうに霊夢の落書きされた顔をカシヤカシヤと容赦なく撮る。流石は記者というところか、ネタにいちいち反応してはいられないのだろう。霊夢の顔の落書きに表情を少しも変えずに写真をとる。

霊「それにしても満月の夜になると頭にそんなものが付いてくるのね」

霊夢が立ち上がり、軽く背伸びをしながら慧音にそんなことを言う。そんな物とは恐らく慧音の頭についている湾曲した角のことだろう。

音「ああ、妖力があふれ出してきて押さえきれなくなっとうして
もな。それより霊夢」

霊「ん？」

音「お前も満月の夜になるとそんなものを顔につけるのか？」

霊「そんなものって、何？」

音「ほら、鏡を見ろ」

慧音は腰に手を当て、だらしの無い生徒を見て呆れるようにため息をつく。それでもう片方の手には慧音の手鏡が霊夢に向けられている。そこに映し出されたものは顔に書かれた落書きと、その落書きで汚れたキャンバスが怒りで歪んでいく様だった。

霊「・・・どこの・・・だれかしらねえ、一人は親切丁寧に名前を書いて下さっているみたいだけど・・・ね」

レ「こ、粉バナナ・・・」

霊「後はだれかしらねえ」

名前を書いてしまったレミリアはもうどうしようもない。

他の当事者である魔理沙は小町の胸で笑いではなく恐怖でプルプルと震え、咲夜はそっぽを向いて目を瞑って澄まし顔だ。これでは霊夢はレミリア以外の犯人を捜すことは出来ないだろう。

霊「あらそう。まあいいわ、名乗り出ないならこちらから出向くま
でよ」

霊夢は切り離されている袖から何か札のようなものをごそごそと探り、取り出した。

そして

『帰符・人を呪わば穴一つ』

と一言、まるで呪文のように言い、ゆっくりと怪しい笑みを浮かべる、と同時にそのスペルカードで顔を撫でる。すると不思議なことに撫でると同時に霊夢の顔から落書きがスーッと消えていく。

更にはレミリア、咲夜の顔に異変が起こる。

レ「へ!?!」

咲「あら?」

人を呪わば穴一つ。

つまり呪った本人だけが地獄という名の穴に落ちろ、という霊夢らしい呪い返しのスペルカードだった。したがって霊夢の顔にかかれた、「レミリア命」・「脇」・「貧乳」という文字がその書いた本人の顔に返されたのだ。

レミリアは自分の顔に「レミリア命」という文字が浮かび上がっている。これではまるでナルシストだ。

更にそんなレミリアにフランが追い討ちをかける。

フ「おねえさまって自分大好きなんだね」
レ「・・・」

全く、天使の笑顔で悪魔のような一言を言うフランは諸説ある二つ名の一つ、その通りの鬼畜娘だった。

そして霊夢の頬にあらう事か「貧乳」と書いたメイドはというと。

咲「何よ、私の顔に何か付いているの!？」

霊「え、ええ・・・まあ」

咲「どこ見てんのよ!!」

青○さやかも腰を抜かすほどの剣幕で霊夢に逆ギレしていた。

町「あれ?魔理沙。額に脇って書かれてないな」

魔「ふふ、私はこれ持っているからな。アリスにもらったんだぜ」

町「へえ、でもそれって誰かに呪いを移すやつだろ?一体誰・・・に」

魔理沙の手にはわら人形が。小町が後ろを振り向くと美鈴が霊夢にアイアンクローをかまされていた。

メ「濡れ衣だあああああ!」

魔「いやゝ本当は咲夜の宴会芸回避のためだったんだが、まさかこんな所で役に立つとはなあ」

フラン以外の紅魔館の住人は当然の如く頭にこぶを作られ霊夢に説教されている。咲夜は情けでこぶと説教は避けられたがそれはこぶよりも、説教よりも身に染みたという。

フ「ねえねえ!これって本物!?本物の角!？」

霊夢の説教で暇をもてあました好奇心旺盛なフランは珍客が来たという事で興味津々だ。慧音の近くに歩み寄りちよっかいをかけていた。

音「ん？ああ、そうだ。本物だよ」

フ「うわゝかっこいいね」

慧音は少し戸惑いつつも見た目は子供のフランだ。子供とはいっても接しているため慣れている事もありいつも子供にそうするように声音を柔らかくしフランの問いに答えてやる。

フランはフランで目を輝かせて慧音の湾曲した角に釘付けだ。

音「君が例のフランドール・スカーレットだね。こんばんは」

そして調子を変えずにフランに優しくそう言って微笑んだ。だが興味を持ったフランは盲目の子供戦士だ。戦士は勇猛果敢で猪突猛進というのが相場。

フ「ねえねえ！角！角！角さわっていい！？」

と、慧音の挨拶を無視し一人で勝手にワクワク、うずうずしてはしゃいでいる。

音「・・・」

フ「ねえってば！」

フランは待ちきれないのか、落ち着きがないように足踏みをしながら更に催促する。だから慧音は頭を下げてやる事にした。その慧音の表情は笑顔だがその笑顔に表情はない。

音「どうぞ！」

ゴッ

という鈍い音を立ててフランの頭に慧音の頭が直撃する。

フランは何が起こったか分からなかったのだろう。

人の体は強すぎる衝撃を受けるとその一瞬痛みはない。それは脳がその衝撃を感じ取りそれに見合った痛さを全身に伝える、という変換を行うために時間が掛かるから。

その衝撃が脳にたどり着くのに時間は掛からなかっただろう。それはもう脳がある頭に衝撃を受けたのだ。当然といえば当然だ。

然るべく、その衝撃が強烈な頭の痛みに変換され、更にフランのわくわくうずうずしていた期待の表情が苦痛のそれに、期待という感情は慧音に対する怒りに変換されたことだろう。

慧音は礼儀を重んじ、その一番基本で一番大切な挨拶をしないものには気の済むまで説教してやらなければ気がすまない性格だ。しかもその説教の仕方がくどく、説教されたものは眠気とも戦わないといけなくなってしまう。

更に満月の夜は持っている知識を全て知る事が出来るため歴史を綴る者の力になるため紙に書き出している。だから体力を消耗し逆にストレスを溜め込んでいる。そのため気が立っているのか先程のような説教という前段階をすっ飛ばした短絡的な行動に出してしまう。

その結果がこれだ。フランが頭を抑えて苦痛にもだえているこの現状がその証。

説教するにしろ頭突きをするにしろ、説教された者にとっては頭

の痛い話だ。

しかし人里の新之助の祖母といい、幻想郷といい、フランは頭突きされている。頭突きされる才能でもあるのかもしれない。そんな才能など何の役にも立ちはないしフランは欲しくないだろうが。

フ「いきなり何すんのよ！痛いじゃない！」

期待を慧音への怒りに変えたフランの子供脳。その脳のせいで当然フランは慧音に食ってかかる。頭を抑え目に蓄えた涙を少しだけこぼしながら怒りの視線を慧音に向ける。

生憎、慧音は寺子屋の教師だ。子供の不服不満は日常茶飯事でそんなフランの言葉をいちいちストレスに変換する脳は持ち合わせていない。フランの睨むな視線にも慣れっこで全く動じる事はない。

あまつさえ慧音は説教を始める始末だ。

音「挨拶されたらちゃんと挨拶を返す！挨拶は人のコミュニケーションの入り口であって更に自分の第一印象を左右する大事な儀式だ！その最初の段階をすつとばして私の角を触ろうなんておかしいと思わないのか！？」

子供をしかりつけるような口調で一息に言っただけの慧音。

フ「うー・・・わけわかんないよ！ばかっ！」

フランの子供脳もまたそんな慧音の長ったらしい文句を変換する機能は持ち合わせていなかったらしい。フランは考える事を放棄しそんなことを言う。

教師を捕まえて馬鹿とは慧音の存在意義全否定に相当する失礼極まりない言い分だがフランはまだ自称大人の子供だ。それを聞いた教師である慧音は鼻でふつと苦笑しその表情が少しずつ教師のそれに変わっていく。

音「よし、なら君にも分かるようにもっと詳しく説明をしてやろう。そもそも挨拶というものは」

慧音は屈みこみ、涙で滲んだフランの目と同じ位置に目線を移動させた。慧音は自分の説教ベストポジションに付いた。しかし

霊「はいはい、そこまでよ」

このまま説教を続けさせたら朝まで続けかねない。すかさず霊夢のストッパーが慧音とフランの間に挟まれる。

霊「あんたはここに挨拶の大切さでも説きに來たの？」

落書きした三人（一人はとぼっち）にきつい説教し終えた霊夢が慧音の方へ歩いて来てパンパンと手を鳴らす。

音「挨拶は大事だ」

霊「そうね。でも今日はそんな事しにきたわけじゃないでしょう？」

音「ふむ・・・まあ、そうなんだが」

相当不満なのだろう、数瞬間を空けて更にそんなことを言う。あまつさえ慧音は口惜しそうに不満の顔を霊夢に向ける。

だが霊夢が言ったように歴史を綴るといふ大切な仕事をほうり出

した挙句、挨拶の大切さを説く為に博麗神社に来たのではないだろう。

音「仕方がない。フランドール、これからは挨拶をちゃんとするように・・・フランドール？」

だから説教を諦め、最後にフランに何か言おうとしたのか、フランがいたところに視線を向けるがそこにはもう影も形も無かった。

フ「ベー！」

音「くっ・・・」

フランは霊夢の説教を免れ、悪びれる風もなく酒を飲みなおしていた魔理沙の後ろに逃げて隠れていた。更にアツカンベーを慧音に向けてやっている。全く子供らしい挙動に魔理沙も苦笑いだ。

霊「・・・それで早速なんだけど」

音「ああ、大体の事はわかってる。後は私が上手くやっておく」
霊「そうしてくれると助かるわ」

と霊夢と慧音のそんなやり取り。

フ「何かするの？」

魔「さあなあゝ、酒がうめえぜ」

それを見てフランは宴会芸でも始めるのかと思ったのだろう。魔理沙首に絡みながら体重を預け、魔理沙の体をユラユラと揺さぶって遊んでいる。

音「なんだ、話してないのか？」

霊「話したら暴れまわるかも知れないでしょ？」

慧音はフランを一瞥し霊夢へ視線を向ける。首を傾げて眉をしかめて。

そしてフランに話したら暴れまわるような事。それは一体何なのだろうか。そのやり取りはフランにも聞こえている。フランがされて暴れだす事。一体なんだろうか。フランは自分の子供脳をフル回転させ何をされたら考える。そして

フ「まさかっ！」

魔「どうしたフラン、酒飲むかあ？」

フ「おねえ様が殺される!？」

レ「フラン・・・それは喜ばないとダメ？」

そんな馬鹿をやっているフランたちを尻目に霊夢は慧音と何やらひそひそと話し合っている。

音「じゃあ何で呼んだんだ？」

霊「呼んだわけじゃなく勝手に来たの。魔理沙の策略よ」

音「それを止める事も出来た筈だが？」

霊「そうだけど・・・あの子には見て欲しいと思った。ただそれだけよ。ただ・・・それだけ」

霊夢は何やら意味深についたため息で慧音との密会に終止符を打つ。それはこれからする事にあまり気が乗らないのか険しい表情を垣間見せる。慧音もそんな霊夢に苦笑し、軽く頷いて「わかった」と一言だけ。

慧音が言う、「呼んだ」とは恐らくフランの事だろう。フランは本来ならば博麗神社に来ることはなかった。それを魔理沙が急に企画した宴会のせいでたまたま博麗神社に来ただけ。しかも霊夢も少々だがあまり抵抗することなく宴会に同意した。

これはつまりこれはフランに何か関係がある事なのだ。

霊「さて」

と、ここで霊夢がそこにいる皆にこえるくらいの声で一言。皆酒を飲みなおしたり馬鹿なことをやってはいるが何故慧音が博麗神社に来たのか気になっている。だから皆すぐに霊夢の方に向き直り黙する。

霊「よく見ておきなさい、特にフラン」

そして霊夢のそんな言葉。フランを名指しで、更によくみて見ておけ、とは一体何なのだろうか。フランを始め、他の皆には全く分けの分からない事だろう。ただし霊夢その一言でフランに注目しなかった者がいた。それは全体写真を撮った後の不可解な行動をしていた者と一致していた事は偶然ではないだろう。

しかし謎は深まるばかりだ。

フ「え？」

と、霊夢に名指しされたフランが少し間を空けて返事をした。と、ほぼ同時、不意に慧音の体がスーッと満月の夜空に向かって上昇していく。それにつられてまるで慧音の体に糸が付いているかのようになり、周りの者の視線が上がり、続けて首が傾いて皆その姿を追う。

丁度フランと満月の間、そこで慧音の上昇は止まった。フランから見ると慧音は満月の中にいる兎のように見えているだろう。しかし月に入り込んでいるのは耳ではなく角を生やした慧音だ。

月の光は太陽のように強くはない。その為満月の逆光で慧音の表情が完全に隠れてしまう、ということとはなかった。だからそんな慧音の表情を見ることが出来たのだが、それは目をつぶり全身の力を抜いたような静かな表情。眠っているでもなく、かといって目をつぶって思いにふけている表情でもない。

なんと表現したらよいか分からない不思議な表情。

上昇を止めた慧音はまるで誰かに操られているように体を回転させる。

その方角、それはフランがこの一ヶ月間暮らした場所。とてもお世話になったフランが好いている新之助が住んでいる人里のある方角だ。

慧音は続いて両手を広げて更に胸を突き出すように体を反らす。顔はほぼ天を仰ぎ見るように傾けられていてまるで天界にいる神に何かを祈っているようだ。

月に照らされるそんな慧音の姿はとても神秘的で皆の視線を釘付けだ。更には口にもまた釘を打ち付けられたのか、誰も喋る事が出来ない。あの好奇心旺盛なフランでさえ瞬き一つせず、小さく開けた口もそのまま固まり閉じる事もできず、一心不乱に慧音を見つめている。

やがて月明かりに照らされてエメラルド色に輝く慧音の髪が少しずつゆらり、ゆらりと揺れ始める。続いてピリピリと空気が震え始める。

そのせいか、視界が歪み、慧音の体が歪んで見える。

それは慧音の妖気が高まり大気を揺らして起こる現象だろう。妖気が高まり息が詰まる。

更に慧音の髪が次第に速く、小刻みに揺れるようになる。そして着ている衣服もバサバサと音を立ててゆれ始める。それも次第に早く。

と、次の瞬間

ドッ！

と一度音のない、大きな衝撃が空気を通して皆の体を打った、と思うとそのすぐ後に大きく鈍い地鳴りのような音と地震のような揺れが起こる。更に信じられないことに夜とは思えないほどに辺り一面が白い光に包まれている。

しかもその光源は人里だ。その光があまりにも強すぎるため博麗神社まで白い光に包まれそうになっているのだ。

人里は白い光に包まれてどこに何があるのか見えなくなってしまっている。更にその光は天高く柱のように伸び、夜空を突き刺し、暗い空を白く染めてしまっている。

これが宴会芸というのなら恐らく最大規模の催し物だが何事に

も限度がある。規模が大き過ぎて皆呆然とし、驚きはするが盛り上がりはしない。皆一様に目を細め、自らの手でその眩しすぎる光を遮る者もいる。

更に何が起こっているかも説明されていない。これでは盛り上がれというほうが無理な話だ。

目を輝かせるように角を見ていたフランでさえ、強すぎる光で身を焼かれる事は無いが直視することができない。直視したらその紅の目を真っ白に染められてしまいそうだからだ。

その大規模な催し物はそう長くは続かなかった。

数分後、やがて地鳴りが止まり、強い光も消え、博麗神社の周りは依然と同じように元の夜空に戻っていった。

そしてその大規模すぎる宴会芸を遂行した慧音は夜空からゆっくり降りてくる。

霊「お、終わったの？」

あまりの出来事に霊夢でさえ少し及び腰だ。

慧音は霊夢と皆の方をゆっくり振り返る。

音「つつがなく」

そしてニコツと笑いそう一言。

その慧音の一言はフランにとって悲劇の始まりの合図となる。

第三十六章 〔宴会芸EX〕（後書き）

咲夜ナムナム・・・そしてとうとう起きてしまいました。本当はこれで何が起こったかを書いてこの章を終わろうと思ったのですがやはり予想外に長くなりすぎてしまいましたね。しかも綺麗に切れたので何が起こったかは次回詳しくやろうと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では次回！

第三十七章　く歴史・解編く（前書き）

今回は前回慧音が改変した歴史の詳細を解き明かしていきます。

ということでサブタイも改変と解・編とかけてみました。
山田君に座布団を全て取られかねないですがどうぞく

第三十七章　　（歴史・解編）

今まで鳴いていた虫も先程の慧音の大宴会芸で止んでしまい、訪れたのは今までと変わらない満月とその光に照らされる博麗神社を囲む木々だけ。

しかし幻想郷の住人の鳴き声はそんな事では止みはしない。

魔「霊夢、そろそろ教えてくれよ。慧音は一体何をしたんだ？何でここに来たんだ？」

慧音の大宴会芸が終わり霊夢もほっと一息ついている所に魔理沙が説明を促す言葉をかける。

慧音は歴史を操る能力を持つ。だから何かの歴史を変えたのだろう。しかし何故わざわざ博麗神社に来たのか。ここでしなければいけない事なのか。

霊夢は横目で魔理沙を見てすぐ目を背けてしまう。すこし唸り、何と説明したらいいか困っているように眉をしかめて暗い空を仰ぐ。

パ「アフターケアよ」

魔理沙のすぐ後ろ、そんな一言が飛び出してくる。魔理沙やその周りの者も振り向くが大して驚きはしない。

前にもあったようにやはりこの二人には何か分かっているようだ。

魔「何だよパチュリー、やっぱりお前も知ってたのかよ」

パ「フ란の計画が始まる前にこの人に協力をしてもらう事にして
いたのよ。フ란がもし人里で暴れて物を壊したり、誰かを傷つけ
たり・・・殺したり」

やはりパチュリーも一枚噛んでいたらしい。スラスラとその実態
を読み上げていく。

パ「そういった事を無かった事にするために。人里の歴史を創りか
えることで」

フ란は幻想郷でも有名な問題児だ。だからそれを人里に連れて
行くには多大なリスクを覚悟しなければならない。それを解消した
のが慧音の存在だった。霊夢とパチュリーは事前に慧音に協力を要
請していたのだ。

フ란が何か大きな問題を起こせばリセットすればいい。しかし
それを言えばフ란の為にならない。だから今の今まで黙っていた
のだろう。

パ「だから人里にあるあなたの記憶を全て消したのよ、フ란」

だからパチュリーはその説明の最後を魔理沙ではなくフ란を見
据えて言った。魔理沙に抱きついてユラユラと揺さぶっていたフラ
ンに。しかしその目には嫉妬心はない。

フ「どういう・・・こと？わけわかんないんだけど！」

フ란は魔理沙の肩から身を乗り出して叫ぶ。今にもパチュリー
に飛び掛らんとする勢いだ。人間の何十倍の力を持つフ란にパチ
ュリーのようなもやしがり飛び掛られたら最後、ぼっきり折れて重傷

を負うことだろう。

魔「そうだよなっ」

フ「あたっ」

だから魔理沙がパチュリーに飛び掛らんとするフランの頭にぽんと手を載せて静止する。魔理沙はフランの味方らしい。

魔「何で今それをする必要がある？フランは無事返ってきた。計画は成功したんだぜ？何も問題はないだろ？」

そんな魔理沙の援護にフランはパツと表情を明るくする。

そう、フランは人を傷つけはしたが結果的にその方が死人もなく、天界行きも無く丸く収まったわけだ。フランも僅かだが成長し、計画は大成功の内に幕を締めたはず。更に人里のフランの印象もよくなり、更には人里の妖怪を見る目も少しは変わったはずなのだ。

ならば何故記憶を消すというのか。それはフランを初め、魔理沙、レミリア、そこにいるこの歴史を変えろという大きな計画を知らなかった全ての者に理解し難い事だろう。

だから先程までそんなパチュリーの説明を静かに聴いていた霊夢がその答えを語り始める。

霊「成功？」

という鋭い切り口で。計画は成功したという魔理沙を睨みながら霊夢は疑問を投げかけるように。それは本当に成功しているのかと問い返すような視線で。

霊夢の顔は真剣だ。そしてその凄みのある表情に魔理沙は思わずたじろいてしまう。

魔理沙は完全に及び腰だ。どうやら幻想郷一のトラブルメーカーの魔理沙も霊夢には叶わないらしい。

魔「あ、ああ・・・フランはこうして無事帰ってきたわけだし。死人もいない、だろ？」

霊「そうね、確かにこの計画は成功したわ」

そう素直に認める霊夢。先程まで凄んで「成功？」などと聞き返していたのにずいぶんあっさりだ。だからそんな肩透かしを食らった魔理沙はそんな霊夢の肯定に満面の笑みを浮かべるフランを尻目に、口を尖らせ「じゃあ何が問題なんだよ」と不満そうに問いかける。

霊「もっと根本的な事よ。何でこんな面倒な事が起こったと思う？」

面倒な事とはフランを一ヶ月も人里に置いて成長を試みた事だろう。フランが滞在する場所の手配、何か問題を起こしたときの処理とその見張り、天界の動きにこのアフターケア。

魔「それは」

フランが人里の周りで暴れ周り人々に恐怖を与えたから。それがそもそもの始まりだった。だから博麗の巫女であり、幻想郷の管理者でもある霊夢に妖怪討伐の命が下った。

フランを退治しろと。

だがそれに乗り気ではない霊夢がこの計画を発案し実行に移したのだ。

霊「そう、人里の人間が、幻想郷のフランという妖怪を怖がったから」

魔理沙はその旨を伝えたと霊夢はまた全てあっさりと肯定してき
た。

しかし妙な言い方だ。人里の人間、幻想郷の妖怪。それは霊夢の
言う根本である、元を辿った言い回し。

それに魔理沙は「ああ」と短くつぶやいて霊夢の言葉を止めるこ
となく滑らせる。

霊「そもそもそこで失敗してたのよ。根本から・・・人里と幻想郷
の関係が」

人里と幻想郷の関係は魔理沙だって分かっている。人里には人が
住み幻想郷には妖怪が住む。それが根本であり全てだ。

だから魔理沙はわけがわからず首をかしげる。

霊夢のいう人里と幻想郷の関係とは一体なんなのか。人里にとっ
て幻想郷とは、幻想郷にとって人里とは何だったのか。

レ「それと人里のフランの記憶を消すのと一体どういう関係がある
の？」

だから魔理沙と同じように首をかしげていたレミリアが疑問を投げかけ、そのよく滑る霊夢の言葉に歯止めをかける。それはフランの記憶を消した事に対し、理由がなければすぐに取消して欲しいと言うささやかな抵抗の表情も込めて。

だがそのせいで霊夢の言葉があらぬ方向を向いて滑っていくことになってしまう。

霊「あの結界、見たでしょ？」

急に霊夢が見当違いな事を言うものだからレミリアは少し間を空けて言葉に使えながら「ええ」と答える。

あの結界とは人里と幻想郷の境目となる結界。人里からは見えず幻想郷からなら見れるというもの。

霊「あれは別に感動の再会を演出するためにマジックミラー的な機能を取り付けたわけじゃない、ということよ」

人里からは見れず幻想郷からは見れる結界をマジックミラーと比喩した霊夢。そのせいでフランは考える暇もなく否応無しにレミリアとそれこそ感動の再会をしたわけだが、やはりそう言われてもレミリアには

レ「分からないわ。フランの記憶を消す事とあの結界にどういう一体どういう関係があるの？」

霊「ああ、ごめんなさいね。さっきパチュリーが言ったフランの記憶を消したって言うのは全体のほんの一部分でしかないわ」

「ほんの一部分」

霊夢が言ったその一言がレミリアの目を大きく見開かせた。そして察しのいい魔理沙にもどうやら分かったらしい。

魔「まさかっ！ 霊夢！ あいつが消したのは」

人里と幻想郷の関係、その間にある特殊な結界、更に人里の、フランの記憶を消した事がほんの一部分だということ。

その要素を結びつけてでた結論が分かったものはどうやら魔理沙とレミリアだけらしい。レミリアと魔理沙が分かったような顔をしているのでフランは心配になったのだろう。分かってないのは自分だけではないのかと。

だからフランは咲夜を見上げる。が、咲夜も首をかしげ何が起こっているのかわからないといった表情だ。咲夜と同じようにフランも首をかしげて二人して首を傾げる様は何とても可愛らしいのだがどうやらそんな場合ではなかったらしい。

霊「慧音が消したのは、幻想郷があったという歴史」

そう言い放った霊夢の視線は器用に幻想郷の住人全員に向けられる。その霊夢の視線で喉に栓をされたように皆言葉が出ない。喉にあるその栓をどうにかして吐き出そうと、しかしそれが叶わず、悶えているようにも見える。

慧音が行った所業とは人里における幻想郷がそこにあったという歴史だった。

慧音はその打ち合わせと、幻想郷の管理者である霊夢の監視の元、

歴史を改変するために博麗神社にやって来ていたのだった。

慧音は人里に住んでいる。それは人が好きだから。

慧音は今回のような霊夢の提案に喜んで乗っただろう。人々を不安に陥れる幻想郷の存在は人間にとっても慧音にとっても疎ましいものだった。

その為、この霊夢達の申し出は慧音にとって願ってもない事だったに違いない。返事二つで了承したはずだ。

そして幻想郷があったという歴史を消すという事。それはつまり

霊「今、この時を持って、幻想郷を現世から隔離する」

霊夢が企てた事、それは幻想郷を現世から完全に消す、といった事だ。フランが人里に行ったという歴史だけではなく幻想郷そのものをなかった事にした。

霊「もちろん人里に必要な物を調達する場合はいつものように私に言ってくれば人里に通すわ。でもその場合幻想郷のことは一切喋っては駄目」

霊夢は徹底的に人里から幻想郷を隔離するつもりだ。

魔「ま、待てよっ！」

喉に詰まった栓を吐き出したのか、それとも全てを受け入れて飲み込んだのかは不明だがやっと言葉を発する魔理沙。しかしその第一声は声がかすれ、叫んでいるにもかかわらず小さな声。

魔「大体何でそんなことする必要がある！？今まで上手くやってたじゃないか！」

霊「今まではね。でも今回のような問題が起きた・・・それは今までが近すぎたから。人里と幻想郷、人と妖怪、互いを隔てるために創ったはずだったのに」

魔「でも上手くいったじゃないか！フランはこうして無事に戻って」

霊「それも今回は、でしょう」

魔「つ、次だって上手くいくさ！」

霊「いくかしら？」

魔理沙の口をついてでた言葉を霊夢が後を追うように言う。本当にそう思っているのか？と。

魔理沙の何の根拠もない言葉。しかし霊夢の言葉もまた根拠がない。上手くいくかもしれないし、いかないかも知れない。

だが失敗すればそれまでなのだ。

人間はすぐ不安になる臆病な動物。何も確証がないことには保険無しでは一步を踏み出せない。そして霊夢は人間で次が成功するという確証はない。

霊「次があったとしてその次は？次の次は？そんなのとても保障しきれないししたくもない。そもそも問題が起ること事態この幻想郷のシステムが破綻している事を明示しているわ」

魔「で、でもなあ・・・」

その場にいる者、恐らくほぼ全ての幻想郷の住人が人里と幻想郷を完全に隔離しても特に問題はないだろう。逆に人とのいさかいが

なくなるのだ。幻想郷の住人にとっても願ってもないことだろう。

だから皆その霊夢の意見に反対するものはいない。霊夢に申請すれば人里には入れるのだ。物資の調達にも困らないだろう。

しかし魔理沙が食いつくのはすぐ傍で今何が起こっているか未だよく分かっておらず、首を傾げすぎて一回転してしまいそうなフランの存在があったからだ。

フランは酒の席で魔理沙に楽しそうに人里で起こった話を話していたのだ。人里に遊びに行き、何をしようかと嬉々として話していた。今の状況が確定してしまった場合フランが不憫すぎる。

魔理沙は苦しそうにフランを見下ろす。フランも首を器用にかしげて魔理沙を見返してくる。

人間と妖怪、フランは上手くやっただから今後もまた上手くやっていけると思っているのだろう。明日にはまた人里へ行き、新之助の所へ向かい、数日間行われているであろう夏祭りにでも一緒に行こう、などと計画を立てていたことだろう。

この純粹無垢な少女にどう説明すればいいか魔理沙は分からなかった。

そして人里と幻想郷が隔離されると困る者がもう一人。

文「まあまあ、霊夢さんもそんな面倒くさがらずに、今回みたいに一緒に解決していけばいいじゃないですかあ、記事にもなるし」

文だった。人里にも自分の新聞をばら撒いている文にとって購読

者が少なくなるという事は給料が減る、という事だ。実際面白くはないだろう。

だから言ったのだろうが、霊夢の口から返ってきたのは気の重くなるような事。

霊「私はあなた達みたいに化け物じみた寿命はないのよ？」
文「あ・・・」

霊夢は無表情で静かに言い放つ。

霊夢と妖怪達の寿命は大きく違う。問題が起きるたびに霊夢がそれに関わり、一緒に解決する、というような事は不可能だ。

霊「だからこの案は私ができる最大限の解決策ととってくれるとありがたいわ」

これには文は黙るしかない。ショボンと肩を落とし諦めてうなだれている。

そしてついに純粹無垢な悪魔が口を開く。

フ「ねえねえ魔理沙っ、何がどうなったの？何で皆驚いてるの？」

皆一様に驚き、戸惑っている中、一人だけ首をかしげ今の状況が飲み込めていないフラン。フランには少し難しいのか、霊夢の言い回しがよく分からなかったのか。魔理沙のスカートをクイクイと引っ張って説明しろと促す。

魔「お前の記憶は全部消された」

フ「またまたあ、計画は成功したんだよ？騙されないんだからっ、わた飴とか林檎飴とかもそうだよ！私めっちゃめっちゃ恥ずかしかったんだからね！」

魔理沙の援護に安心しきったフランは後の説明を何もかも右から左へ聞き流していたらしい。

自分に関係のない事にフランは聞く耳を持たない。

首を傾げて咲夜を見たのも仲間はずれにされたからではない。ただ首を傾げる咲夜を面白がって真似をしていただけだった。その証拠にフランは魔理沙の援護から全く発言していない。

ただ暇そうに皆の驚いて動かない、単調な風景をぼけーっと眺めていたに違いない。

しかし周囲のよからぬ雰囲気からフランも徐々に気になり始めたらしい。本当に疑問を抱き、首をかしげ始めたところに魔理沙の全てを覆すそんな言葉。

フランは魔理沙によく騙されている。フランにも多少なりとも学習能力はあるのだ。耐性はつくというもの。しかしその耐性がここでは仇となる。

魔「お前の記憶だけじゃない、幻想郷の記憶も全部消えた」
フ「だからあゝ私はもう騙されないもんね」

魔理沙は堂々と表情を変えずに嘘をつけるポーカーフェイスの持ち主だ。それがトラブルメーカーと呼ばれる所以。

しかし素顔を隠すそれは耐性がないから。

ポーカーフェイスという仮面の裏にある素顔はあまりにも柔らかすぎたようだ。然るべくフランの魔理沙を信じないその態度に魔理沙の顔が徐々に歪んでいく。どう言えば信じてもらえるか、どんな言い回しをすればフランを傷つけずに真実を伝える事が出来るか。

恐らくそんな方法はない。傷つけたくなければ嘘を付く以外ないだろう。だが幻想郷のトラブルメーカーと歌われる魔理沙でさえ、表情一つ変えずにつける仮面は持ち合わせていなかった。それ以前に魔理沙の良心がそうさせないだろう。

それがトラブルメーカーを慕うものたちが唯一認めている者なのだ。魔理沙に嘘がつけるはずがなかった。

霊「魔理沙が言った事は本当よ」

フ「霊夢も魔理沙と組んでるの？言っておくけど私はそんなに馬鹿じゃないんだよ？」

そんな魔理沙を見かねた霊夢が助け舟を出すがフランは依然として信じようとはしない。

フ「ねっおねえ様っ」

あまつさえフランは徒党を組んで自分を騙そうとする二人に対抗するため、満面の笑みでレミリアを仲間に引き込もうとする。

しかし

レ「・・・」

レミリアから返ってきた言葉はフランの仲間になる事を快く承諾するものではない。それは拒否する事を示す沈黙でもなく、ただ入りたくても入ることが出来ないという苦しい沈黙。

フ「あはは・・・おねえ様も私を騙そうとしてるんだ？ひょっとしてドッキリなの？」

少しだけ笑って咲夜の方を見上げる。それは不自然な笑顔で。

口の両端は異様に釣りあがり、目は笑っておらず見開いただけ。

フ「ねえ咲夜・・・」

フランはゆっくりと咲夜の腰に手を回して前と同じく、甘えるように抱きついた。

フ「咲夜は私の味方・・・だよね」

咲「妹様・・・」

咲夜に抱きついたフランは顔を上げずにただ胸に顔をうずめている。

咲夜から目を背けているのは現実を直視したくないという心の表れ以外の何者でもない。しかしその咲夜に抱きついているのはかすかな希望にすがりたいから。

だが咲夜もまた魔理沙と同じジレンマに悩まされていた。

フ「さく・・・や？」

震えている。フ란の声が、体が、その振動が咲夜に伝わっている。

誰でもいい、せめてフ란の味方になる者が一人でもいればその震える声は元に戻るだろう。

霊「フ란」

だが

霊「消えたのよ」

そんな者は一人もいなかった。

フ「はは・・・あははは、参ったなあもう・・・」

霊夢の一言で咲夜に抱きついていたフ란の震えが止まる。そしてそっと咲夜の体から自分の体を突き離す。

それは酒でも飲んでいるかのようにフラリ、フラリと。月の光から紅の瞳を隠すように。

フ「ばれてるのにつ・・・何でそんな下手な演技するかなあ？」

フ란は左右に体を振りながらゆっくりと霊夢の方を向いた。そしてゆっくりと顔を上げる。

フ「何で」

その紅の瞳は炎の様にゆらゆらと歪み、その熱い視線で霊夢を睨みつけている。その視線は注がれば二度と動けなくなるような恐ろしい激葉が盛られている。しかし霊夢はその視線に目をそらすことはない。

真っ直ぐにフランを見つめ返している。

それは睨むでもなく、哀れんでいるでもなく、ただフランの熱い視線を冷まそうとしているかのような冷たく暖かい視線。

ホロリと、炎のように紅の瞳を揺らしていたそれが頬を伝い流れ落ちる。

その涙はさぞや熱い事だろう。

その熱い涙が意味する事は言うまでもない。

フ「何で」

とは、何故そんな嘘を付くかではなく何故そんな事をするのかと言う疑問。しかしその答えは先程霊夢が説明した通りだ。

だがそんな事フランには関係なかった。何故そんな事をする必要があるのかなど、今のフランにはもうどうでもよかった。

今フランに分かっている事は二つ。慧音が人里の自分の記憶を消したという事実。もう一つはそれが本当に真実か確かめなければいけないということだ。

フランは走り出した。熱い涙を軌跡にして。

霊「フラン!？」

皆の雰囲気から恐らく自分の記憶は消えているという事は分かる。しかしフランは信じたかった。もしかしたら、あるいは、ただ一人だけ、自分の事を覚えてくれているかも知れないと。

新之助なら、と。

霊「待ちなさい!!」

霊夢の静止をすり抜け、わずかな希望を胸にフランは走る。

縁台を駆けて本堂を抜け、何も入っていないであろう賽銭箱を靴下のまま飛び越えて走り抜ける。

フランは虹色の羽を奪われている。飛ぶことは出来ない。だから神社へのとても長い階段を転がるように駆けていく。

その後を霊夢が猛スピードで飛んで追いかける。

霊夢もフランの行き先は分かっている。そこで何をするかも。

だから今フランを止めなければならない。今回の計画もその計画のために作った結果も全て破壊されてしまう。

魔「フラン!」

霊夢が追った後を魔理沙が追おうとすぐそこに立てかけていた箒

を握り締める。そしてそこにいた皆がフランを追おうと一歩足を踏み出そうとした時、待ったがかかった。

紫「待ちなさい」

待ったをかけた人物は意外にも今まで無表情で傍観を決め込んでいた八雲紫だった。

第三十七章　く歴史・解編く（後書き）

人里まで疾走するフランとそれを追いかける幻想郷の管理者。そしてその他の者に待ったをかける八雲紫ですが次回は霊夢がそうした背景とフランと霊夢の微妙な関係を書いていこうと思います。恐らく次回で一旦落ち着いてからエンディングへ向かおうと思います。たぶん・・・

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ではく

第三十八章　く幻想郷の起源く（前書き）

どうもこんばんは。今回は幻想郷の起源を紫が話してくれます。という事でフランは今回出てきませんがその背景を背に次回のフランと霊夢のやり取りを書いていこうと思います。

注意…幻想郷の起源とたいそうな事を書いています但W i k iに載っている事意外は全て私の妄想設定なので細かいことは気にしないように…。

第三十八章　　幻想郷の起源

「まちなさい」

その一言を壁にしてフランを追おうと駆け出した者を止めたのは八雲紫だった。しかし今はフランが結界を壊しに奔走している。早く止めなければとんでもない事になってしまう。

しかも皆を止めているのは紫一人。一人ならば横をすり抜け簡単に通過できるはず、という考えの者は一人もない。それもそのはず、この八雲紫という妖怪は境界を操る程度の能力を持つ。あらゆる空間に隙間を空けて移動する事ができる妖怪だ。

そんな妖怪に待ったをかけられては強行突破など無理というものだ。すぐに空間に穴を開けられ戻されてしまうことだろう。

咲夜ならば時を止めて素通りできるだろうがレミリアの腕で静止されている。

更に紫は大妖怪の肩書きを持つ。隙間という壁以外にもその壁も立ちはだかっているのだ。

それを悟ってか皆足を止めざるをえない。

魔「なんだよ紫！フランが行っちゃうぜ?!」

紫「ここは幻想郷の管理者である霊夢に任せてもらえないかしら」

あせる魔理沙達に紫はゆっくりと言い聞かせるように言う。

しかし早くしないとフランが幻想郷を包む結界が破壊されてしま
う、というのに何故そんなに悠長にしていられるのか。紫は幻想郷
がどうなってもいいのだろうか。と魔理沙は考えない。

なぜなら紫は幻想郷の創設者と深い関わりがあり、紫自身もまた
その幻想郷創設の際の中心人物だからだ。幻想郷を愛しておりそれ
を危険に脅かそうとする者には冷酷な態度で接し排除する。

その紫が自ら幻想郷を危険に晒すフランを止めようとせず、霊夢
に任せようとするのは一体何故。何か意図があるのだろうか魔理沙
はその紫の意図が分からず眉をしかめて睨みつける。しかし紫にそ
の先を促すために口には蓋をして。

皆が留まり、無駄な力を使わなくてすんだ事へ紫はゆっくり瞬き
をして少し首を傾けお礼言うと、口を開く。

紫「あなた達、今まで不思議に思った事はないかしら？この幻想郷
の管理者が何故人間なのか」
魔「は？」

幻想郷の管理者とは霊夢の事。幻想郷の異変や今回のような計画
のごたごたした厄介事を解決する者。そして幻想郷と人里の境界で
ある結界の管理も任されている。そのどこが不思議なのか、魔理
沙だけでなく皆分らないといった表情で紫を見る。

「確かに」

と、話し出したのは紫と同じか、それ以上の膨大な時を生きてい

たであろう永琳だった。

永「代が変わる度にいちいち面倒な引継ぎや修行しないといけない。それなら妖怪にずっと任せればいい」

そう、人間が好きな妖怪は大勢いる。今日来た慧音にしてもそう。紫もいる。幻想郷を探せばいくらでも見つかりそうではある。

魔「成程、何でなんだ？ つつても教えてくれないんだろ？」

紫は普段あまり発現することはない。しかも大事な所だけばかすか黙して話さず、その先を問えば自分で考えろという沈黙で迎え撃ってくる。自分で考え、行動する事は大切だ。だが紫に限ってはそれが少なすぎて伝わらない事が多いのだ。

しかし

紫「戒め」

と一言。

魔理沙は紫が発言した事とその言葉の意味が分からず驚きと困惑を不器用に交互に顔に出している。恐らく永琳でも分かっているだろう。

紫「これは初代博麗の巫女の考えで私の考えではない、とだけ言うておくわ」

と、もったいぶって前口上を置く紫に魔理沙は「いいからいえよ」と一言。

紫「人間と妖怪が近すぎると必ず争いが起こるわ。だから初代の巫女は幻想郷を創った。妖怪を人間界から隔離し争いが起きないように」

皆普段発言しない紫が滑るように言葉を吐き出していくとあって真剣に聞き入っている。紫はどこを見るでもなく隙間で出来た境界にもたれて楽な姿勢で喋っている。

紫「更に管理者である者も人間にしたのはさっき言ったように戒めよ。人間と交わる事で距離が近くなり、知り合いになりやがて親しい関係になる。互いに必要とし離れる事が出来ない関係になる。そして最後に来るのは別れ。それは必ず人間だけがなくなるという一方的な別れ。それはほぼ、永久に変わらないでしょう。だから妖怪もその別れが悲しくなり、人と交わる事を避けるようになった」

そして、紫の無表情な視線がレミリアへ。

紫「もしも妖怪が管理者になれば人に興味を持った妖怪が人里へ出たいという願望を抱くでしょう。お預けされた子供のように、それに興味を惹かれるように。そして摩擦が起き、争いが起こる」

人と接する事の厳しさと悲しさ、そして難しさを教えるために幻想郷の巫女は代々人間が行ってきたということが紫の言う「戒め」なのだろう。

魔「ふーん、初代巫女は上手くやったもんだな」

色々計算しつくされているその紫の説明に魔理沙は素直によく出来ていると感嘆の表情を見せる。

紫「でも初めて争いが起きそうになった事があった。その代の巫女は今まで人間と妖怪を隔ててきたこの幻想郷のシステムにずっと疑問を持っていた」

魔「ふんっ、粋な巫女もいるもんだ」

初代の教えに背き人間と妖怪の調和を望む巫女とは魔理沙にとって「粋」らしい。トラブルメーカーである魔理沙のお墨付きをもらってもその巫女は嬉しくないだろうが。

その魔理沙の言い草に紫は短く鼻で笑う。それは不思議なことに嘲笑ではなく紫には珍しい、暖かく、そして自分もその意見に賛成だと言う楽しそうな笑いだった。そして紫はどこか昔を思い出すように目を細めて俯き、軽く笑みを浮かべて言葉をつむぐ。

紫「その巫女は稀に見る非凡な才能を持った巫女だった。だから修行もろくにしないんだけど、一丁前に師匠である先代巫女と私に意見してきたの」

魔「へえ、なんて？」

紫「妖怪と人間、どうして仲良く出来ないの？って。それはまだまだ子供だったからか、妖怪である私とその先代巫女が親しくしてたからか」

と紫はまたレミリアに視線を向ける。今度はいつものように胡散臭そうな笑みを浮かべて。それでレミリアは俯いてしまうのだが、そうなのでも紫の表情はにやにやとして止みはしない。

紫「だから人間と妖怪が仲良くできるとでも思ったんでしょうね」

魔「って、お前の思い出なんてどうでもいい。私はフランを追いたいんだがな？」

もはや紫の昔話だ。そんな事を聞くために大人しくここで足止めされてやっているのではない、と魔理沙は軽く苛立ちを見せる。

紫「フラン・・・ドール・・・スカーレット、そしてレミリア・スカーレット。昔を思い出すわねえ」

レ「そう・・・ね」

魔「ん？」

レ「あの子も人間と吸血鬼、仲良く出来たらって思っていた」

それは昔、戦争が起こる前の城でダリスと共に思っていたフランの願い。

魔「ま、まさかあ、人をぐちゃぐちゃにしてたやつだぜ？」

だがその願いは崩れ、逆にフランは大勢の人間を殺してしまう。そのせいで情緒不安定になり、地下室に閉じ込められても尚あばれていた。流石の魔理沙もそのフランを見ているだけに少し想像できない。

紫はそれも全て見ていたらしい。

レ「あの子とよく遊んでいる人間であるあなたが酷い言い草ね」

魔「・・・悪かったんだぜ」

レミリアは魔理沙を見ずにそんな事を言う。レミリアは澄まし顔で、すこし茶化したつもりだったのだろうか魔理沙は平謝りしてしまう。魔理沙はその辺りの空気は読める。だからレミリアも魔理沙を睨まず茶化すように言ったのだろが。

と、ここで紫がさらりと普通に聞いていたら聞き逃してしまいそうな声でポツリと驚くべき発言を呟いた。

紫「まさか霊夢も妖怪と仲良くできたら、なんて考えるなんてね」

魔「・・・は!？」

レ「え!？」

急な紫の告白に魔理沙とレミリアは素で驚いてしまう。

紫「霊夢は今まで幻想郷に入ることが出来なかった妖怪を人里に入れるようにした。もちろん自分が選定した妖怪だけだけど。しかも今まで目で見えないほど奥にあった幻想郷もあなた達が弾幕ごっこをしているところを肉眼で確認できる所にまで範囲を広げた。これも全部霊夢がやったのよ。それにあなた達がやっているその弾幕ごっこやスペルカードなんていうのも・・・ふふ、よくやるわよね」

弾幕ごっこは妖怪の争いにスポーツ性を持たせた遊びにした物だ。

それはその妖怪と何度でも楽しみながら遊ぶ事ができるように、どちらかが死ぬまでの争いを避ける為、という名目だが裏では人間である霊夢と妖怪の差を縮めるものでもあったのかもしれない。現にレミリアの紅魔館の住民、四季や永琳達ともこのフ란の計画を実行できるほどに関係を深めていた。

紫「今でも言いつけを守って妖怪と自ら進んで関わろうとはしていない・・・風を装ってはいるけど、本当のところはどうなのかしらね。私もよくは分からないわ」

魔・レ「・・・」

普段は飄々としていて妖怪と関わりたがらないがそれは嫌いだから

らではないだろう。フランを退治しろと言われた時、拒否の意を示したり、レミリアに相談したりしているのだから。

かといってそんな霊夢が人間と妖怪の調和を望んでいたなど、少し考えられないのだが。

そんな考えが皆の頭に注ぎ込まれ今までの霊夢と照らし合わせ水と油のように跳ねたり散ったりしている頃合にまた紫が口を開く。今度は夜空に光る満月を眺めて楽しみながら。

紫「初代巫女はここに幻想郷があることをおおっぴらに公表したわ。全世界に響き渡る程に・・・その理由は2つ。人間への警告と各地に散らばっている妖怪の収集。近くに來た妖怪を私の能力でここに連れてくる。全く・・・骨が折れたわよ」

魔「全世界に発信したら幻想郷があるってばれるだろう？」

全世界に公表などしたら人間と妖怪を隔てるために創った幻想郷の筈なのに興味を持った人間がやってきてしまうかもしれない。それはまた人間と妖怪との摩擦を起こし、戦争が起きる。

それは博麗の巫女の意図するところではない筈だ。それに紫は笑みを浮かべながらため息をついて「そうね」と「でも」を少し間を空けて言った。その空白の間に何か色々な面倒ごとが起こったことは言うまでもないだろう。

紫「気が遠くなるような昔の話よ。公表したのは初代だけだし、時が経てば人間は徐々に忘れていくでしょう。でも妖怪は死なない限りずっと覚えている。これは初代が企画した長いスパンの計画だった。今じゃさっき歴史を消した人里くらいしか覚えてないでしょう。それに今後は、何らかの書物を辿ってこの人里にまで來たとし

ても、近くの人間が知らないとなれば諦めて帰るでしょう？そしてそれが妖怪だったら神隠し。何て上手いシステムなのかしらね」

魔「まさかそれも」

紫「そうよ、霊夢が考えたの。この代で、霊夢の代で幻想郷と人里の関わりは無くなるわ」

紫に改めてそういわれると何だか少し寂しい、と幻想郷に住むものとは思わないだろう。今までどおり何か入用の場合、霊夢に言えば入れてもらえるのだ。更に人里と深いかかわりを持つ者などフランクらしいしかない。

慧音もそのまま寺子屋を続けられるだろう。慧音は人里が好きだ。だから自分から人里を危険にあわすような真似はするはずがない。

逆に幻想郷の住人にとってマジックミラーの結界の中で伸び伸び出来るので願ってもいない事だろう。

夢「私、少し霊夢さんを誤解してました」

紫が全て言い終えると妖夢がポツリとそんな事を言う。

魔「傍から見たら修行サボってやりたい放題のアホ巫女だもんなあ」

そしてそれに賛同するように魔理沙もそんな言葉を吐き捨てる。酷い言われようだが、それは皆から親しまれている証拠でもある。なんだかんだ言いつつ皆霊夢には一定の信頼を置いているのだろう。

紫「まあ、ああいう性格だから。こんな事私が喋ったなんていわないでね？」

と、一応念の為トラブルメーカーである魔理沙に釘を刺しておく。

魔「ああ、でも霊夢がそこまで考えていたとはなあ・・・」

紫「今回の事で身に染みただんしょう」

今回とはフ란の事。しかし途中までは上手くいっていた。このままフ란が何事もなく計画が終了すれば人里との距離は近づいたに違いない。

が、起きる事が起きてしまった。あの騒動が表ざたになれば人里の住人は妖怪を怖がり溝を深める事になるだろう。ならばその溝を埋め、更にその上に壁を築き、完全に隔てれば済む事。

然るべく、こうなる事も予想していた霊夢は幻想郷の歴史を消し、隔離した。自分の考えの甘さと歴代の巫女の考えが正しかったのだと改めて思い知らされたから。

紫「とまあ、そういうわけで霊夢は歴代の巫女の意味を継いで自分の指名を果たそうとしている。私としてもそれは嬉しい限りだわ。だからここは霊夢に任せてくれないかしら、と言うのが私があなた達に待ったをかけた理由よ」

魔「まっ、隔離されたところで私は別に関係ないし、この幻想郷のためって言うのならここで待っててやるよ」

レ「そうね、霊夢が決めた事なら私は意見しないわ」

永「まあ霊夢さんならフ란さんを止められるでしょう」

文「これはいい情報を聞きました」

魔「紫に殺されるぞ」

音「八雲紫、あなたの歴史も一度聞いてみたいな」

夢「あれ、幽々子様寝てる・・・」

妖夢がため息をつきながら毛布を幽々子に掛けに行く。それを目で追った小町が途中にいた鏡を覗き込んでいる四季に視線を止める。

町「あれ、四季様何見てるんですか？」

山「フランドールと霊夢の動向だ」

四季はずっとフランと霊夢を監視していたらしい。幻想郷の起源など四季も知っているのだろう。だからそんな話そっちのけで鏡を見ていたらしい。その鏡は全てを見通せる鏡でフランと霊夢の姿が映し出されている。

紫「いい趣味を御持ちで」

と言う紫の皮肉に四季はふんつと鼻を鳴らして「お前も把握しているのだろうか？」と一言。それに紫は「もちろん」と一言。

魔「お前ら趣味悪いな・・・」

紫「あら、あなたは見ないの？」

魔「見るに決まってるぜ」

と魔理沙の一言を合図にでがやがやと紫が開けた隙間に皆集まってきた。

第三十八章　く幻想郷の起源く（後書き）

今回は霊夢とフランの動向と魔理沙と紫のちよつとした話を挟みつつですね。

霊夢とフランの会話がまだきっちり定まっていなかったので遅くなるかもですが・・・

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ではくまたく

第三十九章　　最後の宴会芸　（前書き）

どうもこんにちは。今回は霊夢がフランを追いかけるところからです。そして満月の夜に行われていた宴会も終了し、と言う感じですが。今回は会話が多いのですらすら読めるのではないでしょうか。

ではどうぞ

第三十九章　　最後の宴会芸

霊夢は結界を破って人里に行こうとするフランを飛んで追いかけていた。フランは羽がないから飛べず、博麗神社に続く階段を風のように駆け下りている。

霊「フラン！馬鹿な真似はやめなさい！」

フ「馬鹿は霊夢だよ！何で新之助の記憶を消すのよ！」

霊夢が空から待ったをかけるがフランは止まる気配がない。それどころか霊夢の方を振り向きもせずフランは猛然と階段を駆け下りていく。

霊「あんただけじゃない！幻想郷全ての記憶を消したのよ！これ以上争いが起きないために！」

フ「霊夢が人里に行けって言ったんじゃない！だから行ったのに！何でそんな事するのよ！」

霊「それは関係ないでしょ？！あんたが外で暴れた時からそうなる予定だった！」

フ「私はおねえ様が外で遊べって言ったから外で遊んだだけ！私は何も悪くない！！」

霊「何でもかんでも人のせいにするんじゃないわよ！」

フ「するよ！外で遊んだら罰ゲーム！罰ゲームしたらまた罰ゲーム？！ふざけないでよ！」

霊「遅かれ早かれこういうことは起こったのよ！それがあんただってだけ！別にあんただけを攻めるつもりもないし罰も与えるつもりはなかった！」

それはつまりフランが貧乏クジをひいてしまったということだ。

他の妖怪がフランのような行いをすれば同じような事になっていたに違いない。だからフランは余計に理不尽に思ったのだろう。だから振り向いて霊夢をキッと睨みつける。

フ「そんなの！」

と、フランが霊夢に何かを言い返そうとした時、フランの足が階段から踏み外されることになる。

フ「きゃあああああああああ！」

フランは悲鳴を上げて面白いように階段をゴロゴロゴロと転がり落ちていつてしまった。

霊「本当に待ってええええええ！」

霊「つかまえた」

ゴロゴロ転がるフランを途中で抱きとめて階段に座らせる。そして霊夢は後ろからフランを抱きしめている。しかしこれはフランを安心させようとかではなくただ拘束するために。

フ「うゝ・・・」

どうやらフランは目を回しているようだ。博麗神社に続く階段は急だ。そこを走るような勢いでゴロゴロと転がっていたのだ。無理

もないだろう。

霊「全く・・・世話が焼けるわ・・・」

フ「は、放してよ馬鹿ぁ」

霊「フラン、まだ言ってるの？いい加減にしなさいっ」

フ「放してって言うてるでしょ！」

目が回るフランは体に回された霊夢の手を力ずくで引き離す事しかできなかった。だがフランは吸血鬼で霊夢は霊力以外は普通の人間でありただの少女だった。

霊「いつっ」

フ「あっ・・・」

そのフランが力いっぱい霊夢の手を掴んだものだから霊夢はたまったものではない。小さな悲鳴を上げて霊夢はうなってしまう。今は暗くてよく見えないだろうが恐らく霊夢の腕にはあざが出来ているに違いない。

そして普段落ち着いた物腰で無愛想な霊夢がそんな悲鳴を上げた事が意外だったのか、フランは目を丸くして霊夢の腕を見つめる。

他に人間といえは咲夜や魔理沙がいるが二人ともフランの攻撃などあたらなない。レミリアはすぐ元に戻ってしまうし美鈴は少し強く握られたくらいでそんな悲鳴など上げたりはしない。

本当にそれが以外だったのだろう。目を丸くしたままフランは動かない。いや、動けないでいた。そして少し前にそんな悲鳴を上げたものがもう一人いた。それは

霊「フランっ」

と霊夢が名前を呼ぶとそれにはじかれた様にフランがビクつき反射的に「ごめんなさいっ」と口に出てしまう。

そしてまたそれが意外だったのか、霊夢も意外そうな顔をする。そして辛うじて繋がっているフランを拘束していた手を握りなおす。

霊「私はあんたを守りたい」

だが霊夢の口から出た言葉はしかりつけるそれではなく強くフランに訴えかけるようなそれ。

フランがもし結界を壊して人里などに行けば今度こそ危険な妖怪として天界に連行されてしまうだろう。

しかしそれはフランがその時まで生きていたら、だが。というのも幻想郷の維持に命をかけていると言っているほど愛情を注いでいる人物、八雲紫の影があるからだ。その異常なまでの幻想郷への愛着にフランがもし結界を壊そうものならば残酷にこの小さな吸血鬼を殺そうとするだろう。

どちらにせよ、フランの身が危険なのは変わらない。

そしてその霊夢の言葉が呪文になったように、フランの体から力が抜けていく。まるで叱られてしゅんとしている子猫のように背中を丸めてうなだれている。

それは霊夢がフランに意地悪をしようというのではないということが分かったから、更には霊夢が新之助と同じ言葉を吐いたからだ。

前に新之助が小島酒蔵に乗り込みフランを抱きしめた時の事を思い出したのだろう。だが霊夢にはそんなこと知る由も無いが。

霊「あら、ずいぶんすんなりと大人しくなったわね」

だから霊夢はやはり意外そうな顔でフランに語りかける。

フ「やっぱり・・・」

霊「ん？」

フ「やっぱりこんなの・・・理不尽だよ」

霊「そうね・・・あなたがこんなに人と仲良くなるとは思わなかったから」

フ「私、ずっと地下室にいた」

霊「ん？」

フ「おねえ様が外に出ろって言うから外に出て皆と遊ぶようになった。楽しかったよ？言いつけも守ったつもり。でもそれで何で人里なんかに連れてくのかって理不尽に思った。でも人里も楽しいところだって分かった。新之助と出会えて楽しかったし・・・すごく・・・でも・・・それも霊夢はまた私から奪うって言うのっ？」

霊「そうね。あの時あんたを人里になんか連れて行かなければよかったと後悔してるわ」

その霊夢の言葉には後悔と疲労が入り混じったような声だった。

フ「ええええ！？何で！？」

霊「そりゃそうでしょ。あの時点で人の幻想郷があるという記憶を消しておいたら万事まるく収まったのに。あんただって新之助さんに会いたいなんて思わなかった」

フ「じゃあ何で私を人里に連れて行ったのよ？！」

それはフランに教育させるため。それもあつただろうが霊夢にはもうひとつ思うところがあつたのだ。それは妖怪と人間との距離が少しでも近づければと思つたからだ。それは昔フランが思つていた事であり、霊夢もまたそう思つていたのだ。

だがその思惑はフランが暴れた事によつて崩壊しあまつさえフランが天界に連れて行かれそうになつた。それは自分の監視が甘かつたから、自分の理想はやはり理想でしかなかったと思ひ知らされた瞬間だつただろう。

霊「さあねえ」

フ「さあねえって私に常識を学ばせるためでしょ!？」

フランの問いに茶を濁す霊夢。

霊「どうだつたかしらねえ」

フ「何それ」

霊「ただ」

フ「？」

霊「あんたなら、何かしでかしてくれると思つたのかもしれないわね」

フ「え？」

それはフランの能力で現状をぶち壊せれば、などと考えていたのだろうか。

霊「何となく・・・ね」

霊夢はそう言つて抱えているフランの帽子にボフンと顔をうずめ

る。

フ「霊夢？」

フランは目だけを上に向けて霊夢を見ようとするが自分の頭を見ることが出来はしない。

フ「泣いてるの？」

霊「泣いてないわ」

フ「・・・掴んでゴメンナサイ」

霊「あなたも普通に謝る事が出来るようになったのね」

フ「と、当然だもん！」

霊「そう・・・ごめんなさいね・・・」

そのごめんなさいはどの言葉に対してか。フランは自分が低く見られていた事に対してだと思っている事だろうが。

フ「・・・そんなに痛かった？」

そんなフランの質問に霊夢は鼻で笑う。

霊「ええ、ものすごく痛かったわ。治療費請求するから覚悟しなさい」

フ「うん・・・」

すると、霊夢とフランの周りに丸い光がフヨフヨと漂ってきた。それはエメラルド色の光で蛍のようだが少し粒が大きい。それは慧音が放ったような強烈な光ではなく、優しくぼやける様な光。少し光ると消えてまた点灯する。

フ「何これ・・・？」

隙間サイド

リ「皆さん遅くなりました。これがボクの宴会芸です」

隙間を覗き込んでいる皆の後ろからリグルの声が。いつからいたのか、リグルがいた。

魔「リグル！？ってことはあの光はおまえの蛍か」

リ「はい、もう夏も終わりだったので集めるの大変でしたけど」

魔「へえ、よくあれだけ集められたな」

霊夢とフランを囲む蛍はまるでドームのように丸くなっている。そして暗い空が見えないくらいに密度が高い。相当量の蛍がいるはずだ

リ「それがあまり集められなくて。だから大ちゃんに蛍を半分妖精化してもらって」

大「がんばりました！」

魔「お前らぐっじょぶだぜ」

人はものすごく綺麗な物を見ると心洗われ、心に付いた傷も洗われるのかもしれない。

それは妖怪も例外ではないだろう。現にフランの赤い瞳はエメラルド色に染め上げられている。そして霊夢もまたフランと同じこと

を考えているに違いない。

そう、それはまさに幻想の郷である幻想郷でしか見ることの出来ない幻想的な光景だった。

文「あのう・・・」

そんな時、文が体をもじもじうずうずさせて皆に呼びかける。

魔「どうした文？」

文「現地に行って取材したいのですが！」

とはあのドームのようになっていた蛍の光の集まりを、だろう。

魔「全く、空気の読めないヤツだな」

文「でもでも！あんな光景、もう二度と拝めないかも知れませんよ！？」

魔理沙が紫の方を見ると紫は目を瞑って扇子で顔を隠してしまう。
全く何を考えているかわからない。

レ「いいんじゃないかしら？もう頃合でしょう。私たちも帰るわよ。
フランを連れて」

咲「はい」

メ「帰りますか」

パ「そうね」

紅魔組みはそろって階段の方へ歩き始める。

文「じゃあ取材オッケーと言う事で！」

とうっ！、と勢いよくジャンプした文は階段の方ではなく隙間の中にダイブしていった。

魔「そこから行くのかよ！」

すると永琳も

永「さて、優曇華帰るわよ。隣町へ」

う「隣町？」

永「それが私達の明日からの住む場所よ」

とは人里に行った時のごまかしの説明だろう。永琳のような医療に長けた者の存在は大きい。だからまたしばらくは行く事になるだろう。

う「ああ・・・でもこの耳じゃないですよね」

あはは、と笑いながらそんな事を言う優曇華に永琳は変な事を提案する。

永「ふふ、耳があるならバーニーガールの姿で行けばいいじゃない」
う「お、お断りします！」

永琳はふふっと笑うと縁台からがって何やらごそごそし始める。

う「師匠？何してるんですか？」

永「忘れ物よ」

う「忘れ物？」

妖夢も幽々子を連れて紫の空けた隙間を使って西行寺に帰っていた。四季映姫や小町、慧音も一言言って引き上げていった。チルノに関しては霊夢の説明が子守唄になったらしく、大妖精とリグルに連れられて帰っていった。

最後に残ったのは魔理沙と紫。

紫「じゃあ私も」

と隙間を空けて帰ろうとする、が、そこに魔理沙が待ったをかけた。

魔「一つ言いか？」

と、紫に話しかけて。

紫「なに？」

魔「お前は代々博麗の巫女と仲良くなってたんだよね？」

紫「ええ」

魔「寂しくなかったのか？その・・・別れとか」

紫「ふふ、何を言うのかと思えばそんな事？」

魔「答えろよ」

紫「・・・そりゃあ寂しかったわよ」

魔「その時お前は」

泣いたのか？と魔理沙は聴きたかった。紫はもう何回そんな別れを繰り返してきたのかわからない。博麗の巫女を代々人間にしたのも別れが悲しくなるからだ。それなのに紫は平気だったのかと。

しかし魔理沙は泣いたのか？とは聞けなかった。それは紫に遠慮したからではない。扇子で口元を隠しつつも、目がニヤニヤと笑っているからだ。

「泣いたか？」などと聞けば魔理沙は何も言い返すことが出来ないくらいに攻めに攻められてしまう事だろう。自分がそんなメルヘンチックな振る舞いをするとは勘違いしている魔理沙は何て可愛いのだろうと。

生憎、紫はそんなに女の子らしい心の持ち主ではないだろう。ただ本当に死に別れる際、涙を流したか流さなかったかは定かではないが恐らく紫は本当の事は言いはしない。

魔「・・・嫌気がささなかったのか？」

だから魔理沙はそういう変えることにした。

紫は先程まで期待で目を細め、今か今かと待ちわびていたのだろうが魔理沙がそう言った瞬間、細めた目が残念でよりいっそう細められたそれになる。そして魔理沙の機転の速さへの賞賛と、自らをあざ笑うかのように自嘲の色を混ぜ込んで鼻で笑う。

紫「ふふっ・・・そうね。別れは辛いわ・・・嫌気も差した」

魔「そう・・・か・・・」

恐らく紫は何度も何度も博麗の巫女の最後を看取ってきたのだろう。紫の声がどことなく悲しげな声に変わっていた。

紫の話では気が遠くなるような昔。その間、何人、何十、何百人

と巫女との別れを経験してきた筈だ。そしてそんなこと慣れる事ができるようなものではないだろう。

魔理沙は何も言えずに俯くしかなかった。そしてそんな事を聞いた自分に後悔した。恐らく今の霊夢と紫の様な関係だった筈だ。全てが全てとは言わないが大半は親しい仲に違いない。それが悲しくないわけが無かったのだ。

魔理沙はほんの少し思ってしまったのだ。紫は、紫ならばそんな事、全然平気なのではないかと。

だが違った。紫もまた常識の人格を持ったものだった。

そんな後悔を魔理沙がしている時、不意に紫が「だから」と呟いた。

魔理沙が顔を上げて紫を見ると、胸に閉じた扇子を持った手を当て、もう片方の腕は月を掴まんと天高く掲げられていた。

紫「こんな辛い思いするくらいなら、あなたと出会わなければよかった・・・」

そして芝居でもしているかのように両手で何かを抱きしめるように胸に手を当て静かに目を瞑る。

そんな光景を呆然と拝む魔理沙。その魔理沙に紫が閉じた目を片方開けて。

紫「なんちゃって」

と一言。そして魔理沙に向き直り意地悪な笑顔。

どうやら魔理沙はまんまと罠に嵌ってしまっていたらしい。魔理沙が発言を変えた時から紫のプランも変わっていたようだ。

魔「ちっ・・・やれやれだぜ」

魔理沙は呆れてものが言えないとばかりにそう吐き捨てる。その顔には胸中晴れない色と疲労感が漂っている。

紫はまたふふっ、と扇子で口元を隠しながら軽く笑って謝り、空を仰ぐ。

紫「でも案外楽しかったわよ」

魔「あーそうですかっ」

魔理沙はもう振り回されるのはごめんだと気のない返事で紫の嘘か本当か分からない満面の笑みで言うそんな言葉を軽く受け流す。

だが紫は次の瞬間信じられない事を言い始めた。

紫「巫女が死んではまた次の巫女」

魔「ん？」

紫「それが死んだらまた次の巫女、博麗の巫女をペットのようにかえひっかえ」

魔「おいおい」

いきなり何を言い出すのかと、狂った者を見るような目で魔理沙は紫を見る。

紫「それが楽しいなんてどうかしている、とあなたは思うかしら？」

だがこれはただの質問だった。あんな言い回しをしたのもまた、紫の掌ダンス講座だったらしい。魔理沙は降参の意を示すように掌を天に向けて肩をすくめる。

魔「そんな事思わねえよ」

そして正直な気持ちを紫に伝える。

紫「あら、そう？」

紫は意外そうに魔理沙を見つめる。博麗の巫女をペットのようになど、そんな非道德的な言葉。人間ならば見逃せるものではない。

だが魔理沙は違ったようだ。

魔「出会いがあれば別れがあるんだ。永遠なんて人間と妖怪が交わる限り絶対ないしな。だからそれが人間と妖怪の正しい交わり方なんじゃないかねえ、と私は思ったよ」

紫「・・・」

魔「それにその巫女も楽しかったはずだぜ？しかも自分はその後の、別れた後の悲しさなんて知ったこっちゃないんだぜ？幸せすぎるだろ？それが何千回も繰り返すんだ。それに比べりゃあ、お前のそんな言葉は戯言に過ぎないぜ」

その時、紫が魔理沙に背を向けたのは恐らく偶然ではないだろう。

紫「・・・馬鹿ね、楽しかった、幸せだった、そんなこと分かるわけないでしょ？」

それは紫がそんな魔理沙の意外な反応に、自分のプライドが傷ついてしまう顔をしてしまったからだろう。

その紫の態度に魔理沙は顔をにやつかせ先程にもまして意気揚々と語りかける。

魔「分かるさつ、人は自分を嫌いな奴を好きにはならない。その逆もまた然りだ。お前は楽しかったんだろ？」

紫は少し沈黙した後くると魔理沙のほうに向き直る。扇子で顔を隠さずに、ほてった顔を冷ますように仰いで。

紫「そうね、なら、あなたにも期待していいのかしら？」

とは自分を死に別れの悲しさ以上に楽しませてくれるのか、と言う事だろう。

それを魔理沙は喉で笑い飛ばす。

魔「はっ、お断りだぜっ残念ながら私は人の期待を裏切る事を快楽に感じる性質でね」

紫「あらそう、残念」

魔理沙は箒にまたがりながらそんな言葉を吐く。そして紫もそれを見ながら笑っている。

魔「だから迷惑ならかけてやってもいいぜ」

紫「それはごめんこうむるわね」

魔「でもお前にとっては願っても無い事だろ？」

という言葉には流石の紫も首を傾げてしまう。魔理沙の言おうとしている意味がわからない。

魔「迷惑をかければ別れは悲しく無い筈だぜ？」

楽しさが大きい程別れの悲しさは比例して大きくなる。つまりその逆もまた然り。

紫「ふふっ、それであなたは何がしたいの？」

魔「お前に迷惑を掛けて掛けて掛けまくってやるのさ。そしてああ、やっつと鬱陶しいヤツがいなくなったわ、なんて言って喜ばせてやるぜ」

紫「期待しておくわ」

その期待は皮肉色に染まったもの。

魔「それなら任せろ、だぜ」

そして魔理沙はそんな色で染まった期待が大好きだった。期待を裏切る魔理沙には大好物だろう。

そんな迷惑をかけられる紫はたまったものではないがその月の光に照らされた表情には心底楽しそうな笑顔以外何も写っていなかった。

第三十九章　　（最後の宴会芸）（後書き）

最後の魔理沙の言葉は何回も別れを経験してきた紫にとって救いになったに違いないでしょう。

そして次回ですが今回の魔理沙の言葉で幻想郷が大きく揺れ動いていく事になります。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

では～

第四十章　く魔理沙の約束く（前書き）

どうもこんにちは。少し間が空いてしまいましたが更新です。

今回は博麗神社であった出来事の次の日からです。

魔理沙がフランを人里にけしかける場面ですね。

ではどうぞく

第四十章　　魔理沙の約束

幻想郷を世間から隔離した歴史的な事が起こった次の日、昼間だと言うのに薄暗い、紅魔館の地下室ではフランが帰ってきた祝いとして、魔理沙がフランと本気の弾幕ごっこに付き合ってたっていた。

しかし一ヶ月間人里に言っていたフランはブランクがある。さらにブランクがあるからと手加減するほど魔理沙は甘くはない。よってフランはあっさりと魔理沙にやられていた。

フ「はあはあ・・・」

然るべく、魔理沙の弾幕に叩き落され、帽子も吹き飛び、服もぼろぼろになったフランは大の字になって地下室の天井を見上げていた。

今は夏の終わり、秋の初め。だがまだまだ気温は高い。それに対し石造りの地下室の床はひんやりと冷たい。火照った体をクールダウンするのに丁度いいはずだ。

フランはそれもあったか、すぐに立ち上がらずに全身を床に押し付けたままだ。

魔「まだまだ甘いぜ」

憎まれ口を叩きながら、箒の上に座った魔理沙がひらりと舞う葉のように、仰向けに倒れているフランの周りを半分回って舞い降りた。そんな魔理沙の憎まれ口に返す余裕もないらしい。フランはまだ息を上げている。

魔「よっと」

魔理沙は仕方なく鼻で笑ってフランに歩み寄ると、すぐ横でころんと仰向けに寝転がった。手を枕代わりに頭の下へ、足は組んでリラックスしている。フランと同じく、床の冷たさを堪能しているかのように目を細め、やがて瞼を閉じる。

フ「はあはあ・・・なによ・・・横に・・・なつて・・・」

それに気付いたフランが息きれぎれになりながら、何故魔理沙も横になるのかと、不思議そうに魔理沙を横目に見て問いかける。

魔「負けた奴がどんな気持ちで天を仰いでるのかと思ってな」

返ってきた答えは哀れみも何もない、敗者であるフランへの追い討ち以外の何者でもなかった。

フ「馬鹿魔理沙!」

とフランは叫んで魔理沙に背を向けて横になる。それを見て魔理沙は笑っているだけだったがやがてぼそりと呟くように

魔「フラン、お前・・・弱くなったな」

そんな事を言い放つ。

フランは驚いてビクつくように身を跳ね上げ、魔理沙の表情を伺う。その魔理沙の発言の真意を確かめるために。しかし魔理沙は眠っているかのように目を閉じていて表情が読み取れない。

フ「ど、ど、ど、どゆこと!？」

魔「あせりすぎだぜ」

表情が読み取れないため、口をプルプルと震わせてカミカミになりながら身を乗り出して魔理沙にその真意を問う。そこで初めて魔理沙は目を開けてフランを見て笑う。

フランがあせるのも無理はない。相手を一方的に打ち負かす事を喜びの糧としている者以外、勝負を楽しむには互いに同じ技術を持って臨む駆け引きがあるから楽しいのだ。初めから勝ち負けが決まっている勝負など、ただの喜劇でしかない。

フ「だ、だって・・・私と遊ぶの楽しくない？」

魔「はあ・・・そうだな」

フランは何かを言おうと口をパクパクさせているが声がでないらしい。いわゆる絶句という状況に陥っているらしい。

魔「だからお前にはもっとがんばってもらわねえとだぜ」

フ「う、うん・・・」

魔理沙はこれからも弾幕ごっこは続けてくれるらしいことからフランは安心、その冷たい床にぺたんと腰を下ろす。しかしそのフランの声にはいつものような自信や元気がない。

一日サボるとその感覚を取り戻すのに三日必要だと言われている。と言う事は約三ヶ月必要だと言う事になる。三ヶ月は魔理沙は楽しむ事は出来ないだろう。

しかし、フランがそういうことで悩んでいるのではない、ということとは魔理沙にも分かっていたようだ。

魔「歯切れが悪い返事だな。なにか悩み事があるならきくぜ？・・・
っていうかどうせ新之助とか言う野郎のことなんだろうが」

フ「え！？何で分かったの！？魔理沙伊藤！？」

魔「・・・」

フ「エスパーだよっ！？」

魔「いや、知ってっけどさあ・・・お前未練タラタラだな」
フ「う・・・」

魔理沙にそう言われてフランは拳を作る。そして血が通わなく、
白い手が紫色に変わりそうな程に強く握り締める。だがその拳はその
のまま力が抜かれる。やがて足と足の間にたるんでいるスカートを
床に付くまで拳を押し当て、更に赤いスカートをしわが出来て戻ら
ないくらいにぎゅっと握り締める。

フ「・・・そう簡単に・・・忘れられるわけ・・・ないじゃん・・・」
「

フランはそう吐き捨てて俯いてしまう。

魔「全く・・・うじうじしゃがって。そんなに気になるなら会いに
行けばいいじゃねえか」

フ「ダメだよ」

即答。

魔理沙の提案をフランはそんな言葉で躊躇なくきって捨てた。魔
理沙がフランを見るとさっきと変わらず俯いたままだった。ただ一

箇所だけ、拳だけはまた握り締められていた。

フ「よく分かったよ。妖怪が人間に関わったろくな事にならないって」

それは事実ではあるがフランにとって受け入れたくないこと。フランの握られた拳がそれを強く明示している。これには魔理沙も苦笑いせざるを得ない。

魔「でも今度はうまくいくかもしれないだろ」

フランが言っている事は自分で自分に言い聞かせ、本当の自分を隠すための仮面だ。しかしそれは自分を変えるのではなく、あくまで仮面。しかもフランが作った仮面だ。魔理沙にとってそれは小さな息で剥ぐことができるくらいに薄い仮面だろう。

フ「そんなに簡単に上手くいくなら昔だれかやってるよ。でも誰も出来なかったじゃない」

魔「私は人間だぞ？」

だから魔理沙はフランのそんな薄っぺらな仮面を剥がしにかかる。

フ「・・・人間は吸血鬼に勝てるわけないもん！」

魔「じゃあ私はなんなんだよ」

フ「エスパー！」

魔「ガキかよ・・・」

フ「ガキじゃないもん！熟女だもん！」

フランはまた身を乗り出すが魔理沙に片手で制されてしまう。

魔「はいはい、でも、そっか・・・お前はそれで納得したんだな」
フ「うん。時間は掛かるかもしれないけど、新之助のことは忘れようと思う」

フランは今回の事、昔の事、それで学んだのだろう。人間と妖怪との間にある厚く高い壁を。交わる事の難しさ、空しさ、分かれることの寂しさを。

幻想郷と人里、今後一切交わる事はないだろう。時折人里に現れはするだろうがそんなこと、人間は気付きはしない。幻想郷は本当の意味で幻想郷になったのだ。

そしてそれを理解し、あきらめるといふ道を選んだ。周りから見れば消極的なその決断もしなければならぬ時も必ずある。その決断が出来た時、フランは間違いなく成長しているはずだ。それは人里での計画は決して無駄ではなかったという証。

フランの顔はどこか毒気の抜けたすっきりとした顔になっている。フランも今後、人里に行きたいなどと言わないだろう。それが成長の証でありフランが少し大人になった証拠だ。

フ「でも、楽しかったなあ・・・」

しかしその思い出はいつまでも消えることは無い。思い出など消す事は出来ない。忘れはしても心の片隅には必ずあるものだ。だからその思い出を大切に胸にしまい、また新たな道を歩めばいい。それを繰り返す事でまた成長できることだろう。

これにて「フランは成長するのか？」終幕

おわり

〈cast〉

れみりあ・すかーれつと

ぱちえ

さくや

ほんえい

魔「フラン・・・何書いてんだ？」

フランが何やらお絵かき帳のようなものに寝転がって鼻歌交じりに何か書いている。そこに魔理沙が立ち上がって上から覗き込む。

フ「えんどろーる！エンディングには書かないといけないんだって」

フランはこの物語を締めくくろうとしていた。しかしそれは平仮名だらけの見るに耐えないエンドロールだ。

魔「そんなエンディングで大丈夫か？」

そんなエンドロールに魔理沙がいちゃもんをつける。それはフランが作るエンドロールが見るに耐えない、という理由からではないだろう。

フ「え？」

魔「諦めたらそこで試合終了ですよ」

フ「・・・」

魔「スラ○ Dank だろ？」

フ「いや、しってるけどさぁ・・・」

魔「どうせなら、ハッピーエンドにしたいだろ？」

このままではフランにとってバッドエンドに違いない。だがそれをハッピーエンドにするには確実にやらなければならないことがある。

フ「・・・人里に行けって事？」

魔理沙が先程言った、新之助に会いに行けということだろう。

魔「お前がそう思うんならそうなんだろ」

何故かフランがそう言われた気分になってしまふ魔理沙の言い回し。それにフランは不満を覚え、眉を歪めて口を尖らせる。

フ「ふんっ！ 私大人だもん！ あきらめたって言ったじゃない！」

そっぽを向いてそんな事を言うフランは言葉とは正反対にまるつきり子供のしぐさだ。その子供のようなフランを見下ろしながら魔

理沙は鼻を鳴らして手を腰に当て、胸を張る。

魔「ふふん、いいかフラン。大人はな、引きずらないんだぜ？」
フ「え？本当に？」

フランは子供なので額面どおりに魔理沙の言葉を取ってしまう。
どんな辛い事があっても後を引きずる事もなく綺麗さっぱりなど、
感情のないロボットでない限りあるはずがない。

つまりこれは魔理沙によるいつものフラン騙しだ。

魔「ああ、いやなことがあっても綺麗さっぱりさ。そうじゃないと
やっていけないからな」

フ「ふ、ふん・・・どうやったら忘れられるの？」

魔「だからお前は子供なんだよ」

フ「え？」

魔「大人はな、自分のやりたいことをやるんだぜ」

フ「やりたいこと？」

魔「ああ、自分の目で見て耳で聞いて頭で判断してやりたい事をやる」

フランのやりたいこと、それは決まっている。

フ「むう・・・でも、やっぱり無理だよ。霊夢が通してくれないよ」

魔「誰がお前にそうしろって言ったんだ」

フ「だから霊夢が」

魔「霊夢のせいにするなよ」

フ「はぁ!？」

フランはそれが魔理沙が霊夢をかばっている風に思えたのだろう。

フランは魔理沙は自分の味方をしてくれない事に声を上げて不満を示す。

魔「自分に命令できるのは自分だけなんだぜ？」

フ「わけわかんないんだけど！」

魔「そりゃ人のせいにしてうじうじしてりゃあ楽だろうぜ。今自分がうじうじしているのは全部霊夢のせいだって言い訳できるんだからな」

フ「ち、ちがうもん！ 霊夢がそうしろって……幻想郷を守るためだって……言うから……仕方ないじゃん……」

魔「お前はこの先ずっとそうしていくつもりかよ？ 誰かがあいつたから仕方がない、誰かがそうしろといったから諦める、それが大人な行動なんだからと何かしら理由をつけて」

フ「だって……霊夢が……」

さっきまで大人だなんだと図に乗っていた自分が恥ずかしくなったのだろう。今にも泣きそうな声で言った言葉は最後まで続けられることはなかった。霊夢の名前を出した時点でそれは責任転嫁だからだ。

魔「誰がなんて関係ねえんだよ。それを聞いて判断して行動するのはおまえだろ。霊夢の言った事はお前にとって判断材料でしかないんだよ」

フ「じゃあどうしろって……いうのよ」

魔「考えろ。考えて考えて考え抜け。自分は今何がしたいのか、どの選択が最良でどうしたら今の状況をぶち壊せるか」

フ「ぶち壊す？」

魔「ああ、お前の得意分野だろ？」

フランはそんな魔理沙をボーっと見上げている。

フ「何だか大人って子供みたい」

魔「知ってるか？大人は子供以上にわがままなんだぜ？」

フ「え！？本当！？」

魔「ああ、本当だ。ただ一つ、子供と違うところがある」

フ「何？」

魔「自分の行動に責任を持つ事だ」

フ「どこかで聞いたような・・・」

それは霊夢が小島当主の処遇をフランに押し付けた時の台詞だ。
他の誰でもなく、自分の責任で人を裁けと。

魔「へえ。誰が言ったんだ？」

霊夢はその責任という言葉を魔理沙より先に言っていた。フランはそれを学んだはずだったのだが。

フ「うーん・・・わすれた！」

そのありがたい言葉をフランは忘れたらしい。これを知れば霊夢はどんな顔をするだろうか。

魔「お前らしいな・・・で、お前は何がしたい？」

フ「新之助に会いたい！」

フランは魔理沙を見上げていつものように元気一杯の笑顔と声でそう言った。もうフランが被っていたうすっぺらな仮面は剥がれ落ちたらしい。

自分のやりたい事をやる。

魔「それでこそフランだぜ！」

そして魔理沙もフランの元気に当てられて声を張り上げる。だがしかしその勢いはすぐに止まることになってしまう。

フ「あ」

魔「ん？なんだ？」

フ「幻想郷に行くには霊夢にお願いしないとなんだった・・・」

そう、誰がなんとやろうと自分のやりたい事をやればいいと言った魔理沙の意見には色々な障害が付きまとう。新之助に会いに行くにもまず人里に行かなければならない。人里に行くには霊夢の許可が要る。

魔「結界壊せば良いじゃないか」

フ「ええ！？本気で言ってるの！？」

結界を壊そうとしたところで紫に何かしらの妨害を受けるだろう。もしかしたら殺されるかもしれない。

魔「本気で言ったとしたら？」

フ「・・・却下」

魔「正解」

フ「あっ・・・私を試さないでよ！」

魔「ははは、まあまあ落ち着けて。私みたいな上級の大人は大人予備軍のお前に助言をしてやることもできるんだぜ？」

フ「ふゝん・・・結界壊せて言う人が助言なんて出来ないと思う」

そんな最もな意見に魔理沙は頬をカリカリと書くしかない。

魔「あんなの冗談だろ？」

フ「じゃあ、どうやったら霊夢に幻想郷つれていってもらえるか・
・ちよつとなら聞いてあげてもいいかも」

魔「霊夢なんてちよろいぜ？私に任せな」

フ「・・・嘘だね！もう騙されないから！出来るわけ無いよ！」

魔「できるできねえじゃねえんだよ。この世はやるか、やらないか、
それだけだ」

フ「お、おお・・・かっこいい！」

魔「お前はどっちだ？」

フ「やる！」

魔「よし。でもこれは秘密の作戦だぜ？私が言ったって言うなよ？」

一応保身の為、釘を刺しておく。フランは頷いた。が、恐らくばれるだろう。フランに秘密なんてものはあつてないようなものだ。

そんな時、フランの表情に不意に笑みがこぼれる。それは魔理沙の秘密をばらしてやろう、というわけではないだろう。

魔「なんだよその笑みは、気持ち悪いな」

フ「だって嬉しいんだもん。魔理沙が私のためにそこまでしてくれるなんて」

誰かが自分の味方をしてくれる。それはとっても単純なことだが今まで過酷な生活をしてきたフランにとって、それはとても重要な事だったのだ。

そして素直にそんな事を言われると、どこかむずがゆい気持ちになつてしまう。いつもトラブルメーカーとして皆に迷惑を掛けている魔理沙にとっては全身かゆくてたまらないだろう。

魔「いつまでもしけたつらして弾幕ごっこなんかされたら叶わないからな」

フ「むう・・・」

だからかゆさを紛らわせるために憎まれ口を叩き、その場をやり過ぐす。それを額面どおりに受け取ってしまうフランだから魔理沙のかゆみはずっと引いていくことだろう。

フ「でもいいの？」

魔「ん？」

フ「私を人里なんか・・・ばれたら後で怒られるよ？」

魔「いいんだよ」

フランの為ならばどんな危険でも冒すことができる。などとロマンチックな事を考えているわけではないだろう。

魔「約束したからな」

それは紫と交わしたあの約束だろう。

フ「約束って？」

そして紫はそれを期待しているといったのだ。

魔「内緒だぜ」

魔理沙はそれを実行に移すのだった。

第四十章　く魔理沙の約束く（後書き）

一番いいエンディングを頼む、というわけで次回は魔理沙にもらった秘密の作戦を持って霊夢に許可をもらいに博麗神社へGO!の予定です。

第四十一章（前書き）

どうもこんにちは。

今回は魔理沙に作戦をもらったフランが人里へ行こうと霊夢に交渉？しにいくところですね。まあフランなのでまともな交渉は出来ないだろうと思いますがどうぞ。

第四十一章

昼下がり、真上から太陽光がサンサンと降り注ぎ、水や葉を輝かせる。夏にたくさんさんの光を浴びた葉は、青々とした色素を失い赤く腫れ、やがてかさぶたのように硬くなって散ってしまうだろう。

初秋。前にあった分厚い入道雲は薄くスライスされて鱗雲に。ときおり吹く風は粘着性を失い、以前のようにまとわり付く煩わしさはない。触れるとひんやりと冷たく、日に当たり、熱を持った肌を程よく冷ましてくれることだろう。

余った風は、夏に置き去りにされた風鈴へ。ぶら下がっている短冊を申し訳程度に揺らして鳴らし、心地よい音色を奏でている。乾いた空気に響く鈴の音が、秋の訪れを告げているようだ。

ひとけのない、博麗神社のたたずまいがその音色にあいまって哀愁を漂わせている。

そんな秋の訪れを告げる鈴の音色を目覚ましに、一人の少女がうつすらと瞼を開く。その少女は布団からのっそりと身を起こし、寝ぼけた眼をこすりながら辺りを見回している。

辺りは嵐が過ぎ去ったような散らかりようだ。昨日皆が馬鹿騒ぎしたせいで酷い有様だった。それは神を祭る神社とは思えない程。

その神主である、黒い髪に寝癖をたっぷり蓄えた少女、博麗霊夢は一つため息をついて立ち上がった。そしてしばらくボーっと立ち尽くしたかと思うと、まだ手に持っていた薄い毛布をポロリと落とす。

霊「ん・・・」

かすかな匂いを嗅ぎわけ、何かに気付いた犬のようにある方向を向いたまま静止した、かと思うと、急に何かに導かれるように真っ

直ぐ、ゆっくり歩いていく。そして賽銭箱や鈴が設置されている場所へ通じる、拝殿の扉を開けて外を見る。

フ「あ」

そこには鈴に繋がれた、赤と白の紐を結って作られた太い綱を、小さな手で掴み、今にもガラランと鳴らそうと、振りかぶって止まっているフランがいた。賽銭箱にはいつもレミアが使っていた日傘が立てかけられている。恐らくそれをさしてここまでやってきたのだろう。

フ「やつほー、霊夢。今起きたの？」

霊夢は拝殿の扉をバタンツと乱暴に閉め、続けて頭痛がするように頭を押さえる。これは決して二日酔いではなく、夢でもないだろう事が、今までの二日酔いの経験と痛みではっきりと分かる。そしてその頭痛に追い討ちをかけるようにガラランと鈴の音が神社中に鳴り響く。

頭痛の種が加速度を増して増えていく。

その種を植えられまいと霊夢は必死に耳を手で覆う。しかし寝起きで、しかもすぐ傍でガラランと鈴の音を聞かされる霊夢はたまった物ではない。

霊「やかましい!!」

霊夢はたまらずに拝殿の扉を蹴って開く。頭痛の種を芽が出る前に回収するため、怒鳴り散らす。

フ「呼び鈴だよ？」

霊「どこにそんな大層な呼び鈴があるのよ!」

フ「ここ」

けろっと顔色一つ変えずに不思議そうな顔でフランは言う。きっと本気でそう思っているのだろう。その呼び鈴で霊夢を呼ぼうとしたに違いない。神社にある神聖な鈴はフランに掛ければただの呼び鈴に成り下がってしまうらしい。

霊「まあ間違いないけど・・・」

昼と言う事もあって拝殿は影になっており、石段はひんやりしている。霊夢はまた一つため息をついて石段に腰掛けた。しかし先ほど起きたばかりの霊夢には外の光がまだ眩しいらしい。目を細めてぼんやりとフランの方を見る。

霊「これは神様に呼びかけて、話や願いを聞いてもらうための物なのよ。だからそんな使い方しちゃだめ」

と普段の霊夢とは思えないくらいに優しい霊夢。本来あるべき姿の巫女よろしく、丁寧にフランに説明してやる。

おそらく魔理沙なんかがこの光景を見れば雨が降るかもしれない、と傘でも捜しに行こうと茶化してくるだろう。

しかし、生憎フランには魔理沙のような捻くれた思考回路は持ち合わせていない。受け取った文句はそのままダイレクトにフランの頭に届く。

霊夢の説明を黙って真剣に聞いていたフランは「ふうん」と納得したように何度か頷きそして急に表情が明るくなる。

フ「じゃあ私の願いも聞いてくれるかなっ？」

そのフランの目は期待によって満ち満ちている

霊「やってみれば……ふあ」
フ「じゃあ」

霊夢は欠伸をしながらだるそうに手で口元を隠している。と、次の瞬間爆発でもあったかのような、耳を劈く衝撃が霊夢の鼓膜を襲う。

フ「神様！私人里に行きたい！」

フランの馬鹿でかい声と、力の限り鳴らされる鈴の音。気を抜いていた霊夢はたまった物ではない。霊夢の耳には無限の肺活量を持つ笛士が住み着いてしまった事だろう。

フ「聞いてますかあああああ！？」

そのフランの言葉が終わるか終わらないかの内に、霊夢の手が伸び紅白の紐で結った綱を驚づかみにする。ガランガランと乱暴に鳴り響く鐘がゆっくりと静寂を取り戻していく。

霊「フラン……もう十分よ……」
フ「え！？本当！？」

とフランが嬉しそうに顔をほころばせる。それは恐らく神にフランの願いが伝わったと勘違いしているのだろう。しかし霊夢はとうと頭が割れそうなほどの激痛に襲われている。綱を掴んでいない手は顔を覆い隠し、背を丸めて苦しそうにうなってしまう。

フ「ねえねえ！何て返ってきた！？」

そして然るべく、その返答を博麗の巫女である霊夢に尋ねてくる。その筋の巫女には分かるものもいるというのが生憎霊夢にはそんな事分かるわけがない。しかし神の言葉が聞けると思っっているフランは興味心身でワクワクしている。その顔はまるで天使のような笑顔なのだが霊夢にとっては悪魔の笑顔に他ならない。

霊「そんなの・・・返ってくるわけ——」

と、ここで霊夢の、眠ったまま止まっていた思考回路が動き出す。霊夢は一刻も早く、この天使のような笑顔でワクワクしている迷惑な悪魔に帰ってもらいたいはずだ。そして霊夢は巫女であり神意の伝達者でもある。この立場を上手く利用しない手はない。

霊夢は一瞬、フランにばれないようににやりと唇を吊り上げる。そして一度表情を無くし、更にその上から優しい巫女の上塗りした。

霊「フラン、神様の言葉が返ってきたわ
フ「本当?!」」

霊夢は石段に座りながらフランの細い両肩をしっかりと掴む。そして優しい表情でフランにゆっくり微笑み、そして

霊「神様はこうおっしゃってるわ。今すぐここを去れと」
フ「ええ・・・」
霊「さもなければわざわ」

ガーン!と何かに打たれたような強い衝撃、更に後から来る言いようのない痛み、いろいろなものに襲われ、地面に両手をついてうなってしまう。

霊夢が。

フ「霊夢！？大丈夫！？」

霊「ぐっ」

信じられないことに、先程までフランが力の限り鳴らしても落ちなかった鈴が落ち、盛大に鈴の音を鳴らして霊夢の脳天に直撃した。鈴は中が空洞に鳴っているとはいえあの高さから落ちれば痛い。

フ「霊夢！？しっかりしてよ！わざわざってなに？！」

霊「わざわざが・・・」

フ「わざわざが？」

霊「降りかかる・・・」

フ「誰に？」

霊「私に・・・」

・
・
・
・

霊「で？何しに來たのよ」

霊夢は氷嚢を頭に載せて先程の石段にまた腰掛けていた。氷嚢を取りに行っている間フランを拝殿に待たせ中に入らせなかったようだ。中に入れないところを見ると霊夢は本当に早くフランを帰らせたいらしい。

フ「人里に」

霊「却下」

フランの願いは先程聞いた。それ以前にフランがそれ以外の目的でここに来るとは考えにくい。レミリアならともかく、フランがわざわざ霊夢の所に遊びに来るなどありえないからだ。

しかし昨日言い聞かせたはずの人里と幻想郷の分離。なのに昨日の今日でこの有様だ。霊夢はいろんな頭痛がして仕方がないだろう。

フ「・・・じゃあ結界壊すもん！」

そんな霊夢の即答にわずかにうなってそんな言葉を返すフラン。

霊「そんなことしたら天界行きよ」

前に言ったようにフランが壊そうとしてもきつと紫が現れて送り返されるか殺されるかの二者択一だ。どちらに転んでも人里になど行けやしない。

フ「そ、それでもいいもん！！」

霊夢は頬杖を付いて頬をぐにゃつと歪ませてフランを見ると目は真剣、手は握られて拳を作っている。どうしても譲れないらしい。

しかし、さすがにそれをされると霊夢は少し困ってしまう。

フランに常識を学ばせ、せっかくいい具合に成長したフランを死地に追いやるのは気が引ける。ましてや人間と妖怪の仲をよくしようにとしていた張本人がそんな事を出来るはずがない。

今度は鼻のため息をし、少し言い方を変えてフランをなだめるように言う霊夢。

霊「あんた昨日納得したんじゃないの？大体、人里に行っちゃって新之助さんは何も覚えていないのよ？今更何をしに行くっていうのよ？」

昨日言った事を思い出させ更に現状の理解をさせる。相手はフランだ。現状を十分分かってない可能性もある。だがフランはちゃんと分かっていたらしい。

フ「お別れを言いにく」
霊「お別れ？」

その不可解な答えに霊夢は眉をしかめ、思わず聞き返してしまう。別れを言いに会いに行くとはこれいかに。

フ「うん。私別れるときに殴り飛ばして気絶させちゃったから、ちゃんとしたお別れ言っていないんだあ」
霊「殴り飛ばしたって・・・あんたねえ・・・」

そういえばフランは幻想郷へ帰ってくる前にちゃんとした別れを新之助としていなかった。拳が別れの言葉など、ロマンの欠片もない。後出会いにいけないと思っていたのだろう。だがフランは記憶を消される事を知らなかったのだから仕方ないと言えは仕方ないのだが。

霊夢は呆れるように頬杖を付き、目を細めてフランを見る。フランも睨むように霊夢を見つめ返してくる。その視線は霊夢の細い目にある瞳を的確に突いている。

フ「めじけをつけるんだよ！」
霊「？」

フランのその真剣さが空転する。

フ「あ……えと……えじめ？ いじめ？」

霊「けじめ」

フ「そうそうそれそれ！ げじげじをやっつけにいくの！」

霊夢が一言そう言ってやったにもかかわらず、フランは霊夢を指差し、そんな事を言う。霊夢は危うく噴出しそうになってしまおうがこらえて話を続ける。

霊「あんた分かって言ってるの？」

分かってはいないだろう。これはどこかで聞いて、小さい子供が背伸びをするように新しく聞いた言葉を使い、失敗するパターンのやつだ。つまりこれは魔理沙がフランに吹き込んだ台詞ということ。ただそれを知らない霊夢はフランの酷い発言をただのフランの言葉としてとってしまう。

そしてますます頭痛が酷くなる霊夢。

フ「だからね！ それで私はきっぱり諦める事が出来るの！ と、思うの！」

と、一転して自らきっぱり諦める宣言。てっきり「別れを言う」は建前で、人里で新之助の記憶を取り戻そうと、何かしでかそうなど企んでいるのではないかと勘ぐっていた霊夢。

しかしフランは諦める為に行くらしい。けじめをつけるために。それに光明を見たのか霊夢はすっと顔を上げてフランを見る。

霊夢は考える。それで諦めてくれるならば一度くらい人里に連れて行ってやっても良いのではないかと。

霊「別れを言うだけで、それ以降は人里に行きたいなんて言わない？」

フ「うん！」

ここで人里へ連れて行けば、今後フランが人里に行きたいと神社にやってくることはないだろう。しかしここで断れば後々フランに付きまとわれる、というリスクを背負う事になる。

霊夢は人里へ連れて行かなければいけないという面倒ごとはあるが、それを除けばほぼ両者の利害が一致している。

霊「なるほど、それは私にとってもあんたにとっても好都合って分けね」

つまりこれは実に合理的で効率的な提案で

フ「うん！」

出来すぎている提案でもあった。

霊「魔理沙でしょ」

フ「うん！」

フランは魔理沙の作戦を聞いてワクワクを押さえきれずそのままでてきたのだろう。見ると服はボロボロのままで誰がどう見ても弾幕ゴッコをしていた事は明白だ。フランをボロボロに出来る相手はほぼ魔理沙で間違いないだろう。

フランはしまったとばかりに両手で口を塞ぐがもうすでに遅い。

霊夢は唇を片方上げてフランに負けず劣らずの犬歯がキラリと光る。

霊「ふっ」

フ「・・・うん、ち、ちがうよ・・・」

そこにふってわいた、フランが考え付くはずもない合理的な提案。誰がどう見てもフランをけしかけた犯人は魔理沙しか居ない。

霊夢にとってそれは陳腐なクイズ以外の何者でもない。

霊「どうせ霊夢なんかちよろいぜ、とか言ってそそのかされたんでしょ」

霊夢はわざと魔理沙の口調を真似てそう言った。それが面白かったのかフランは噴出し、「似てる」と笑いながら霊夢に賛美の言葉を送ったのだった。

しかし霊夢知らぬところでコケにされていたのだ。心中穏やかではないだろう。

霊「魔理沙、ぶちクロス」

フ「うん！」

霊「で？あんたはいつまでそこにいるつもり？ネタは割れたのよ。さっさと帰れ」

その提案は合理的ではあるが魔理沙が作った案だ。魔理沙だとばれなければ霊夢はフランを人里に連れて行ったかもしれない。だが霊夢はそれが気に入らなかったようだ。

フ「やだ！行くなって言うまで帰らない！」

霊「やれやれ・・・私がそんな面倒な事やってあげるわけないでしょ？それとも何？お布施でも持ってきてくれたのかしらあ？」

フ「フフフ、じゃじゃーん！」

フランは幼稚な効果音をもってポケットから何かを取り出した。

霊「それって・・・あんたまさか・・・」

霊夢が見るとその先には銀色に輝く丸い円盤上の物体が。

フ「コイン一枚!」

霊「・・・魔理沙にあげたやつじゃない」

よってこれも魔理沙の策略だということは明白だ。

フ「うん!もう一度コンティニューしてこいて!」

霊「で?それをどうー!」

霊夢は現金だ。だからお布施で霊夢の心を揺さぶれ、とでも言ったのか。霊夢が言い終わらないうちにコインが回転しながらフランの手を放れ、宙を舞う。

フ「コインを生贄に!私を人里へしょーかーん!」

フランが投げたコインはまっすぐ賽銭箱に向かって飛んで行く。誰がどう見てもコインは賽銭箱の中に入る軌道を描いている。

だが、フランが投げたのはゲーム用コイン。霊夢にとって何の足しにもなりはしない。そして賽銭箱はおもちゃ箱ではないのだ。

霊夢はすぐそこに立てかけていた箒を掴む。更にメジャーリーガーさながらの豪快なスウィングで賽銭箱に入る直前でそのコインを打ち抜いた。そうしてコインは風鈴のように小気味よい音を立て、空の彼方へ飛んでいったのだった。

霊「秋の訪れか、それとも・・・夏の終わりか」

と、霊夢は目を細めてぼそり。風鈴とコインの音を重ねたのだらう。

フ「どっちも同じだよ！」

秋の空に響くその音は夏の終わりを告げていた。

霊「そう、あれは私が五歳の頃、マイケルが私をスカウトに」

フ「意味不明！！私のコインに何するのよ！」

霊「あんたは私のお賽銭箱様に何しようとしたのよ？あれはおもちや箱じゃないのよ？」

箒で自分の肩をポンポンと軽く叩くと、もう片方の掌を天に向けて呆れたように言い放つ。

フ「うう・・・ひどい・・・ひどいよっ・・・ひっぐうっ・・・」

霊「はあ・・・もう、泣かないでよね。たかがおもちゃのコインくらいで」

フ「あれは・・・あれは私のお母様が残した大事なコインなのに・・・」

霊「え？」

フ「大事な・・・大事な形見だったのに！死ぬ間際にこれが私だと思って大事に持っていなさいって！いつかまた・・・絶対会えるからって！！」

霊「フラン・・・」

フ「だから今までずっと大切に持ってたの！霊夢は私のお母様を奪ったんだよ！！」

霊「フラン！」

フ「なのに・・・なのに霊夢は」

霊「あんたねえ」

フ「ちょっとまって次めくるから」

フランは指をペロツと舐めて魔理沙にもらったであろう、作戦が書かれているノートのページをめくる。

霊「すこしは隠す努力しろ」

フ「はっ、つい夢中になって」

霊「と言うわけでじゃあね、とこしえに」

霊夢が拝殿の中に入って扉を閉めようとする。

フ「け、結界こわすよ！」

霊「どうせ紫が来て終わるでしょ。そしてあんたは天界へ、南無阿弥陀仏、嫌なら止めなさい。じゃ」

フランの立てたストッパーも効果を見せず扉が完全に閉まってしまいそうになった時。

フ「それ！その人！」

霊「・・・まだ何かあるの？」

霊夢はどこかの家政婦のように扉の隙間から片目でフランを覗き見る。だがこれは魔理沙がフランに仕組んだ最後の作戦だった。

フ「霊夢は何で人間と妖怪が仲良く出来ないのって疑問に思ったんだよね！」

霊「うげっ・・・どうしてそれを」

フランの予想外の攻撃に奇声を上げて扉を開く霊夢。

フ「その紫って人が皆に言ってたって魔理沙が言ってた」

紫は皆に言うなと言ったのだが。それは霊夢が皆に知られて恥ずかしいと思うことだから。しかも霊夢と一番長い付き合いだろう紫が言うのだ。霊夢からしたらかなりの恥ずかしさに違いない。

霊「あいつう・・・余計な事をつ・・・」

普段、あまり妖怪と関わろうとせず、クールに決めている霊夢が実は皆と仲良くしたかった、などとツンデレもいいところである。それを言いふらされた霊夢はたまった物ではない。

フ「私もそう思って」

霊「そう・・・そういうこと・・・」

フ「霊夢?・・・あ、あのね」

とフランが霊夢に何か言おうとしたところを霊夢の手に制された。

霊「わかった・・・もういい・・・もういいわ・・・連れてってあげる」

フ「本当?!」

霊「ええ・・・」

一言霊夢が言くと、顔面を手で押さえて隠しながらぶつぶつと何やらつぶやいている。

霊「・・・ぶち壊して・・・ば・・・いのよ・・・」

フ「ぶち壊す?」

霊「はっ、私としたことが・・・」

フ「ん?」

どうやら魔理沙の作戦は功を奏したらしい。紫は敵と言う共通の意識を霊夢に植え付けフランに協力させる。しかも霊夢は妖怪にツンツンしてはいるが本当は優しい自称ツンのツンデレだ。ツンの牙城を破壊すれば後はたやすい。

霊夢は一つ咳払いをし、フランの目の前に腰に手を当てて仁王立ちする。そしてこれから説教でもするのか、というくらいに目一杯胸を張る。

霊「いい？お別れを言ったらもう二度と人里に行きたいなんて言わないこと、それが条件よ」

フ「うん！」

霊「それとリングは付けて羽は切る」

テキパキと指示をする霊夢にフランは満面の笑みを持って元気よく、手をピンと一直線に伸ばして「はい！」と返事をする。

霊「とりあえず中に入りなさい」

霊夢は扉をフランが入れるくらいに広く開けると、フランは嬉々として飛び込んでいった。

霊「私も着替えるか・・・」

霊夢は欠伸をしながら一言言って扉を閉めたのだった。

第四十一章（後書き）

フラン勝利！となりました。これでフランは人里に行けることになります。

しかしその前にやることと人里に行く前に行かなければならない所があります。

これは慎重になった霊夢が行きそうな場所です。

というわけで次回の舞台はそこになります。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

最近また暑さが戻ったり、と思ったら寒くなったりしていますが
皆さんも体調を崩さないように（周りが体調不良の人が多いので・
・・）

ではでは

第四十二章　く忘れ物く（前書き）

どうもこんにちは。

今回はフランが人里に行く前に行く所だったのですがその前の場面がごっそり抜けてたので追加しました。いらなと思ったのですが紅魔館で魔理沙の様子も追加してみました。

流れとしては紅魔館↓博麗神社になってます。そして次回が前回言ったとおりになっております。宣言とは違い申し訳ありませんがどうぞ！

第四十二章　　〈忘れ物〉

紅魔館

紅魔館の地下。フランに入れ知恵し、霊夢の所へけしかけた魔理沙は、ひんやり冷たい石造りの床が気に入ったのか、背中をぴたりと床につけて昼寝をしていた。薄暗く、涼しい地下は昼寝にはうってつけだ。

フランの心配もせずに昼寝とは、全く暢気なものだ。

しかしその顔には満足げな笑みが浮かび上がっている。きっとフランがまた大きな一歩を踏み出した事に喜びを感じているのだろう。もしくはフランが霊夢に対し、どのように授けた作戦を仕掛けているか、想像して笑っているのかもしれない。魔理沙はどちらかと言うと後者が似合いそうだが。

その魔理沙の、天井と平行になっている額に、垂直に忍び寄る影が。

魔「ん？」

咲「あ」

気付けば咲夜がしゃがみこみ魔理沙の額に何かを突きたてようとしていた。それに気付いた魔理沙は首を横にずらして先端を避け、跳ね起きた。

魔「うおおい！何やってんだ咲夜！」

昨日、魔理沙が霊夢の額に「脇」と書き、一人だけ落書きを返されないことを不服に思ったのだろうか。見れば咲夜の頬に書かれていたはずの「貧乳」と言う文字は綺麗に消されていた。少し赤くなっているので必死に消した事が伺える。

咲「だって、寝てたから」

魔「だからってお前！それはないだろ！」

何でそんな当たり前のことを聞くのかという顔でそんな事を言う咲夜の手には普通のペンではなく、消しても消えない魔法のインクが出るペンが握られていた。

咲「冗談よ」

魔「冗談よ、じゃないぜ・・・」

床に寝転んだせいで付いた汚れを払いながら言う魔理沙を見ながら咲夜は魔理沙の額に突きたてようとしたナイフをエプロンの中にしまいこむ。

魔「で？何しに来たんだよ」

咲「何だっけ？」

魔「・・・お前さあ」

咲「冗談よ」

ナイフをしまいこんだポケットから何かを取り出した咲夜が手を差し出してくる。その掌には魔理沙がよく見知っている物が乗せられていた。魔理沙はそれを手にとって目の前にかざしてみる。

魔「あれ、これは私がフランに渡したコインじゃねえか。どこにあったんだ？」

咲「それが・・・」

咲夜は困ったように手を頬に当てて首を傾げる。

咲「居眠りしてる美鈴にナイフを突き立ててやろうと忍び寄ったんだけど、先にコインが美鈴に当たって起きちゃったのよ」
魔「ふーん……」

魔理沙は手にあるコインを人差し指の先端に乗せてクルクルクルと器用に回して弄ぶ。

どうやら霊夢の打ったコインが美鈴に当たったらしい。

魔「賽銭箱に入れる前に、霊夢にホームランでもされたかあ？」
咲「ん？」

魔理沙は咲夜に聞こえないくらいに小さく呟いて笑い、コインを上方に弾いてキャッチする。

魔「いや、美鈴は運がいいなとね」
咲「でも結局、刺しちゃったんだけどね」
魔「あ、そう……」

そう言い終えると、咲夜がキョロキョロと辺りを見回し始める。壊れている壁やら天井を直すためにパチュリーにまた頼まないと、とても考えているのだろうか。パチュリーの魔法にかかればすぐに修理が済む。だが

咲「妹様は？」

と、一言。どうやら咲夜はフランを探していたようだ。
見れば地下室への出入り口にお茶とお菓子が用意してある。静かになり、弾幕ゴッコが終わった事に気付いた咲夜が、一息つかせようと持ってきたのだろう。だがフランは弾幕ゴッコが終わった後、すぐに博麗神社に向かってしまっ、もうここには居ない。

魔理沙がその旨を伝えると咲夜は「そう」と一言言っただけで驚くのではなく、不思議そうな顔をします。そして目を細めて少し睨むように魔理沙を見つめた。

咲「まさか、妹様をけしかけたんじゃないでしょうね」
魔「お前だって遅かれ早かれこうなるって分かってたはずだ。それが今だってただだぜ」

魔理沙は両掌を天に向けて肩をすくめる。
それに咲夜はやれやれとため息をついてしまう。

咲「あんたもせっかちなえ」
魔「なんだよ、褒めても罰はあたらねえぜ？」
咲「あんたが図に乗るとろくな事がないのよ」

魔理沙は軽く笑い箸を手取る。

魔「さて、こんな物騒な所じゃ暢気に昼寝も出来ないから私は帰るぜ」

咲「妹様の心配くらいしたら？ さっきだって怪しげに笑いながら寝てたし」

魔「人の寝顔観察なんて趣味悪いぜ？」

咲「あんたの寝顔見るくらいなら妹様の寝顔みるわよ」

魔「どうせ起こしに行く時にじーっと見てんだろ？」

咲「当然でしょ？」

魔「そんな犯罪めいた事を自信満々に言われてもなあ・・・」

咲夜は紅魔館のメイドだ。住人を起こすのも仕事の内なのだろう。美鈴はともかくレミリアやフランを起こすのも仕事。その際、天使の寝顔をじっと見てしまうのも分からなくてもいい。

そんなメイドに魔理沙はやれやれとため息をつく。何をどう注意しても寝顔観察は止めそうにないので、レミリアとフランには悪いが魔理沙は話題を元に戻すことにした。

魔「まあ・・・とにかくにも、心配したって結果は変わらないだろう？」

咲「その軽さが腹立つのよねえ」

魔「ふん、お前を腹立たせないために心配するフリでもしろってか？」

魔理沙はニヤニヤしながら咲夜を見ている。

咲夜には鬱陶しい魔理沙の視線、魔理沙には今にも飛び掛らんとする獣のような咲夜の視線が両者見て取れることだろう。その視線同士が合間見えた時、弾幕ゴッコの合図となる。

咲「胸糞悪い面をこれ以上拝みたくないって事よ」

魔「そうだな。お前のNiceバディがこれ以上小さくならないように、おっと！」

魔理沙は突如咲夜の手から放たれたナイフをさりと避け、反撃すると思いきや猛スピードで地下室から逃げて行った。どうやらフランとやった後に弾幕ゴッコをするつもりはないらしい。

咲「全く、ゴキブリみたいなやつね・・・あら」

ため息をつき、取り出したナイフをしまおうと咲夜はある異変に気付く。

魔理沙はあるものを盗んでいたようだ。

咲「お菓子・・・無い」

博麗神社

その頃、フランと霊夢はと言うと。

霊「フラン！じっとしてないと切れないでしょ!？」

寝巻きからいつもの巫女服に着替えた霊夢はフランを、高さにして霊夢の腰くらいの椅子に座らせその後ろに立っていた。それはまるで今から散髪でもしようか、という位置取りだが、霊夢の手にははさみではなく包丁が握られている。

フ「だってくすぐったいんだもん・・・」

霊夢とフランはまだ博麗神社に居た。フランはリングを付けられ、霊夢に押さえつけられている。フランの背中に付いている七色の羽。人里では当然目立つので切らなければならぬ。

羽を切る際、はさみでは切れそうにないため霊夢は包丁を取り出したのだが、これがなかなか切れないらしい。霊夢が包丁の刃を羽に突き立てるがなかなか切ることが出来ない。痛みは無いようだが、その包丁の刃をすりすりすると羽にこするので、振動が背中に伝わりビクビク動いてしまう。フランには少しくすぐったいようだ。

そのたびに包丁の刃が狙った位置とずれるのでただでさえ切りにくい羽が更に切りにくくなってしまうていた。

フ「霊夢料理下手なんじゃないの？」

あまりの切れなさとむず痒さに、ついにフランが不満の声を上げる。包丁の使い方が下手だから料理も下手だと思ったのだろう。その最たる例が咲夜だ。そのナイフで侵入者も料理してしまうのだから霊夢と比べるのは酷というものだろう。

霊「あんたを弾幕で痛めるのは得意なんだけどね」

フ「料理された私は美味しそう？」

霊「はぁ・・・大人しくしてればね」

いけしゃあしゃあとそんな返しをしてくるフランに霊夢はため息をつき、少しでも大人しくして欲しいという願望を込めてそう言った。

その後も霊夢がしばらくゴリゴリと羽を切ろうとしていたがのこぎりでもない包丁の刃はつるつるだ。切れ味もそれ程無い。

霊「にしても切れないわねえ・・・のこぎりでも持ってくるかしらね・・・どこにあったっけ」

ため息をついた霊夢は羽を掴んでいた手を離しさじを投げる。そしてのこぎりのある場所を思い出そうとしばし黙考する。が、さっぱりでてこないようだ。

霊「こうなったら引っ張ってべりつと――」

フ「霊夢！ 霊夢！ これ何！？」

霊「ん？」

フランが椅子に座ったまま、すぐ横にあった机の上にある箱を指差している。机の上はまだ片付けられていない皿やらコップやらが料理の残骸を乗せたまま。その中に一つ、木で出来た見慣れない箱が置いてあった。

霊「何かしら」

霊夢は少しワクワクしながら蓋に手をかける。

よもや金銭ではないだろうが、木箱に入れられるお中元の残暑見舞いや奉納などの贈答品を入れることが多い。それらは得てして値の貼るものが多いからだ。

霊夢が箱を開けると中には手紙と紫の布で包まれた何かが入っていた。

霊夢はすこし眉をしかめてしまう。

贈答品等に掛けられる布、所謂「ふくさ」と呼ばれる物だが、贈る花に意味を込める花言葉にもあるように、その色にも意味が込められることがある。

そこにある紫の色には、祝いとは反対の、葬式などのあまり縁起のよくないことにつかわれる色だからだ。

そしてそれは布で包まれた上から見ても分かるように、金銭などではなく、棒のように細長い。フランも横から覗き見、霊夢が手に取った手紙に目を移す。

手紙の内容

『もしもフランさんが来た場合これを使ってください。』

霊「永琳より？」

フ「これって？」

とは紫の布で包まれた中身の事だろう。

霊夢が布をスルスルと解いていくと中から刃渡り3cm程の刃物が出てきた。計画当初、フランの羽をサクッと切り離した、手術用に使うメスというものだ。

霊「あんたの行動読まれてたみたいね」

永琳もよもや昨日の今日で来るとは思わなかっただろうがフランの単純な性格から見えてくるだろうと踏んだのだろう。しかし普通の器具で切れないと分かる辺りフランの羽で何かしていた事は明白だ。そこまで考えていない霊夢はくすくすと、意地悪くフランのほうを見て笑って言うてやる。

フ「永琳も伊藤なの？」

霊「あんたが単純なのよ。ほら椅子に座りなさい」

フ「・・・」

霊「何？」

フ「・・・」

霊「私は突っ込まないわよ？」

フ「えー・・・」

霊夢は椅子に座ったフランの羽をそのメスで切ってみると何の抵抗も無く羽が切れ落ちた。

霊「お」

その切れ味がすばらし過ぎたせいで思わず声が漏れる霊夢。間髪入れずもう一方の羽にメスを入れる。

ポトリ

と、七色の羽が二枚、剪定している木の枝が落ちるように木製の床に舞い落ちた。

フ「ん？」

その羽が落ちた音でフランが気付き、床を見る。それはフランが鈍いというわけではなく、それ程切れ味は良かったということだ。

フ「おお！切れてる！」

フランは椅子から飛び降り早速「人里へいこう！」などとはしゃいでいたが霊夢の反応がない。

フ「霊夢？」

夢「ごめんくださいーい！」

拝殿を迂回し、昨日宴会を開いていた会場に妖夢がやって来ていた。散らかしたまま帰ってしまったので、その後片付けに義理堅くやってきたのだろう。剣士である妖夢といえば妖夢らしいが。いくぶん中の様子がおかしい。

呼んでも返事がなく、障子も閉められているのだが、中で物音がする。

夢「まさか・・・泥棒？」

妖夢は刀に手をかけたままゆっくりと障子を開く。
すると目の前には不思議な光景が広がっていた。

夢「・・・何やってるんですか？」

霊夢がフランを追いかけている。よく見ると霊夢の手にはメスが。それを振り回しながらフランをただ追い回している。フランはフランでひよいひよいと余裕で避けてはいるが顔は困惑気味だ。

夢「何かの遊びですか？」

フ「あ！妖夢！助けて！」

夢「え！？」

フランが妖夢の方へ慌てて駆けよってくる。そしてその勢いのまま妖夢に抱きついた。

夢「ちょ、ちょっとフランさん！？」

続けて霊夢がメスを振り回しながら妖夢に向かって突進してくる。しかし様子がおかしい。霊夢の目が何かに操られているような、常軌を逸しているように怪しい光を放っている。そして霊夢の振り回すメスが妖夢に届こうという刹那、妖夢はフランを抱えて横っ飛び、霊夢のメスをかわす。

夢「フランさん！どういふことですかこれは！？」

フ「うーん、なんかねえ、羽を切り落としたらあぁなった」

夢「切り落とした？」

フ「そう、あのカタターで」

フランが霊夢の握っているメスを指差して言う。妖夢も改めてそのメスを見してみる。

夢「あれはっ」

と言うまもなく、霊夢が妖夢に再びメスで切りかかる。そして妖夢はまた横っ飛び、はすることはなく、身構えて刀に手をかける。次の瞬間、ものすごい速さで刀を抜いたかと思うと、キンッと短い金属音が。そしてその音で瞬きをしたフランの目に、次に映った光景は抜刀する前の妖夢の姿だった。

いわゆる居合い抜きというものだ。抜刀術の一種で鞘に収めた刀をすばやく抜いて相手を斬りつける。

霊夢の遅い振りでは当たる寸前に出しても余裕で切りつける事が出来るというものだ。これを妖夢はフランを小脇に抱えたまま行っただの。

全く、宴会芸でもそうだが神業としか思えない。そして妖夢が斬ったのは霊夢ではなく、霊夢が握っていたメスだった。メスは真っ二つに折れ、床にコロんと転がっている。

霊「あら、私どうしたのかしら」

夢「ふう・・・」

妖夢は一つため息をついてフランを下ろすと床に転がったメスの破片に歩み寄る。そして斬って折ったメスの破片をひょいと拾い上げた。

霊「ん？妖夢？いつ来たのよ？」

霊夢はすっとぼけているという様子でもない。どうやら霊夢にはフランを切り刻もうとした記憶がないらしい。

そんな霊夢に見える位置に妖夢がメスの破片を目の前に持ってくる。

夢「霊夢さん、これ妖刀ですよ」

霊「え？どうということ？」

フ「妖刀って何？」

霊夢は、ワクワクしながらそう言って自分の横に立つフランを見るとビクついて驚いた。

霊「フラン！あんたなんて格好してるのよ！」

フランは体は切られていないものの服をずたずたに斬られ、目も当てられない格好になっていた。

フ「霊夢が斬ったんじゃない！」

霊「私が切ったのは羽だけよ、何言ってるの？」

フ「霊夢が何言ってるの！散々斬りつけて！」

夢「まあまあ、これは凶鑑で見たことあります。妖刀の一種であまりの切れ味に少し斬るとそれが楽しくて止まらなくなってしまいう、という類のものです。常々一度拝見して見たいと思っていたのですが・・・勢い余って壊してしまいました。もったいない・・・」

フ（凶鑑？）

霊

と、霊夢の奇怪な行動の理由をつらつらと述べ始めた。

夢「これをどこで？」

霊「その箱に入ってたのよ。全く、妖刀を置いていくなんて・・・」

不機嫌な霊夢とは正反対に、上機嫌な妖夢がその箱を持ち上げて木箱の裏や蓋の裏を見ている。まるで宝の価値を調べる鑑定士よろしく、そして今までこんなに嬉しそうな妖夢は見たことがないというくらいに楽しそうな表情をしている。しかし所望する物がなかつ

たのだろうか、少しうなつて箱をコトリと机の上に戻す。

夢「どうやら箱は変えられているようですね。これは凶鑑にも製作者の名前が書いてなくつて未だ謎のままなんですよ」

霊「そ、そう・・・」

フ「あれがマニアっていうの？」

霊「しいーっ黙りなさいっ」

妖夢が箱の中にあつた永琳からの手紙を見る。そして箱を裏返した要領で裏返してみるとそこにはまた文字が。

夢「これは」

霊「どうしたの？作った人の名前でも見つかったのかしら？」

霊夢は半ば呆れ気味でそんな事を言ったのだがそれは妖夢ではなく霊夢に関係のある事だったらしい。

妖夢はその手紙を霊夢に手渡し、その手紙の内容を指で指す。それは霊夢が先程見た手紙の裏に書かれていたものだった。

手紙の裏

『追伸…これは妖刀なので斬り過ぎると危ないかもです。霊が取り付いているという噂もあります。返さなくていいので除霊、または供養をお願いします』

霊「永琳より・・・かっこ、笑、かっことじ」

ビリビリッと手紙を真っ二つに破り、霊夢は適当にその辺に投げ捨てた。この散らかりようだ。少しゴミが増えても気にはならないだろう。

フ「ねえ！早く人里いこお！？」

フランはもう待ちきれないらしい。足踏みをして落ち着かないフランだが、その格好はとも人前に出せる物ではない。来る時もロボロだったが霊夢が切りつけたせいで布がどうにかフランの体に捕まっているだけになっている。その布も落ち着きなく足踏みしている振動でどんどんずり落ちてきている。

夢「人里に連れて行くのですか？」

妖夢が驚くのも無理はないだろう。昨日の今日で人里に連れて行くというのだから。

霊「成り行きでね・・・」

フ「はやくうー！」

霊「その前に、あんた着替えの服とかあるの？」

フ「ない！」

霊「でしようね」

夢「霊夢さん。ここにまた木箱が」

妖夢が嬉しそうに木箱を持ち上げて霊夢の方へ運んでいく。きつとまた妖刀の類だと思っているのだろう。

それは先程の木箱と見た目も作りも同じ事から恐らく永琳がおいでいった物だと思われる。しかし先程のものより少し大きい。

霊「何だか開けたくないんだけど・・・」

夢「でも見つけてしまったからには開けないと、この後ずっと気になっちゃいますよ？」

霊「まあ、そうね」

後悔するならやるだけやって後悔しろ。と誰かが言ったような気がする。

じだんだしを踏んでいたフランは、なかなか人里にいけないことで不満げな顔をしているが中身が気になるらしい。せめてもの抵抗に二人の間に割って入り、不満げな顔で事の成り行きを見守ろうとする。

霊夢が箱を開けると中からは綺麗な柄の着物が出てきた。
そしてまた手紙が。

手紙の内容

『人里に行く場合、フランさんの服では目立つと思います。それにもしもフランさんの服が・・・になっていた場合困ると思うのでこれを置いて行きます。もしよければ使ってください』

霊「永琳より・・・かつこ、笑、かつことじ・・・」

夢「・・・確信犯ですね」

フ「これ着ていけばいいの？」

霊夢は手紙の裏を見ってみるが何も書いていない。妖夢もまた箱を念入りに調べていたがどこにもおかしい所はないようだ。

霊「ふう・・・まつ、いいんじゃない？」

夢「ですね」

フランは箱から着物を取り出し、びらんと広げてみる。鮮やかな色合いの着物が広げられ、すばらしい柄の着物がその全貌をあらわにする。人里にその格好で行けば逆に目立つような気がするが。

その着物のサイズは小さめでフランにはきつと合うだろう。

フ「うわー、綺麗・・・」

夢「へー、いいじゃないですか」

霊「全く・・・そんな大層な着物、どこで手に――」

フランと妖夢が感動している中、霊夢だけがあるものに気がついた。それは霊夢だけがその着物の後ろから見えていたから。その着物の背中部分に張り紙がしてあるのだ。フランが広げた事で見えるようになったのだ。

その内容は見るまでもない。それは先程のこともあるが、その張り紙の外枠に子供の霊と思われる不気味で、青白い顔が覗いていたからだ。恐らくその着物の元の持ち主だろう。

鼻から上を覗かせて霊夢を見つめている。

霊「きゃあああああああああ！」

霊夢は悲鳴を上げながら、持っていた札をその着物に投げつけ除霊した。後に残ったものは背中部分がぽっかりと焼けて穴が開いた着物と、少し焦げたフランの不満そうな顔が覗くだけだった。

フ「霊夢の馬鹿あああ！せつかくの着物どうするのよ！」

霊「うるさいわよ！トラウマよ！あんな顔見せられたらよるトイレに行けないじゃない！」

フ「分けがわかんないよ！」

巫女でも霊が怖いのだろうか。という謎は置いておいて。

結局、フランは霊夢が小さい頃に来ていた巫女服を来て人里に行く事になった。

霊「というわけで、悪いわね、留守番の上に掃除まで」

夢「いえいえ、そのつもりで来ましたから」

フ「行ってきまーす！」

夢「いってらっしゃい」

妖夢はニコリと笑ってフランを霊夢を送り出したのだった。

夢「さて・・・ふふふ、今の内にあのメスを詳しく調べてみましょう」

第四十二章　く忘れ物く（後書き）

永琳の忘れ物フラグをぽっきり折ってしまいそうでした。そしてフランが巫女服とは・・・あまり似合いそうにないですが。更に妖夢は少し危ない人に・・・

さて次回は前回言ったとおり新之助に会う前に寄り道します。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ではく。

第四十三章 (前書き)

どうも、こんにちは。

今回は人里に行く前の寄り道ということですね。今回は少し複雑になっています。

そして原作にはだされていない設定を出しています。ご了承ください。

子供…子

藤原妹紅…紅

第四十三章

人里から少し離れた小高い丘。丁度幻想郷と人里の中間に当たる場所。そこには木造の建物が。

昼過ぎと言うには少し早く、夕方と言うには少し早い太陽の日差しを浴びて、藍色の瓦は茜色に輝いている。その建物の玄関であろう扉は開け放たれていて、とても広い。五、六人駆け込んだところで、つかえる事がないくらいに十分なスペースがある。

そのスペースには小さな、子供用のぞおりやら靴やらの履物がぎっしりと、しかも規則正しく並べられている。これほどの多くの履物が店に並べられる商品のように規則正しく並べられている光景は爽快だが、踏まれたのだろうと分かる、形がつぶれてしまっている靴もちらほらと見て取れる。そして普通の家よりも広いスペースにもかかわらず開け放たれた玄関からはみ出している履物も少ない。

恐らく建物の中かなりの人数の子供達が居るのだろう。そして子供達の履物がこれだけ規則正しく揃えられているところを見ると、この建物の主はそういうところに厳しいのだろうことが伺える。中は子供特有の騒ぎ声や甲高い叫び声が一切聞こえない。恐らくその者によって抑制されているのだろう。

「この時、なぜこの人物はこの言葉を口にしたか答えてみなさい」

しかし中から聞こえてきたのはまだ若い、女の声。はきはきとしていて滑舌がよく、とても澄んだ声が聞こえてくる。

「はい！この人物は自分に出来ない事は何もないという強い意思を持っていたんだと思います！」

そしてその女の声に呼応するにはきはきと、その問いに答える子供の声。

見ればその建物の大部分が大広間になっており、左右の障子は開け放たれていて、一方からは傾いた日差しが差し込んでいる。

中には長机が綺麗に並べられ、その正面には大きな黒板が設置されている。その長机一つに四、五人の子供達が窮屈そうに座っていて、二人に一つの割合で教科書らしき本が広げられている。

ここは子供達が勉強を学びに来ている寺子屋だった。そしてその子供達の前で教鞭を振るっているのは上白沢慧音。先日、歴史を変え、幻想郷と人里を切り離す計画に一役買った人物だ。

慧音の能力で歴史はもちろん、慧音自信の学力も相当な為それを生かし、子供達に勉学を学ばせているのだ。

音「いい線だ。だがこの言葉は本当に辞書にないんだ。不可能は小心者の幻影であり、権力者の無能の証、更には卑怯者の逃避所である、という説が有力だな」

子「へへ」

と、教科書片手に子供達の方を見ながらさらさらと述べる慧音。聞き取りやすく、はきはきしているその声で述べられた答えに皆関心したように頷いている。

音「まあ、実際には戦が続く中、自分を奮い立たせるために言い聞かせた言葉だったんだがな」

子「どれが本当なんだよ」

慧音が感心している子供達に、残念そうな顔でそんな事を言う子供達の不満気な言葉が漏れ出してくる。

慧音は実際に伝えられる歴史と自分が認識している歴史の差異が分かっている。だからどちらを教えればよいか少し迷っているのだ

ろう。が、答えを二転三転させられる子供達はたまったものではない。

しかし、勉強よりももっと大切な事がある。

音「こら！先生にそんな口のききかたをするんじゃない！」

慧音が一番重んじる物は礼儀だ。その際たる例が挨拶だ。その礼儀の一番の基本である挨拶をしない物には慧音による厳しい挨拶が待っている。だからここから慧音の長い演説が始まる。

音「いいか？目上の者に対しては敬意を払い」

子「先生！」

と思われたが、子供の言葉に慧音の演説が遮られる。

音「なんだ！？」

子「もう時間だよ」

音「む」

礼儀を重んじる慧音だ。時間通りに始まり、時間通りに終わる。それもまた礼儀の一つなのだろう。演説は中断され慧音は軽く時計を見て、教卓の上に教科書を置き、静かに閉じた。

音「と言うわけで、今日の授業はここまでだ」

子「ひゃっほおおお！」

子「ちよつと駄菓子屋寄っていこうぜ！」

子「俺これから釣り行くんだ」

子「私洗濯物頼まれてる・・・」

授業が終わった瞬間、子供達の元気な声が教室内に響いて、開け

放たれている障子の隙間から外へ漏れ出していく。

音「用事の無い者は真っ直ぐ家に帰るんだぞ！もう日が長くないんだからな！」

子「はい！」

慧音が声を張り上げて注意を促す。子供達は嬉しそうに元気よく返事するがほとんど守る者は居ないだろう。現に慧音の顔は不服そうで、しかしこれ以上言っても仕方ないと分かっているのだろう。ため息にしてその不服を吐き出した。

音「全く・・・」

子「ねえねえ先生、けんけんぱやろう？」

と、複数人の女の子が慧音に声をかけてきた。けんけんぱとは子供達の間で流行っている遊びだ。

音「ああ、すまないが先生はこれから夏休みの宿題の添削をしないといけなくてな」

子「え」

音「あ、それと」

その女の子に軽く謝った慧音は何かを思い出したように顔を上げて周りを見渡し、また声を張り上げる。

音「夏休みの宿題をやってない者！今度必ずやってくるように！」

この問いには返事をする子供は独りも居ない。

音「分かったら返事っ」

と、慧音が厳しい顔で静かに言う。「はい・・・」と何人かの子供が返事を返してきた。

音「ふふっ、よろしい」

それを見て少し笑ってそう言う慧音は誰がどう見ても教師らしい教師だった。そして最後に「忘れたら頭突きだからな」と意地悪そうな笑顔を浮かべて子供達に告げていた。これには子供達も苦い顔をする。

慧音は机の上に放り出された教科書を持ってきた子供達に礼を言っ
て子供達を寺子屋の軒先まで送り出した。

子「「慧音先生！またねー！」

音「ああ、気をつけてかえるんだぞ」

子「「はーい！」」

何度もやっている慣れた授業もやはり緊張するのだろう。慧音は子供達を見送ると方を落とし微笑みながらため息をつく。

音「さて、宿題の添削でもしようかな」

子供達が帰り誰も居ないはずの教室に慧音が戻る。と、不意に、慧音の目に奇妙な光景が映し出された。

「私の賽銭箱に銭を入れる価値はない！」

普段慧音が授業の際に立っている場所に巫女の服を来た女が立っていた。そして教鞭をくいくいと弄びながらそんな事を言っているのは博麗霊夢だった。

霊「フラン、この言葉を口にした愚民の末路を言ってみなさい」
フ「その巫女に報復されて殺された！」

霊夢が指差した先には悪魔の妹と歌われる、金髪の少女、フラン
ドル・スカーレットが居た。フランは普段子供達が座っている長
机の上に行儀悪く座っている。

霊「いい線よ。でもそれじゃ私が殺したみたいじゃない。この言葉
を口にした愚民は神様の恩恵を得られず、自然災害で自分の家を失
い、自分の愚かさを知り、更には地獄という奈落の底に突き落とさ
れたの」

フ「へへ」

霊「まあ、実際のところ、私が吹っ飛ばしたんだけどね」

フ「だから賽銭箱が空なんだよ」

霊「こら！巫女の私に向かってそんな口のきき方をするんじゃない
！」

フ「ぷぷ、似てる」

どうやらさっきの慧音の授業を見ていたらしい。霊夢とフランは、
ふざけてわざとそんな茶番劇を行っていたのだった。

音「何やってるんだ、小娘共・・・」

霊夢たちは教室の奥、普段慧音が作業をしている場所に案内され
た。そこには本がうずたかく積み上げられており、本棚は一杯でス
ペースがない。慧音が普段使っているであろう机の上には子供達の
宿題と思われる用紙が。○や×が付いた用紙とそうでない用紙が分
けられている。

音「それで？何しにここに来たんだ？それに何でフランドールが巫女の格好を？」

慧音が使っている机以外にももう一つ机があった。来客用だろう、少し綺麗な机とフカフカの椅子が用意され、二人はそこに座らされていた。

慧音が言ったとおりフランは霊夢に服をずたずたに引き裂かれて仕方なく巫女の服を着ている。周りから見たら姉妹とも思えなくもない。その点では人里に行った時に上手くごまかせるかもしれない。

霊「慧音」

音「ん？」

これから宿題の添削に移ろうとしていた慧音は面倒くさそうに霊夢に尋ねるが霊夢はそんな事、知ったこっちゃないというように自分の道を歩み始めた。

霊「私たちは客なのよ？お茶とお菓子くらい用意する。それが礼儀じゃないかしら？」

音「くっ・・・」

慧音は苦虫をつぶした様な顔をして「まってる」と一言言い残し、更に奥の部屋に入ってしまった。慧音は礼儀を重んじる者だ。何も言い返せはしないだろう。

霊夢もそれは分かっている。だから言ったのだろうが相変わらず性質が悪い巫女だ。

その性質が悪い巫女は満足そうな笑みを浮かべているがもう一人の金髪巫女は不服そうな顔で霊夢を睨みつける。

霊「ん？何よ？」

フ「私の時はお茶もお菓子も出なかったけど？」

どうやらフランが来た時はお茶もお菓子も出なかったらしい。それに不服を申し立てた視線だった。

霊「妖怪に礼儀なんて不要でしょ」

フ「それって差別だよね！？」

霊「あんただって呼び鈴、とかいって神聖な鈴をガンガンかき鳴らしてたじゃない」

フ「呼び鈴を鳴らすのは礼儀じゃん！」

霊「はいはい。分かった分かった」

フ「何が分かったのよ！」

霊「今度来たらお茶とお菓子用意すればいいんでしょ？」

フ「え？行っているの！？」

霊「ダメ」

フ「・・・どうということよ」

霊「私はお茶とお菓子を出さないってこと」

そうやって姉妹のようにじゃれあっていると慧音がお茶とお菓子をお盆の上に置いて、霊夢達のいる部屋に戻ってきた。

コツリコツリと、白い湯気がたっているお茶が入った湯のみを慧音が二人の前に置く。続いて饅頭が三つ乗った小さな皿を机の上に置いた。

音「これで文句ないだろ？ちなみにこしあんだ」

茶、菓子を要求した霊夢を見据えてそう言うが霊夢はまだ少し不服そうだ。

霊「今日び、饅頭で・・・もうちょつと気の聞いた。ロールケーキとかショートケーキとか・・・全く気が利かないわね」

音「お前はどこぞの姑か？」

フ「私ブラッディカステラがよかったなあ」

音「私は血は飲まないんでな、て言うかお前達、要らないなら食べなくても」

霊・フ「「いただきます」っす」

慧音が皿を取り上げようとすると、それよりも早く二人の手が饅頭を搔つ攫った。

これには慧音は少し笑ってしまう。子供達を見るような優しい目でくすくすと笑っていた。ずっとそんな顔をしていればただの優しい先生だが生憎慧音は厳しさも併せ持つ。

と言うのも慧音が用意した饅頭があまりにも美味しすぎたのだから。そしてその饅頭が三つだった事で霊夢とフランが取り合いを始めたのだ。

喧嘩をしている子供達を静めるのも先生の役目だ。だが沈めようにもそこにいるのはただの子供ではなく、性質の悪い巫女と、おおよそ人と呼べる年齢ではない、見た目は子供、頭脳も子供の吸血鬼だ。

フ「それ私の！」

霊「ダメよ、これは毒が入っているわ。私が食べて清めてあげる」

フ「嘘だ！」

霊「私は巫女よ？この格好を見れば分かるでしょ？」

フ「私だって巫女服着てるから巫女だもん！」

霊「あんたにはまだ早いわ」

音「何をしているんだお前達は・・・」

霊夢にお姉さんだから譲ってやれといってもその返しは想像がつ

く。だからといって霊夢に譲ってやれといえどフランは泣きそう。それならいいが暴れられて建物が壊されても困る。だから

音「そんなに喧嘩するなら没収だ」

霊・フ「あ！」

二人は慧音を取り上げた更に乗っている饅頭を口惜しく見つめている。そのおかしな光景に慧音は危うく噴出しそうになってしまったがそんな事をするのが怖いので何とか我慢したようだ。

音「で、お前達は何をしに来たんだ、と聞いてるんだが？」

霊「あ、忘れてた」

音「・・・」

霊夢はフランを連れてきた理由を慧音に説明した。そして歴史を変えて日が浅いこともあり幻想郷のことが明るみになってしまう可能性を考慮し、霊夢は慧音に相談しに来た、というわけだった。

音「なるほど。それでここに来たと？」

霊「ええ、別に問題ないわよね？ 思い出すとか」

音「うーん・・・多分」

霊夢はそう問うが、慧音の返事は歯切れが悪くあいまいだ。それに霊夢はしかめっ面で不満な顔。

それもそのはずで多分、では困るのだ。霊夢にとっては断腸の思いで実行した幻想郷の隔離。それが水の泡に帰す、などということになってはたまらない。

霊「何よ、あるなら事前に対策を打てるように言っておいて欲しいんだけど」

その為に霊夢はここに來たのだ。その霊夢の最もな意見に慧音は少し唸って口を開く。

音「そもそも私の歴史を操る能力というのは人々の記憶を辿って再形成し、周りのあらゆる事象を改変していくというものなんだ」

霊「それで？」

音「逆を言うと人々が知らない事は変えようがない。歴史とは人に知られて初めて歴史になる。人々が知らない事を変えても意味がないからな」

霊「うーん・・・確かに・・・そうかも？」

フランには慧音と霊夢の話は難しいのか、最初は真剣に聞いていたのだが、今では慧音が自分の机の上に置いた饅頭に釘付けだ。まるでお預けされている犬のようだ。

しかし慧音の説明はまだ続く。

音「そこで問題となるのがフランドールの存在だ。私は里の人々の記憶を辿ってフランドールの記憶や幻想郷の歴史を消した。しかしだ、人々になくてフランドールにある記憶は改変されてない」

霊「は？」

と、ここでフランの名前が出てきたのでフランは饅頭から視線を上げて慧音と霊夢の方へ向き直る。見ると霊夢が信じられないといった表情で慧音を睨みつけていた。

慧音の説明でいくとフランがしたことは元に戻されていないと言う事になってしまう。小島酒蔵襲撃事件も元に戻っていないと言う事になってしまう。

霊「何でよ！？普通そこが一番重要でしょ！？」

食って掛かる霊夢を両手で壁を作って制止つつ、押し返して霊夢を座らせる。

フランがやったことを元に戻さなければ幻想郷がすぐそこにあるとばれてしまうのではないか。という疑問が当然の如く霊夢の中に生まれてくる。

やっこのことで霊夢を思い留ませた慧音は一言「説明してもいいか?」、と言うので霊夢は頬杖を付いて慧音を睨みながら「どうぞ」と一言。

音「見れなかったんだ。というよりも壊れていたと言った方がいいかもしれない」

霊「壊れてた?」

音「ああ、断片的にしか見る事ができなかったんだ。まるで壊れた鏡に映る世界を見せられているように。その中の世界も世俗的に言って壊れていたが・・・」

とはフランが今までしてきた惨たらしい事を指しているのだろう。地下室で起こっていた惨事、吸血鬼の町で起こった大量虐殺。それを見せられた慧音は数日食欲がわかないことだろう。

それはフランの「ありとあらゆる物を破壊する能力」と何か関係があるのだろうか。

慧音はフランをちらりと見るが少し首を傾げるだけ。本人も無意識の内に壊していたのかもしれない。一度はそんな記憶を忘れようとしたのだ。他人からは見られないくらいに壊してしまったのかもしれない。

話を聞いていなかったフランの視線はまた饅頭へ戻っていく。

霊「ふーん・・・それで?その場合どんな問題あるの?」

音「問題・・・なあ・・・」

慧音は腕組みをして、腰を机に持たれかからせてしばし黙考し口を開く。

音「恐らくフランドールの周りには必ず誰かいたし、その人の記憶からフランドールがした事を辿って歴史を改変はした。と言っても、フランドールが知っていて人々に知らない事は変えていない。というよりも改変する事ができない」

霊「その場合どうなるの？」

音「記憶のミスマッチが起こる」

霊「ミスマッチ？フラン、どう思う？」

フ「何でミスマッチだけ英語で言ったかってこと？」

霊「何だか中二臭がするわ」

音「聞けっ・・・その場合、改変した歴史とあるはずのない歴史がその目撃者の頭の中で矛盾を引き起こす。こんな歴史はないはずなのに何故こんな事が起こったのだろうか、と。船酔いでも同じだ。目で得られる視覚情報と、三半規管でえられる平衡感覚の情報がミスマッチすると気分が悪くなるような。その気持ち悪い思考と現在の状況の食い違いが補正されてしまった時、私がした歴史改変は解除されてしまう。でもまあ、人の頭は寛容に出来ていて、そんな突拍子もないことは容疑の事象からはずれるんだがな」

霊「なんだかよく分からないわねえ」

霊夢でも理解に苦しむようだ。フランにとっては呪文か子守唄としか認識できていないだろう。これには慧音はまた唸って困り顔でしばし思案するが、一つ残った饅頭に視線を落とした時、ふと何か閃いたのか、顔すこし笑って口を開く。

音「そうだ、そこの写真を見てくれないか？」

と、慧音が指差したのは霊夢達の丁度真後ろ、天井に近いくらい高い壁に何人かの写真が飾られている。白黒ではあるがどれも慧音と同じような変わった帽子を被っている。そして皆それなりに歳を召した老人だ。

霊夢と、フランもつられて顔を上げてその方向を見る。

音「それらは私の古い恩師なんだが、それを歴史を改ざんするもの、つまり私としよう。そして私がフランドールみたいに歴史を変えられないものとする。その写真の私が今から争いが起きそうになるこの場の歴史を変えたでしょう」

霊「争い？ ってああああ！ 私のお饅頭様があああああ！」

霊夢が振り返ると慧音が饅頭を食べ、「ご馳走様」と言っている所だった。続いてフランも慧音のほうを見ると目を丸くして立ち上がった。

フ「ああああ！ それ私のだったのに！！」

音「やはり旨いな」

二人が二人とも私のものと主張するその様は面白いものがあるが当の本人達は面白くないだろう。

霊「やはり旨いな、じゃないわよ！ はけ！ はきだしなさい！」

フ「お腹かつさばく？」

霊夢が慧音を取り押さえフランが慧音の服をめくり上げてお腹をあらわにする。

食べ物への恨みは恐ろしいと有名な言葉があるほどだ。霊夢は霊夢で変な言動をするし、フランはフランで物騒な事極まりない。

音「や、やめろ！吐き出したとしてお前はそれを食べるのか！？」

この二人なら実際にしかねないと思った慧音は慌ててそんな事を言つて霊夢たちを思いとどまらせる。

霊「食べないわ」

フ「私の趣味じゃないかな」

音「だったら放すんだ！！」

二人は顔を見合わせてそう言うとなんり慧音の拘束を解いたのだった。

霊「で？」

音「でだ。私が饅頭を食べてしまった事で争いが起きてしまった。それは饅頭が3つあったからだ」

慧音は乱れた服装を正しながら説明に入る。

霊「うん」

音「だから写真の私は饅頭は最初から二個だった事にした。そしたらおまえ達二人は争う事は無かった事になる」

霊「うんうん。ていうか慧音。口に餡子が付いてるわよ」

慧音の口の周りが饅頭の餡子で汚れている。慌てて食べた為だろうが教師という肩書きを持っている以上その体たらくはどうだろうか。

もちろんその事を霊夢に指摘される。

霊「あんた教師なんだから・・・もっと行儀よく」

音「そう、それだ霊夢」

霊「え？」

慧音はそれが待っていた回答だと言わんばかりににやりとし、霊夢に指をさす。霊夢は指を刺されて少し困惑気味だ。

音「饅頭は二つ、それをお前達二人で一つずつ食べたはずなのに何故か私の口の周りに餡子が付いている」

霊「ええ」

音「お前達がここに来て、座って、説明をしている私が饅頭を食べた形跡なんてなかったはずなのに。ここで歴史の矛盾が起きる。私の口に餡子が何故付いているのか。饅頭が出された時には付いていなかったのに。という事は、本当はここには三個の饅頭があったのではないか、そして他の誰かによって都合のいい歴史に改変されたのではないか、とな」

霊「そこまで考えるかしら？」

慧音は難しい問題が解けた子供を褒めるような満足げな顔をして「そう」と口火を切る。

音「先程も言ったように人間の脳は寛容に出来ている。恐らくは私が隠し持っていた饅頭を隙を見て食べていた、とか、もしくは食べた後、餡子が付いたままの手で口元をぬぐったりなんかしたんだろうと都合のいい解釈をつけて終わりだ」

起こった事全てを明確にしなければ気がすまない探偵のような者ならともかく、極一般の人がそこまで追求する事はないだろう。つまり心配するほどの事ではないと、言う事だ。現に霊夢は「ふーん」と気のない返事をして茶をすすっている。

霊「じゃあ別にばれる心配はないってわけね」

音「そうだな。まあ別れを言うだけだったらいいんじゃないか？」

慧音がそう言い終えると湯飲みをコトリと置いた霊夢がおもむろに立ち上がる。

音「行くのか？」

霊夢を見て慧音が止めるでもなく、問いただすでもなく、何気なく霊夢に問う。

霊「ええ、ここに居てもお菓子はもう出てこなさそうだし」

音「あれは町で有名な饅頭屋で売ってる。買ってくればいい」

霊「余裕があればね。行くわよフラン」

フ「うん」

子供達と同じように慧音は霊夢たちを送り出す。が、霊夢達は子供達と違って玄関からではなく両側が開け放たれている障子から出て行った。

音「全く、迷惑な連中だな」

「終わった？」

音「ん？」

ふと、声がするほうを見ると白い髪に赤いリボンをつけた者が。赤いもんぺをはいて、そのポケットに手を突っ込んで壁にもたれかかっている。

不死の能力を持つ藤原妹紅という娘だ。

紅「ん？じゃねえわよ。慧音が近々引っ越すからって荷物運ぶの手伝いにきたんじゃない」

音「あ、そっか・・・忘れてた」

慧音や永琳もいずれは幻想郷に引き上げることになる。その前準備と言うわけだ。

紅「で、霊夢に人里行くって言ったら私達が先よ、なんて言うから待ってたんだけど・・・」

音「そ、そうか・・・すまん」（霊夢のやつ・・・言ってくれればいいのに）

紅「てか慧音・・・なんで口の周りに餡子つけてんの？」

音「え、あ、これはっ」

紅「教師なんだからもうちょっとちゃんとした方がいいと思うけどねえ？」

音「だからこれは――」

霊「ふふ、今頃慌てふためいてるでしょうね」

フ「だれが？」

霊「だらしなない先生」

第四十三章 (後書き)

今回は歴史の能力の解説のような感じでしたが分かりましたかね？何か疑問や矛盾があれば報告頂いたモノについてはなおします。

(多分これでいけると思いますが・・・)

次回は新之助にフランがアプローチをかけていきます。そして多分ですが次回最終回？もしくは長くなりそうなら二話に分けます。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

では～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327p/>

フランは成長するのか？

2011年10月11日01時49分発行